

徳島の剣道

特集：追悼 堀江幸夫 先生

第22号



徳島県剣道連盟



題 字 幸 夫
堀 江 繪 恒 徳
さ し 嶋 恒 徳
村 嶋 恒 徳

巻頭言

堀江先生の教えを剣道修行の指針として!!

徳島県剣道連盟会長

遠藤 一美



徳島県剣道連盟名誉会長・堀江幸夫先生が平成十七年七月、八十五歳でご逝去されました。徳島県剣道連盟が発足して以来、堀江先生は本県剣道連盟の中心的な存在として、連盟の運営ならびに自

身の剣道修行を通しての剣道指導等々、皆様もご存じのように、本県剣道連盟に多大な功績を残されました。

人の世の常とはいえ、まだまだ、堀江先生からはもっと多くのご指導をいただけるよう、本県剣道連盟のためにお元気でいらしてほしかったと残念でなりません。今、堀江先生という本県剣道連盟を支え、私たちを守っていた巨木は静かに倒れられました。しかし、よく見ると、堀江先生という巨木から蒔かれた種が、次代を担う人材としてりっぱに育ってきております。一昨年は、河田清実先生の大澤孝彰先生以来十七年ぶりの剣道八段誕生、また、昨年は米倉滋先生の剣道八段合格と、二年連続の快挙となっております。

私も数多くのご指導を堀江先生からいただきました。その中で先生のお人柄が偲ばれるものをいくつかご紹介したいと思います。 「剣道の魅力は何かと時々考えることがあります。私が考えるところ、それは稽古の中に真の自己・むき出しの自分を観ることができるところではないかと思うのです。そのことから、自己を振り返り、自己の未熟さを反省することができるところが、剣道の大切なところであり、魅力になるところだと思います。」

「剣道は自分勝手ではいけません。剣先を通しての相手との対話がなくてはなりません。それを感じるように稽古することが大切なのです。」

これら堀江先生の教えを剣道修行の指針として、ご自分の人生と剣道連盟のためにしっかりとがんばって参りましょう!!

『徳島の剣道第二十二号』目次

巻頭言	遠藤 一美	1
特別寄稿	堀江幸夫名誉会長を偲ぶ	
堀江先生を偲んで	佐藤 博信	4
徳島との剣縁	熊本 正	6
堀江幸夫先生の思い出	井上 茂明	8
堀江幸夫先生事績	遠藤 一美	10
堀江先生の思い出	大澤 孝彰	15
名誉会長 範士 堀江幸夫先生を偲んで	藤本 雅史	17
堀江先生を偲ぶ	近藤 巨	19
共に歩んだ五十年	堀江 后子	21
顕彰一覽		24

剣道八段		
八段審査に合格して	米倉 滋	25
おめでとう米倉八段	鎌田 恵	29
おめでとう米倉八段	近藤 巨	31
剣道有功賞		
楽しかった剣道	高下 正義	32
少年剣道教育奨励賞		
木頭錬心館の歴史あれこれ	岡田 豊	35
少年剣道教育奨励賞受賞について	佐藤 勇	38
平成十七年度徳島県高等学校剣道優秀選手		40
平成十七年度徳島県中学校剣道優秀選手		41
先生を偲ぶ		
「良き友、良きライバル」	坂下 彦之	42
父・岡本憲三との思い出	岡本 茂	44

高橋静夫先生を偲ぶ	大西 正範	47
講習会報告		
平成十七年度剣道中央講習会		
(西日本)を受講して(報告)	中尾 正輝	48
居合道中央講習会に参加して	吉岡 修一	52
第四十三回剣道中堅剣士講習会に参加して	平野 誠司	54
平成十七年度徳島県剣道連盟秋季講習会	手塚十三子	56
形講習会に参加して	横川 由佳	60

徳島の剣道史		
剣道師範笠井雄次の碑	坂本 裕二	62
武徳殿物語(一)	竹原実太郎	70
大会所感		
第三十六回全国中学校剣道大会を目前に控えて	白木 洋一	73
清原杯争奪 第五十回県下剣道大会を終えて	北條 憲治	74
各種大会に参加して		
全国スポーツ少年団剣道交流大会に出場して	二反田和則	76
第五十三回全日本都道府県対抗剣道優勝大会	玉田 真理	78
第二十二回全国家庭婦人剣道大会		
灼熱の戦い、久々のベスト16	手塚十三子	80
全国矯正職員武道選手権大会に出場して	金野 卓司	83
全国高校選抜大会に出場して	玉田 晋作	84
第十四回全国高等学校選抜大会に出場して		
インターハイを経験して	富岡東高校 山田 愛	85
第五十二回全国高等学校総合体育大会	阿南工業高校 岩沙 佑樹	87
第四十七回全国教職員剣道大会に参加して	富岡東高校 近藤 愛	88
全国中学校剣道大会に参加して	近藤 久善	91
	田村 義弘	92

第三十五回全国中学校剣道大会に出場して	中川 知香	93
四国中学校総合体育大会に出場して	賀上由里奈	95
全日本女子選手権大会に出場して	伊藤奈津子	96
第五十一回全日本東西対抗剣道大会に出場して	山室 雅幹	98
第六十回国民体育大会に出場して	今井 剛	99
第四十回全日本居合道大会の報告	原田 勝	100
全日本剣道選手権大会に出場して	富田 圭介	101
第四十八回全日本実業団剣道大会に参加して	前田 悟志	103
全国警察剣道大会を終えて	富田 圭介	104
徳島県高齢剣友会活動報告	高島 稔之	105
第十七回土佐生涯剣友会交流大会に参加して	端村 武	108
第十一回徳島県健康福祉祭		
剣道交流大会に参加して	中山 啓男	109
ねんりんピック福岡大会	三木 毅	110
随 想		
風 香 る	細川 昭典	113
昔の名前で出ています(その二)	高田 豊	114
静岡よりのメッセージ	内田さくら	115
自画自賛の武者修行	勝浦 守	118
称号・段位合格者		
剣道七段に合格して	山田 耕司	119
やっといただきました!七段	加藤 哲裕	120
無欲・無心と稽古	伊賀 雅人	121
七段に合格して	岩木 一功	122
六段に合格して	園田 慎吾	124
剣道六段に合格して	福多 博史	125
六段に合格して	平 正明	126
六段に昇段して	山室 雅幹	127

六段に合格して	山本 泰史	128
剣道六段に合格して	平野 悦子	129
剣道六段に合格して	森本 敦子	131
六段受審への変革	三木 毅	132
称号・段位合格者一覧		134
がんばろう徳島		
徳島県剣道連盟美馬支部の誕生について	大川 功	139
部活だより		
徳島中学校	粟田 恭史	141
相生中学校	福田美知子	142
城北高校	福多 雅英	143
那賀高校	大石 正志	145
道場だより		
岫雲館	藤本 辰夫	148
三好淳志館	増田 和広	149
平成十七年度 大会記録		151
徳島新聞に見る戦いの跡		188
平成十八年度 昇段審査学科問題・解答例		205
徳島県剣道連盟事務分掌表		214
平成十八年度徳島県剣道連盟行事予定表		215
平成十八年度級位・段位審査実施計画表		217
徳島県剣道連盟審査資格・審査料等		218
事務局だより		
約七年間の感謝	長谷川陽子	219
寄贈書籍		220
剣道行事の中止、開催などの確認の仕方		221
編集後記		

特別寄稿

堀江先生を偲んで

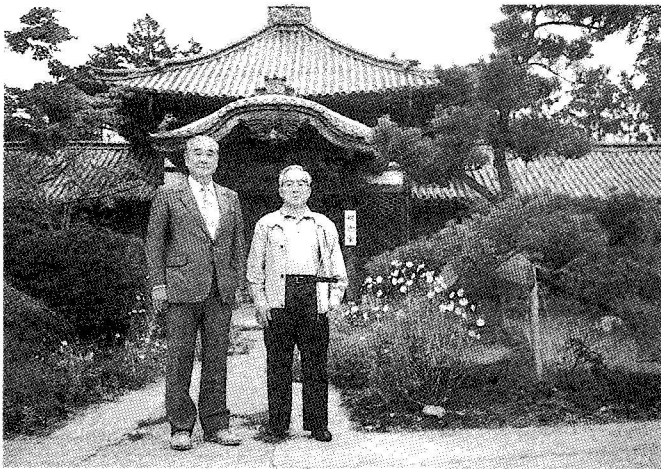
佐藤博信

昨年秋に『徳島の剣道二十一号』が送られて来ました。二二三頁もある立派な冊子で内心すごいなと思っただ次第です。最初の頁に遠藤会長の温顔と巻頭言を拝見しての直感、徳島県は人徳のある方が多いな!!徳島の剣道は益々発展するだろうな!!と云う事です。私が尊敬し、永年おつきあい頂いた堀江幸夫先生の影響が多大である事は申す迄ありません。先生一人ではありません。先生を取り巻く多くの方々の善意と努力の結果であり、人の和が如何に大切であるかを強く感じております。

堀江先生との最初の出逢いは昭和四十年代でした。警察に逮捕術が考案され、その普及指導の為、全国の柔道剣道の先生が関東管区警察学校に集まり、三週間の講習会がありました。先生とは同室で隣同上、毎日柔道衣で道場での実技訓練でした。お互いに投げたり、突いたり、一日の訓練が終わると剣道衣に着替えて、剣道の稽古、夜は一杯やり乍ら種々とお話を伺いました。そしてその時に感激した事は、先生が毎日欠かさずに奥様に便りを書かれる事です。毛筆で達筆でした。本当に奥様を愛しておられるのだ

など感じておりました。奥様にお逢いしたのはその後何年も過ぎてからですが、まことに素敵な奥様で先生が大切にされるのも当然だなど思っただ次第です。私ที่บ้านを粗末にしなくなったのも先生のおかげだと考えております。講習中に飲み過ぎて二日酔いになった時も、大丈夫かと気遣ってくれ、優しい兄貴が出来た様な嬉しい気分にもさせて頂きました。三週間の寝食を共にした講習で、すっかり先生の人柄にほれ込んでしまい、以来ずっとお世話になりました。

国体開催の折も、先生の推進でアドバイザーコーチをさせて頂きました。剣道の皆さん一丸となって頑張り見事に総合優勝と云う成果を挙げられ、本当に嬉しい限りでした。国体に向けての努力は徳島の剣道レベルの向上につながりました。各種大会や、審査会等の好成績がそれを証明しております。河田さんの八段合格、続いて米倉さんの八段合格は徳島の剣道が全国トップレベルに並んだと云う事にな

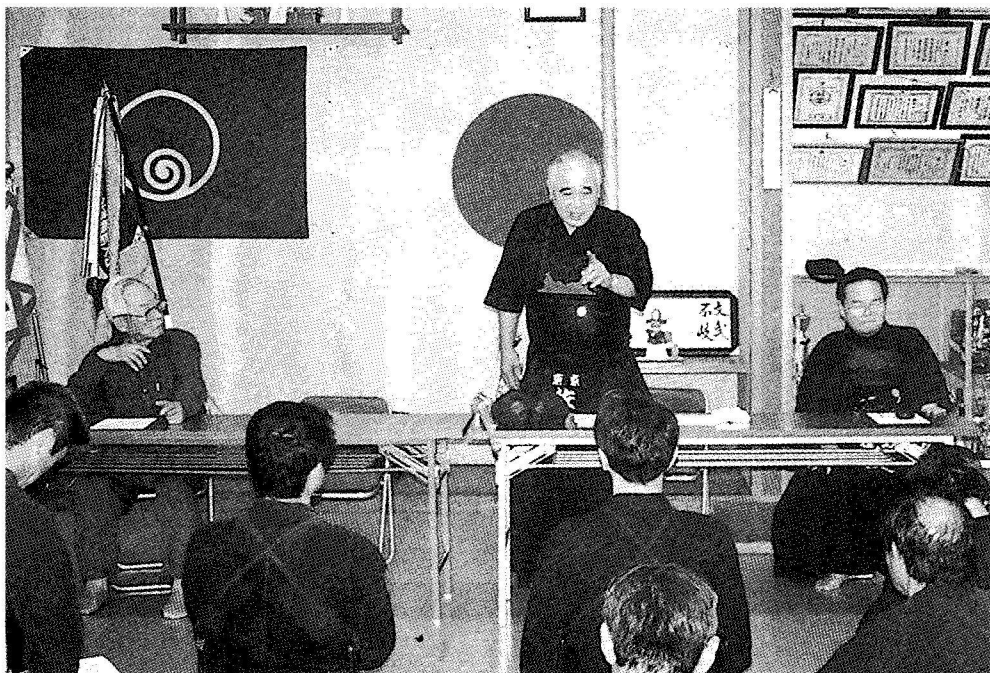


ります。おそらく今年も続くのではと考えておりますので、皆さんの特段の御精武をお願いする次第です。

堀江先生が永年に亘り徳島の剣道に尽くされた素晴らしい剣徳を偲び、先生が天上から暖かく見護って下さる事を信じて、徳島剣道連盟が益々発展されますよう、そして会員皆様のいよいよの御健勝を心から御祈念申し上げてペンを置きます。



堀江先生の書「争心なし」



徳島との剣縁

財団法人広島県剣道連盟 熊本 正



うになったのは、たしか昭和三十八年の夏ではなかったかと記憶しております。

当時、私は広島県警察の剣道特練生として警察部内の対県試合において優秀な成績を収めるために、師範の故大森玄伯先生に引率されて大阪府警に合宿訓練に参った際、同じように徳島県警察の剣道特練生も堀江先生に引率され、上本町の本政寺を両県の宿舍としてご一緒に宿泊し、大阪府警の分校道場において、厳しい稽古に明け暮れたのが、最初ではなかったかと思えます。

爾来四十年余の永きに亘り、堀江先生や徳島県警の剣道部の方々と剣縁をいただき、ご指導ご交誼を賜ることになりました。全国の警察の先生方が警察大学校に入校されます剣道指導者専科に、大森玄伯先生と堀江幸夫先生がご一緒に、共に稽古されました交剣知愛のご縁により、先生方も従前のご交誼よりは更に深い剣縁が結ばれておられます。そのお陰で、大阪府警における合宿

訓練や京都大会の武徳殿での朝稽古においても、特に声を掛けていただきました。お稽古とご指導をいただいたことが、昨日のように想い出されず。

先生にお稽古をお願いしまして強く印象に残っていますことは、先生の体型には似合わず軽快な足さばきと手の内のよい竹刀操作、真直ぐなお稽古、そして稽古後ご挨拶にうかがっても常にニコニコされて指導して下さるお顔が走馬灯のように脳裡に浮びます。

そして、香川の植田一先生と師大森玄伯先生は、兄弟のような剣縁で結ばれておられました。植田一先生を堀江先生は師として仰がれておられた関係と、私が大森先生の師弟ということ、特に目をかけていただいたのではないかと思います。

また、広島県出身の手塚十三子先生が学生時代に堀江先生宅に



若き日の堀江先生

寄宿されておられ、剣道に、そして日常生活にとご指導をいただかれ、親と子供のような繋がりなどのご縁のお陰によって、徳島の剣道指導者講習会に講師としてお招きをいただき、依り一層に徳島県との剣縁が深まりました。

剣道は伝承文化と云われます。平成十六年には河田清実先生、平成十七年には米倉滋先生と若い二名の方が剣道八段位に合格され、徳島県の新しい剣道文化の伝承者が誕生されましたが、これからも新しい伝承者が、次々と誕生し、徳島県の剣道が益々隆盛発展されますと共に、深い剣縁をいただきました、故堀江幸夫先生のご冥福を心から祈念申し上げ筆を置かせていただきます。

合掌



堀江幸夫先生の思い出

奈良県剣道連盟会長 井上茂明



平成十七年七月七日夏の陽射しの強い日、大阪から高速バスで明石大橋を渡り、淡路島を縦断し、鳴門の渦潮の上を走り、堀江先生の数々のお教えを思い出しながら徳島市のお別れの式場に参りました。

先生のお若い頃この橋がまだまだ夢の頃に船で、汽車でそしてまたは飛行機で大阪まで剣道具を担いで稽古にいられていた頃のお話を先生の口からお聞きした大切な大切なお教えを思い出しながら……。

お別れの式場では在りし日の先生の稽古の様子ビデオでながれていました。その中に松本敏夫先生と稽古されている様子が、お別れの悲しみとともに拝見いたしました涙を流しておりました。

平成十五年夏、ついこの前の夏、奈良県国体の選手を中心としたメンバーが徳島県剣道連盟にお願いをして、修行旅行いたしました時、堀江先生は八十三歳のご高齢にも拘らずお元気に面をつけて奈良県の若手八段を始め殆ど全員にご指導いただいた時の事が私の先生との最後の思い出です。崇高な剣道で、力ばかり自慢の我が奈良若手に厳しくやさしく稽古頂きましたこと、帰り際鳴

門の名物、サツマイモ金時をたくさん頂きそれにまだ土がついていましたのでお聞きしますと、先生自らご自分の畑からその朝採り掘りしていただいたたのお話で剣道のほかやさしくご指導賜った事が鮮烈な記憶として残っております。

私のまだ二十代の頃、関西学院大学剣道部の夏合宿で井阪賢一郎先生と学生多数が徳島にお邪魔し、連日ご指導いただいた記憶がございます。身長はそんなに高くない先生がよく面うちをなされていたのと滅多に突きをされなかったのが最初の記憶で、あとで先生にお聞きしますと、突き技については上手が下手に使う技ではない、それは若手の上達を妨げるとお教えいただいたことを思い出します。

先生が松本先生との最初の出会いのお話もいかにも先生らしい事と両先生から楽しく伺いました事もまた、堀江先生の求道心のお教えとして印象深く残っております。先生はおそらく何かを教えてやろうとしてお話されたのではないと思います



稽古中の堀江先生

が、それは大阪城の修道館での稽古のとき、堀江先生は松本先生
にお願いしようと面をいち早くつけて並び順番を待ったそうでご
ざいます。なんとか松本先生にかかろうと徳島から剣道具を担ぎ
それだけを目標に来た時とお話されてきました。ところが、次か
ら次ぎへと他の先生が追い越して（先約があるといつて）ついに
は、時間切れで終わりの太鼓となったそうなのですが、その間
ずっと正座で見取り稽古をされていたのだそうですが、それを松
本先生は気付かないはずがなく太鼓のあと痺れる足で稽古にこぎ
つけ、その後で自己紹介をし、親しくお付き合いが続いたとお聞
きました。大阪に来られて、また、松本先生が徳島に行つて稽
古が続いたとお聴きいたしております。ずっと後で先生は「お前
はいい何時も松本先生のそばにおられて、お前はおれの兄弟子
だよ」と冗談を言われていました。とんでもない話でその頃から
私は自分勝手に堀江先生に弟子入りしていました。

私の昇段試験前後、広島での単身赴任時代仕事の出張（奈良に
帰る途中、自分勝手に作った出張）で徳島に参りました折り、先
生に電話をして道場に行きますと先生の体格と私はそっくりでし
たので、先生の稽古着、袴、剣道具、竹刀と全部お借りして、ご
指導いただいたことが一番の先生との思い出であります。堀江先
生は決して手を抜くことなく激しくやわらかく面を頂きました。
その時決まって道場近くの美味しいお魚のお店へのご指導が続き、

「お前さんは松本先生の弟子のくせに固いなー、右手ばかり強い
稽古だなー」と。いまだにその当時のままで早く何とかしないと

いけないと稽古いたしております。

その他、堀江先生の優しくて厳しいお教えは数知れず、先生か
らお叱りを受ける時は他に誰も、いない時、お褒めいただくとき
はみんなの前で、今、私は先生の多くの部分を真似ようと努力い
たしております。

堀江先生を偲んで。



平成15年8月 徳島県警察学校体育館にて

堀江幸夫先生事績

徳島県剣道連盟会長 遠藤 一美



堀江幸夫先生は、幼少の頃よりご尊父から剣の手ほどきを受け、青年時代には、酒匂久先生に師事し大阪武徳殿において修行に励まれました。恩師酒匂先生については、次項のように平成十六年の「徳島の剣道」に書かれておられます。また、堀江先生は鹿兒島の酒匂先生の墓参りを毎年されていたそうです。

終戦後、徳島に居を移してからも剣の道一筋に、温故知新と日夜研鑽を積まれて約半世紀に亘って剣道の発展のために尽力されました。そして、自らの剣士としての修行を怠らず、また、剣道界の知識の源として相談に応じられる等、後進のための指導を続けられておられました。

戦後の剣道復興と発展に尽くされた功績

先生は、選手として常に最前線で活躍され、国民体育大会、全日本東西対抗剣道大会等の数々の全国大会に出場し、すばらしい実績を残されています。とりわけ明治村における八段選抜大会においては、全国の強豪を相手に見事三位入賞の荣誉に輝かれました。一方、全日本剣道連盟の理事、評議員を永年にわたり勤めら

れ、その進路について貴重な提言をされる等、名実ともに日本の剣道界のリーダーとして戦後剣道の復興と発展に寄与され、その功績は誠に顕著でありました。

徳島県剣道の振興と徳島県剣道連盟の

礎を築かれた功績

昭和二十四年に発足した徳島県剣道連盟に、昭和二十五年に理事として就任して以来、審議員、事務局長、理事長、会長、名誉会長と要職を歴任し、緻密で堅実な運営で確固とした徳島県剣道連盟の基礎を築かれました。その間、理事長在任中には全日本東西対抗剣道大会、理事長兼会長在任中には第四十八回国民体育大会（東四国国体）を成功に導き、特に東四国国体剣道競技においては地元の大きな夢でありました総合優勝を勝ち取ることができました。これら大イベントにおける先生の企画力、行動力、指導力等は繊細かつ大胆であり、後進の模範となっています。

また、昭和三十七年から徳島県警察剣道師範として警察剣道の発展に尽力されながら、次代を担う剣道を志す若者の育成にも力を注がれ、撫養高校（現鳴門第一高校）を始めとして、四国大学、徳島大学剣道部の師範として指導にあたられました。先生のご指導は真正かつ深遠であり、先生の崇高な指導理念及び偉大な功績は、徳島県剣道界のみならず日本剣道界に大きな影響を与えてきました。

ここに堀江幸夫先生のご冥福を心よりお祈り致します。

随 想

老剣士のつづや記

— 恩師 —

堀 江 幸 夫



“初日の出
待つ間に交わす
御慶かな”

老境の光陰は夢

中に過ぎていく平

成十五年はどんな年になるかと。結果は、暗いニュースばかり益々混とんとした世相の中で終わった、無責任な放言と受取られても仕方がないが、正直言って何一つ期待出来る材料がなかったし、その上、今日の世の中の動静など所詮は私の手の届かぬところであり、心の中でケ・セラ・セラを決めこんで、剣の道の片隅で一隅遍照を考えていたのが本音であった。今年は、珍しく素晴らしい初日の出で迎えた、平成十六年は

甲申で私にとっては七回目の年男となる。

想えば、太平洋戦争で死んでいた筈の私が、大病もしつつ八十四年生かされた。有難いと言うより不思議に思えるのが実感であるが、人生いろいろ八十四年の人生の後半で考えもしなかった剣道の専門家としての生活になり、多くの先輩専門家に交じり我武者羅に稽古して、心技体を鍛えられて今日に至ったこの四十余年間剣道具を肩に、全国津々浦々に足跡を残す。期するは、心秘かに一流専門家に伍して一步も、との競う心と一方で恩師が目指した剣の心を守り継ぎたいと、大外れた望みを抱くようになっていくのも自然の成り行きであった。師の大きな背中が私を導いてくれた。今日未だ力及ばずの焦燥はあるが、師の背中を見失うことがない限り精進努力の泉は枯れることはない、恩師の更なる加護を祈る今日この頃である。

恩師「酒匂 久」は鹿児島県蒲生町に生れ鹿児島県立第一師範学校を経て、京都武道専門学校を卒業され、大阪府警察の剣道教師となられるが、終戦により郷里蒲生町

に帰られ、請われて蒲生町長に就任在職中に亡くなられた。享年四十三歳の若さであった。鹿児島師範在学中に鹿児島県代表として、昭和四年の昭和天皇即位天覧試合に出場し、予選六試合を五勝一敗で惜しくも決勝トーナメントに進出出来なかったが、その豪剣ぶりは後々まで語り継がれた。武専時代は申すに及ばず、大阪府警に入られ、精進ぶりは府立青年塾堂の朝稽古から始まり、警察学校、武徳殿、時には母校武専へと稽古相手を求めて一日が終る繰り返してあった。その間宮内省主催の皇居済寧館大会に優勝、明治神宮大会に二度の優勝されたが日々の稽古は愈々きびしさを増すばかりであった。

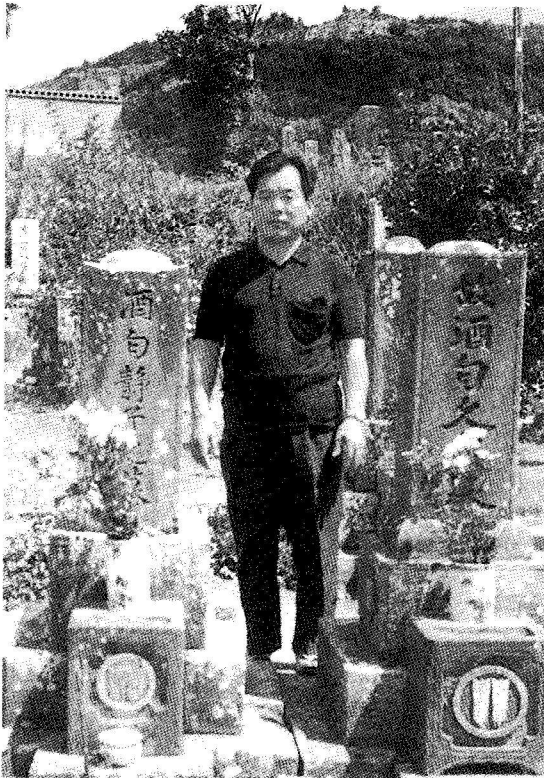
私が全国各地の行事や稽古に参加しはじめた頃、よく「君の師匠は誰か？」と聞かれたが「酒匂 久」と答えると、殆どの人は「道理で！」とうなずき特に武専出身の人達は、「酒匂先輩の」その後は別格の親しみを以って接してくれた。思わぬところで師の遺徳をいただく。先生は薩摩出身らしく言葉数のごく少ない、一緒にいても言

葉で指導されることは殆どなかった。ある時など「男はいらぬことはしゃべらないようにしなさい」と注意をうけた。稽古を頂いた後も、いいとも悪いとも言われず「露堂々」すべてをさらけ出して稽古を見せて下さった。「見て学べ、研究工夫せよ剣道は百錬自得だ」と声なき声が体の芯まで。多感な青年期又とない剣と人生の良師を得、今日尚、無言の語らいの中で教えを頂く幸せをしみじみ噛みしめる日々である。

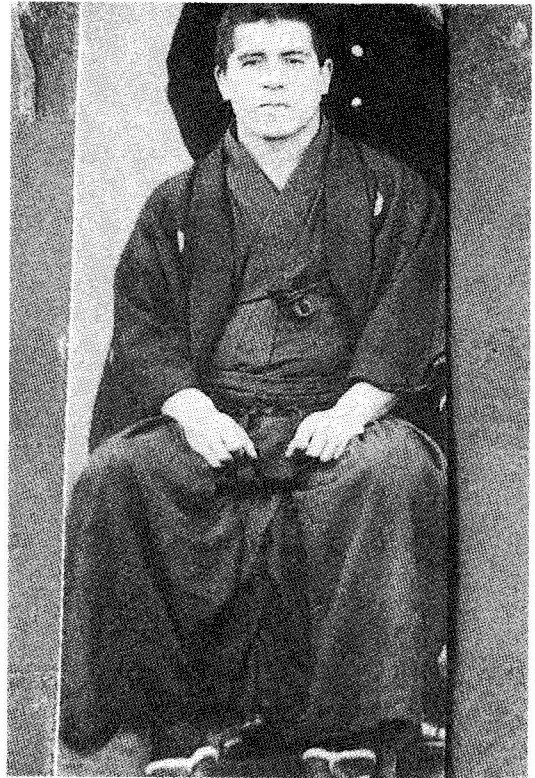
“かなかなや 師弟の道も 恋に似て”

秋桜子門 滝春一句

平成十六年『徳島の剣道第二十号』より



鹿兒島の酒匂先生の墓参り



堀江先生の恩師 酒匂 久先生

堀江幸夫 先生 主な経歴

〔学 歴〕

昭和16年12月 日本大学大阪専門学校卒業（現 近畿大学）

〔剣道段位・称号〕

昭和49年 5 月 8 日 剣道八段

昭和57年 5 月 8 日 剣道範士

〔職 歴〕

昭和21年 8 月 復 員（中部憲兵隊司令部）

〔昭和22年10月
昭和27年 3 月 関西自動車用品株式会社

〔昭和27年 4 月
昭和37年 3 月 自 営（用品雑貨商）

〔昭和37年 4 月 1 日
昭和54年 6 月30日 徳島県警察本部技術史員
（剣道師範）

〔昭和54年 7 月 1 日
昭和63年 3 月31日 徳島県警察学校術科専任講師

〔団体歴〕

〔昭和25年 3 月12日
昭和50年 3 月31日 徳島県剣道連盟 理事

〔昭和46年 4 月 1 日
昭和50年 3 月31日 徳島県剣道連盟 事務局長

〔昭和50年 4 月 1 日
平成 6 年 3 月31日 徳島県剣道連盟 理事長

〔昭和62年 4 月 1 日
平成 9 年 3 月31日 徳島県剣道連盟 会長

〔平成 9 年 4 月 1 日
平成17年 7 月 徳島県剣道連盟 名誉会長

〔昭和44年 6 月 1 日
昭和62年 5 月31日 (財)全日本剣道連盟 評議員

〔昭和62年 6 月 1 日
平成 6 年 5 月31日 (財)全日本剣道連盟 理事

〔昭和52年 4 月 1 日
昭和62年 7 月 (財)徳島県体育協会 評議員

〔昭和62年 7 月23日
平成 9 年 3 月 (財)徳島県体育協会 理事

〔昭和37年 4 月 1 日
平成17年 7 月 徳島大学剣道部師範

〔表 彰〕

昭和44年 2月11日	(財)徳島県体育協会 体育功労者表彰
昭和63年 8月 7日	(財)徳島県体育協会 感謝状
平成 4年 6月 3日	徳島県知事 表彰
平成 5年10月10日	文 部 大 臣 表 彰
平成 6年 2月11日	(財)徳島県体育協会 感謝状
平成 7年 6月27日	(財)全日本剣道連盟 表彰状
平成 7年12月 3日	中四国学生剣道連盟 感謝状
平成11年 5月11日	勲五等瑞宝章 受章

〔競技歴〕

大 会 名	選手回数	監督回数	審判員回数	役員回数
国 民 体 育 大 会	11	2	7	2
全 日 本 東 西 対 抗	11	1	1	
全 国 都 道 府 県 対 抗	8	8	6	
全 国 八 段 選 抜 大 会	8			
全 日 本 選 手 権 大 会			3	
四 国 四 県 大 会	16		15	

堀江先生の思い出

副会長 大澤孝彰



「鳴門に大阪からええ若いしが来てるらしい味をみに行ってくるか」と亡父と剣友の故中野清先生二人で徳島から鳴門の故尾形郷一先生の道場へ自転車で剣道具を積んで稽古に行き、結果は「強い奴だった。こっちゃんが味をみられたのう」と話し合ったそうです。

この若いしが堀江先生だったのです。亡父から聞いた話です。その後、私が大学三年の夏休みだったと思いますが、田舎の木頭に帰省していた時、出張審査があり、尾形先生等が来られた時、堀江先生も来られ、模範稽古をされたのです。亡父が私に「堀江先生の足さばきを良く見ろ」と云われ、しっかり拝見しました。如何なる動きをしても足の歩幅が変わらず基本の足さばきの模範を見たのが今も目に焼きついています。

私が三十四歳から剣道ばかりの生活に入ってから、県内の大会等は勿論国体、都道府県大会、四国大会、各種講習会等々と殆んど御一緒させて頂き、剣道の御指導は勿論ですが、人生について色々な事を教わりました。ほんとうに色々な思い出がたくさんありますが、とても書き切れ無いので、剣道そのものよりも逸話的なものをいくつか紹介します。

まずお酒と稽古の話です。

堀江先生が県警の師範時代、東京の警察大学で全国の師範の集合教育が長期間あったのです。私も大変御指導頂いた滋賀県警師範の故八木謙一先生と御二人で毎日良いお酒にあげ暮れたそうですが、稽古も人一倍も二倍もやられたので、当時の大先生からあいつ等二人は稽古もあれだけやるから立派だと一目置かれたそうです。

始めて参加した岐阜国体で

前に国体の思い出で書いた事がありますが、故高島永吉先生が監督で堀江先生と私は選手でした。私は始めて参加したものですから、嬉しいのと反面不安で無茶苦茶に酒を飲んで騒いだのに高島先生も堀江先生も黙って見守ってくれた事に深く印象づけられました。

鹿児島国体で

堀江先生が大将、私が副将で参加し、堀江先生が大将戦で惜敗し、チームが負けた残念会で私が酒を呑まなかったのです。その時、堀江先生が「私が負けたから呑まないのか」と云われたので私がうなづくと「そんなら一生酒は呑むな」と一喝されました。この時の感情は師弟の情を越えた親子の情愛だったと後で思いました。仰せの通り一切酒を止めて居れば酒の失敗も無くて済んでいたでしょうに……。

群馬国体の帰り

故三木只雄先生が役員、堀江先生が審判、私が選手で参加して

いました。三人で一緒に帰徳するため、夜遅くなる関係で東京で一泊する予定でした。私がホテルを予約していたのですが、日之間違え宿泊出来ず、しかたなく、東京駅の宿泊案内で築地の古い旅館を紹介されました。夜遅くなっていたので、仲居さんにつっけんどんにされましたが、三木先生が鼻薬を飲まずと途端に態度が変わり、三人で宴となりました。

三木先生は余り召し上がり無かったので先に休まりました。その後、夜通しお酒を頂き乍らしみじみと堀江先生御自身の人生のお話をして下さいました。人生って色々あるものだと思います。

躰（と）の大きな先生より先に寝る方法

広島での中四国学生大会の大会審判員として殆ど御一緒しました。或る年審判会議終了後、OB稽古会、親睦会の後すし屋の二階の宿舍へ帰りました。御一緒の部屋で饅頭果物をデザートとし「ふとん」に入り先生に話をして貰っている間に眠る計画が成功していたのですが、この夜はお話がいつの間にか躰（と）に変わってしまい困惑しました。朝すし屋の主人が階下において先生の躰（と）に何が起ったのかとびっくりしたそうです。

レクリエーション剣道大会

先年、助任橋の旧武道館で私が計画して剣舞から始まり、基本練習、勝ち抜き紅白一本勝負、団体風船割り勝負、そして最後にカラオケ大会を道場別対抗として実施しました。審査員は、三木・堀江先生等五名。道場主、父兄代表、少年代表でしたので私も出場したのですが、カラオケで口を動かすのと振りだけで幕の後で

父兄の名人に歌って貰い一番高い点数でした。しかし、堀江先生に声が違おうと見抜かれ失格となりました。

京都大会の三福寺宿舎で

京都大会は私は七段取得以来三十五年間皆勤ですが、故高島先生以下大先生方がたくさん宿泊され、世話係の堀江先生と私は寝る場所が無く玄関で寝た事が遠き思い出となりました。私は堀江先生の稽古の御指導は受け続けましたが、口述での指導は殆どありません。しかし、八段一次合格、二次で不合格の時だけ「試合なら大澤の二本勝ちだが、稽古は相手が良く見えた」と御指導いただきました。翌年、そのお言葉を頭に置き、合格しました。

堀江先生はどこに出張遠征等されても必ず一日一回は奥様にお電話をされ、ほんとうに御家庭を大事にされ、そして剣道に生涯を打ち込まれた人生でした。



名誉会長 範士堀江幸夫先生を偲んで

剣道連盟事務局長 藤 本 雅 史

「こんにちは」玄関を入ると、スリッパがきちんと揃えられている。それを履き、廊下を渡ってダイニングルームへ入り、挨拶をする。「おっ、いらっしやい」と眼鏡を少しずらして、迎えてくれる。「さあ、どうぞ」と椅子に座るように勧められ、先生は食卓の上の書物をかたづけられる。連盟からの書類や伝達事項等を伝え、用事が終わると「とところで、昨日の稽古はどうでしたか」と剣道談義に花を咲かせるのである。このお話が聞きたくて、無理矢理に用事を作って、お宅に伺ったものである。

しかし、最初から親しくお話などできる由もなかった。堀江幸夫という名は、とてつもなく、でかくて大きかった。徳島県剣道連盟名誉会長 範士八段は雲の上の人であった。新米の事務局長として、先生のお宅に何うには、敷居が高く、非常に足が重たかった。そこで、事務局次長の手塚先生にご一緒願って、訪問するうちに段々と緊張もほぐれ、人間として慈愛に満ちた温かさ、剣道に対する見識の深さ、ひたむきさに心を魅かれるようになってきた。「挨拶とは、近づいて会って話を聞くことである」と云われる。正にその通りで挨拶に行かなければ、色々なお話も聞くこともできなかったし、お人柄にも触れることもできなかったであろう。

いつも、お話の内容は徳島県の剣道の行く末と稽古の有り様、「心法」であった。

「一隅を照らすは、万国を照らす」と四国の徳島に居ながらも本格的な剣道、本物の剣道をと念じておられた。徳島県剣道連盟は稽古の連盟であるべきで、会員の競技力向上に親切であり、会員が稽古できる環境作りに務めなければならぬと力説された。「剣道は行の文化」である。いくら良いことを言っても実践できなければ意味が無い。だから、難しい。だから、稽古をしなさい。と言われ、自らも率先垂範され、「只管稽古」を座右の銘として、剣の道を歩んでこられたのだと思う。

大会・講習会・審査会等に於いても、大所高所から観られていて、運営、審判、審査、観衆をも含めての有り様等全般に亘り、剣道の大会として、あるいは剣道人としてどうあるべきか、厳しくご指導を受けた。

稽古ではよく「胆を鍛えなさい」と仰言っていた。「いつまでも打った、打たれたに拘らず、心の病を無くしなさい。そして、素直な心で修行しなさい。剣道は人格の見識比べです」と教えられた。稽古の帰りの車中で「雅はん、今日の稽古は何回も突っ張っていたよ。まだまだ心が固い、迷ってはだめ、相手の気が映ったから素直にハイ、ポンと打てばいいんですよ。」とよく注意を受けたものである。未だに出来ない自分が恥ずかしい限りです。こんなことを言うと「やる気が無いから、出来ないんです」と又々お叱りを受けそうですが……。

平成十七年七月五日、

先生がお亡くなりになられた日、通夜から告別式に際し、県内は勿論、遠く県外より多数の大先生方がご多忙の中を弔問に足を運んで下さり、先生との別れを惜しんで下さった。そのお姿に接し胸が熱くなるのを覚え、人間として誠の大切さ、生きる姿をお教え頂いたように思います。

真実に剣道を愛し、奥義を求めて、只、ひたすらに、歩み続けてこられた剣の道、道は険しいと思いますが、ご教示を頂いた事を忘れずに精進していきたいと思えます。

たくさんの想い出を有り難うございました。
遠い空から徳島県剣道連盟を見守って下さい。



台掌



堀江先生を偲ぶ

県警剣道師範 近藤 巨

先生が亡くなられて半年あまりになりますが、未だに信じられませんが、「よう、近ちゃん」川内のご自宅に伺えば今でもそう言っ
て出迎えてくれるような気がします。

私が先生にご指導頂くようになったのは、昭和四十八年四月の
警察学校に入校した時からです。

その当時先生は、県警剣道師範をされており、以来三十二年間
ご指導いただきました。

先生の剣道に取り組む姿勢は、一貫して「剣道によって自己を
高めてゆく」ということではなかったかと思えます。

先生は、剣道をこよなく愛し、剣道に真剣に向き合い、剣道を
深く追求し、本当に剣道即生活を実践されておりました。

先生の剣道に対する熱い思いに引っぱられ、ここまでやってこ
られたし、現在の私の剣道があると、感謝の思いで一杯です。

先生を思う時、「口管稽古」「稽古見性」という言葉が浮かんで
きます。先生は、よく「剣道は稽古以外にない。稽古することに
より疑問が生まれ、その疑問が課題となり、自分の剣道が成長で
きる。」とおっしゃっていましたし、自らそのことを実践してお
られました。

昭和五十一年一月の稽古回数は、私（二十歳）が二十五回で、

先生（五十五歳）は五十回でした。稽古の後で先生の体をマッサ
ジすると、指圧をする親指が折れるのではないかと思うくらい背
中が岩のように硬かったことを思い出します。

ご指導をいただき十二年目、ひとつだけ先生にご恩返しが出来
たのではないかと思うことがあります。

昭和六十年の全日本剣道選手権大会において私が決勝戦まで進
出できたことです。この時は、先生の見守っていただけの日本武
道館で思う存分の試合が出来ました。試合が進む毎に自分の力以
外の何かが働いて、大げさな話かも知れませんが、「この試合で
死んでもいい。」と思うくらい気持ちが高揚して、体が意識せず
とも動きました。

結果は準優勝でしたが、先生は我がことのようにとても喜んで
くださいました。

昭和六十三年、旧の県立武道館の朝稽古の後、入浴中に脳梗塞
で突然倒れ、どうなることかと心配しましたが、後遺症もなく見
事復活し、胸をなで下ろしました。

しかし、この時から好きなお酒をやめられました。「これまで
に人の一生分のお酒は飲んだ」ということでした。

私は先生が酔っぱらった姿を見たことがありません。ある酒席
で酒の弱い私が「今日は家までお送りしますので先生ゆっくりと
飲んでください。」と大きなことを言っておきながら、気が付く
と機動隊の独身寮に寝かされたことがありました。後で事情
を周りの人に聞くと、先生に寮までタクシーで送っていただいた

ということがわかり、先生に大変申し訳ないことをしてしまつたと、深く反省したことです。

先生は、剣道の奥深さを話される時、俳人「山頭火」の「分け入っても分け入っても青い山」をもじって、「分け入っても分け入っても剣の道」とよく言われておりました。

先生は、終わりのない奥深い剣道を何処まで追求することが出来るか常に挑戦されていきました。

挑戦半ばで倒れられたのは非常に残念であつたことと思います。これからは、先生にお話を伺うことも直接ご指導頂くこともできませんと思うと、とても心細く淋しい限りです。できることならもっともつと見守って頂きたかつたのですが……。

思いは尽きません。

今後は先生からお教えいただいたことを胸に、剣道をより深く追求すると共に自己を高めて参りたいと思います。

堀江先生、長い間ご指導いただき本当にありがとうございます。ごゆっくりとお休みください。



昭和52年青森国体にて

共に歩んだ五十年

堀江 后子

主人が亡くなって半年が過ぎました。

私たち家族は、この家にお父さんがいない（お爺ちゃんがいない）という実感のないまま日々をすごしています。遠征や試合で県外へ出かけ、「ただいま」と帰って来る声が玄関から聞えるようです。

書齋で読書や調べ物をしている後ろ姿、書道室で筆を持つ背中、麦わら帽子をかぶって庭の手入れをしている姿、家のどこに行っても主人の姿が浮んできます。

生き字引のような人で、何を尋ねてもすぐに答えてくれるし、わからない事はすぐに、辞書や本で調べて解決してくれる。

私たちには、それが当たり前の生活でした。

家の中を見回してみると、剣道具をはじめ、書物、書道の道具、ビデオ、茶道具、焼き物など博物館ができるほどたくさん物を残して旅立ってしまいました。

勉強好きで「時間がもつとほしい」が口癖でした。なにか思いつくことがあると夜中でも起きて書き留めたり、冬の寒い時期でも朝の四時や五時に起きて本を読んでいた。

娘たちにとっては、口数も少なくいわゆる厳格な父親でした。しかし、私が商売をしていましたから店を空けられず、娘のPT

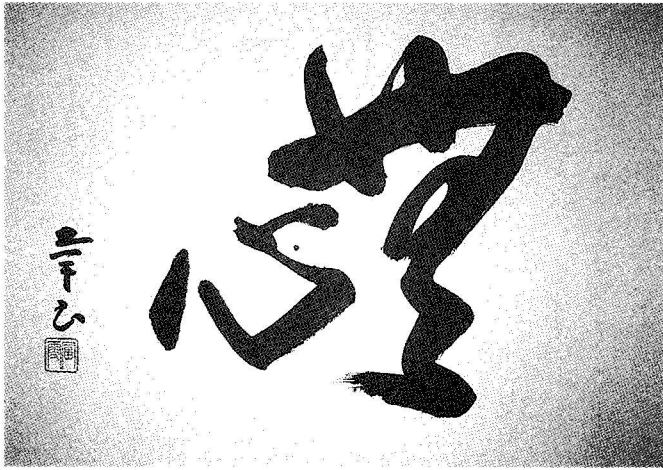
Aや学校行事などは全部主人が出てくれました。家にいる時は、娘の話を嫌な顔ひとつせず何でも最後まで聞いていました。それは、いつからか娘から孫へと変わり、一日の出来事から悩み、相談事までどんな小さなことでも対等に向き合い真剣に聞いていました。

店を閉めるのが遅くなると、夕食の準備をする私を気遣い「あんなのでいいよ」と言い、出来るまで文句も言わず黙って待ってくれました。考えてみると、主人は剣道の道、私は美容の道という自分の天職を見つけ、必死に修行しました。どちらもゴールのない奥の深いものでした。

時に相手を思いやりながらもそれぞれがそれぞれの道で戦ってきた、いわば同士だったのかもしれない。それがお互いを理解し合えた私たち夫婦の五十年でした。

戦後、公職追放となり自動車部品を扱う会社を興しましたが、昭和三十六年に徳島県警から請われて剣道師範に就任しました。





最後の書「無心」

夏には、食事がのどを通らず、七十六キロあった体重は五十八キロになり、咳が止まらなくなったり微熱が続く日々でした、気分がよい日には道場にも足を運び、家では筆をもち七百枚にも及ぶ写経を書いておりました。最

当時、大阪の剣道仲間からは、そんな地方で剣道をして強くないと反対されましたが、自分のやる気さえしっかりしていればどこでもやれると、反対の声を力の糧にして徳島の剣道を全国に通用することを目標に、尚且つ自らの理想とする剣道の追求に貧欲に取り込んできました。

剣道をするために生まれてきたような人でしたから、おかげさまで臭警機動隊、連盟の先生方、各支部の剣士の方々に恵まれて本当に幸せな人生だったのではないかと思います。

一昨年の四月に肝臓の腫瘍が見つかり、余命半年の宣告を受け

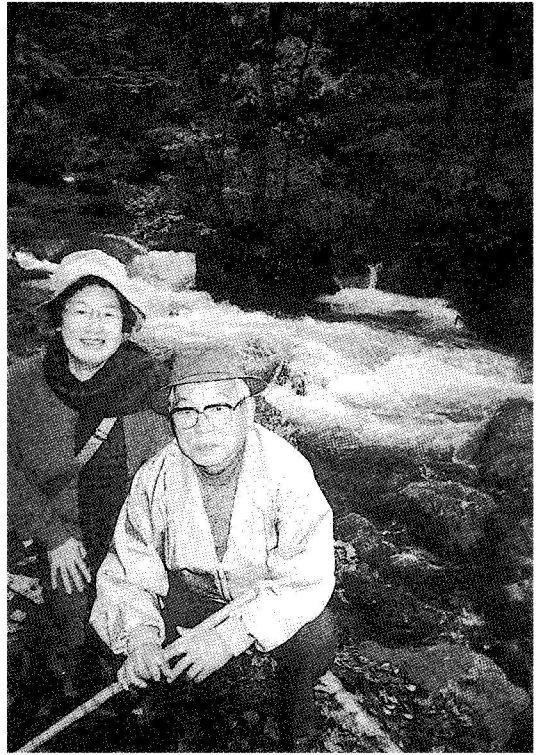
ましたが、主人には知らせず自宅療養することにになりました。夏には、食事がのど

後に書いた「無心」という書は主人の心境そのものだったのかもしれない。一年二ヶ月が過ぎた昨年六月二十七日の八十五歳の誕生日は、病院でしたが皆様からのお花やご馳走、ケーキなどの贈り物に囲まれ、孫娘の明るい笑顔にさそわれて楽しい一日を過ごしました。ダンボール数箱にもなる日記帳もこの日が最後のページでした。翌日から容態が悪化しましたが、主治医も驚くほど苦しみを表に出さず、剣道家らしく最後まで毅然とした態度だったことに心が痛みます。

私には剣道のことは全く分かりませんが、事あるごとに噛み砕いて分かりやすく話してくれました。今思うと、もっとしっかりと聞いていれば、孫たちが（お爺ちゃん亡き後）いろんなことで悩み苦しんでいる姿を見ると、少しでも役に立てたのではないかと悔む毎日です。

職業は何ですか？と聞かれたら剣道家と答えたいと言っていた通り、剣道三昧の生活に正直腹の立つときもありましたが、人間性においてはこれ以上の人はいない、尊敬できる人でした。

禅宗の書物を好んで読んでいた主人が、最後に娘に買ってきてほしいと頼んだ本は、「アールデコの時代」でした。なぜ、この本を読みたかったのか？聞く事は出来ませんでした。最後まで読むことが出来ずに逝ってしまいました。来世で、再び会う事ができたら、この本を持ってまた一緒に人生を歩みたいと思います。共に歩んだ五十年、私は幸せでした。



平成十七年度 顕彰一覽

剣道八段 (全日本剣道連盟)

○米 倉 滋 (昭和三十年一月二十九日生まれ)

平成十七年十一月、東京都日本武道館における剣道八段審査会において難関の剣道八段に合格する。受審者一三五七名中、合格者十二名、合格率〇・八八%であった。

剣道有功賞 (全日本剣道連盟)

○高 下 正義 (大正十五年五月十九日生れ)

徳島県学校剣道連盟理事長を十年、徳島県剣道連盟監事を四年、審議員を十二年、平成七年よりは副会長を務め、現在に至る。昭和二十二年より三十九年間、徳島県高等学校教諭として、赴任校において剣道指導に携わり、多くの高校剣士を育成した。その後も連盟役員として、常に剣道の普及発展に寄与している。

少年剣道教育奨励賞 (全日本剣道連盟)

○佐 藤 勇 (昭和二年七月二十四日生まれ)

鳴門運動公園剣道教室が昭和五十五年に発足して以来、指導員

となり、現在に至るまで代表を務め、少年剣道の維持発展に寄与している。また、少年剣道の指導の他、高齢剣友会員として、率先した稽古を重ねており、指導者としてその姿勢は範たりえるものである。

○木頭錬心館 (丹生谷支部)

戦後、昭和三十一年に徳島県で最も早く専用道場として「大和錬心館」が設立され、昭和四十一年に「木頭錬心館」と名称変更し、現在に至っている。その間、常に徳島県剣道界をリードし、卒業生が木頭中学校、富岡西高校、富岡東高校、阿南工業の中心選手として活躍しており、さらに、教員、警察官、実業団で幅広く活躍する人材を多く輩出している。

体育功労者表彰 (徳島県体育協会)

○馬 場 力 (昭和五年一月八日生れ)

徳島県剣道連盟評議員として四年、平成三年より現在まで徳島支部長として、本県剣道に寄与した功績は顕著である。特に、県内最大支部の運営に努力し、徳島市内の少年剣道育成に尽力している姿勢は多くの人より賞賛を得ている。

八段審査に合格して

米 倉 滋



平成十七年十一月二十八日に日本武道館で行われた八段審査は、受験者一三五七名のうち十二名が八段に合格しました。合格率は〇・八八%と例年以上に厳しい結果でありましたが、幸いにも合格することが出来ました。これもひとえにこれまでご指導を賜った多くの先生方、先輩方、剣友の皆様のお陰と感謝しております。

今回の八段審査は二回目の挑戦でした。一回目の審査は受験資格ができた直後の四十六歳の時で、一次審査で警視庁の西川清紀先生と立合い、打ち砕かれてしまいました。初めての受験での気負いや八段審査に対するこだわり、たとえば八段審査はこうしなければいけない、こんなことをしてはいけないなどを考え悩み迷っていました。西川先生に打ち砕かれたことで未熟さを痛感し、自分の納得のいくまで修行を重ねこだわりや迷いがなくなった時、再度挑戦しようと考えました。

それから四年半、国際社会人剣道クラブの月例会、徳島県剣道連盟主催の練習会等で稽古を積重ねていくうち、迷いも忘れ、溜めのある構えから思い切った技が打てるようになり、今回の審査に臨みました。

審査では一次、二次審査とも迷わずに思い切った技が出せ、さらには自分自身持っている力を一〇〇%出すことができました。ここで四年半の間日々の稽古で心がけたことや、稽古時間の捻出方法を紹介します。

まず初めに、日々の稽古で心がけたことを四点紹介します。第一点目は、どのような相手に対しても気を抜かず、常に真摯な態度で稽古をすることです。

剣道場では少年の指導を中心に稽古しているため、少年との稽古が多いのですが、どのような相手に対しても初太刀一本を大切にしながら、常に真剣に取り組んでいます。

第二点目は、「先」の気持ちで稽古をすることです。

交刃の攻防から打間に攻め入り、相手を崩して打つという一連の動作を「先」で行えるよう心がけています。

第三点目は、打ち切ることです。

打突を出すときは、一足一刀の間合いから姿勢を崩さず、気・剣・体の一致の打突が出来るよう心がけました。その中で特に注意したのは、小手面、面面といった二段打ちを極力出さないようにし、一足一刀で打ち切る練習に励みました。

第四点目は、姿勢を崩さないことです。

攻められても姿勢が崩れないよう又、打突時、打突後の姿勢が崩れないよう送り足に重点をおいて稽古しました。

次に稽古時間の捻出方法ですが、会社経営しながら剣道場「養武館」を主宰し、稽古に励んでいます。道場での稽古は、週三回

主に少年の指導を中心に行っています。

稽古日以外の日は午後八時すぎまで仕事をし、日曜日は各種剣道大会の審判に出向いているため、出稽古はほとんど出来ませんが合間をぬって、国際社会人剣道クラブの月例会、徳島県剣道連盟主催の練習会等に参加しています。

徳島県警察の剣道特練生として稽古をしていた時と比べると稽古時間は十分の一以下となりましたが、稽古量が少なくなつた分、一分一秒を大切に真剣に取り組んでいます。



茶会の心得に「一

期一会」という言葉があります。それは生涯にただ一度まみえることという意味があるそうです。私自身これからも「一期一会」の精神で頑張りたいと思っています。

最後になりますが、剣道最高段位に合格出来たことは、私にとっては勿論のこと私共家族にとっても

大変名誉なことです。これからは、八段位に恥じるのではないよう修行を重ね、一生懸命精進努力を重ねる所存ですので、今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



二〇〇五年十二月十二日 徳島新聞掲載写真

八段審査において米倉先生（右）が初太刀の面を決める瞬間



米倉滋先生の略歴

〈生年月日〉昭和30年1月29日生 51歳

〈本 籍〉徳島県

〈住 所〉徳島市八万町馬場山43番地の2

〈職 業〉有限会社 米倉電気管理事務所 代表取締役社長

〈最終学歴〉徳島県立阿南工業高等学校卒業

昭和30年1月29日 阿南市水井町にて父兵次、母チエ子の長男として出生する。

昭和42年4月 阿南市加茂谷中学校に入学、1年生から剣道を始める。

昭和45年4月 徳島県立阿南工業高等学校に入学、故清原栄範士・鎌田恵錬士に師事

昭和48年4月 徳島県警察に奉職、故堀江幸大範士に師事

昭和62年11月25日 七段受有

昭和63年5月8日 教士受有

平成7年9月 徳島県警察を退職、会社員を経て平成16年4月より現職業

平成9年7月 住所地において剣道場「養武館」を開設。剣道の振興と青少年の剣道指導を行う。

平成17年11月28日 八段受有

主 な 戦 歴

全日本剣道選手権大会 出場 5 回

昭和53年 ベスト16

国民体育大会 出場10回

昭和54年 5位入賞（総合3位）

昭和59年 5位入賞（総合8位）

全日本東西対抗剣道大会 出場 1 回

全日本都道府県対抗剣道優勝大会 出場 3 回

全国警察剣道大会 出場16回

昭和56年 3位（2部）～1部8チーム、2部40チーム

平成元年 3位（2部）～1部8チーム、2部40チーム

全国警察剣道選手権大会 出場 5 回



おめでとう米倉八段

元阿南工業高校剣道部顧問 鎌田 恵



平成十七年十一月二十八日午後七時頃であった。日本武道館で行なわれた、全剣連主催の八段審査会で米倉滋君の剣道八段合格の第一報が入った。彼から八段審査を受けることは聴いていたが、まさか二回目で合格するとは思いませんでしたので、そのあと彼本人に確認の電話を入れたところ、最難関、剣道の最高段位八段に合格したとのことであった。

その時初めて彼に喜ばしく心からお喜びを伝えた。

私と米倉君との出会いは、昭和四十五年四月彼が阿南市立加茂谷中学校より徳島県立阿南工業高等学校電気科に入学し、剣道部へ入部してからです、入部当初彼は体格には恵まれていたとは言えなかったが、下半身の強さと走力には素晴らしいものを持っていた。

昭和四十三年四月から、剣道部師範に清原栄先生、剣道連盟会長長遠藤一美先生、尾崎行男先生、勢井良平先生方を指導陣にお迎えし、全国高校総体に向けて、指導者の充実と強化策がはかられた。

先輩達には昭和四十六年度に徳島県で全国高校総体剣道競技の

開催に備え、県下の有力校男女各四校の強化指定校として阿南工業高校が選抜され、その後、指定校の強化合宿を旧徳島武道館で実施し、近畿地区を中心に長期休業中に強化遠征が続いた。全国総体には、県予選会での一位・阿南工業高、二位・富岡西高の男子二校が開催代表として出場し、活躍した。

米倉君は清原先生始め諸先生方のご指導と彼の剣道に対する前向きな取り組みと、前述の様な基礎体力と剣道理解と器用な竹刀捌きで群を抜く速さで剣道が上達し、前記の先輩達の卒業後の新チームの先鋒としてレギュラー五人の中に入り、名先鋒としての地位を不動のものにした。

彼は、先生方や先輩との稽古にも、その立ち向う闘争心と前に出る気力とその動きの速さが充実し、集中力の切れない日々の稽古が各大会の成果として出ていた。清原先生がよく言われた言葉に、稽古は試合の如く、試合は稽古の如く、と彼は正にそのとおりであった。

高校最後の学年では、県下高校大会公式戦のうち高校総体を除くすべての大会に優勝したが、残念ながらインターハイに出場できなかったことが今も悔まれる。

しかし、彼がこれまで剣道を続けられたのも、阿南市水井町から同市宝田町今市の学校まで往復三十キロを二時間かけて山路を三年間通学したことが彼の体力と精神力をささえた一つに思う。そうした環境の中で、学業では、専門の電気工学が得意で高校三年生の秋に、電気第三種電気主任技術者免状などを修得している。

受検対象は社会人、大学生、高校生とし、合格率十五%で、高校生としては最難関の資格試験と言われている。こうした彼の文武不岐の精神力がうかがえる。この資格が現在の会社経営につながったと思う。

阿南工業高等学校を昭和四十八年三月に卒業した彼は、徳島県警察奉職後、剣道特練として本格的な剣道の修業を始めた。

当時の師範の堀江幸夫先生はじめ多数の先生方と先輩方のご指導を受け、前掲の「主な戦歴」のような活躍と実績を残した。

その後、平成七年徳島県警察退職して仕事の傍ら、自宅所在地に剣道場「養武館」を創設し、館長として、自ら研鑽を積むとともに地域の青少年育成に努め、他方、NPO法人国際社会人剣道クラブ会員として、昨年は二回にわたって欧州など海外への剣道指導と自分の研鑽に向いたことが大きな自信と成ったと思われる。彼の今度の剣道八段合格については、徳島県剣道連盟の諸先生方と幾多の先輩方始め皆様方のご指導ご支援の賜物と思う。

米倉滋君には今後健康に留意し、これに慢心することなく、益々剣道に精進し、徳島の剣道いや、全国の剣道の更なる発展に貢献できることを期待し、お歓びを申し上げます。



第34回国民体育大会剣道競技 総合成績第3位 徳島県選手団
昭和54年10月17日 宮崎県・高千穂町大会にて (写真：鎌田所有)

おめでとう米倉八段

徳島県警 近藤 亘

米倉君八段ご昇段おめでとうございます。

一昨年の河田君に引き続き、二年連続で徳島県から八段合格者が出たということは、徳島県剣道連盟にとって誠に喜ばしい限りです。

河田君、米倉君と私は、高校時代お互い切磋琢磨してきたよきライバルです。特に米倉君とは、阿南工業高校剣道部で同じ釜の飯を食べた中で、高校卒業後（昭和四十八年四月）共に徳島県警に就職しました。

警察学校卒業後、一年間警察署で勤務し、昭和五十年共に機動隊に入り、県警の剣道特別訓練員（選手）として各種大会に出場いたしました。

当時、堀江幸夫先生が県警剣道師範をなさっており、良き師の元でお互いしのぎを削りあいました。

米倉君の剣道は、「機関銃」の異名を取るくらい打ち出したら次から次へと技が出る剣道でした。また、ここ一番の勝負強さを持っており、チームの要として大いに活躍致しました。

二度の全国警察剣道大会第二部三位（昭和五十六年・平成三年）、四国管内警察剣道大会初優勝（平成三年）は、米倉君の活躍がなければなし得なかったものです。

米倉君と私はよく人に比べられることがあり、ある時「米倉と近藤を足して二で割れば丁度いいなあ。」と、言われたことがあります。

それくらいお互い両極端だったのででしょうか。

その後米倉君は、自宮の道に進み、自宅に道場を設け少年指導を始めました。それからおよそ十年、この度の八段合格となりました。八段位は、

「心・技・体」

すなわち実力の上「品位・風格」が備わって初めていただけるものと思います。

米倉君のご昇段をお慶びすると共に、今後ますますのご活躍をお祈りいたします。



全国警察剣道大会 昭和53年11月1日

剣道有功賞

楽しかった剣道

副会長 高下正義



この度県剣道連盟の御高配により、全剣連から有功賞を戴くことになり、有難く深く感謝いたしております。

さて、私は昭和十四年に旧制麻植中学へ入学し、一年生から剣道部に入部して横田武文先生指導により稽古を始めました。当時、上級生に重井好高・乾寿夫の先輩、同級生には美馬政雄・久保農夫也（鴨島町長）後輩に南充美、川真田高太郎君等がおり、五年間よく稽古しました。

上級学年になって、久保勇・瀧下勝両先生に御指導いただきました。県の中等学校大会で低学年の部・高学年の部共に団体優勝し、当時の仁科校長が校長室で親子ドンブリで歓待してくれました。低学年優勝は昭和十六年、時あたかもアメリカとの太平洋戦争開戦の時でありました。

戦時中はさておき、昭和二十七年阿北高校に転勤、占領軍から剣道が解禁されました。しかし、道場がなかったので、運動場の

片隅で運動靴をはいて稽古を始めました。昭和三十年頃、麻植中の柔道場が阿北高校に体育館として移転改築され、その落成式にPTA会長の森本義男先生と壇上で日本剣道形を当時刀引きがなかったもので、よく切れる真剣を使って実演しました。

本当に気合のこもった演武でありました。当時、阿北高校には出口嘉平先生がおられ、稽古でお世話になりました。その頃、毎年市場町八幡の八幡神社で二月十一日に拜殿で稽古会があり、坂本裕二先生から案内があり、阿波支部の先生方と稽古し、御指導を戴きました。

昭和三十四年、徳農神山分校に転勤、当時の県教職員体育大会剣道の部に名西郡から名西高校の高瀬嘉十郎先生と中学校の多田三美先生と私の三人で毎年出場し、優勝してはウナギ飯で乾杯を上げました。昭三十八年、神山町体協主催で第一回の武道大会を開催しました。徳農本校、名西高校、川島高校、神山分校、中学校は神山中、石井中、高浦中、入田中、北井上中等が出場、盛大に行なわれました。前半十年間は高校と中学校、後半二十年間は中学校と少年で三十回まで行いましたが、生徒の減少により幕を閉じました。昭和四十年から約十年間位、部活に力を入れました。午後四時で仕事を打ち切り、毎日約一時間、生徒と共に汗を流しました。当時の卒業生には松村和宏、久保隆司、東徳美、馬岡聡（東京警察）等が、現在七段となつて活躍しています。金曜日には名西高校で名西支部の稽古、土曜には石井町須見善富・石井隆介両先生のところへ居合の稽古に出かけていました。昭和四十三

年には県高校総体で個人で男子一位、女子二位となり、広島での全国大会へ出場しました。全国大会でも二、三回戦まで進出しました。

昭和四十七年京都で七段に合格しました。神山での祝賀会に堀江幸夫先生、当時石井警察署長高田豊先生が出席していただきました。昭和四十九年に県高校規格の武道館が完成、正課剣道と部活に一段と活用させていただきました。

また、神山少年剣道教室をつくり、毎週土曜日に実施しました。退職後は場所をかえて十五年間継続することができました。昭和四十七年には全剣連主催奈良柳生の中堅剣士講習会に参加することができました。同期生には十二名の範士八段が誕生し現在も健在であります。昭和四十八年、松本一城・下村富夫両先生から依頼され、学校剣道連盟の事務局を中川虎雄先生から高島稔之先生に、下村先生の代りを小生に引継ぎ、昭和六十一年退職するまで、学剣連の稽古会、全国大会の予選等の世話をさせていただきました。平成十年、全日本学校剣道連盟から表彰を受けることができました。又、全国教職員大会には鹿児島から青森まで選手および監督として九回出場しました。

昭和五十六年から五年間高校教頭、副校長となり、多忙でありましたが、高校の四国大会の審判を十二回、全国高校大会の審判を五回、約二十日間滋賀、愛知、高知、秋田、鹿児島大会に参加でき良い研修をさせていただきました。昭和五十八年には全国高体連から表彰を受けることができました。毎年京都大会には美馬、南

君と参加、朝稽古等の三福寺での生活が脳裡に浮んできます。平成十五年全国健康福祉祭徳島大会では総監督を拝命、選手一同の努力により優勝、感慨深いものがありました。

昭和五十二年から県連監事を六年、審議員を十二年、副会長を十一年勤めさせて戴き、皆様の御支援に感謝いたしております。長くなりますが、剣道についての私の感想を述べさせて戴きます。「剣道をやっていた良かった事」

一、健康を維持することができた。

弱い体であったが八十才まで生きることができた。

二、すべてを忘れて打ち込めた。

生徒指導でも剣道精神で対処できた。

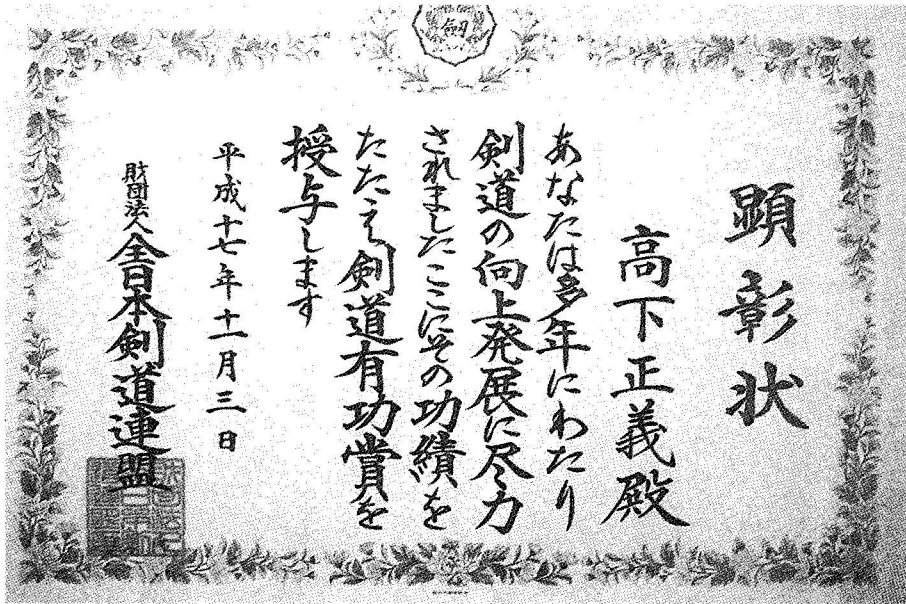
三、多くの人との出会いがあり、人生豊かに過ごすことができた。

参考に私の生活指針を述べます。(健康生活のための)

腹八分 くよくよするな 無理するな 仕事急ぐな 腹立てな

大酒のむな よく歩け 身の安全を心得よ(八ヶ条)

長い間剣道でお世話になった皆様に厚くお礼を申し上げ、受章の御挨拶いたします。



少年剣道教育奨励賞

木頭錬心館の歴史あれこれ…

岡田 豊



平成十七年十一月三日に於いて、全日本剣道連盟より木頭錬心館に教育奨励賞の受賞の栄を頂きました。誠に持って大変名誉なことで、関係者一同心より御礼申し上げます。これも偏に県剣道連盟関係者各位のおかげで衷心より感謝申し上げます。

まず道場の歴史について述べさせていただきます。道場がある日突然できるわけもなく、物が出来るには大抵の場合、前の段階があります。それでは道場が建設されるまでの過程を触れてみたいと思います。戦後、木頭で剣道が始まったのは、和無田八幡神社の舞台で始められたそうです。その後、木頭で唯一の劇場、木頭会館を個人で経営されていた西岡信太さんより無償で提供していただき、道場主・西岡信太さん、指導者・大澤先生、愛好者の三者一致の元、昭和三十二年二月より本格的な剣道が始まりました。入会者も増え、大澤先生のご指導の元、一日置きの稽古の時は芋を洗うような盛況振りだったとのこと。その後、愛好者

の大変な努力によって、昭和三十七年六月、戦後県下のトップを切って、専用道場が建設されました。その名称を大澤先生が個人で経営していた大和熟の大和の二文字を頂き大和錬心館と名付け、大澤先生の指導により足音高く木頭剣道全盛時代へと向かいました。

昭和四十一年、村役場建築の為、道場移転となり、その移転した道場も諸般の事情により平成十六年十一月解体されました。

その後は、木頭小学校横にあります、柔剣道場で行っております。顧問、雄西義春先生、走川輝一先生、佐々木武夫先生、指導者、木頭小学校校長・芝原功一先生、松本繁嗣館長、早川幸男教育委員長、小野恭補、福井則夫、山下伸也、小川大造、佐々木幸次、喜多弘の各先生方です。私が剣道に携わり始めたのは、昭和四十九年四月からで、当時木頭錬心館は、原田勝先生が指導されておられました。私も一緒にさせてもらっていましたが、原田先生が結婚を機に私に任せられました。私が指導する立場となりましたが、何分にも若く、経験未熟な者に、将来有望な子



ども達を任されることは大変な責任を感じました。当時を思い出すと、ただ無我夢中で若さにまかせて稽古に取り組んだと思います。

昔自分が教わった基本練習と掛かり稽古を中心にやりました。厳しい稽古にも関わらず子ども達は本当に道場へ足を運んでくれました。深いご理解あるご両親はもちろんのこと、子ども達に感謝感謝。

元旦の初稽古には毎年福井重二先生、佐々木和人先生、臼木崇先生、曾根徳治先生の出席を頂いております。その他OB関係者はもちろん、充実した年の始まりとなっております。

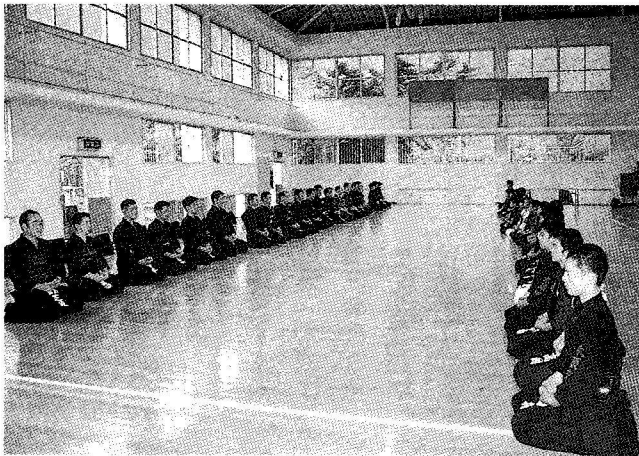
この伝統ある木頭錬心館の灯を絶やす事なく引き継いで行くことが今携わっている者の使命です。改めて指導者はよくよく考えて事に当たらなければならぬと感じました。

幼少年に対する剣道指導上の留意点として、以下の事柄を心がけております。

- 一、発達段階に応じた指導
- 二、基本重視の指導
- 三、礼儀の指導
- 四、基本的なしつけの指導
- 五、学業と剣道の両立についての留意点
- 六、自立心、独立心の養成
- 七、社会性の養成

終わりにりましたが、受賞に当たりご推薦いただいた徳島県

剣道連盟の諸先生方に厚くお礼申し上げ、今後共かわらぬご指導の程よろしくお願い申し上げます。



少年剣道教育奨励賞

木頭錬心館 殿

少年少女の剣道指導に永年に亘り
尽力され家庭及び学校教育並に
地域社会の向上に資する活動を継続
してこられたことに敬意を表します
今後とも剣道を通じての人造りのため
一層の精進と努力を期待しここに
少年剣道教育奨励賞を贈ります

平成十七年十一月三日

藍染会日本剣道連盟

会長 武安義光



少年剣道教育奨励賞受賞について

鳴門支部 佐藤 勇



この度、表記の賞の栄を戴く事を剣窓で知り、先日の理事長からの質問はこの為であったのかと思ひ至りました。また、私如き者がこんな賞を戴いて良いのかとも思いました。振り返ってみると、只先輩先生方に従いマネ事ばかりしている内に自分の稽古も出来て子供達と共に昇段も順調よく登らせて戴きました。

私の生れは昭和二年です。小学校の教科書も私の時から国語は「ススメスス、ヘイタイススメ、ヒノマルノハタ、バンザイ、バンザイ」になりました。小学校六年の頃、青年学校の先生の太田郷八先生が赴任され、剣道をゼロから教えて下さいました。国民学校になり、八年間終わると国策に応じて、各方面へ進路指導を先生方が奨めて下さいました。私と浜田君の二人は予科練（三重海軍航空隊）へ、佐賀君と増金君は満蒙開拓義勇軍へ、四名は時代の波の進路を選びました。後日、浜田君はコレヒドールの特攻隊で戦死、佐賀君はソ連のシベリア抑留で亡くなりました。一緒に巣立った者として感無量悔んでも悔み切れない残念な結果になりました。

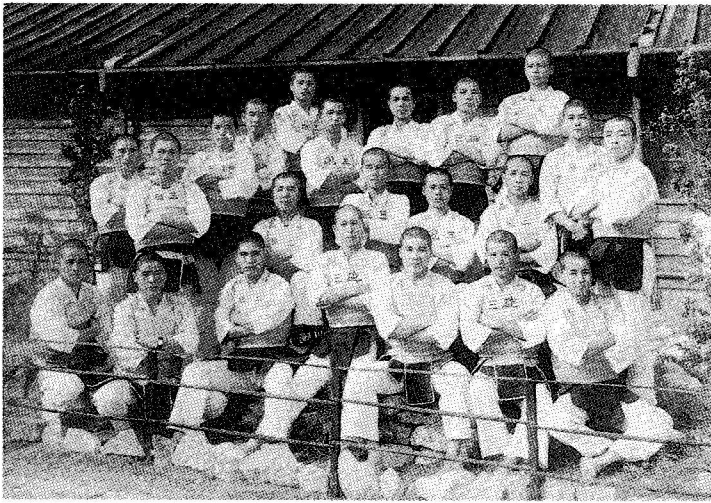
海軍では基礎を太田先生に教わっていたので迷わず剣道を選び

ました。毎日別科時間は剣道です。他には体操、角力、陸上、銃術などありました。軍隊の約三年間厳しい訓練を通じ、軍隊で身体も心も一人前にして戴きました。剣道を選んだ者の内、昭和十九年十月頃、査定があり航空隊司令から初段を許されました。二五〇名位の内二十二名位だったと思います。（写真）

終戦後の昭和二十五、六年頃から堀江先生の鳴門剣道倶楽部に御世話になり、色々教えて戴きました。昭和二十八年、尾形道場道館で五段。昭和六十四年、名古屋で六段。平成六年、京都で七段。六段の十一月に練士。七段の十一月に教士をそれぞれ戴きました。二段頃より、本道に目覚め、先生方の御教導を、心して教わる様になりました。

全剣連より示されました理念と剣道修練の心構えをしっかりと捉え、目標に向けて精進する事が正しい稽古法であり、理念を元に心構えを実行する事こそが子供達と共に進歩する根本であると確信します。堀江先生はもとより、私の場合、大



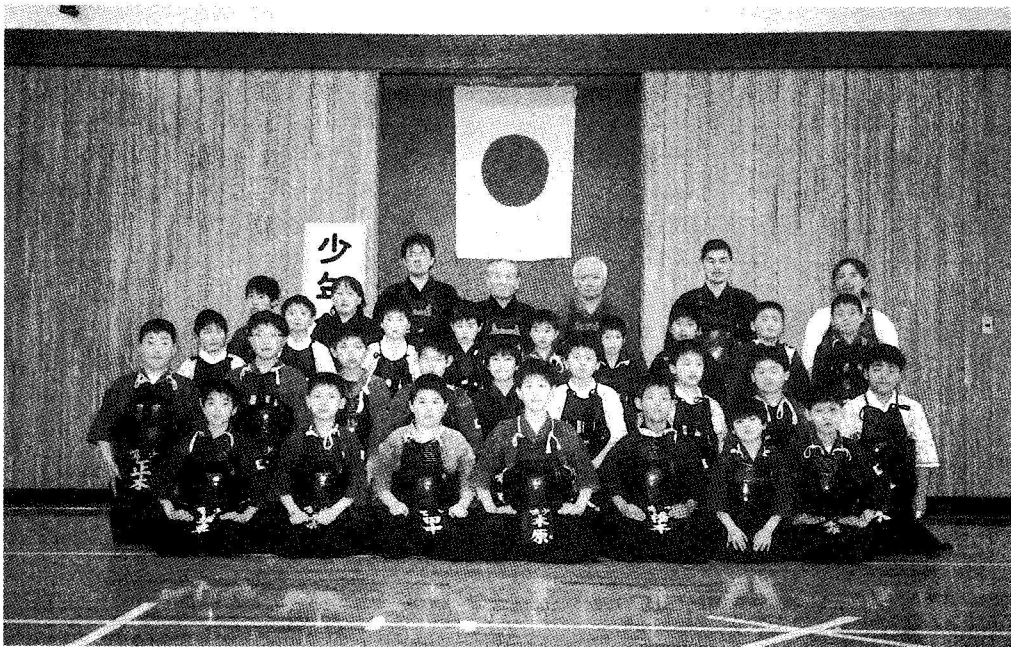


昭和19年 初段当時 三重海軍航空隊にて
(三列目右より二人目が筆者)

勢の先生方に恵まれ、子供達から難しい質問とか疑問があっても必ず良い解答が返せるだけの剣道の知恵袋である先生方が何時でも対応できるように回りに存在してくれています。また、子供に伝達する前に自分の分は中間で勉強させて戴くという至れり盡くせりの環境下で勉強させて戴きました。山田先生、寺西先生、山本先生、堤先生、前林先生、菱田先生、木原先生、元木先生らと一緒に努力して来ました。これらの先生方こそこの賞を戴いて然るべくと存じますが、この度私が代表して戴くことになりました。

故人も何人か出ておられますので、御仏前へ心から報告したいと思います。
長々と詰まらぬ事を書きました。が、県剣道連盟の会長、理事長始め役員の皆様、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。今後共

頑張るつもりでございます。益々の御指導宜しくお願い申し上げます。



鳴門運動公園少年剣道教室 平成14年度閉校式 (平成15年 3月15日)

平成17年度 徳島県高等学校剣道優秀選手

No.	男 子	学 校 名	No.	女 子	学 校 名
1	佐 藤 崇 景	徳島文理	1	田 尾 望	川 島
2	鎌 田 崇 佐	徳島文理	2	井 口 あすか	川 島
3	阿 部 高 大	徳島市立	3	乗 原 遙	川 島
4	岸 野 哲 也	徳島市立	4	山 田 佳 奈	川 島
5	峰 本 博 彰	川 島	5	檜 本 彩 里	富岡西
6	久 保 智 司	川 島	6	酒 井 奈 々	富岡西
7	高 橋 洋 行	川 島	7	近 藤 愛	富岡東
8	佐 藤 一 貴	川 島	8	山 田 愛	富岡東
9	大 西 佑 弥	川 島	9	村 瀬 聡 美	富岡東
10	松 原 佑 介	川 島	10	濱 野 薫	富岡東
11	新 居 由 啓	阿 波	11	横 山 佳 那	富岡東
12	湯 浅 貴 浩	阿 波	12	堂 上 恵里子	城 西
13	岩 沙 佑 樹	阿南工業	13	東 村 幸 子	徳島市立
14	石 井 孝 二	阿南工業	14	福 田 沙也加	新 野
15	壺 内 慎 介	阿南工業	15	渡 部 早智子	城 北
16	森 友 志	阿南工業	16	原 田 彩 子	鳴 門
17	田 中 優 大	阿南工業	17	山 下 純 子	鳴 門
18	三 原 直 起	阿南工業	18		
19	小 西 朝 陽	城 北	19		
20	新 田 裕	富岡西	20		
21	岩 本 達 也	富岡西	21		
22	米 澤 弘 朗	城 東	22		

平成17年度 徳島県中学校剣道優秀選手

No.	男 子	学 校 名	No.	女 子	学 校 名
1	庄地 畠 康 太	文 理	1	大 西 梓	阿 南 一
2	桜 木 鉄 也	坂 野	2	中 川 知 香	北 井 上
3	田 村 嘉 崇	坂 野	3	井 上 奈 津 実	北 井 上
4	平 井 悠 基	坂 野	4	中 川 瑞 稀	北 井 上
5	小 西 衛	坂 野	5	村 田 奈 津 季	阿 南 一
6	岩 永 蓮	坂 野	6	細 川 美 波	阿 南 一
7	松 本 凜 太 郎	坂 野	7	賀 上 由 里 奈	阿 南 一
8	藤 本 健 登	文 理	8	西 澤 真 世	牟 岐
9	福 川 敬 太	相 生	9	瀬 戸 楓 子	牟 岐
10	前 川 航	相 生	10	西 田 奈 央	相 生
11	前 川 淳 史	相 生	11	高 橋 理 恵	山 川
12	福 永 啓 人	相 生	12	芳 田 裕 美 子	那 賀 川
13	岩 雲 祥 吾	鴨 島 一	13	壺 内 美 沙 希	那 賀 川
14	山 口 拓 也	鴨 島 一	14	黒 川 ひ と み	池 田 一
15	土 山 康 平	徳 島	15	磯 部 つ か さ	大 麻
16	向 原 紳 悟	日 和 佐	16	片 山 由 貴	鴨 島 一
17	福 井 一 馬	木 頭	17	寺 西 珠 里	鴨 島 一
18	三 木 亮 二	市 場	18	今 川 和 美	那 賀 川
19	正 村 良 太	小 松 島	19	横 川 由 佳	三 好
20	西 山 拓 志	小 松 島	20	永 浦 瞳	阿 南
21	大 塚 亮 太 朗	上 八 万	21		
22			22		

先生を偲ぶ

《岡本憲三先生を偲ぶ》

良き友、良きライバル

審議員 坂下彦之



岡本憲三先生は、私と同じ、昭和十二年の丑年生まれですが、私は一月早生まれで、一学年先輩です。実家も同じ町内（撫養町斉田）で、家族も子沢山で、私が八人兄弟、憲さんも七人兄弟で、お互

い家で要らない三男坊、そして小兵で勉強嫌いと、本当に似た者同士で、「憲さん」「さくちゃん」（私の旧姓は桜田）と呼び合う仲でした。憲さんは、親分肌で、人に頼まれると絶対嫌と言わず、最善を尽くすので誰からも頼りにされ、愛される良い男でした。

私は、鳴門高校一年（昭和二十七年）の夏、鳴門一中体育館で、堤茂先生が始めた剣道教室に入会して剣道を始めました。一ヶ月後に中学三年の憲さんと、後藤、倉根君の三人が入会しました。翌年、岡本、後藤、倉根の三名は、仲良く撫養高校に進学しましたが、私と憲さんは、一中の稽古、尾形郷一先生の貫心館道場で土用、寒稽古に競って参加し稽古したものです。

昭和三十三年春、私が和歌山の会社を止め帰県し、堀江先生に

ご挨拶に行ったおり、先生より、「憲さんが県警に合格し、警察学校に入校している。お前も頑張って採用試験を受けなさい」と言われました。私もやるだけやってみようと、一心発起し慣れない勉強を必死でやりました。そして試験に合格し、昭和三十四年四月、私も警察官を拝命することができました。これも岡本憲三と言う良き友、良きライバルが居たからだと思います。

昭和三十六年春、岡本、堀部、鶴和、桜田の四名が剣道特別訓練生として花の機動隊に入隊しました。憲さんは、昭和三十四年から四十四年までの十一年間、徳島県警察剣道選手として、四国管区内剣道大会に出場し、個人戦で三度、準優勝という立派な成績をのこしています。また、昭和四十、四十一年、全日本剣道選手権大会に連続出場し、四十年第十三回大会では、初出場ながら三回戦まで勝ち進む大健闘しています。その他、国体、全国都道府県対抗剣道大会等に、県代表選手として出場、大いに活躍され剣道発展に寄与されました。

昭和四十四年、難関の警察幹部試験に見事合格し、翌年三月、特別警ら隊の分隊長に栄転され、剣道特練生を卒業されました。その後、先生は警察署の交通係幹部として活躍されると共に術科指導員として署員は勿論、警察署管内、中・高生、一般の方々の剣道指導に積極的に取り組まれ、各地に大きな足跡を残されました。

昭和六十一年九月九日、三野町で病に倒れましたが、その後回復されたのですが、少し後遺症があり、リハビリに頑張っ

いると聞いていましたが、昨年二月十三日思いがけない訃報、残念無念。岡本憲三先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

合掌



父・岡本憲三との思い出

鳴門支部 岡本 茂



父は徳島県鳴門市撫養町に（七人兄弟の三男）生まれ、鳴門第一中学校から撫養商業高校（現・鳴門第一高校）に進みました。又、剣道では高校時代から故堀江幸夫先生を師と仰ぎ、徳島県警察に奉職後、警察署勤務を経て、警備部機動隊（剣道特練）に配属。堀江先生を県警察剣道師範に、選手に現徳島県剣道連盟審議員・坂下彦之先生・松村克隆先生・中尾正輝先生、現板野東支部長・川田武志先生といった先生方と汗を流し、各種稽古会では現在本県剣道連盟でご活躍されている諸先生方と共に、稽古三昧だったそうです。

諸先生方に聞いた話ですが、当時の父は大変活発で、剣道においては、ことのほか研究熱心で勝負に掛ける執念たるやすさまじかったそうです。現役時代には、全日本剣道選手権・国体・都道府県対抗剣道大会等で活躍したとの事です。警備部機動隊（剣道特練）を離れ、現場の第一線に配属されました。

阿南警察署勤務時には当時県立阿南工業高校に在籍されていた現徳島県警察剣道師範・近藤巨先生やこの度八段に御昇段された米倉滋先生らを相手に稽古をしていたようです。

私が覚えているのは、父が牟岐警察署勤務時に海部支部・美馬和義先生や現在高知刑務所で活躍されている森崎善之先生らを相手に稽古を続けていた事で、美馬先生が在籍する徳島県立水産高校剣道部の練習が終わった後、必ず家にきて父の指導を受けていた様子を見て、よく続くなあと思う反面、何事も自分から追い求め、継続していかないと強くないのだと思いました。

父は私に剣道をさせたくて仕方がなかったようでしたが、小学校当時の私は、父が教えたとおりにできないと父はすぐに怒るので、それが嫌いで逃げまわっていました。それを知っていたのかどうかはさだかではありませんが、私を稽古に誘うことはありませんでした。

私が中学二年生の春に父が川島警察署（現吉野川警察署）勤務となり、父から「もし、転校先の川島中学校に剣道部があれば剣道をやってみるか？」と言われ、私も興味半分で「あればやってみる。」と答えました。私が剣道を本格的に（？）始めるきっかけとなりました。

川島中学校には幸か不幸か剣道部があり、剣道部に入部する事になり、父も仕事の合間を縫って指導に来るようになりました。父の稽古をご存知の方は想像できると思いますが、父の指導は生半可なものではありません。私との稽古では足払い・体当たりは当たり前で、当時の同級生・後輩が震いあがったほどでした。家に帰れば稽古の内容について細かく・厳しい叱責が待っていて、よく我慢したと思う反面、今になって思うと父は自分の持っ

るもの全てを私に伝えたい、剣道とは本当に素晴らしいものであると教えたかったのではないかと思います。川島高校に進学し剣道部に入部しましたが、父の期待とは裏腹に、私がいまにもパツとしなかったので、その頃から父は私をいわゆる選手タイプでなく、生涯通じて剣道を継続していく一般の愛好家として細々と剣道を続けてほしいと思ったのではないのでしょうか。事実その頃より、私生活・剣道において少しではありますが、優しく感じられました。

やがて父が念願の七段に昇段し、私も高校三年の九月に三段に奇跡的に合格し、これから父に年齢相当な剣道を教えてもらえるかなと思った矢先に、その年の九月下旬に脳内出血で倒れ再び竹刀を握ることができなくなり、父の長く厳しい闘病生活の始まりであり、母や姉にとっては終わりのない介護の始まりでした。右半身不随・失語症と大きな後遺症が残りましたが、私が徳島市内の建設会社に就職を決めた時に父は一言「ほうか」といって喜んでくれたのが大変印象的でした。

闘病生活中の父は母と二人三脚の生活で、散歩が毎日の日課となり、姉が勤務の合間を縫って父の面倒をみるようになりました。私は仕事の関係上何もできませんでしたが、毎日元気で仕事に行くことが親孝行と思い、仕事優先で頑張り（？）しました。剣道も鳴門支部で一週間に一〜二回程度の稽古となり、稽古帰りの私をいつもニコニコと迎えてくれました。

連盟の稽古会等で前述の先生方からご指導を頂くのですが、な

かなか思うように行かず、私の実力不足と父の偉大さを再認識させられました。私が剣道連盟の評議員に鳴門支部から推薦してもらったことを父に話すと、「お前ができるか？」という表情でしたが最後にニコニコしながら一言「ほうか」と頷いてくれたのを覚えています。私が少しでも剣道にかかわっていることが内心うれしかったのではないかと思います。

父が体調を崩し、鳴門市内の病院に入院した時、休みごとに妻

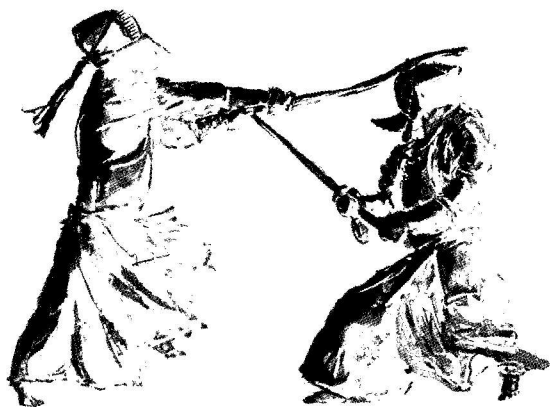


ありし日の父 県警チームで社会人大会優勝
前列左より松村克隆先生、父、坂下彦之先生、寺西慶裕先生

と私が父の元に行くくと、ベッドの上から「ヨッ」と軽く左手を上げて迎えてくれました。しかし、だんだん病魔に冒されるに従い元気がなくなっていました。私達が行くと必ずニコニコと笑みを見せてくれましたが、平成十七年二月十三日に黄泉の国へ旅立っていきました。

私にとって心残りなのは、父の存命中に父の段位（教士七段）までに追いつけなかったことです。私は父のように各種大会等で活躍することは難しいので、せめて段位はと思っていたのですが……必ずや追いつき、父に胸を張って報告できるよう、仕事にも剣道も以前よりも前向きに取り組みたいと思っています。

最後になりましたが、父の葬儀・告別式の際には多数の御心を賜り有難うございました。



高橋静夫先生を偲ぶ

名西支部 大西正範

先生は高原に生まれ、十歳頃より、久保利夫先生の道場久武館にて剣を学ばれ、俊敏なる才を発揮され、中学青年学校をへて、教職の道を進まれ、戦後の混乱期の中、中卒生の社会への送り出し等で苦勞があった由である。

復活後の剣道では高浦中学で長く指導され、その第一期が審査部長の中村稔裕氏であり、私はその四期である。また、石井中、加茂名中と歴任され、最後は旭学園であった。

先生のすごい所は、その地、その地において成果を出され、生徒を輩出した事です。特に旭学園を徳島市の予選に出されるまで育てられた事、有段者を出した事は驚きに値する。退職後は、全国高齢者大会に十回以上出場され、表彰を受けている。ここでも、先生は負けた事がなく、体調と相談されて棄権している事です。又、高齢会でオーストラリアに遠征された時は帰国時、空港に十数名の人が見送りにこられ「ユーアーナンバーワン」とキャップをもらい、送られた事を得意然と楽しそうに話されていた事を思い出す。

先生を語るにもう一つ忘れられない事は仲人である。現職国会議員三名が出席する結婚式等、たくさんされている。晩年、元気がなくなり心配していた所、次に会うと元気になっていたので、

話を伺ってみると、後藤田正純氏の仲人をするとの事。その後、彼の結婚後、再度尋ねてみると、祝電、記念品を贈ったとの事。退職後のライフワークの集大成になった事に充足感をただよわせていた。

先生 享年八十八歳。
合掌

なお、高橋静夫先生におかれましては、名西支部での剣道発展への貢献により、平成十五年三月に徳島県剣道連盟創立五十周年記念感謝状が贈られました。

全国講習会報告

平成十七年度剣道中央講習会

(西日本)を受講して(報告)

徳島県剣道連盟審議員 中尾正輝

実施日時 平成十七年四月二日(土)

同月三日(日)

実施場所 神戸市立中央体育館

主催 全日本剣道連盟

みだしの講習会は、本年度から、従来

三日間で行われていたものが二日間に短縮されました。

本県からは、私と高島稔之先生がこの講習会に参加させていただき受講いたしました。

受講された各県剣道連盟等の参加者は、五十四名(八段二十五名・七段二十九名)、年齢四十五歳以上六十五歳以下の剣士が集合してハイレベルの講習会であったように感じました。

講師は、指導法・奥島快男範士、日本剣道形・熊本正範士、審判法・太田友康範士の先生方で大変内容の濃い講習会が行われました。

第一日目は、開講式で奥園國義全剣連副会長及び木山兵庫県剣

連会長の挨拶、島野大洋常任理事の趣旨説明、講師紹介が行われたあと引き続き講習会が開始されました。

初日は、審判法・日本剣道形・救急法・稽古会が、第二日目は、指導法について実施されました。指導法は、講話及び実技についておこなわれましたが、その時間配分は、講話に重点が置かれませんでした。

この講習会の伝達講習会は、平成十七年六月十九日(日)に実施いたしました。

一 審判法(太田友康範士)

講話及び実技指導がおこなわれました。

一 反則の見極め、望ましくない試合に対する審判員としての対処

剣道試合審判規則に精通し、審判法講習における重点事項
三つの柱に基づく。

〈重点事項〉

○試合内容を正しく判断する。

○有功打突を正しく見極める能力を養う。

* 有功打突の条件と諸要素の理解

* 技の違いと錬度に応じた打突の見極め

○禁止行為の厳正な判断と処理をする。

* 行為の原因と結果の正しい見極め

* 禁止行為に対する的確な処置

最終的には、試合審判規則第一条に立ち返って判断する。

二 有効打突の見極め

有効打突の要素、要件一つでも欠ければ有効打突と判断すべきでない。有効打突としないと判断した場合、要素、要件の何が足りないかの的確な説明ができなければならぬ。

錬度に応じた判断基準はある。(小学生～一般)

経験が大切。(自己の剣道研鑽と審判経験)

三 位置取り

試合者と審判員の距離。動きの中でも、最初の定位置での距離が原則(切り込みの必要性)

他の二人の審判員(試合者も含め四人)を常に視野に入れておく。上段の構えの選手に対しては、副審は、やや内側に入る必要がある。主審は、できるだけ早く試合者の中心に立つようにする。また、移動可能の範囲から責任範囲の位置にできるだけ早く戻る方策をとる。

四 その他

立ち姿(頸椎を緩めず、視線の高さを変えない)・基本姿勢(足を揃える)・声、動作(菌切れ良く)

審判員の入退場を揃える。(次の審判員入場のタイミング、入場時の足)

二 日本剣道形(熊本正範士)

講話及び実技指導が行われました。

・日本剣道形制定の経緯と剣道形修練の必要性

・制定の目的及び、現代剣道における位置づけと必要性―剣道

の基本の修練

・「中学校令施行規則」一部改正による正課教材導入。指導の必要性から制定。解釈統一の必要性その後の加註及び、加註増補。

・剣道形修練の守・破・離―「合わせる・打つ・切る」(段階指導)

・「守」の段階を脱皮するだけの形の修練がなされていない。講習会は「守」の指導。

・日本剣道形の修練を通して剣道の原点の普及発展と伝統文化の継承。

・形稽古で体得したものを竹刀剣道にどう活かすか。剣技、風格、品位。

・なぜ剣道形を修練するか、どう伝承するか。

・礼法・所作・構えの重要性(礼法、太刀・小太刀の持ち替え、小太刀を置く位置等)

・形の理合の理解が重要。例太刀の四本目。

・仕太刀が後の先で勝つ(四本目と六本目のみ、他は先々の先で勝つ)

・足運び。八相の構え、脇構えの右足は撞木足。自然体から足運びとは異なる。(忍び足)

・死に体、死に手、死に足にならない。太刀六本目、小太刀三本目の仕太刀の左足等。

三 救急法（日本赤十字社 兵庫県支部員）

応急処置と心肺蘇生法

救急法は、日進月歩。半年たてば講習内容が変わることもあり、一年以上前の受講では役に立たない。

四 指導法（奥島快男範士）

一 講話

○ 指導法の基本概念

指導法とは何か、何をなすべきか、その基本となる総論とも言うべき目標（目的）はどこに設定するのかを指導者が確信をもって策定し、それに基づいて具体的方策を展開し、指導の実行にあたる。

○ 指導の前提

指導者が矜持し、方法論を展開すべきである。人としての進歩向上教育は文化遺産の伝達である。

○ 剣の理法

○ 理念に基づいて、小学生から老人まで判る一般論として考える必要がある。技術区分、年齢、老若男女を勘案しながら具体的指導法を作り出す。Ⅱ 刀剣発達の歴史を基として、操法にかなっていないければ刀剣価値を失う。

○ 剣の法則Ⅱ先達が刀剣の攻防に生命をかけぎりの限界が積み重なって法則が生まれ、合理性が培われて剣の理法が存在する。

○ 剣の持つ法則性

*正しい刃筋

*物打ち

*押し切り・引き切り・直切り・突（掌中の作用であり、手の内）

○ 刀剣使用、刀の特性と合理性

○ 教育の基本

知育・徳育・体育を根幹とする。

○ 指導者は基本概念を持ち、方法論を展開し、指導を受ける側の納得と意欲の向上を図る。（教育のノウハウの確立）

○ 剣道の教育的効果（人間形成論による）

「知・仁・勇」三徳をもって剣道を標榜。人間形成の教育の礎。

*身体的効果

育成的側面と機能的側面

△育成的側面

- ・正しい姿勢の育成
- ・左右対称、上下均等の均斉美の錬成
- ・伸暢性のある姿勢の育成

△機能的側面

- ・気・剣・体一致の瞬発力の育成
- ・強靱にして耐久力の有る体力の育成
- ・技の修錬による巧緻性と機敏性

- ・技の修練による安全感の養成
- ・丹田呼吸の重視による安全性

*精神的効果

△特性涵養の側面

- ・武の七徳、剣の五徳、その他伝統的諸徳の涵養
- ・武道訓、諺等による社会的態度の育成
- ・剣道の実習を通じて実社会に生きるマナーの体得

△特性展開の側面

- ・日常生活への展開
- ・社会生活への移行 調和と協同性
- ・社会教化への実践

詳細については、平成十七年の剣窓四月号（通巻第二八四号）三ページに掲載されていますので、参考にしていただきたい。

五 実 技

面を着けずに、構え―左足と左手の収まり。面打ちの姿勢―両手の収まり所、体の安定、体勢復元上手な脱力による振りの冴え。（左手作用と右手の作用の理解と実践）

面を着装して

元立ちの心得―懸かり手の技をのばせる。懸かり手の先を取る。

懸かり手が、のびのびと打ち込みやすい元立ちでなければならない。

懸かり稽古と打ち込み稽古の違いを認識する。

切り返し―元立ちに従う。左右面前進四歩、後退五歩の功

罪。

効―一斉指導。基本錬成大会。

罪―元立ちと懸かり手の関係を見無視して行われ

がち。

「我」を出さない稽古―自分一人、打とうと思う稽古はよ

くない。

打つべき所は打つ。打たれるべき

所は打たれる。

以上のような事柄について、講習を受けてまいりました。今後、剣道指導者として、更に知識を養い指導していくと同時に自らも実践していく覚悟でいますのでよろしくお願いいたします。

居合道中央講習会に参加して

居合道部 吉岡 修 一

平成十七年九月十七日(土)～十八日(日)に京都武道センターにおいて、第三十二回居合道中央講習会に原田勝先生と私が参加させていただきました。原田先生には平成三年千葉県勝浦で行なわれました居合道中央講習にも連れて行っていただき、御一緒するのはこれで二度目であります。本講習会は各都道府県での伝達講習実施を条件とし、各都道府県剣道連盟の中核となる指導的立場の者を対象にしたものである。その目的は、全剣連居合審判実技の講習を重点的に行うことによる技能向上を図ることでありました。

受講人員は東京四名、埼玉・千葉・神奈川・愛知・大阪・福岡三名、その他の道府県二名の計一〇二名です。

講習一日目(九月十七日)は午前九時より全剣連武安会長はじめ役員・講師が参列し、開講式が行われました。居合道委員長上野範士の講話後、全剣連居合の解説に入りました。解説は岸本範士、模範演武は河口範士でした。全日本剣道連盟居合解説書の礼法一本目から十二本目の解説と模範演武が繰返し行われました。

全剣連居合は解説書の通りで何も変わったところはありませんでした。続いて、受講生を六班に分け、各講師による個別指導が行われました。私は一班で岸本範士の指導を受けました。その中で

二本目「後ろ」の抜きつけ時の足の位置について細かく指導を受けました。

午後からは今講習会初めて他流の研究で伯耆流がとりあげられました。熊本県安永範士の解説、同県の木村教士八段の模範演武で行われました。大会等で伯耆流の居合を拝見してはいますが、解説付きで演武を拝見するのは、初めてで注目しました。伯耆流の開祖は片山伯耆守藤原久安で、その師は居合の始祖林崎甚助重信、居合では一番古い流派と言われています。切りは「エイ」突きは「ハッ」と声を出し、全剣連居合五本目(袈裟切り)九本目(添え手突き)が伯耆流より取り入れられていると言われております。解説模範演武を拝見して伯耆流の運力、体さばき等良い勉強になりました。

講習二日目(九月十八日)午前中は居合道試合審判規則細則の解説が行なわれました。その中で主審の発声は大きく、旗の表示判定では三審判員同時に上げ、上げた手の方向角度等について細かく指導ありました。その後、受講生が審判員と演武者に分かれて、模擬試合を数回行い、各講師より指導を受けました。

午後からは各流派に分かれ古流の講習が行われ私は無双直伝英信流ですので、武田範士・山崎範士両講師より指導を受けました。同じ無双直伝英信流でも人がそれぞれ個性が有るように流れ理合の違いが表われているだけで大差はないので、師匠道場で教わっている通り修練してくださいとのことでした。その後、八段の先生元立ちで正座之部、立膝之部、奥居合へと進み難しい技の理合

第32回 居合道中央講習会 日程表

平成17年9月17日(土)～18日(日)
 (於・京都市武道センター)

財団法人 全日本剣道連盟

	9月17日(土)	9月18日(日)	
9:00	開 講 式 全 剣 連 居 合	審 判 実 技	9:00
		質 疑 応 答	11:30
12:00	昼 食	昼 食	12:00
13:00	全 剣 連 居 合	古 流 の 研 究	13:00
		閉 講 式	16:00
17:00			

役 員

全日本剣道連盟 会 長
 " " 専 務 理 事
 " " 居 合 道 委 員 会 委 員 長

武 大 上
 安 谷 野
 義 正 貞
 光 俊 紀

講 師

居 合 道 範 士
 " " " "
 " " " "
 " " " "

岸 武 山 河 安 山
 本 田 崎 口 永 崎
 千 清 正 俊
 尋 房 博 彦 毅 蒼

などの説明も受けました。

充実した講習を受けつつ、閉講式へ午後四時に講習会終了、散会となりました。二日間という短い講習会でありましたが、役員・講師先生の心遣いと熱心なるご指導に対しまして深く感謝を申し上げますとともに居合に対する取り組みを新たにしたい次第であります。また、地元京都府剣道連盟居合道部の先生方にも準備万端お世話になり有難うございました。

講習後、九月二十五日(日)松茂第二体育館において原田勝先生の解説、私が実技を担当し、伝達講習会を実施いたしました。最後になりましたが、講習会に派遣していただきました県連又居合道部の先生方に心より感謝申し上げます。



第四十三回剣道中堅剣士

講習会に参加して

警察支部 平野 誠 司



剣道の文化的継承と技術的向上の連鎖を図り、指導者としての自覚とその指導力を養成し、これからの剣道界に貢献しうる人材を育成すべき講習会として、全国から六十三名の中堅剣士を集め、今年もここ剣の聖地・柳生（奈良市・鴻池道場）にて開催されました。剣道には、「行ずること」（身体的実践・技術）を離れては論じることが出来ないという大きな特性があります。剣道理念においても、「剣の理法の修練による人間形成の道である」と掲げているように、自己の人生の課題を剣道との関わりを通してどう展開していくか、その基となるのがこの「指導法」であり「稽古・修行論」であるのです。

即ち、

剣道とは「瞬間々々の自己創造」である。

（湯野正憲範士）

剣道とは「消える芸術」である。

（堀江幸夫範士）

と言われる所以がここにあり、刀（木刀・竹刀）を持って相対する相手に対し、その瞬間瞬間に自分は一体何を表現するのか、よ

り高い価値観を持って修行（行ずる）していくことが求められるのです。

講習会では、例年の如く剣道講話、講義、審判法、指導法、日本剣道形、スポーツ医学、救急法等幅広い課目が行なわれました。『剣道講話』では奥園國義講師による「気をいたたく稽古」、『講義』では松永政美講師による「これからの剣道界の当面する課題と将来展望」というテーマでお話がありました。

奥島快男・西出功講師による『審判法』では、有効打突の見極めと審判員の位置取りを厳しく指導していただき、決して横着・油断せず万が一のため常に理想とする位置関係を維持し、選手と審判が一体となった試合展開となるように心掛けることが大切であることがよくわかりました。

田口榮治講師による『日本剣道形』では、剣の理法が凝縮されたような正確で凛とした形の披露と詳細まで事細かい指導を熱心に行っていました。

『指導法』では福本修二・作道正夫講師が担当され、特に福本講師の実践的な指導は、やらされる側の立場に立ってもらう（つ）ということになり、切り返し、打ち込み、体当たり等基礎となる稽古法を骨の髄までみっちり鍛えていただきました。

また、作道正夫講師は「木刀による基本技稽古法」の中で素振りや指導される場面があり、剣道修行の中の「素振り」の重要性を説かれました。常に相手を仮想して構える、竹刀を振る、打ち込むといった「独り稽古」の位置付けと、すり足打突・踏み込

み足打突といった移動と打突の結合を「先後」「懸待」と関連付けての説明は、一つ上の剣道を目指す指針として受講生に明確に伝わったように思います。

最後に本講習を受講して「指導」と「稽古」における各方法論を考察してみますと、指導法では、「どのような対象者に対して」「どのような方法によって」「何を明確にしたいのか」を構成することが大事であって、そのプロデュースのやり方が即ち方法論であります。

稽古法では、「形」「稽古」「試合」をそれぞれ別個なものとはせず、まずは「自」の中で統一した意識を持って修行していくことが大切であるといわれています。知識としては皆分かっており、理想とすることも分かっている。しかし、いざ体現するとなると話は別みみたいな感覚でしたのでは、先に述べたように「行ずる」ことはおぼつかないでしょう。できれば根本となるそれぞれの剣道観を確立し、より高い競技文化として継承していききたいものです。

講習を終え半年余り、亡くなられた堀江幸夫先生が生前口癖のように言っておられた「ほんまもんになれよ。」というありがたいお言葉が、今となっては耳元から離れない、そんな心境のなか日々初発心の稽古を大切にしたいと考えております。



平成十七年度

徳島県剣道連盟秋季講習会

範士 山田博徳先生をお迎えして

事務局次長 手塚 十三子

九月四日(日) 県立鳴門武道館 受講者数 九八名

講習会実施での要旨

開講式 遠藤会長挨拶

審判法講義 山田講師により以下の内容について講話

なぜ剣道の講習会をするのか。従来、各都道府県の連盟及び全日本剣道連盟が独自に実施していましたが、全剣連は昨年頃から講師を派遣して各都道府県単位で実施する方向に変えました。なぜ「審判」に重きを置くのか。最近、全国的にみても剣道が悪くなっているという意見や感想を随所で耳にします。

剣道に何を求めるのか。剣道は社会的評価を受けなければなりません。剣道をやる人だけが満足するのではいけません。剣道をやる人もやらない人も「すばらしい」と感じるような剣道でなければ発展しません。では、どういうふうに変えるか。まず試合を良くすることが大切です。しかし、試合者と指導者だけでは剣道は向上しません。そこで「審判」を良くすることが大切になります。審判を良くすると試合がよくなります。試合が良くなると剣道が良くなります。剣道が良くなると剣道

を見る人の評価が上がります。すなわち、立派な審判は剣道をよくする最高の手段なのです。

立派な審判とは、最終的に剣道の在り方として、剣道の理念、修練の心構えという考えに基づくものです。最終的には剣道をすることによって、社会のためになるように、そのためには剣道を正しく学ぶことが大切です。そのための講習会なのです。

審判実技

判 中学生の試合による審判実技、山田講師による模範審判

質疑① 二人の審判員が有効打突を表示し、後の審判員は表示をしなかった。この場合の対応はどのようにすべきですか。

回答 二人の審判員の有効打突が同じ表示の時は「止め」をかけず、目などで表示を促す。(「審判員の任務」に審判員相互に意思の統一を図るとなっている。)二人の審判員の有効打突が異なる時は直ちに「止め」をかけて意思の確認をし、表示を促す。

質疑② 相メンなどの場合で旗が分かれた時、主審が規則第二十八条、有効打突などの錯誤に当たるかどうか、確認の意味で合議をかけられますか。

回答 手引きには不適切と書いてあります。合議をかけることによって、他の審判員に圧力をかけたとかで、試合者及び観戦者に不信感を抱かせるように見えるので不適切です。

質疑③ 発声がはっきりしない場合の打突は、有効打突として認められますか。

回答 偶然に当たったような場合、有効打突の条件にある、

氣勢の充実が見られないので有効打突としては認められない。その時の状況により、打突の意志があると認められた時には有効打突として認める。

指導法

練習のやり方にはいろいろあります。人間は次第に歳を取ります。そういう中で、互角にそして自由に相手と渡り合えるのは技と精神力があるからです。剣道の要点は何か。それは相手の心を読めることです。即ち「先」を取ることです。そのためには呼吸法ができればなりません。呼吸が乱れると心が乱れます。

下記内容により指導法実施

面を着けないでの基本打突

面を着けて三人一組による基本打ち込み

合同稽古

山田講師による指導稽古並びに合同稽古

閉講式

平尾副会長挨拶

※本講習会を記録したビデオがあります。ご希望の方は剣道連盟事務局に問い合わせてください。

日 程 表

内 容	時 間
開 講 式	9:00~9:15
審判法講義	9:15~10:00
審判実技	10:00~12:00
昼 食	12:00~13:00
審判実技	13:00~14:00
指 導 法	14:00~15:00
合 同 稽 古	15:00~16:00
閉 講 式	16:00~16:30



山田先生のちょっとイイ話

攻めについて

初心者への教え「形に表われるものと表われないものの二つがある。昭和五七年、私は小沼先生に言われました。

「一足一刀の間合に入ったらすぐ打たねばならない」しかし、わからない。無意識のうちに打っている。

小沼先生はいつでも打って来られる。応じなければならぬのに「オオーッ」となってしまふ。終わってから、「間合に入ったら打たねばならない」と言われた。「攻めて打つ」とは「一足一刀の間合に入って打つ」こと。攻め合は一足一刀より遠い間合で。(相手が来たら退がる、間を切ること)その接点は、交刃の間である。(行くぞ。さあ、来い。今の人はわかっていない。緊迫感がない)特に八段を受ける人は、触刃の間より、打つ時は一足一刀の間に入る。(それが攻め)

いつ入るのですか？

機が熟した時、相手の体勢を見る。相手の機・自分の機を読むこと。打つ機会はある、相手が開いた時に打つ。剣先が効いているけど打っていく。当たる瞬間に隙がある。隙がなくても打っていく。当たる瞬間に隙になることがある。相手を崩して打てとは言うけれど、打っていく間に隙ができる。開いているから打つのではない。「これが当たる」とはわからない。気で攻め勝っておくことが大切。一か八かは駄目。技を出すときは「当たる」と

いう前提で打っていくこと。私はかつての試合で五十分近く技の読み合いをした。「エーイ、行け」はない。今日までいろんな試合を経験した。最終的には精神力です。二刀流は、上段と思えばよい。私は随分と泣かされてきたから上段に勝たないと優勝はないと思っていた。

乗るについて

打つ前に勝負を決めること。気持ちの問題、乗ったときは勝っている。若い時は、攻め攻め攻めの一手であった。ある時から我慢するようになった。無理はしない。真剣勝負で守ってはいけない、打つべきところは打つ。「辛抱」すなわち「溜め」である。

礼儀について

「礼」は「心の豊かさ」を示すもの。剣道の神様に対する礼。カナダでは体育館には神棚を持って移動しているとのこと。

指導について

指導の根拠、それがあると子供は納得する。それがなぜ必要なのか？「面打ちを大きく」などとよく言う。基本では身体全体の筋肉を遣う、手先だけではだめ。最終では「パツと打て」と言い、そのようにしてみせる。どなたの言葉であったか、『むやみに指導するな、指導者を選ばな』

私の思い

私の自慢は自分の工夫でできること、田舎にいたからこそ、東京や大阪に住まわれている先生方に比較すると、まだまだ努力や工夫が足りないと思つて稽古を積んできた。

大切なことは、攻めて絶対に打たせないこと。来るなら来い。狙っているわけではない。相手が無理をして打ってくるのです。そうなると、相手の動きがよく読めるのです。一番大切なのは『心』です。心気力の一致が一番難しいのです。これができた人は剣道の達人です。これは剣道の極意です。

自分が構えた時―相手が振りかぶる―かぶった―面に来ると思う……それは『心』

目で見たのを正しく映すのが『心』 相手を正しく映すことが大切です。

心で映す―面に来る―気が強いと形になって動作(力)になる。心がしっかりしていないと対応を間違ってしまう。

明日、受講される皆さんにそのことを指導法の中でお伝えしたいと考えています。

(講習会前夜の打合せ会において)



形講習会に参加して

三好中学校 横川 由佳

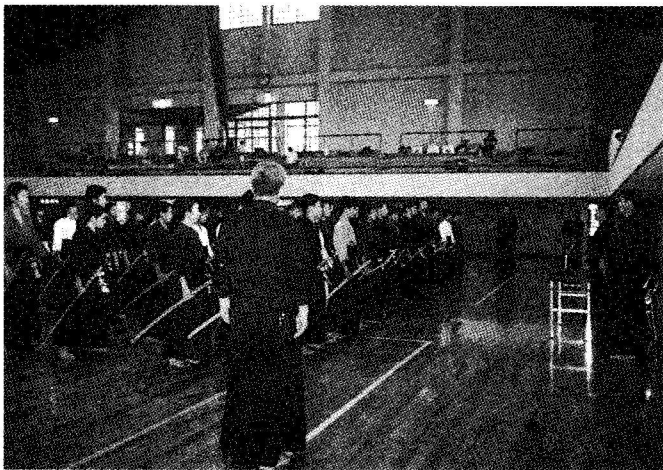


八月六日と七日の二日間、私は鳴門武道館で行われた形講習会に参加させていただきました。講習会は中学生から大人まで、たくさんの方が参加するなか始まりました。

まず一日目は、段をとっている人と、いない人で分かれて何組か組を作り、その組ごとに先生方が指導してくださいました。そして、一本目から四本目までの形の稽古をしました。一本目は、左上段と右上段の構え方。二本目は、打太刀が小手を打ったときの太刀の位置や、その小手を打たれたときの仕太刀のよけ方。三本目は、下段の構え方、打太刀は相手の水月の突き方、仕太刀は相手の胸部の突き方。四本目は、打太刀の八相の構え方と仕太刀の脇構え、打太刀は相手の右肺の突き方、仕太刀は打太刀の刃先の巻き返し方など、たくさん細かいところも先生方は一人ひとり丁寧に教えてくださいました。

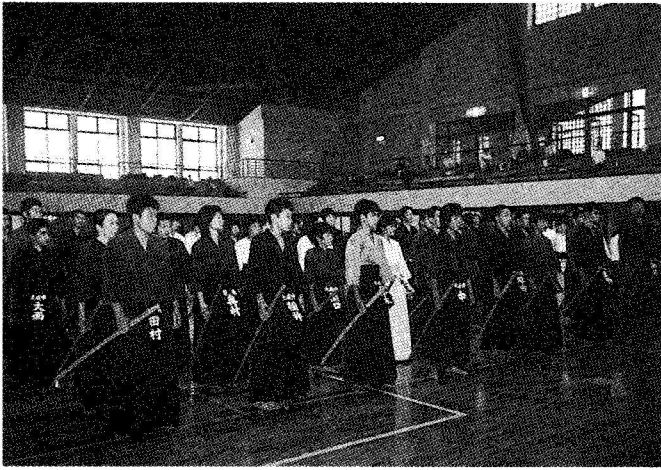
そして二日目は、五本目から七本目までの形の稽古をしました。一日目と同様に、構え方や太刀の角度などを教えていただきました。また、先生方の模範も見せていただきました。先生方の形は、特に太刀を解いたときの相手への目付けの仕方や、呼吸の意識、

そして相手への気迫は本当に素晴らしいと思いました。私の形は、順序を覚え「かたち」ができていただけでした。自分もそれで形を身につけたつもりでした。しかし、先生方の形を見させていただき、自分が形をする上で欠けているものは、相手に対しての自分の「気」の入れ方だということに気づかされました。だから私は、先生方の様の一つ一つの動作に「気」を集中させ、緊張感のある形を自分も身につけたいと強く思いました。二日目の最後は、各組ごとに形の発表をしました。段をとっていない人も、教えていただいたことを思い出しながら一生懸命に形を発表する姿勢は、



私も見習わなければならないと思いました。私もこの二日間で教わったことを意識しながら、形を発表することができたので良かったと思います。また、講習会終了後に、先生方からお誉めの言葉をいただき、本当にうれしかったです。

私は、この二日間の講習会で形を改めて教わることによって、形の難しさや奥深さ、形の素晴らしさに気づきました。講習会が終わった後、講師の坂下先生が「日本剣道形は剣道の基礎となるものだから、面をつけて稽古するばかりではなく、毎日の練習のうちでも二十分でもいいから形の稽古をしてほしい。」と、おっしゃっ



ていました。私は形の練習は段を受けるときにだけ稽古をするものだと思っていました。しかし、よく考えてみると、形には相手への目付けの仕方、足の運び方など、面をつけて稽古するときの基礎となるものがたくさんあります。だから私は、坂下先生がおっしゃったように形の稽古を毎日に取り入れ、剣道の基礎から身につけていこうと思いました。そして、剣道の基となる日本剣道形の素晴らしさを、同じ剣の道を歩む者として大勢の人々に知ってもらいたいのです。その素晴らしさを伝えるため、数多くの先生方が今回の様な講習会を開き、少しでも日本剣道形の素晴らしさを知ってもらおうと、努力されています。私も昨年と今年、二度参加させていただきました。その四日間で学んだことはたくさんあります。それを、私がかれからも剣道を続けていく上で活かしていきたいです。私は、今回の講習会に参加することが出来たことを心からうれしく思っております。最後になりましたが、今回の講習会のためにご出席くださり熱心にご指導くださった先生方、本当にありがとうございました。

徳島の剣道史

剣道師範笠井雄次の碑

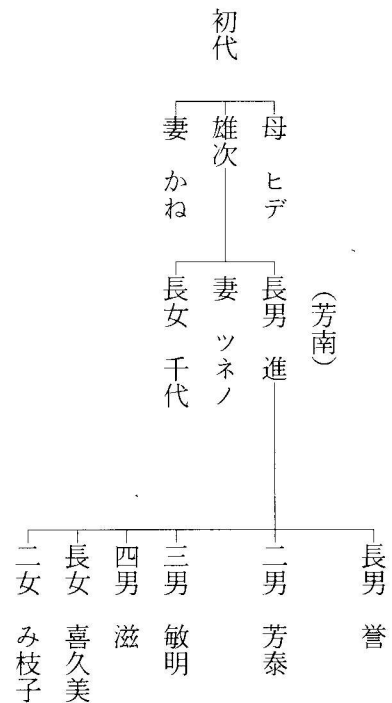
旧所在地 吉野川市鴨島字西麻植大東
新所在地 阿波市柿原字小笠前

剣道史担当 坂本裕二

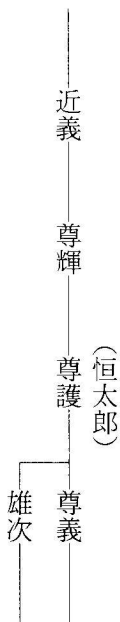


笠井雄次の碑は、雄次の前記の旧屋敷に青石の基礎石（横二・一〇m、巾〇・五m、高さ〇・七m）の上に、心柱（横一m、縦一・九m、厚さ〇・二三m）は花崗岩の素材で、正面に剣道師範笠井雄次の碑 嗣子芳南書、その上に四文字の篆額が書かれ、裏面には左の如く刻まれている。

父雄次ハ阿波藩士範士笠井恒太郎ノ二男也、明治初年廢藩トナルヤ、其母ト共ニ此地ニ分家ス、幼ヨリ武ヲ好ミ、長ジテ剣ヲ究ム、農業ノ傍青年ヲ指導シ、大日本武徳会徳島県支部剣道師範ヲ嘱サレ、明治・大正ノ劍客トシテ大正十二年十月二十一日此所ニ終生ス、行年六十五歳、昭和十六年七月進建之



笠井家の出自は定かでないが、三好氏に仕えた武士と伝えられ、帰農して十四代を継承した。偶然笠井権大夫（寛政九、一七九七年没）の代に士分として、蜂須賀家に召し出され、後裔近義の代に刀工となった。近義の子尊輝は十代藩主蜂須賀重喜の時、江戸水心子正秀のもとに技術習得の為に派遣された。尊輝は修業を終え、帰藩後刀工として亦時代の要請により鉄砲鍛冶として、優秀な刀剣や鉄砲を造った。その後裔尊護、尊義共に刀工として活躍した。笠井家の系統は左の如くである。



尊義の弟雄次は刀工を好まず、農業を本業とし、傍ら剣の道を研めた。その為近所の貫心流師範武知文司郎尚孝に親炙し蘊奥を極め師範となった。明治二十八（一八九五）年武徳会徳島県支部創立するや嘱託師範を命ぜられ、本業の農業の傍ら近郊の青年を

指導した。晩年は各地より懇望され、遠く木屋平方面まで出張指導して、斯道発展に寄与した。一方自己研修も怠らず、毎年京都大会には出場した。このことは京都平安神宮奉納の武道額に、阿波では西麻植の笠井雄次、柿原の高木義則、大滝山の中田義則、名田の武田長年、上鮎喰の佐藤兵八郎等と共に記載され、また明治三十六（一九〇三）年五月の京都大会には栃木県山口金三郎、同三十八（一九〇五）年五月大会には静岡県中条克太郎と各々試合をした記録が京都武徳会本部にある。このように研鑽を怠らなかつた雄次ではあつたが、大正十二（一九二二）年十月二十一日に天命は如何ともし難く六十五歳で没した。

彼の長男進は孝心厚く、父の功績を讃え、記念碑を昭和十六（一九四一）年七月に母ヒデと共に分家した雄次の屋敷に建立した。

大正の初期に雄次の長男進（芳南）夫妻は大阪に居を移し、商業を営んで生計を立てることになった。雄次の死後、殊に太平洋戦争後、家屋は老朽化し、屋敷は荒れ遂に撤去せざるを得なくなつた。三反余の広い屋敷は竹藪となり碑だけが残り、昔の面影もなく荒廃した。

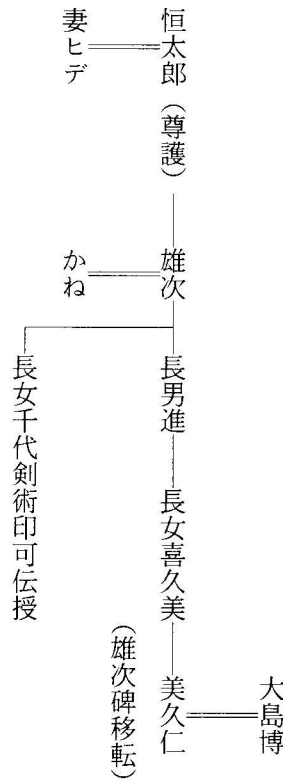
そこで大阪の笠井家の意向のもと、碑は雄次の曾孫に当たる阿波市柿原字小笠前の大島美久仁の屋敷に移転、屋敷地は吉野川市に寄贈することになった。

碑の移転工事は平成十七年七月に着手。総重量は一トン半であつたが、無事移転建立し、少しく環境整備して同年十二月に完工した。

元屋敷の藪は切り払われ、目下公園化の方向で整地工事が進められている。

これにより碑は今後大島家が中心となって管理され、雄次の斯道に尽力した功績は後世永く伝えられるであらう。

「明治四十五年一月吉日貫心流剣術印可の巻」は、雄次の長男進に伝授せず、長女千代に伝授された。



雄次の剣術の来歴

雄次の剣の師匠は武知文司郎尚孝である。尚孝は近隣には武知の姓の一族が多いが、醸酒家八福神の武知家総本家の出自と云われている。尚孝は吉野川市麻植塚の佐藤忠右衛門正信に教導されて師家になる。この佐藤家は七条家の家来で、七条家が奥州最上より阿波国勝瑞に入部したとき、従属して勝瑞に來た。以後この地に居を定めるが、主家七条家が慶安三（一六五〇）年に原土に取り立てられた際に鴨島町麻植塚に移住した。佐藤正信の四代前の祖、佐藤常左衛門近正は、鉄柱無端に親炙した玉置常左衛門に教導を享けて貫心流剣術の師家となった。以後佐藤家は五代貫心流剣術師家を継承する。

築山斉依通——鉄柱無端——玉置常左衛門——佐藤常左衛門近

正——佐藤忠右衛門俊信——佐藤忠右衛門信行——佐藤常佐衛門

信矩——佐藤忠右衛門正信——佐藤兵八郎信行——

武知文司郎尚孝——笠井雄次——

笠井千代

川真田頼義

注

築山斉依通

伊予の河野大蔵通昭の後裔は、故有って、母方の姓を取り築山と称して芸州広島に住し、松平安芸守に仕えた。依通は家伝であり家宝であった司箭流薙刀・貫心流剣術を公にして門弟にはじめて教授した。その門弟の一人が溝口甚左衛門（鉄柱無端）である。

鉄柱無端

旧名溝口甚左衛門は阿波に来て鉄柱無端と改名、元禄年間阿波国二軒屋で藩士を教える。これが阿波貫心流剣術の嚆矢である。無端は万里小路大納言雅房の四男、肥後大守加藤清正の一家加藤民部丞政章の孫、二軒屋竹林院で宝永元（一七〇四）年八月一日没す。

玉置常左衛門

玉置宜蔵種興の嫡子。日帳格、小目付役歴任す。鉄柱無端に親炙して師家となる。

笠井千代

笠井雄次の長女。雄次に親炙して明治二十三（一八九

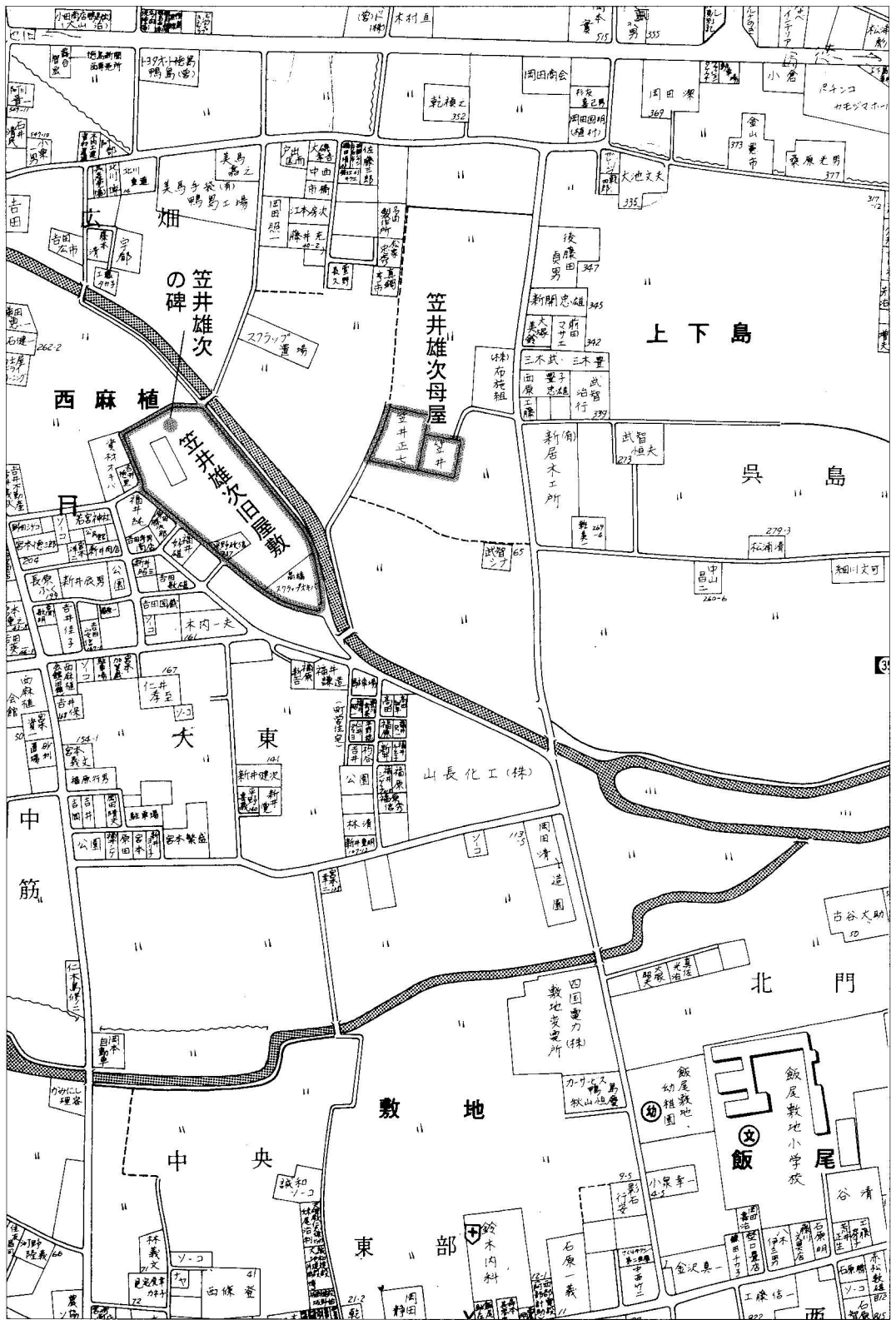
〇）年正月印可授与される。

川真田頼義

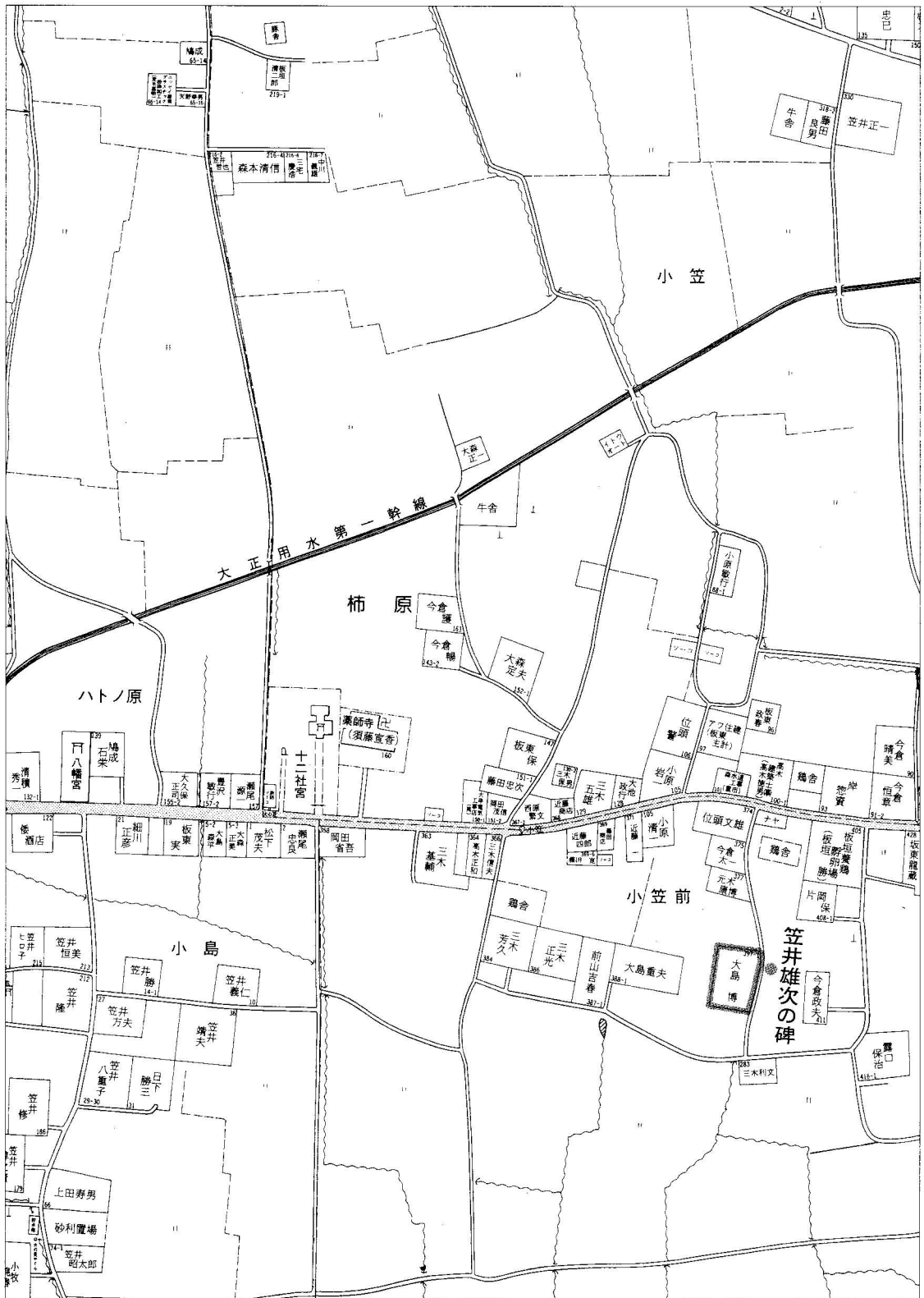
笠井雄次に親炙す。大正十一（一九二二）年十月印可授与される。頼義は剣道七段川真田高太郎の父親である。

終わりに

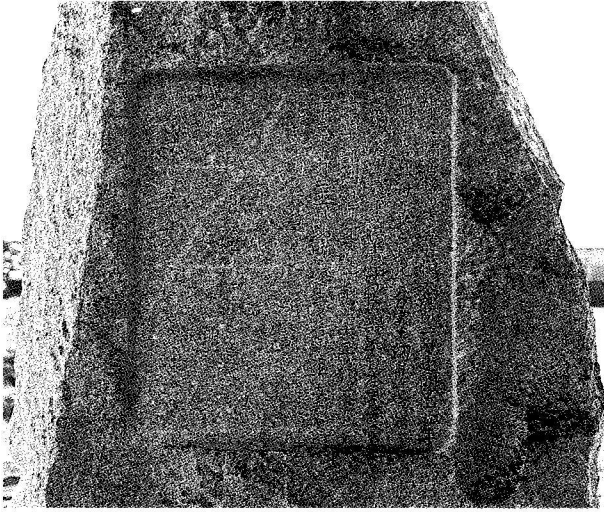
笠井雄次の先祖笠井尊輝は多数の刀工中で出藍の誉れ高い刀工であった。次に雄次は明治・大正時代の阿波を代表する剣士であったこと、更に今般後裔が雄次の碑を移転して雄次の旧屋敷を市に寄附し、これを小公園化し、市民の憩いの場所とすること等、今の混沌とした世相を沈静化するに寄与すること大でなからうか。



図一 旧所在地



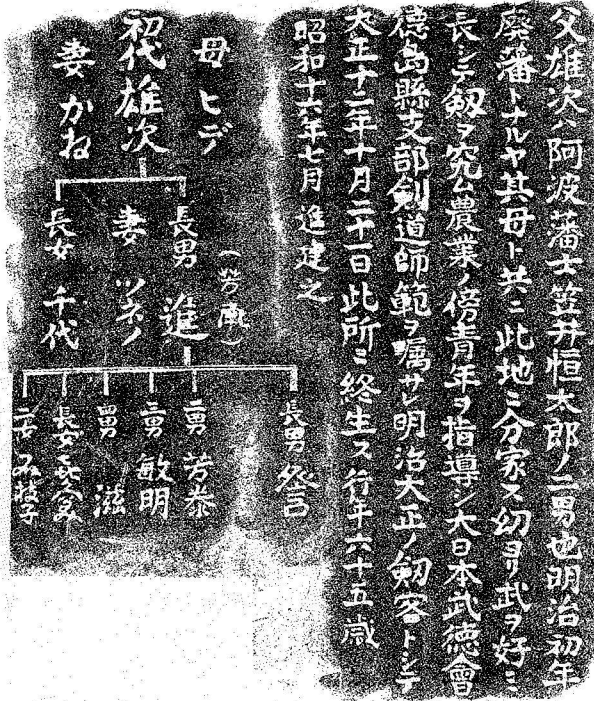
図二 新所在地



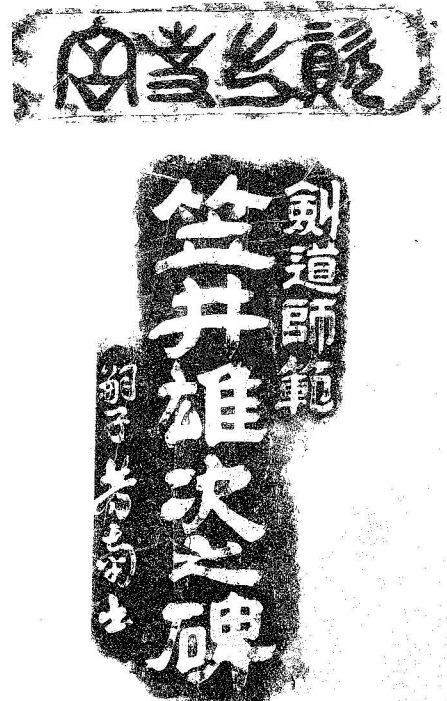
図四 笠井雄次の碑（裏面）



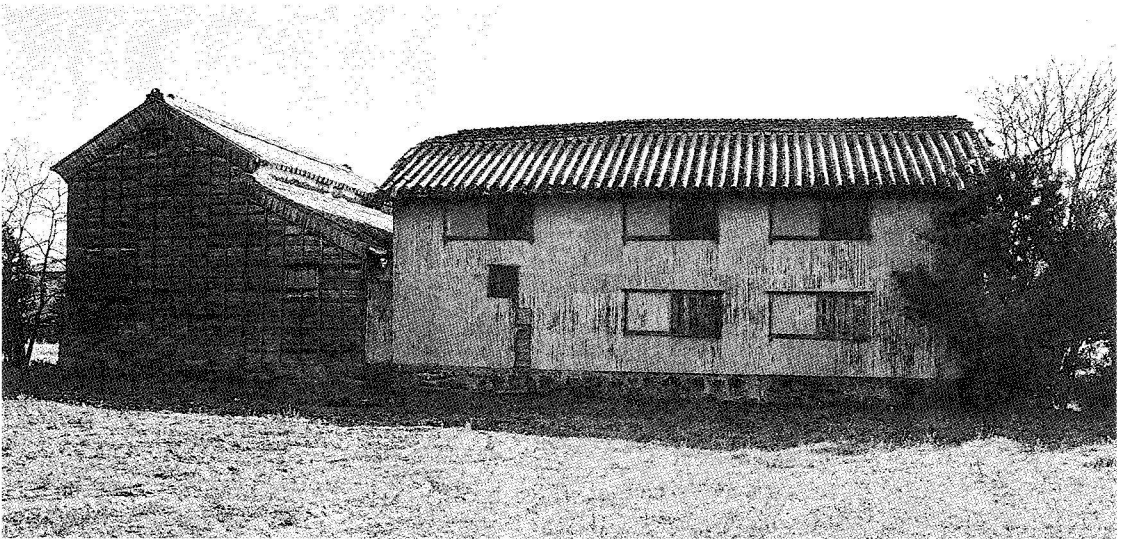
図三 笠井雄次の碑（正面）



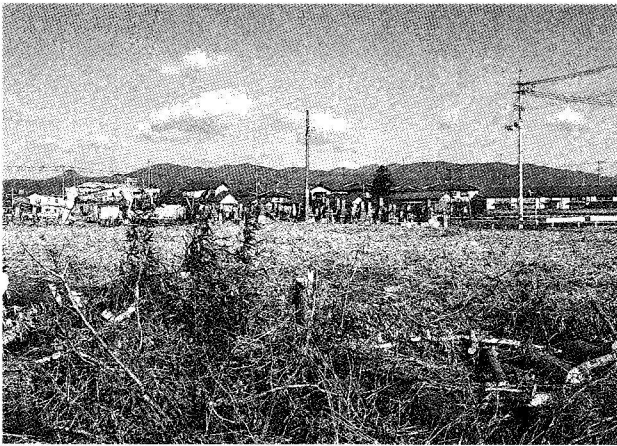
図四 裏面の拓本



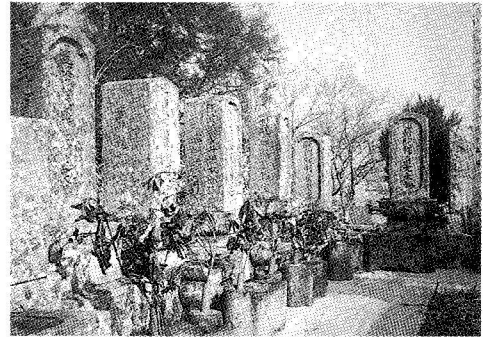
図三（正面と上部の篆額）拓本



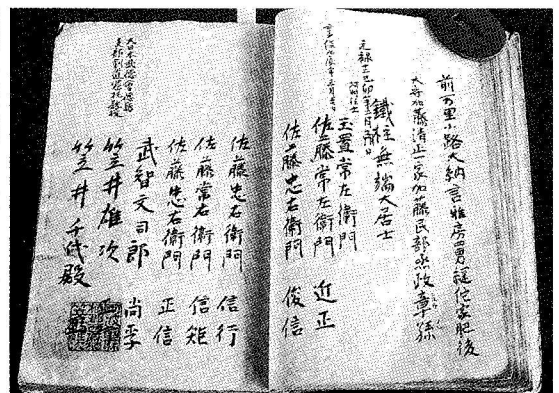
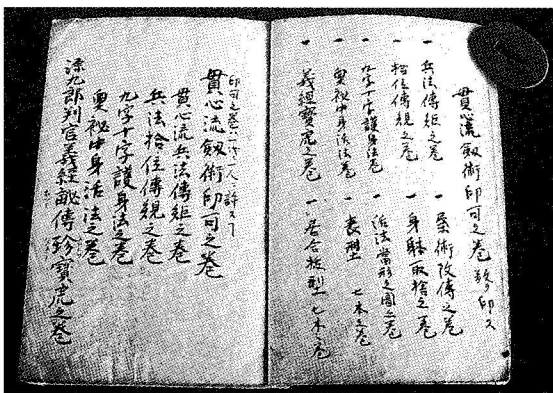
図五 雄次の母屋、鍛冶工房跡



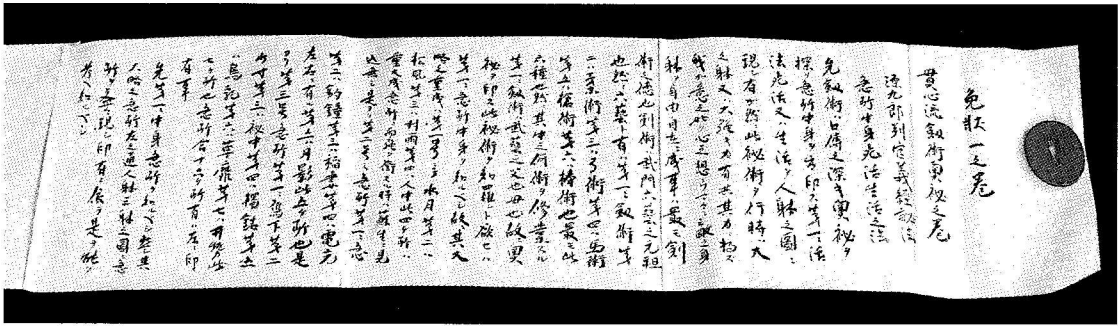
図七 公園化に工事する旧屋敷



図六 東禅寺山の笠井一門の墓

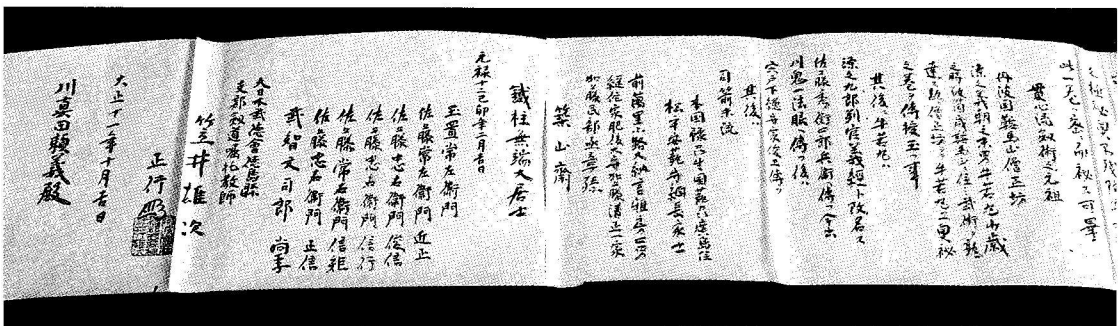


図八一・図八二 貫心流剣術印可之巻 雄次より長女千代に授与した



図九一一 雄次より川真田頼義に授与した免状

免狀一之巻
 貫心流劍術奥秘之巻
 源九郎判官義経秘法
 急所中身死活之法
 先劍術ハ口伝之深キ奥秘ヲ
 探リ急所中身ヲ方印ス第一ニ活
 法死活又ハ生活ヲ人体之図ニ
 現シ有ガ然ニ此秘術ヲ行時ハ大
 之体又ハ大強キ力有共其力ニ拘ズ
 我方意之如ク心之想ウマニ敵之身
 体ヲ自由自在ニ成事ハ最モ劍
 術之徳也劍術ハ武門六芸之元祖
 也然ニ六芸ト有ハ第一ニ劍術第
 二ハ柔術第三ハ弓術第四ハ馬術
 第五ハ槍術第六ハ棒術也最モ此
 六種也然ニ其中之劍術ヲ修業スル
 第一ニ劍術ハ武芸之父也母也故ニ奧
 秘ヲ印ス此秘術ヲ知ラント欲セハ
 第一ニ急所中身ヲ知ルベシ故ニ其大
 略之重成ハ第一号ニテ水月第二ハ
 松風第三ハ村雨第四ハ人中此四ヶ所ハ
 重大成急所ニ而強ク衝スル時ハ蘇生ニ見
 込無シ是ヨリ第二号之急所第一ニ急
 所第二ハ釣鐘第三ハ稲妻第四ハ電光
 左右ニ有ル第五ハ月影此五ヶ所也
 ヨリ第三号急所第一ニ鳩下第二
 打寸第三ハ秘中第四ハ独鉗第五
 ハ烏乳第六ハ草摩第七ハ井勢此
 七ヶ所也急所合十六ヶ所有ハ左ニ印
 有事
 先第一ニ中身急所ヲ知ルベシ然シ其
 大略之急所左之通人体三體之図ニ急
 所ヲ益々現シ印有二依テ是ヲ能ク
 考ヘ知ルベシ
 以下中略



図九一二 雄次より川真田頼義に授与した免状

之極秘奥不殘改伝可致ス
 此一巻ハ密ニ而秘ス可畢
 貫心流劍術之元祖
 丹波国鞍馬山僧正坊
 源之義朝之末男牛若丸少歳
 之時數箇歳鞍馬山ニ住ミ武術ヲ熟
 達ス故ニ僧正坊ヨリ牛若丸工奥秘
 之巻ヲ伝授タマフ事
 其後ニ牛若丸ハ
 源之九郎判官義経ト改名ス
 佐藤秀衡四郎兵衛ハ伝フ今出
 川鬼一法眼ハ伝フ後ハ
 穴戸下総守家俊工伝フ
 其後ハ
 司箭末流
 本国予州生国芸州広島住
 松平安芸守綱長家士
 前万里小路大納言雅房四男
 縫陀家肥後大守加藤清正一
 加藤民部丞章孫
 築山斎
 鐵柱無端大居士
 元禄十二己卯年二月吉日
 玉置常左衛門
 佐藤常左衛門近正
 佐藤忠右衛門俊信
 佐藤忠右衛門信行
 佐藤忠右衛門信矩
 武智文司郎尚孝
 大日本武徳会徳島県
 支部劍道囑託教師
 笠井雄次
 正行(花押)
 大正十一年十月吉日
 川真田頼義殿

武徳殿物語(一)

徳島支部 竹原 実太郎



はじめに

昭和二十年七月四日、米軍は他の都市と同様来襲を予告し、徳島市を焼夷弾で攻撃した。わが武徳殿は国宝級の名建築ではあったが、他の施設と共にあとかたもなく焼け落ちた。惜しみて余りある痛恨事と云うべく幻の武徳殿と化した。以来六十年の歳月を経て、郷愁の武徳殿の面かけを筆者は記憶の底から掘りおこし書き残したいと念じ、筆を執ることになった。

私事で恐縮だが、筆者は通学のため毎日二回は武徳殿の玄関先を通過した。昭和十二年にはじまった日中戦争も後半にさしかかると武徳殿を訪れる人が激減する中で、故あって今でいうクラブ活動の為、道場を毎日のように使用させてもらった。現存する関係者のうちでは筆者が最も武徳殿との関係が深いと自負している。

道場のあかり

建築学には採光というセクションがあつて屋内のあかりを技術的に設定管理する役割りを果たしているが武徳殿の道場にはもう二度と設定しようのない絶妙ともいえる幻の「あかり」があつた。

もとより今の体育館のような圧倒的な明るさではない。そうかと云つて暗いかと云うとそうでもない。京都の「町家」の光と闇の芸術的なあかりを想起していただきたい。誰も居ない道場の真中に一人で立つたことがおありだろうか。正面には当然の如くあたる静寂を支配するように神殿が鎮座し、鹿島香取の神軸がかかり、御神酒に併せて三方の上には山海の珍味が祭られてごくありきたりの風情に見える。おごそかで立派なことを荘厳と云い、おごそく深く微妙な趣のあることを幽玄という。折角だがその何れでもない。神殿には終日そだけ光つて、小さいハダカ電球が一つ、あたりは暗いかというと演武者には最適のあかりだ。

道場の音響

静けさが深い程一瞬動に転じた時の感動の大きさははかり知れない。静が動を呼ぶ、突然裂帛の気合と共にすさまじい竹刀を打ち合う音に我に返つて心臓が飛び出さんばかりの感動を覚えたいと云えるもので、このような道場だからこそ、他にはない獨特の清涼感を満喫できた。建物の設計には伝承の技術と創建の精神が詰め込まれている。武徳殿は原則として各都道府県にあつた筈だが、格別厳しい規格があつた訳ではない。わが武徳殿には他にない二階があつて磨かれたように黒い光を発する床板と天井の間に一定の距離が保たれていた。昔からの道場はと云えば周囲は羽目板と武者窓だが、わが武徳殿の道場には、なんと太い格子の入っ

たガラス戸で太い柱に高くない天井、廊下の向うはガラス戸でかこわれていた。竹刀を打ち合う激しい音と演武者の気合は混然一体となり、反響を繰り返す。この音が増幅されてハネ返ってくるのだ。音からリズムが生まれる。音はリズムの根源だ。このリズムが素質に火を付けて名人上手が生まれる。筆者はこの道場のことをミラクル道場と名付けた、演武者の心をとらえて放さない。

今の武道館は体育館形式の模倣で特徴がない。高い天井へ音がスッ飛んでいって消える。従ってリズムが生まれない。武徳殿には広い廊下があったと先に申し上げたが、この廊下から一段下がったところに「ゆとり」とも云える控えの区画があって、演武者が面を付け終って道場へ足を踏み入れる前に、一瞬モノを考えるために短い時間を共有出来る空間があった。

長久館の撃剣場

筆者の手許に徳島藩校一覽なる記録がある。江戸八丁堀藩邸内にその名「長久館」と云う藩校があった。もとより藩士を教育する機関であることはいまでもない。安政三年（一八五〇）設立、敷地面積南北二丁東西一丁、江戸の真中でよくもマァこれだけの敷地を確保出来たと感心する。

地元徳島にも長久館が出来た。明治二年（一八六九）設立で所在は出来島の西の丸、生徒数一八六九名、教職員一〇七名、驚いたことに撃剣場一〇〇坪、講堂と漢学席が夫々五〇坪、洋学席六〇坪（二階）、職員詰所五〇坪、書生寮七〇坪、その他不詳とあ

る。御覽のとおり撃剣場一〇〇坪が突出している。当時はこれが当たり前だった。

かつての阿波徳島藩は全国一最強の軍団を保持した武勇拔群の雄藩と云う評価が定着していた。慶長十九年（一六一四）の大坂冬の陣には九千人の将兵を出陣させ、戦功拔群で手柄のあった七人の藩士には大御所徳川家康、將軍秀忠から感状が贈られた。これを阿波の七感状と云って注目された。続く大坂夏の陣にも大軍をもって大坂に向ったが阿波藩の軍勢が大坂に接近しただけで、徳川の陣営は安緒し、大坂がたに少なからぬ恐怖を与えたという。結果は大坂城の落城が意外に早かった為合戦には間に合わなかったと云われているが戦わずして日本一強い軍団との評価はゆるぎないものになった。従って撃剣場一〇〇坪の突出は当たり前のこととして自他ともに許す常識であった。

ついでながら撃剣について申し上げたい。江戸は神田猿樂町に天明八年（一七八八）当時名人の誉高かった岡田十松吉利と云う人が道場を開設した。その名を撃剣館と云い門弟実に四千人を数え、黄金時代を現出。以来剣術は撃剣と呼ばれていた。筆者の父も「武徳会支部へ撃剣の稽古に行く」と云い、戦後剣道連盟が発足して「剣道」という名称が一般化するまで「撃剣」という名称も使用されていた。

徳島武徳殿の建設

武徳殿を建設した頃までは以上申し上げたように物凄く撃剣の

盛んな土地柄だった。撃剣場一〇〇坪は惜しくも無くなったが武勇の誇り高き阿波武士の魂が匠の伝統に固執する技術屋集団に受け継がれ天下に類のない徳島武徳殿が建設された。場所はご存知徳島城内の一角。

さて徳島城は天下の名城だった、武徳殿から見渡せるお城の石垣は粗雑な石積みになっていた。実は秀吉からこれは戦略上の必要からか、工期一年間と厳命があつて工事を急いだためであつた。およそ徳島城構築は渭津山に本丸を置き、助任川や寺島川の自然の流れを内堀に利用した平山城として構想されていた。しかし急遽、在来の勝瑞城と城下の寺院や一宮城を解体してその地盤石や古材を渭津に船で運び入れ突貫工事で城の中心部を完成させている。その規模は雄大ですが秀吉お声がかりの名城として天下に誇るべきものであつた。

世に借景という熟語あり、景を借りると書く。この見事な城郭と蜂須賀三百年の伝説の庭をバックに登場した武徳殿は全国でも贅沢極りない稀有の存在だつたと思われる。旧徳島城表書院の庭は武将で茶人の上田宗箇が作庭者とされ、枯山水庭かれさんすいでいと築山泉水庭つきやせんすいでいの二庭からなる。全国の国指定名勝一八〇ヶ所の中より著名な作庭家十四人によって第十位に選ばれている。夏でも手が凍るような清水が尽きることなく、歴史の重みを伝えるように武徳殿あとに注いでいる。

おわりに

かつての武徳殿あと思われる場所は現在、無残にもコンクリートにおおわれ、もはや見るかげもない。武徳殿の再建は夢の又夢でしかないのだろうか！読者も既にご存知の如くあとを続けるには紙数が足りない、徳島武徳会の最盛期は昭和一ケタの時代だつた。そのころの徳島武徳殿には忘れてはならない功績を残された多数の先生方の思い出が詰っている。武徳殿銘々伝は剣道連盟の皆さんの絶大な御協力を得て、是非とも書きのこしたい題材であり、いづれ稿を改めたいと思っている。

大会所感

第三十六回全国中学校

剣道大会を目前に控えて

中体連専門部長 白木洋一



日頃は中学校剣道専門部の活動にご支援・ご協力頂き誠にありがとうございます。ございます。いよ

いよ本年八月に全国中学校剣道大会を開催する運びとなりました。昨年も徳島の剣道に書かせてもらいましたが、この大会は全国中学校総合体育大会の一競技として開催されます。

第一回大会から十二回までは東京、その後全国を持ち回りで開催されています。私事ですが、第五回大会に牟岐中学校のメンバーとして、日本武道館で試合したことを今も誇りに思っています。

もちろん現在も中学生の剣道大会として全国的にもっとも権威のある大会で、その出場を目指し、日本中の中学生剣士が日々稽古に励んでいるといっても過言ではありません。

今回、三十六回大会をもって初めて徳島県で開催されることは、私自身も何か大会に関する縁を感じずにはいられません。次回、徳島県で全国中学校剣道大会が開催されるようになるのは、三十六年後であると思えば自分は生きているのかなとも思います。いずれにしても、徳島県で開催されることは、まことに意義深いものであります。

現在、中体連剣道専門部はもちろん高体連剣道専門部の多大なる協力、そして県剣道連盟、各支部の協力的な支援を受けて大会運営の準備を進めております。昨年開催された三重大会では三千人を超す人間が訪れたと聞きます。徳島県の限られた施設・人員で、いかに大会を運営するかが現在の課題です。また、大会期間中は八月であり台風の心配もされますが、大会を成功させるという大会関係者全員の熱い思いで吹き飛

○ 諸会議	8月16日(水)	13時00分～16時00分	審判講習会・実技研修
	8月17日(木)	10時00分～12時00分 14時00分～15時00分	審判講習会・実技研修 監督会議
○ 大会	8月17日(木)	15時50分 16時00分	(1)入場行進整列 (2)開会式
	8月18日(金)	9時30分	(3)試合開始 ※男女とも個人戦4回戦までと、団体戦予選リーグおよび団体戦決勝トーナメント戦1回戦を行う。
	8月19日(土)	9時00分 12時00分	(4)試合開始 ※男女とも個人戦準々決勝以降と団体戦決勝トーナメント2回戦よりすべて行う。 (5)閉会式

ばしたいと思ひます。

まだまだ、大会については準備が必要な
ことばかりです。皆様方のご協力なくして
は大会は成功することができません。今後
も、様々なことでご協力を願うことが多々
あると思ひますが、なにとぞよろしくお願
ひ致します。

最後に大会日程を記載させて頂きます。
混雑が予想されますが、徳島県選手団の応
援よろしくお願ひ致します。



清原杯争奪第五十回 県下剣道大会を終えて

阿南支部長 北 條 憲 治

昭和三十一年、第一回県下剣道大会が当
時の那賀支部に於いて、羽ノ浦町岩脇小学
校で開催された。終戦から十一年、そして
剣道連盟那賀支部が発足して四年目、一般
の大会として、若い青年剣士の情熱と勢い
を、当時のプログラムに感じ見る事ができ
ます。其の後、代々の支部長を中心に、支
部員が一致団結して参加する、支部最大の
行事として取り組んで参りました。

昭和四十年より、故清原栄先生が、第四
代阿南支部長を務め、この年より、高等学
校男子団体の部が取り入れられ、教育者で
あった先生の影響で、青少年の指導、育成
の基を築かれました。その後、中学校男子
団体、小学校団体、高等学校女子団体、第
二十六回大会より、中学校女子団体の部も
実施され、まさに、一般の試合から小学生
までの幅広い大会へと発展して参りました。

本大会を開催するに当り、後援をお願い
しております、徳島新聞社様には、格段の
ご理解とご援助を賜り、厚く感謝を致して
おります。

支部内十一少年剣道教室の保護者の皆様
によるお接待、又、地域有志方々の物心両
面に亘る、ご理解ご協力を心より、ありが
たく思っております。家族ぐるみ、地域ぐ
るみ、で取り組む大会が青少年の健全育成
に繋がる、本来の大会の主旨だと思ひます。
五十回の節目に、何か記念の部門を計画
する事が、より一層、支部の充実と、発展
に繋がるものと立案したのが、三人制の一
般女子団体戦でした。県剣道連盟の手塚十
三子女子専門部長とも相談し、一般女子の
層造りとして、ご指導を仰ぎ、準備を進め
て来ました。

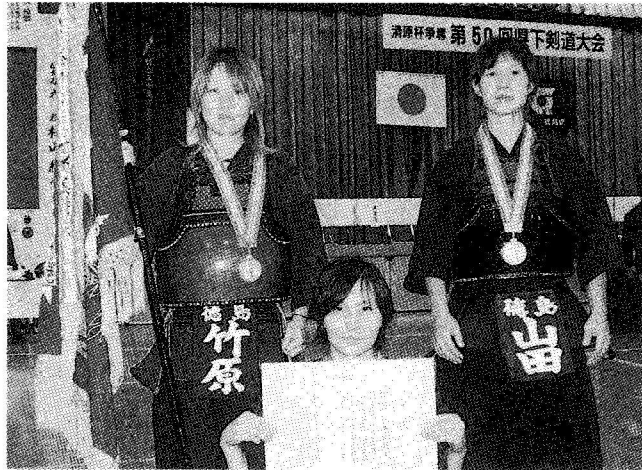
本県には全国トップレベルの実績をもつ、
富岡東高等学校女子剣道部、又、良きライ
バル校として、富岡西高等学校、川島高等
学校があります。卒業して、大学生になり、
社会人になっても、剣道と関って欲しい、
そして母親になったら、子供に剣道を薦め

て欲しい！と言う願を込めて一般女子団体の部を新たに実施致しました。

今回県下各地より、昨年を上廻る、百四十三チームの参加をいただき、六試合場において、試合が展開され、スムーズに大会運営もできました。これも、県剣道連盟の先生方に審判の労を取っていただき、ご指導いただいた賜物だと思っております。

半世紀の歴史を振り返り、全県下、数多くの先輩、諸先生方、又、関係各社、教育委員会、体育協会、剣道連盟の方々に大変お世話になり、大会回数を重ねて参りました。ここに、深く感謝とお礼を、心より申し上げます。

今後も、先輩達の築かれて来た灯を、絶やす事なく、尚一層、阿南支部一致団結して、求道と弘道の心で取り組んで参ります。倍旧のご指導と、ご協力をよろしくお願ひ申し上げます。



一般女子の部
優勝 阿南具優美



平成18年度 剣道連盟阿南支部稽古初め 平成18年 1月9日

各種大会に参加して

全国スポーツ少年団

剣道交流大会に出場して

監督 二反田 和 則



桜前線間近の平成十七年三月二十六日(土)私達徳島県チームは、和歌山県で開催され

る第二十七回全国スポーツ少年団剣道交流大会に臨みました。

毎年選手は県予選会を勝抜いた実力者であるが、私自身が初監督であり大役を任せていただいた限り、選手と共に良い経験をしようにと決意しました。

監督 二反田和則 那賀川少年剣道クラブ

小学校団体戦出場選手

- 先鋒 久保 孝緒 徳島少年剣道教室
- 次鋒 岡内 拓未 小松島少剣クラブ

中堅 上田 勇輝 坂野少年剣道クラブ
副将 原 麻由香 蔵本少年剣道クラブ
大将 松本 好史 徳島至誠館

中学校個人戦出場選手

男子 福川 敬太 相生竜虎館
女子 壺内美沙希 那賀川少年剣道クラブ

過去監督を経験された先生方にアドバイスをいただき、合同稽古会で各道場を訪ねチームの和を築く事に専念しました。選手



の中には過去出場者も存在しており、大会が楽しみでした。最終調整は二月末に香川県の宮武監督より四国四県強化練成大会が高松総合体育館で行われ各県代表者が試合稽古中心に友情を深め四国全体で健闘を誓い、力強い激励をいただき大会に臨む事ができました。

さて試合当日の二十七(日)昨日の交流会で選手達はリラックス出来、虎視眈々と



〈小学生団体戦 予選リーグ〉

	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
静岡県	遠藤	満中	鈴木	小松	渡辺
					引分け
4勝1分	メ	ココ	メメ	メメ	
徳島県	久保	岡内	上田	原	松本

上位進出を狙っていましたが。結果は以下通りです。

	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
徳島県	久保	岡内	上田	原	松本
4勝1敗	ココ		ココ	メ	メ
	メ	メメ			
兵庫県	木本	東村	東野	高木	平野

徳島県二勝で決勝トーナメントへ

〈決勝トーナメント一回戦〉

	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
鹿児島県	坂下	山口	田渕	木原	口ノ内
	ココ	メメ		コメ	
2勝3敗			ココ		コ
徳島県	久保	岡内	上田	原	松本

小学団体ベスト十六敢闘賞

中学生個人戦 男子 予選リーグ

前(和歌山) メー | 福川(徳島)

福川(徳島) メー | 根本(福島)

一勝一敗で予選敗退

中学生個人戦 女子 予選リーグ

牧野(和歌山) 引分 壺内(徳島)

壺内(徳島) | メー 小澤(神奈川)

一敗一分けで予選敗退

二日間を通じ選手たちは、一回り成長し

た事を実感しました。試合の楽しさ、剣友

との絆、選手達のこれからの活躍を期待し

ています。

このような貴重な経験をいただき、皆様

に感謝致します。

第五十三回

全日本都道府県対抗

剣道優勝大会

徳島支部 玉田 真理

平成十七年

五月一日

於 大阪市中央

体育館



選手資格

先鋒 年齢十八歳以上三十歳未満の女子。

高・大

学生は除く。職業に制限なし。

次鋒 年齢十八歳以上三十歳未満の男子。

警察・刑務・教職員は除く。高・

大学生を除く。

五将 年齢三十歳以上の女子。職業に制

限なし。

中堅 教職員の男子。年齢に制限なし。

三将 警察・刑務・職員の男子。年齢制

限なし。

副将 年齢三十歳以上の男子。警察・刑

務・教職員を除く。

大将 剣道教士七段以上の男子。年齢四

十歳以上。

徳島県チーム

監督 河田 清実

先鋒 下久保 奈々枝

次鋒 今井 剛

五将 玉田 真理

中堅 福多 博史

三将 富田 圭介

副将 山本 泰史

大将 福多 雅英

私にとっての「都道府県大会」とは、正

直無縁のものと考え、気にも留める事もな

く日々、淡々と稽古を重ねていました。今

年は予期せぬ所から選手の枠を頂き、この

大会の大きさを改めて痛感する事になりま

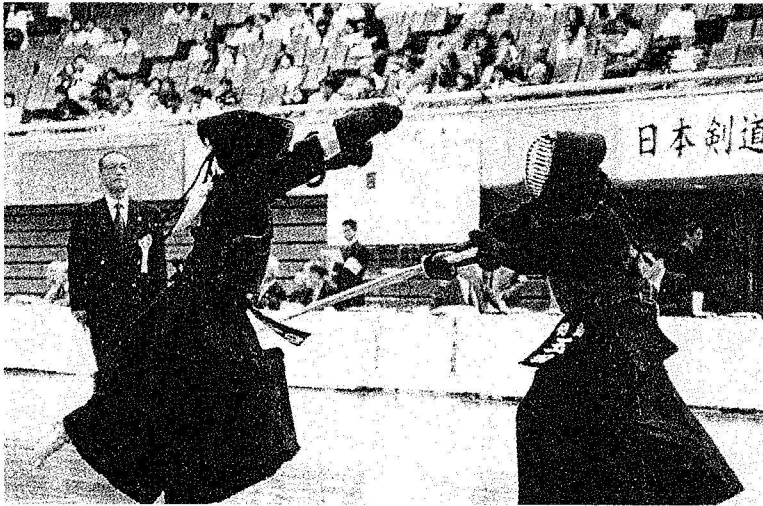
した。「全国大会」と名の付く大会は高校

時代の高校総体と家庭婦人大会。

考えてみると、両方の大会のチームメン

バーは女性ばかりの朗らかなもの。この大

会は開会式に整列して改めて明らかに今ま



で経験したことのない空気にとっても圧倒されました。

開会式には左右前後に並ぶ選手は体格の大きな男性選手。ただでさえ小さな自分の体格が一段と小さく感じられた開会式でした。ただ、一回戦の相手である宮崎県の五将・私の相手は、家庭婦人大会で対戦した

選手。同じ土俵で戦った事のある選手という事で少し気持ちは楽でした。

しかし、家庭婦人大会では、見事に二本負け。この日の対戦は、落ち着いてじっくり勝負が出来ればと考えていました。監督である河田先生に、強化練習の時だったか「無理に勝ちに行かなくて良い。」と確かそんな言葉を掛けて貰ったことを記憶していました。

「無理」と言う言葉で、自分自身、選手に決まっていた自分の稽古も含め色々無理をしていたようにも感じられました。選手の立場でこの河田先生の言葉は色々な場面で自分なりに解釈させてもらいました。結果、試合で私は五分を無理せず粘ったつもりだったが、終盤辛抱が出来ず小手を狙い相手のふところに入った所をかわされ面を取られた試合に終わりました。

後悔しました。

やっぱり無理をしたかなと……。最後にやはり監督に「無理しなくて良かったのに……」と。

私はこの言葉に不謹慎だが可笑しくなっ

た。やっぱり「無理した自分を見られていたな」と。

本当にいろいろな意味でとても勉強になり、この大会に出場して良かったと改めて感じています。この経験をこれからも生かした剣道を続けて行きたいと思います。

チームの試合結果は別に記します。このチーム選手それぞれ、思い考える事はあると思いますが、本大会出場に際し、多くの先生方にご指導頂き、暖かい激励の言葉をととても有り難いことと思えたことは、選手みなさん同じだと思います。この場をお借りてお礼を言わせて下さい。

本当にありがとうございました。そして、これからも変わらぬご指導をよろしくお願ひ致します。

今回、剣道時代の七月号にこの大会の特報が載っていました。私たちの徳島×宮崎戦が一部記載されていました。重ねて報告いたします。

第二十二回全国家庭婦人剣道大会

灼熱の戦い、久々のベスト16

監督 手塚 十三子

肝っ玉を内に秘め、かけがえのない家族に気を配り、何事も健気に頑張る家庭婦人。その粘り強くたくましい姿を未来の子どもたちの健やかな成長と活躍に託して、夏休み早々の祝日に日を改めて実施された本大会。今年も全国から二十三歳のフレッシュな先鋒を始めとして、五十四歳までの実生活に裏打ちされた、経験豊富な家庭代表、そして県代表の榮譽をかけた大勢の選手たちが鎬を削り合った。

予選リーグ初戦、対島根戦。初出場ながら先鋒のプレッシャーを微塵も感じさせない丸岡選手は、立ち上がりから落ち着いて相手の動きを読み込んだ柔軟性に富んだ技の対応で幸先の良いメンの一本勝ちを収め、

チームの雰囲気盛り上げる。続く第二戦福井戦では前へ前へと相手を気で攻め、有効打突と思われるような返し技や擦り上げ

技など多彩な技が繰り出される。コテとドウを連取されてしまったが、清々しい展開であった。

続く次鋒、山田選手。高校時代から全国大会でも入賞を果たし、本県の国体代表選手としてその役を担っている。ややあって両者メンを放つが、一瞬相手が速かったようだ。しかし二本目の開始と同時にメンを奪い返し、引き分け、電光石火の見事な早業であった。二戦においてはメンを先取されたものの、相手の動きをじっくりと見極めてコテを取り返し、引き分けとした。

中堅、玉田選手は五月に行われた都道府県大会の五将としても出場し、全国大会の緊張感と心地良さを余韻を残して日々の稽古に熱心に取り組んできた。チームの流れを変える大事な一戦であるが、相手の動きに動揺することなくしっかりとした構えを保持し、中心を攻めながら技を次々としかけていく。二戦とも引き分けた。

三者のここまでの試合運びを確認するかのようにコートに立つ副将、平野選手。本大会の常連であり、国体の大将としてもそ

県名	先鋒	次鋒	五将	中堅	三将	副将	大将	本数	勝者数
徳島	下久保	今井	玉田	福多	富田	山本	福多	2	1
		メ反		×		×			
宮崎	メ	メ▲▲	メ	×	メ		メ	5	4
	田口	黒木	増田	島田	大重	馬場	長友		

〈一回戦〉



の責を担った覚悟の活躍は一段と冴える。凛と張り詰め、遠間からジワリジワリと攻め入りながら、相手の技に迎え撃つ。二戦とも貴重な一本勝ちを収める。常の稽古の賜物であり、正に集中力の昇華と感じられた。

勝負強さにおいては殊に定評のある双方の大将戦、竹内選手の締めくくりに期待が

寄せられる。激しい気のぶつかり合いと

もに技の応酬が繰り返され、島根戦では五

分と五分の拮抗。第二戦においては得意と

するコテを鋭く決め、辛勝の中にも決勝ト

ナメント進出の嬉しい瞬間であった。

気分を新たに引き締め、目の前の相手に

全力を尽くす覚悟で宮崎戦に臨む。善戦す

るも一瞬の隙を見逃さず、機を読み、次か

ら次へと畳み込むかのように技を仕掛けて

くる宮崎県チームに錬度の差を感じさせら

れる。試合を終えた選手たちの顔に得意や

満足は見られなかったものの、その目には

既に来年を期してそれぞれの課題に取り組

む強い覚悟がはっきりとうかがえた。しな

やかな発想と物事の本質をどこまでも追求

する素直な姿勢こそ、日常生活の根本であ

り、そのことが剣道をさらに充実・発展さ

せる所以であると教わった有難い大会であ

る。徳島県の女性剣士の皆さんの総力を結

集していただいて、来年はぜひ、入賞、い

え優勝を飾っていただくことを心から期待

平成十七年七月十八日(祝)

於 日本武道館

先鋒 丸岡亜寿佳(小松島支部)

次鋒 山田 美枝(阿南支部)

中堅 玉田 真理(徳島支部)

副将 平野 悦子(鳴門支部)

大将 竹内佳代子(鳴門支部)

監督 手塚十三子

予選リーグ 徳島 2(3)―0(1) 島根

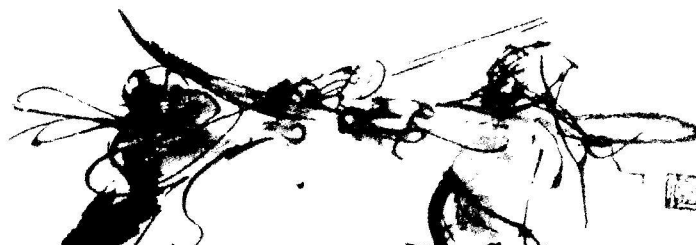
徳島 2(3)―1(3) 福井

決勝トーナメント一回戦 徳島 0(1)―4(6) 宮崎

	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	勝者数	総本数
徳島	丸岡	山田	玉田	平野	竹内	2	3
	⊗	⊗	⊗	⊗	⊗		
島根		⊗	⊗		⊗	0	1
	川中	尾木	三原	糸原	渡部		

	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	勝者数	総本数
徳島	丸岡	山田	玉田	平野	竹内	2	3
		⊖	⊗	⊖	⊖		
福井	⊖⊗	⊗	⊗			1	3
	橋本	松井	高原	古河	堀江		

	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	勝者数	総本数
徳島	丸岡	山田	玉田	平野	竹内	0	1
			▲		⊗		
宮崎	⊗	⊗	⊗	⊗⊖	⊗	4	6
	深田	森田	甲斐	落合	竹元		



全国矯正職員武道

選手権大会に出場して

徳島刑務所支部 金野 卓司



平成十七年十月
七日(金)大阪刑務所
体育館に於いて、
全国矯正職員武道
大会が開催された。

私は、管区予選を一次リーグを二勝一分、二次リーグを〇勝二分。二次リーグでは三名と二分であったが、私と松山刑務所の片上選手が同本数のため、決勝戦へ進む決定戦を行った。ここで勝利すれば全国大会への切符を手中にすることが出来た訳だが、一本負け。三位決定戦で勝利し、高松矯正管区代表として初出場することが出来た。

管区予選を勝ち抜き、代表になった喜びやプレッシャー、全国の管区予選を勝ち抜いてきた強者との試合に対する期待や不安など、様々な思いが交錯するなか大会当日をむかえた。

大会は、四・五名での予選リーグが行われ、上位一選手が決勝トーナメントに進み優勝を争う。

私のリーグは、福岡刑務所の水上選手、東京拘置所の黒澤選手、広島刑務所の国武選手、京都刑務所の梅木選手であった。

一試合目は、水上選手との対戦。立会いこそ先を取ってつけたものの慎重になりすぎたため、足が止まり攻めこまれての敗戦。二、三試合目は、黒澤選手、国武選手との対戦。気負いすぎ、気持ちがまとまっていない状態で試合に臨み敗戦。四試合目は、梅木選手との対戦。ここまで三敗、開き直った気持ちで臨み勝つことは出来なかったものの、最後の試合でようやく心・技・体がまとまり自分の剣道が出来た試合であった。結果は三敗一分。結果以上に試合内容に悔いの残る大会であった。

しかし、組織だけのものではあるもの全国大会に出場出来たことは、これからも剣道していく上でいい経験になった。

またこの大会に出場し、結果、内容を残せるよう日々の稽古に精進していきたい。

最後になりましたが、全国大会に向けて応援、サポートして下さった諸先輩方に対しお礼申し上げます。



全国高校選抜大会 に出場して

徳島文理高校監督

玉田 晋 作



平成十七年三月
二十七日〜二十八
日、愛知県春日井
市総合体育におい
て開催された、第

十四回全国高校選抜大会に初出場を果たす
ことができた。ここまでの道のりは大変険
しく、勝負を掛けたここ数年、伝統校の厚
い壁にはねかえされ続けた。そして向かえ
た、一月の県予選は、生涯忘れることので
きない大会となった。準決勝では阿南工業
に、決勝では川島に、先鋒、次鋒を取られ
てからの逆転劇を二試合続けて演じ、全国
大会の出場権を勝ち取ったのだ。一ヶ月後
の四国新人大会では、県予選の好調をその
まま維持し、決勝戦で帝京第五高校に敗れ
たものの、県勢初の準優勝という結果を得

た。

本校剣道部が全国大会に出場するのは、
平成十五年に長崎県で開催されたインター
ハイ以来二回目となる。前回のインターハ
イでは、予選リーグで二戦二敗で未勝利に
終わっているのですが、今回は何としても予選
リーグを突破したいという気持ちで大会を
向かえた。予選リーグは大分県日田高校と



愛知県愛知桜ヶ丘高校という全国大会常連
校との対戦となった。特に、日田高校は大
将二串選手を擁して、九州大会でも好成績
を残し、優勝候補の一角に名を連ねていた。
リーグ戦第一試合、文理高校対日田高校
の対戦。先鋒、中堅と敗れ二一〇と苦しい
展開となる、ここで副将片山が何とか勝利
し一矢報いた。そして向かえた大将戦、玉



田の健闘も光ったが二串選手の鋭い引き面が炸裂し、終わってみれば三―一の完敗に終わった。第二試合、文理高校対桜ヶ丘高校の対戦。すでに予選リーグ突破の可能性は無くなったが、ここは何とか一勝しなければという強い思いがチーム全体に満ち溢れていた。先鋒引き分けの後、次鋒の佐藤が挙げた一勝を残りの全員が守り抜き、一〇と薄氷の勝利を得た。この勝利は、本校剣道部にとって記念すべき全国大会初勝利となった。

今大会は愛媛県代表の帝京第五高校が初優勝を飾り、四国に初めて優勝旗を持ち帰った。また、高知県代表の明德義塾高校もベスト八に入り、四国勢の活躍が目立った大会となった。この両校は常に練習試合をお願いしている学校であり、身近な生徒の活躍は本校の生徒に大いに励みとなったようである。「俺たちも、やればできる。」という気持ちを持って、次回の大会では今回の初勝利の上の一つでも多くの勝ち星を重ねることを目指し、日々の稽古に取り組んでいる。

第十四回全国高等学校 選抜大会に出場して

富岡東高校 山 田 愛



三月二十七・二十八日に愛知県春日井市総合体育館で第十四回全国高等学校剣道選抜大会が開催された。

新チームになって初めての全国大会であり、不安もあったが、チームの雰囲気はともよく、自分達の力を出すことができれば勝ち上がるという強い気持ちで試合に臨んだ。

予選リーグ初戦は滋賀県の草津東高校だった。先鋒一本負け。次鋒は一本取られたが粘って一本取り返して引き分け。私は何とかして勝ち、後ろに繋がる試合をして、チームの流れを良くしたかった。しかし不用意に小手を打っていったところを相小手面にあわされてしまい、取り返すことができず

一本負け。副将も先に一本取ったが二本返されてしまった。大将は凌がれ引き分け。三対〇で敗れた。

次は山形県の左沢高校との対戦だった。強豪チームではあるが予選リーグを突破するためには左沢に勝たなければならぬ。弱気にならず強気で自分の力を信じ、仲間を信じ試合に臨んだ。先鋒二本負け、次鋒一本負けで私に回ってきた。私が負けてしまうと勝負は決まってしまう。チームの流れを良くしたいと思い私は強気で攻めた。絶対に相手のペースにされたくない。しかし後半に面を決められてしまった。残り時間はあまりないと思ったが、一本返そうと必死だった。でも身体を崩されたところ、引き胴に決められてしまった。続く副将・大将も敗れてしまい一勝もあげることができず予選リーグを突破することはできなかった。

全国大会前の練習では、強豪チームだと思って最初から弱気になるのではなく強気で立ち向かうことが大切だと先生は指導して下さった。部員全員も同じ気持ちだった。

それでも勝ち上がることができなかったということは、私達に相手よりも足りないことが多かったからだと思った。技術や経験もあるかもしれないが、一番大きいのは気持ちだと感じた。試合では負けたくないし誰でも思う。勝ちたいとも思う。しかし、負けたくないや勝ちたいと思うのではなく、絶対に勝つという気持ちが大切なんだと思った。その気持ちで必死の試合をすれば、インターハイに出場できたなら、今まで以上に自分達の力を出すことができると思った。今回、全国大会に出場することができたのは、日々熱心に指導して下さった先生方やOB・OGの先輩方。また、応援やお世話を下さった保護者の方々、そして辛い時や苦しい時に支え合い、励まし合いながら練習してきた仲間、全ての人のおかげだと、心から感謝の気持ちでいっぱいです。先輩にも感謝の気持ちを忘れず、全国大会で自分達の力を十分に発揮することができるよう、これからも頑張り続けて欲しいと思います。

平成17年度 第14回全国高等学校選抜剣道大会

校名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	結果
草津東	加納	那須	大城	新見	辻	5/3
	メ	メ	メ	コメ	×	○
富岡東		×		コ		×
	村瀬	河田	山田	元木	細川	2/0

校名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	結果
左沢	阿部	斎藤	鈴木	萩原	高橋	8/5
	メコ	メ	メド	コメ	×	○
富岡東				コ		×
	河田	村瀬	山田	元木	細川	1/0

インターハイを経験して

阿南工業高校 岩 沙 佑 樹

私たちは、昨年の総体に敗れた悔しさをバネに、必死に練習を積んできました。そして今年六月、阿南工業高校としては十四年ぶりとなる優勝を果たし、念願のインターハイ出場権を手に入れました。

その後の練習は、三年間の中でも最も質の高い練習となりました。インターハイまでの間に全国の壁を実感することを目的として、春の全国選抜大会優勝校の帝京第五高校を筆頭に、四国有数の強豪校との強化合宿を行いました。練習試合で刺激をうけ、さらに全国で活躍できることを夢見て厳しい練習を積み重ねました。

インターハイ初日は、開会式がありました。全国大会だけあって、自分たち以外のすべての選手が強く見え、いつもより緊張感が高まりました。

予選リーグの対戦相手は、埼玉県代表の浦和高校と、近大附属和歌山高校でした。

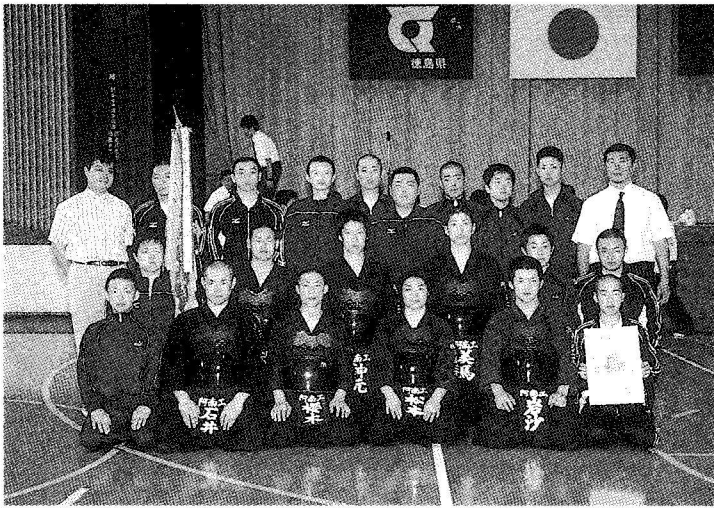
試合前には「このメンバーで試合ができるのは最後だから自分たちの力を出し切ろう。そして、悔いの残らないようにしよう。」と気合いを入れ、チームを一つにして試合に臨みました。一試合目は浦和高校との対戦でした。相手チームの情報もなく、どんな剣道をするのか全く分からない状態で臨んだこともあって、全員が緊張しているのが分かりました。そんな中むかえた先鋒戦、なんとか勝って勢いをつけたかったです

が、緊張のためか動きが悪く、引き分けてしまいました。次鋒戦が勝負の流れを左右する大事な試合になりましたが、いつもの動きが戻らず集中しきれないところを、先取されました。こちら、すかさず面を取り返しましたが、気持ちをもとめきることができないまま、もう一本取られ負けてしまいました。中堅はこの嫌な流れを変えるために積極的に攻めました、引き分けでした。副将は大将に苦しい試合をさせないためにも勝ちでつなぎたいところでしたが、その思いがかえって焦りを生み、面を先取され負けてしまいました。この時点でこの

対戦の負けは決まってしまいました。大将は最後まで気を抜かないで戦いました。しかし、相手大将は一枚上手で、技の切れもすばらしく、二本負けし、結果三対〇の完敗でした。

一試合目終了後、少し時間があいたのでミーティングをすることにしました。浦和に敗れ予選を上げることは難しくなりましたが、次の試合に望みをかけ、最後まで戦い抜こうと気持ちを一つにするためです。このミーティングのおかげで負けたことを引きずらず、気持ちを切り替えることができました。

二試合目は、近代和歌山高校でした。先鋒はよく動いていましたが、結果的には引き分けでした。次鋒は面を一本取るも、守りに入ったのがいけなかったのか、小手、そして胴を奪われ負けてしまいました。ここまでは一試合目と同じような流れになってしまいましたが、中堅が踏ん張り一本勝ちしました。こちらの流れになったと思っ



負けてしまいました。大将は勝たなければチームが負けてしまうという、苦しい立場に追い込まれましたが、ここぞというところで面が決まり勝利しました。結果は二対二の引き分けとなるも残念ながら予選リーグ落ちが決まり、僕たちの夏が終わりを告げました。

私はもう高校生として試合をすることは

できませんが、後輩達には常により上を目指す向上心と、強い相手に臆することのない精神力を養い、来年は全国の頂点に立てよう頑張ってもらいたいと思います。

最後になりましたが、僕たちがここまでこれたのは、これまで熱心に指導してくださった監督や諸先生方をはじめ、阿南工業OBの先輩方、陰ながらいつも僕たちを支えてくれた保護者の方々、そして普段の生活からすべてを分かち合ったチームメイトたちのおかげだと強く感じています。多くの人たちに支えられた僕たちは存分に剣道をする事ができました。心から感謝の気持ちでいっぱいです。阿南工業剣道部で学んだ事は私の一生の宝物です。

第五十二回全国高等学校

総合体育大会

富岡東高校 近藤 愛



平成十七年八月三日～五日の三日間、千葉県立館山運動公園で、「輝きを胸に・夢をそ

の手に・房総の夏」をスローガンに、第十二回全国高等学校総合体育大会剣道競技が開催された。

県総体では一年生コンビが活躍し、二・三年生がつなげ、見事インターハイへの切符を手にすることができた。そのインターハイでの目標は「一試合でも多くこの会場で、このチームで戦うこと」であった。三年生にとってはこれが泣いても笑っても最後の大会となる。

予選リーグの対戦チームは富山県代表高明高校と昨年のインターハイで惜しくも負けた青森県代表青森山田高校であった。初

戦は高朋であった。第一試合では青森山田と高朋が対いで引き分けており、高朋には勝ちたいところだ。勝てる自信は十分にあった。中堅が終わって対一。何とか一本でも多く取りたい。ここであせってはいけないと頭ではわかっていたのだが、副将・大将と負け、結果は三対一。第一試合の結果との兼ね合いで、次の試合で富東が勝ったとしても予選リーグでチームとしての負けがない高朋を勝ることはできず、予選敗退が明らかになった。しかし私達は最後まで諦めなかった。試合前の円陣で、「思い切ってしっかり自分の剣道をしてこよう」一人一人の中には高朋との試合での悔しさやさまざまな気持ちで一杯だったと思うが、青森山田との試合への意気込みは皆同じだったに違いない。先鋒横山から果敢に攻め、先に一本先取した。このまま富東は波に乗り相手には一本も譲らず結果は四対〇。しかし予選リーグを突破できなかった事ながらも悔しくて仕方がなかった。三年生はこれで富岡東高校として闘うのは最後となった。チームに三年生は一人だけであったが、



2005千葉きらめき総体剣道大会
2005.8.3(水)~5(金) 千葉県・館山運動公園体育館

私達の思いも背負い闘ってくれた友人にとっても感謝している。今まで負けて味わった悔しさや、勝った時の喜びを今後のバネに、次のステップへとして一人一人の財産としていきたい。

私達がこうして全国の大きな舞台に立つことができたのは、厳しく熱心にまた優しくご指導して下さいました先生方、OB・OG

の方々、そして保護者の皆様のおかげです。そして今まで苦楽を共にしてきた仲間にも本当に感謝しています。ありがとうございます。

【追記】

キャプテンとして、そして補員として：出場したインターハイ。思いが色々あったと思うのですが、役割に徹し、チームのことを最優先に考え行動してくれた近藤主将に心から感謝しています。彼女あつてのこの一年でした。結果を求めすぎ、厳しくあつた事もたくさんありましたが、よくぞ笑顔で（たまに？泣き顔で）へボ監督についてきてくれました。また、三年生として一人出場して、最後の最後の試合で有終の美を飾った山田副主将。このチームの最後の試合で三年生が勝ってくれたことに安堵しました。近藤・山田のW愛を中心に一年間チームを盛り上げてくれ、努力してきたことが結果には結びつきはしなかったですが、これからの長い人生に、そして後輩達にきつと役立つ三年生の努力だったと信じます。

(富岡東高校監督 飯田栄一)

女子団体予選リーグ Iブロック [第三試合場]

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	取得本数 /勝者数	勝敗
青森山田 (青森)	沖田	千葉	新藤	渋谷茜	櫻井	1/1	□
		メ					
高朋 (富山)				メ		1/1	□
	山村	渡邊	永森	中野	中山		

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	取得本数 /勝者数	勝敗
高朋 (富山)	山村	渡邊	永森	中野	中山	4/3	○
	メ			メコ	メ		
富岡東 (徳島)		メ				1/1	×
	横山	河田	中野	山田	細川		

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	取得本数 /勝者数	勝敗
青森山田 (青森)	沖田	千葉	新藤	渋谷茜	櫻井	1/0	×
					コ		
富岡東 (徳島)	メ	ドメ	メメ	メメ	コ	8/4	○
	横山	河田	中野	山田	細川		

第四十七回全国教職員

剣道大会に参加して

徳島工業高校 近藤 久善



世界に誇る雄大な阿蘇五岳を持つ熊本県阿蘇市において、平成十七年八月七日(日)、

第四十七回全国教職員大会が盛大に開催されました。

本大会は私自身、三度目の出場となりました。依然一本を取ることのできていない私は、一本の壁を打ち破るという目標を念頭に置き挑んだ大会でした。初戦で対戦する栃木県は、前回出場したときに、私の取られた一本で敗戦した苦い思い出のある相手でもあり、試合前から気合いも充実していました。

まず試合は、女子個人・男子個人の順で開始され、女子の部に伊藤奈津子選手(富岡東)、幼・義務教育の部に松本真治選手

(鷲敷中学校)、高・大・教委の部に大石哲生選手(鳴門第一高校)がそれぞれ参加しました。その戦績は次のとおりであり、伊藤選手は善戦し、ベスト八まで勝ち上がりました。

- 一回戦 松本 | 延メ村瀬(愛知)
- 大石メメ | 吉村(山口)
- 二回戦 大石ド | メメ森田(京都)
- 伊藤メメ | 若松(福島)
- 三回戦 伊藤メ延 | 筒井(佐賀)
- 四回戦 伊藤 | 延メ光永(福井)

〈ベスト八進出〉

団体戦は、第三試合場の第一試合目でした。個人戦出場選手の活躍や先鋒の緊張感を無心の攻めに転ずることができたのか、開始三十秒で小手を先取することができました。しかし開始戦に戻った時には、無心の気持が途切れ、一本が取れた喜びと、もう一本取れるのではという気持ちのなかに芽生えてしまい、その後の試合展開は燦々たるものとなってしまいました。下がったところをメン、そして慌てて一本取り返そう出たところをツキでした。試合中に私

の気が二転三転(無の一本・欲の一本・焦りの一本)したのを今でも覚えています。またしても私は、先鋒としての役割を十分に果たせることができず、悔いの残る試合となってしまいました。私たち徳島県チームは、次の戦績のとおり善戦したものの二対三で敗退してしまいました。

- 一回戦 徳島県 栃木県
- 先鋒 近藤久善 コ | ツメ 野口 幹
- 次峰 白木洋一(山川中学校)

中堅 富浦廣志(由岐中学校)

- 副将 福多雅英(城北高校) メ | 麻生直征
- 大将 木原資裕(鳴門教育大学) メメ | 渡辺幸勇

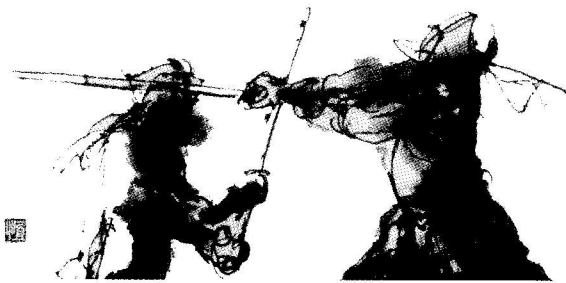
今大会において私は、稽古によって会得しなければならぬ三殺法の一つ「気を殺す」の大切さを知るとともに、今後どのようにならぬかという大きな課題を得ることができました。私が今できることは、常に先の先を取ることを心掛け、日々

の稽古や生活において「師弟同行」を実践
 しくことだと思っています。

大会会場までの移動等において、数々の
 ハプニングもありましたが、私にとってと
 ても思い出に残る大会となりました。最後
 になりましたが、今大会において監督・審
 判の労でお世話になりました塩田先生・立
 川先生をはじめ、ともに本大会へ参加しま



した先生方に末筆ながらお礼を申し上げま
 す。ありがとうございました。



全国中学校剣道大会に

参加して

坂野中学校剣道部顧問

田村 義 弘



はじめに、坂野中
 学校は全校生徒三
 百余りの学校で、
 和田島小学校、坂
 野小学校、新開小
 学校の、三小学校より進学してきます。そ
 の、三小学校の全てに、剣道に熱心な指導
 者が剣道教室を開き、盛んに稽古に励んで
 いますが、小規模の学校であるため剣道を
 する子供も少なくなっています。しかし、
 入部者六人全員が剣道経験者という幸運に
 恵まれました。けれども、坂野中学校は、
 練習場所が十分でなく、体育館が週三回程
 しか使用できないため、練習内容を考えて、
 まずは、体力をつけるため走ることに重点
 をおき、二年間朝走りました。そして、保
 護者の陰ながらの支えもあり、剣道をする

ことが生活の一部になりました。

新チームになり、生徒・保護者と「一回は優勝したい」を合い言葉に頑張り、ライオンズ、小中錬成、選手権と優勝し、七月十八日県総体当日となりました。私も保護者も、第一シードということで勝って優勝したいというプレッシャーを抱きながら試合が始まってしまいましたが、二年間走り体力もつき、心も技も充実でき、運も味方してくれて、夢であった全国大会の切符を手にすることができました。

八月十八日～八月二十日三重県伊勢市サニアリーナで全国大会が行われました。対戦相手は、花巻市立花巻中学校（岩手）高森町立高森中学校（熊本）でした。二校とも強豪校で、特に、高森中は、大分県の錬成会でも素晴らしい力を見せつけられていたので、生徒たちも勝ちたいと思い頑張りました。一試合目は花巻中学校対高森中学校で一对二で高森中学校が勝ちました。二試合目は坂野中対高森中で、坂野中は初戦、しかし、高森中は二戦目だったため、心のみに不安がよぎりましたが、先鋒櫻木が良

く攻めてムードを引き寄せてくれました。

結果先鋒から副将まで引き分けて、大将戦で松本が試合開始直後に一本を先取されたが、すぐに取り返すことができ三分が過ぎました。そのとき私自身引き分ければリーグにでれる（高森中は、全てで二本しか取っていないため）という気持ちで延長戦になりました。その直後取られてしまい負けしまいました。二戦目は四対一で勝ちました。本当に、私自身の心の動揺が現れた試合でした。

全国大会を終えて、私自身また生徒達も素晴らしい経験ができ、ご支援下さった地域の方々またご指導下さった先生方に感謝し、これからも剣道に精進することにより生徒の育成に励んでいきたいと思えます。

第三十五回全国中学校

剣道大会に出場して

北井上中学校三年

中川 知香



平成十五年四月、私たちの挑戦は始まりました。女子は、私たち新入部員三名だけでの出

発でした。少人数ゆえにたいへんなことや悩みもありましたが、互いに励まし合い、協力し合いながらがんばってきました。やがて、中学校での厳しい練習の成果が始め、剣道の楽しさを知ることができました。勝つためには、技を磨くだけではなく、「感謝の心」「礼儀」「精神力」が必要であることも実感しました。一年後、新入部員を迎え、一・二年生だけのチームながら、やっと団体戦のメンバーがそろい、練習もさらに充実してきました。最初は小さい目標でしたが、それらを一一つクリアして

いき、だんだん大きい目標へとチャレンジしていききました。そして、ついに夢の舞台、全国大会への出場をめざすようになりました。

私たち三年生にとって最後の夏、郡市予選を勝ち抜き、県総体でも力を発揮することができ、決勝戦まで勝ち進みました。決勝戦前、豊田先生に「君たちはチャレンジャーだ。恐れるものは何もない。夢まであと一つ。今までの努力を信じて、全力で戦ってこい。」と声をかけられ、試合場へ送り出されました。チーム一丸となって戦い、大接戦の末、念願の優勝を果たし、全国大会という夢舞台への切符を手にすることができました。熱い思いとたゆまぬ努力は、私たちに忘れることのできない最高の思い出を残してくれました。

「夢かかけ 共に青春かける夏 輝け感動 三重の地で」の大会スローガンのもと、三重県営サンアリーナで第三十五回全国中学校剣道大会が開催されました。私たちは、指導してくださった豊田先生や支えてくれた保護者の皆様への感謝の気持ちを胸に、

徳島県代表としてはずかしくない、正々堂々

とした試合をすることを誓いました。予選リーグでは、栃木県代表大田原中学校、山口県代表桑山中学校との対戦でした。対大田原中戦二(三) 対二(三)、対桑山中戦一(一) 対一(二)で惜しくも敗退してしまいました。会場の雰囲気にもまれたこと、勝たなければという焦りがあったことは確かですが、今の自分たちの全てを出し切ることができ、悔いは残っていません。仲間と心を一つにし、同じ目標に向かって努力を続けていった日々、その結果得ることのできた忘れ得ぬ感動、本当に充実した中学校での部活動生活を閉じることができました。私たちは、このすばらしい体験を生かし、これからも前進を続けます。

最後になりましたが、時には厳しく、時にはやさしく、毎日熱心に指導してくださった豊田先生、剣道連盟や中体連の先生方、いつもお世話してくださった保護者の皆様、本当にありがとうございます。そして、この三年間剣道をしてきて、苦しいとき、悲しいときに助け合い、共に感動を味わっ

てきた仲間みんなありがとう。



四国中学校総合体育

大会に出場して

阿南第一中学校三年

賀上 由里奈



私たちは、県
体で惜しくも準優
勝という結果になっ
てしまい全国への
切符を逃してしま

いました。その日は朝からチームの雰囲気
もすごく良くて一回戦、二回戦と順調に勝
ち進んでいたのですが、勢いにのりすぎて
突っ込んでしまい、結果準優勝ということ
になりました。最初はみんな信じられない
という顔をしていて、その後何日は練習
に気が入っていませんでした。しかしこれ
ではいけないと、先生が必死に私たちに稽
古をしてくださっている姿を見て、みんな
の目が四国大会の方にやっと向き始めたの
です。もう絶対にあんな嫌な思いはしたく
ない、と心に決めチーム一丸となって練習

しました。

そして八月五日に行われた第四十三回四
国中学校総合体育大会当日、ほどよい緊張
感の中、三年生にとっては中学校生活最後
の大会が始まりました。

まず団体予選リーグでA組とB組があり、
私たちはB組を一位で通過しました。けれ
どB組の二位の協和中学校（香川）とは、
同じ二勝一分けで本数差によるものでした。
A組の一位は北井上中学校で二位が北郷中
学校（愛媛）でこれも二勝一分けの本数差
によるものでした。準決勝は接戦の末北井
上中学校に負けてしまった北郷中学校とで
す。この調子で波に乗っていいこうと思っ
ていたけれど苦戦してしまいました。対一
のまま代表決定戦となり、先鋒が代表とし
て出ていきました。代表戦が始まってから
二十分ぐらい経過してお互いに体力がなく
なってきたので、気力と根性の勝負になり
ました。私たちは張り詰めた空気の中祈る
ような思いで、ほとんどまばたきもしない
でその試合に集中していました。少し時間
がたち、相手が気を抜いたその一瞬を狙っ

て引き面を決めました。今でもその時の記
憶はしっかり残っています。

そしていよいよ決勝戦です。試合前のミー
ティングで、

「これが最後、自分の力を全部出し切ろう。」
と声をかけ合い試合に臨みました。先鋒が
一本勝ちで次鋒も一本勝ち、中堅は一本負
け、なんとここまで本数はちがうものの県
総体の時とほとんど同じだったので。し
かし、信頼を裏切ることなく副将が一本取っ
てくれました。私は思わず隣にいた子と抱
き合いました。大将は、

「前で勝負をつけてくれたけん、すごい気
が楽だったよ。」

と、後で言ってくれました。こうして三年
生にとっては最後となる四国大会は、最高
の結果で終わりました。

私はこの中学三年間でいろんなことを学
んできたと思います。悲しくて嫌になった
時もあったけれど今、三年生は、

「私達っていっぱい涙を流してきたけれど
それと同じくらい幸せでもあったよなあ。」
と、時々言っています。終わり良ければ全

て良くと言いますが、まさしくその通りです。私は高校に行っても剣道を続けていこうと思っっていますが、この三年間いろんなお話をさせて頂いた先生方、保護者の方々、そしてチームのみんなのことは絶対に忘れません。だから、いろんな人の支えがあったからこそ今の自分がいるんだということに頭を刻み、これから生活していきたいと思っと思っています。私は阿南第一中学校で三年間剣道が出来て本当に良かったと思っています。



全日本女子選手権大会

に出場して

伊藤 奈津子



平成十七年九月
四日、静岡県武道
館で第四十四回全
日本女子剣道選手
権大会が行われま

した。この大会は満十八歳から出場することができ、段位や職業の制限もなく、女子剣道の頂点を決める権威ある大会です。私は、県予選を経て徳島県代表としてその試合に出場しました。

選手権大会は二回目の出場で、初出場は富岡東高校三年生の時でした。緊張する私に河田先生が「背伸びした剣道をするなよ。」と一言だけおっしゃったことを覚えています。その言葉で気分がほぐれたのか、のびのびと試合することができ、面二本で初戦を勝つことができました。今回は、前回の成績を上回ることを目標に試合に臨みまし

た。

試合当日、九月といってもまだまだ暑く、体調もそれほど良くありませんでしたが、今出せる力をすべて出きるつもりで戦いました。対戦相手は神奈川県代表の迫田選手でした。迫田選手は高校時代から全国大会等で活躍している力のある選手です。身長が私と同じぐらいあり、試合後のあいさつでお互いが「身長何センチですか？」と同時に聞いてしまいました。

試合は、お互い思い切った技の出ないままあっという間に四分間が過ぎてしまい、延長戦に入りました。打ち合いがあり、相手が少し手元を上げたところ私が小手に出ました。機会は良かったのですが、浅く一本になりませんでした。その後少しあってから、つばぜり合いの別れ際にひき面を打たれ、勝負ありとなりました。前々から気をつけていたところだったのでしたが、やはり一番弱いところを打たれてしまったと感じました。自分の惜しい技があった分、そこで一瞬気を緩めてしまったせいだと思います。一瞬の隙を確実にとらえるという

ころにレベルの高さを感じ、勝負の厳しさを改めて知りました。迫田選手は、面技に加えて小手技も鋭く、力強い打突でした。私も、しっかりと竹刀を振り、冴えのある打突を心がけて稽古したいと思います。

負けて当然悔しかったのですが、一方で同期の友人たちとの再会は大変嬉しいものでした。みんな高校時代から剣を交えて親しくなった友人ばかりで地元へ帰り活躍しています。友人の活躍は心から喜ばしいことですし、大いに触発されます。私は、大卒を卒業してから、何となく行き詰まりを感じることも多く、稽古にも専念できずにいたのですが、友人たちと話すうちに、もう少し頑張ってみようという気持ちになりました。これがこの大会の一番の成果だと思えます。

また、今回の優勝者である埼玉県代表の村山選手は三十一歳で、これまでの入賞者で最年長でした。体力や筋力においては年齢が若い方が優勢かもしれませんが、村山選手には気力、頂点を目指す積年の思いというものが強く感じられ、一戦一戦感動す

るものがありました。私の剣道人生もまだまだこれからです。また、稽古に稽古を積んで、全日本選手権大会に挑戦したいと思います。

稽古
人の
心も
うま



第五十一回全日本東西対抗 剣道大会に出場して

機動隊 山 室 雅 幹



「山室よかったなあ。」

藤川副隊長から、
思いもよらない言葉
を耳にしたので

す。なんと幼い頃からの夢でありました、全日本東西対抗剣道大会出場の知らせであったのです。試合会場は薩摩の国、鹿児島県（鹿児島アリーナ）において開催されることになりました。

本大会は、毎年全国各地を巡って行われており、幾多の名勝負が語り伝えられている由緒ある大会であります。

大会は、全国を東西に二分し、剣道六・七・八段剣士の中から三五名を選抜した対抗試合であります。選手構成は大将・副将を範士八段、三将から一七将までを教士八段、一八将から三一将までを七段、三二将

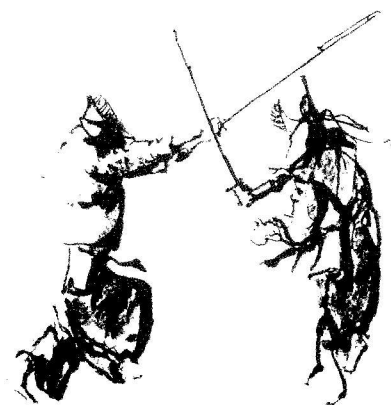
以下先鋒までが六段となっております。また、男子は新たに一〇分三勝負の試合方式が採用されました。

私は、三四将（前から二番目）での出場となりました。対戦相手は、一八六センチの長身から繰り出す豪快な面技を得意としている愛知県警の外山選手です。先鋒戦が終了し、いよいよ私の出番となりました。開始から中盤にかけてお互いに技の攻防が続き、決め手がなのまま、試合は経過していききました。そして四分過ぎ、外山選手の下からの攻めに対して一瞬のけぞった形になってしまい、面を奪われてしまいました。その後、引き面を連取され、残念ながら試合は負けてしまいました。

その後の諸先生方の試合を拝見していると自分には無い打突の機会、また絶妙な間の取り方を勉強させて頂くことができました。特に打突の機会について、自分の機会だと思っているとところが、実は相手の機会であったり、また一瞬しかない機会に打突するか、しないかによって試合の流れは大きく左右するというのを改めて感じるこ

とことができました。

この大舞台での経験が、これからの剣道人生に生かせるように、また、このときの気持ちを忘れることなく、日々努力し精進してまいりますので今後とも御指導、御鞭撻のほど宜しくお願い致します。



第六十回国民体育

大会に出場して

今井 剛



平成十七年十月二十五日、二十六日の二日間岡山県津山総合体育館にて第六十回国民体

育大会（晴れの国おかやま国体）剣道競技が開催されました。徳島県は、

監督 近藤 亘 先生

先鋒 今井 剛（公務員）

次鋒 川添義仁（警察官）

中堅 平野誠司（警察官）

副将 福多雅英（教員）

大将 北條憲治（会社員）

というチーム編成で、私は先鋒として出場させていただきました。

私自身国体に出場することは初めてですが、チームの雰囲気もよく、絶対にこのチームで勝とうという気持ちを持って大会に挑

戦しました。しかし学生時代のように週六回の稽古が社会人となった今では週一回程度となり、国体出場が決まってきたからの遠征や練習試合では結果を残せないことが多く、明らかに稽古不足を痛感していました。そこで大会が始まるまで、県警の朝稽古に参加させて頂いたり、またトレーニングをするなど自分に足りない部分を補い、大会当日は心身ともいい状態で迎えることができました。

大会一回戦は栃木県、昨年度の大会ではベスト八に進出していました。自分の試合が近づくにつれ、集中力を高め、落ち着いて試合に臨みました。私の相手は鈴木選手、大学生の方でした。

受けに回らず先に技を仕掛け積極的に攻めていきました。開始一分後ぐらいに、鏢迫り合いから相手を崩し、引きドウを先取しました。しかし、先に一本取ったことで気持ちが守りに入ってしまう、試合中盤では相手に攻められ、終了一分前ぐらいに、鏢迫り合いから崩されて、引きドウを取られました。その後延長になり、相手が下がっ

たところを機会とみた私が間合いを詰め、メンを打とうとしたところを出コテに取られました。その後チームは手に汗握る好試合を展開し、一進一退の攻防となりましたが、惜しくも負けてしまいました。

私自身、負けた悔しさや一本取ってから試合内容に反省すべき点は残るものの、大会に至るまでに徳島県チームの方々、剣





道連盟の諸先生方、ご支援していただいている方々、県外出身の私にも温かく接して頂き、本当に感謝の気持ちでいっぱいでした。お世話になりました方々に心からお礼申し上げます。社会人になってからもこのような経験ができることを幸せに感じております。今後仕事の都合で徳島を離れることがあろうとは思いますが、剣道を通して多くの方々との出会いを大切にしながらこれからも精進していきます。本当にありがとうございます。そしてこれからもご指

導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

(試合結果)

一回戦 徳島県 二対三 栃木県

先鋒	今井	ドー	ドコ	鈴木 (学生)
次鋒	川添	メー		荒井 (教員)
中堅	平野	ー	メメ	高濱 (警察官)
副将	福多	メー		横山 (警察官)
大将	北條	ー	コ	高橋 (警察官)



第四十回全日本居合道 大会の報告

監督 原 田 勝



平成十七年十月十五日(土) さわやかな秋空の下、千葉県ポートアリーナにおいて各

都道府県代表の精鋭剣士一四一名により盛大に開催されました。本県からも監督原田勝、五段の部に高野康寛選手、六段の部に斉藤吉明選手、七段の部に坂本憲一選手の精鋭をもって望みました。

五段の部高野選手は一回戦で静岡県の佐野選手との対戦となり甲乙つけがたい内容であったが惜しくも二対一の僅差で敗戦となりました。六段の部斉藤選手は群馬県の植田選手を三対〇で圧勝し、二回戦では新潟県の岡田選手を二対一で退け、三回戦に進み福岡県の馬場選手と対戦し、斉藤選手の勝と思われたが結果は二対一で惜しくも

敗れました。よく善戦したと思っております。七段の部においては坂本選手が全国優勝経験五回の実績を持つ東京の桑田選手との対戦となり、誰の目にも坂本選手不利の状況にあったが、「勝負はやってみなければわからないから気にするな何時もの通りに抜け」と言って送り出しました。結果は二対一で坂本選手に軍配が上がりました。二回戦においても全国優勝経験のある福岡県の国方選手との対戦となり二対一で退け、三回戦では来年の第四十一回大会の開催地である北海道の松橋選手との対戦となったが、これも二対一で退け、ついにベスト八まで勝ち上り、四回戦では神奈川県森島選手との対戦となりました。この選手も全国優勝一回準優勝三回の経歴を持つ三十六歳の若手有名選手である。坂本選手に「今までよりも上手に抜こうと思うな」と言って送り出したのだが、結果三対〇と少し色気が出て堅くなり、痛恨の敗退となりました。

昨年までは全国順位四十番代であったのが、今年は十四位まで上ることができ、三選手

共良く頑張りました。次回北海道で行われる第四十一回大会には優勝を目指して頑張らなければならないと思っております。そのためには徳島剣連居合道部の各選手候補者は漫然とした稽古ではなく、常に研究心をもち創意工夫をし、稽古は毎日するよう心がけなければなりません。人並みの稽古では人並み以下にしかならない、人並み以上の稽古をしてやっと人並みと思わなければならない、人の想像もできないような稽古を行って初めて人より優位に立てるのではなからうかと私は常々思っております。全国優勝出来るか出来ないかは強い一念をもった心がけ次第でありましょう。

全日本剣道選手権

大会に出場して

警察支部 富田圭介



平成十七年十一月三日、日本武道館において行われた第五十三回全日本剣道選手権大会

に出場しました。私自身、本大会の出場は三回目でありましたが、七月の県予選以降、国体強化選手の方々と石川遠征、広島遠征をはじめ、強化練習に同行させていただき、過去二回と比べても最高に充実した状態で本戦に臨むことができました。

大会当日も不思議なくらいに気持ちが落ち着いており、再びこの場所に立てた喜び、また日本武道館の張りつめた空気の中、おそらくは自分自身本大会への出場は最後の挑戦であろうということや、いままで自分が必死に取り組んできた稽古のこと、数々の試合での反省等々、短い開会式の間様々

な思いが頭の中を駆けめぐりましたが、それでも最後は（一回戦に集中しよう、全力を尽くそう。）と気持ちをまとめることができました。

一回戦の相手は岩手県警の岡市選手、本大会出場選手中、最年長の選手です。まず立ち上がりはお互いに慎重な攻め合いが続きましたが、中盤は私のペースで試合が進み惜しい面も何本があったように思います。しかし一本にすることができず五分が経過。時間内は攻めてはいましたが、一本決めきれないというあまり良くないパターンでした。延長戦に入りしばらくして、相手の打突に反応し、胴に変わったところに、小手を打たれてしまいました。

あっけない幕切れでした。まさに勝負は一瞬という言葉を感じた試合でした。後になって思うことは、打たれたところよりも、時間内の決めきれなかった打突のことです。この厳しい試合の中でチャンスがそんなにあるはずはありません。一瞬でも気を抜くとそこを打たれるし、また一瞬のチャンスを逃すと勝機を失いかねません。勝負

の上で当たり前のことではありますがそれを実践して行くのは非常に難しいことです。本大会で優勝した警視庁の原田選手の試合を見て感じたことは、まず我慢強いという印象を受けました。自分の形で技を出し、無理な状況では決して打たないという点が徹底していると感じました。そして勝負所では確実に一本にする技術と気力、まさに優勝にふさわしい試合内容でした。

本大会を通じて得た自分の課題は、やはり決めるべきところで決める強い攻めと打突です。特に技を出す前の攻めの段階でワンプアーションになりやすい傾向があり、攻めのバリエーションが少ないため、そこを防がれると手詰まりになる場合が多いのです。もちろんこの点についてはこれまでの稽古を通じて取り組んできていたことではあります。大会を通じて改めてその重要性を感じました。

現在、私は三十五歳、体力的にはこれから厳しくなる一方です。その中で自分の剣道をどう進めてゆくかと考えたとき、やはり強い攻めと打突、そして真っ直ぐで正し

い剣道を求めていきたいと思えます。そのためにももう一度基本に立ち返り今自分ができることをそれぞれの時期に怠ることなくそれを継続していきたいと思えます。



第四十八回全日本実業団

剣道大会に参加して

日亜化学 前 田 悟 志



平成十七年九月十九日、全日本実業団剣道大会が日本武道館で開催されました。

日亜化学剣道部は、週一回一時間の稽古を行い、毎年この大会で上位に食い込むことを目標とし頑張っています。夜勤などで選手全員が揃うことはほとんどありませんが、大会前には強化練習を行い、試合にベストコンディションで望みました。

二回戦からの出場となった今大会は、

二回戦 日亜化学3(5)―(4)2 三菱信託銀行

三回戦

日亜化学3(7)―(4)1 三井住友海上

(駿河台)

四回戦

日亜化学3(6)―(1)0 トップファンファームズ

(福正)

五回戦

日亜化学2(3)―(6)3 松下電器産業

(本社)

結果二八チーム中ベスト三十二。今回、選手として二人が初参加となり、どのようになるか不安もありましたが、日々の稽古や強化練習によりその不安もなくなり試合では各自が全力で試合ができ、次へと繋がるものになったと思います。

私は今回で三回目の参加となりますが、初参加の二年前は、大学を出たばかりで実業団の剣道がどのようなものか全くわからず、不安を持っての参加となりました。しかし回数を重ねることに思うことは、どのチームにもそんなに差はなく、各チーム紙一重であるということです。試合前から、注目されているチームでも試合が終わるまではどうなるかわかりません。実際二年前の日亜化学は、前年度までは、全く上位に進出できませんでしたが、ベスト十六まで勝ち上がることができ、全国に名を残すこ

とことができました。

この大会を勝ち上がるポイントとして、相手より強い気持ちと、チームワークが大きなポイントだと思います。私たち日亜化学のチームワークは全国に引けを取らないものだと思います。今回は二年前のベスト十六には届かなかったのですが、各自の力、気持ちはこの大会終了後に上がっています。

又、今年は試合前に徳島新聞からの取材、大会中の剣道時代からの取材もあり、日亜化学剣道部の名が知れ渡りました。このことを踏まえ、今後一層の努力と稽古に励み、全国実業団剣道大会でベスト十六を越える成績が残せるように精進していきたいと思っています。

終わりにになりましたが今大会に出場するに際してご支援ご激励いただきました皆様方にお礼を申し上げますと共に今後より一層の御指導御鞭撻の程よろしくお願い申し上げます、ご報告といたします。

勝ち上がることができ、全国に名を残すこ

全国警察剣道大会

を終えて

警察支部 富田圭介



「全国警察剣道大会」、今年もついにこの季節がやってきました。本大会は、我々剣道特

練員にとって一年の内で最も大きな重点を置く大会の一つです。ここ数年、剣道特練員の年間目標は「全国大会二部優勝・一部昇格」であり、今年もまさにその日を夢見で稽古に励んできました。私自身、主将として全国大会に臨むのは初めてであり、どのようにチームをまとめていくか、そしてまた選手の一人として自分自身の調子がいかにして最高の状態に仕上げていくかというところに努めました。試合の日が近づくと、つれ全体の雰囲気は盛り上がり、一人一人の顔に充実感が見て取れるようになった時、（よし、これでいける。）と感じていました。

さて、いよいよ大会当日、初戦の相手は

福島県警。福島県警は先に行われていた宮崎県警戦に二対二で敗れており、次の我々との試合に負けると三部陥落。まさに死に物狂いでむかってくるのが予想されました。必死の相手に中途半端な気持ちで受けて立つと間違いなくやられるというのは勝負における鉄則です。試合直前平野監督からも、「受けて立つな。一本を取りに行け。」と強気な指示がとびました。我々の手拭いには生前、堀江先生が残された「無心」の文字。選手一人一人がそれぞれの思いと無心の二文字をかみしめながら面を着け、試合に臨みました。

福島県警戦、

先鋒・佐藤選手、先鋒戦らしいスピード感あふれる熱戦は、延長でも勝負が付かず引き分け。

次鋒・川添選手、充実した気迫で終始自分のペースで試合を展開、面の一本勝ち。

中堅・山名選手、全国大会ではほとんど負け知らず。我が徳島県警のポイントゲッ

ターである。この試合も見事な面を決め一本勝ち。

副将・山室選手、試合の流れを考えた冷静な試合運びで引き分け、この試合の勝利を決定する。

大将・富田、次の宮崎県警戦に向け勢いを付けるためにも是非大将戦でも勝利したかったところであるが、延長戦で面を奪われ負け。しかし、この一戦に勝利したことで、三部陥落という呪縛から解放された真に上（一部昇格）だけを見つめ宮崎県警戦に臨むことができました。

宮崎県警戦、

先鋒・山名選手、延長戦の末、引き面を取られまさかの負け。

次鋒・佐藤選手、嫌な雰囲気を振り払うかのごとく、積極的に攻め早々に甲手を先取、さらに攻撃の手を緩めず面を追加し、大きな二本勝ち。

中堅・川添選手、一試合目同様すばらしい試合を展開、終始攻め続けるも引き分け。

副将・山室選手、立ち上がり相面を奪われ苦しい試合展開、中盤にも面を追加され

二本負け。

大将・富田、この状況はまさに四国管区大会の愛媛戦、香川戦と同様一本取らなければならぬ場面。延長戦開始早々、いちかばちかの逆胴が決まり何とか一本勝ち。

その結果、勝者数、取得本数とも同数となり、代表決定戦にもつれ込んだ。代表戦では山名選手と宮崎の副将大重選手が対決した。試合は山名選手が攻め続けるも相手の大重選手も守りが堅くなかなか決定打が出ない。山名選手の技に審判の旗が一本上がる場面が二度三度。その度に応援している私達も尻が浮くほど力が入り序盤には出ていた応援の声も終盤には(頑張り、山名頑張り。)というような声にならない祈るような気持ちで試合を見守った。三〇分にも及ぶ熱戦。そして遂にその時が。鏢迫り合いから山名選手が一瞬居着いたところ、相手の引き面が決まる。時が止まったような最後の瞬間。

今年の我々の挑戦はここで幕を閉じました。責任感と悔しさから泣き崩れる山名選手を責められるはずありません。負けは

しましたが、まさに全員で戦うことができた試合だったと実感しました。

大会後数日が過ぎ、今改めて思うことは一部昇格の壁のなんと厚いことか。正直なところ現在の私達の実力は選手全員が一〇〇%の力を試合の場で発揮して初めて一部に昇格できるかどうかのボーダーラインにいます。ただ、ここ数年少しずつではありますが、確実にその目標に近づいていることが実感できるようになってきました。今後さらに個々のレベルアップを図ると共に常に全国大会の場面を意識して稽古に励み、近い将来必ず日標達成できるように努力していきたいと思っています。

最後になりましたが、剣道連盟の諸先生方をはじめ剣友の皆様方には常日頃から私達県警剣道特練員に対しまして温かいご指導をいただき誠にありがとうございます。今後とも変わらぬご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

徳島県高齢剣友会

活動報告

徳島県高齢剣友会事務局長

高 島 稔 之



徳島県高齢剣友会は、八十四名の会員(会長は遠藤一美德島県剣道連盟会長)で活動を

進めている。

平成十七年度は、主な行事として次の活動を実施した。

(四月) 第二十回徳島県高齢者剣道交流大会

(五月) 第十七回土佐生涯剣友会交流大会参加

(六月) 第二十七回全日本高齢者武道大会

(十月) 第十一回徳島県健康福祉祭剣道交流大会(二〇〇五とくしまねりんピック)開催

(十一月) 第十八回全国健康福祉祭ふく

おか大会(ねんりんピックふく

おか二〇〇五)参加

(毎月) 原則として、第二土曜日の午

後二時から、県立中央武道館他

で定例の稽古会を開催

以上の行事の中で、私の方からは、「第

二十回徳島県高齢剣友会剣道交流大会」、

「第二十七回全日本高齢者武道大会」につ

いて報告することとし、「第十七回土佐生

涯剣友会交流大会」、「第十一回徳島県健康

福祉祭剣道交流大会(二〇〇五とくしまね

んりんピック)」、「第十八回全国健康福祉

祭ふくおか大会(ねんりんピックふくおか

二〇〇五)」他については、他の会員の先

生方から御報告いただくことにしたい。

◎第二十回徳島県高齢者剣道交流大会

平成十七年四月十七日(日)、午前九時

から県立中央武道館で実施。

開会式の後、日本剣道形が、打太刀教士

七段南充美先生、仕太刀教士七段中村稔裕

先生により行われ、続いて、居合の演武が、

無双直伝英信流教士七段吉岡修一先生によ

り披露された。

その後、会員選手二十七名による交流試

合が、団体戦・個人戦の順に展開された。

団体戦は、九チームによりトーナメント

戦が行われた。その結果は次の通りである。

・優勝：徳島A (先中村稔裕 中松村

克隆 内南 充美)

・二位：阿南A (先影山美雄 中有賀

秀敏 内遠藤一美)

・三位：徳島B (先中尾正輝 中端村

武 内西岡金若)

・三位：徳島C (先高島稔之 中東内

勉 内糸田川美千男)

個人戦は、二十九名の選手が年齢別の四

グループに分かれてトーナメント戦を行っ

た。その結果は次の通りである。

〈特組〉

優勝(早川一也)、二位(高田 豊)

三位(糸谷文雄、岡島茂雄)

〈A組〉

優勝(遠藤一美)、二位(南 充美)

三位(濱田逸郎、近藤康次)

〈B組〉

優勝(中山啓男)、二位(有賀秀敏)

三位(東内 勉、滝本博文)

〈C組〉

優勝(中村稔裕)、二位(沢井勝之)

三位(松村克隆、高島稔之)

午後からは、全日本高齢剣友会の来県選

手(橋本保治、高崎健一、西尾茂富、支倉

真人)及び土佐生涯剣友会の来県選手(坂

本誠士、三谷義守、横山大道、篠崎俊雄、

安瀬地福市、山崎利雄、戸田七夫、濱田幸

男、山崎桂子、松岡弘城)との親善交流試

合を実施した。

その結果は、次の通りである。

全日本高齢剣友会——徳島県高齢剣友会

(0) (0) —— 1 (2)

土佐生涯剣友会——徳島県高齢剣友会

(1) (1) —— 4 (4)

全日本高齢剣友会——土佐生涯剣友会

(4) (5) —— 4 (6)

大会後、全日本高齢剣友会会員・土佐生涯

剣友会会員・徳島県高齢剣友会会員による合同

稽古を行った。

本県会員による試合だけでなく、全日本



選手宣誓をする遠藤一美先生

及び土佐の選手との親善交流試合・合同稽古ができる本大会は、大変盛り多い大会である、改めて感じた次第である。

◎第二十七回全日本高齢者武道大会

平成十七年六月六日（月）、午前九時から東京の日本武道館で実施。

この大会は、その大会名の通り、剣道だけでなく銃剣道、なぎなたも含めての武道

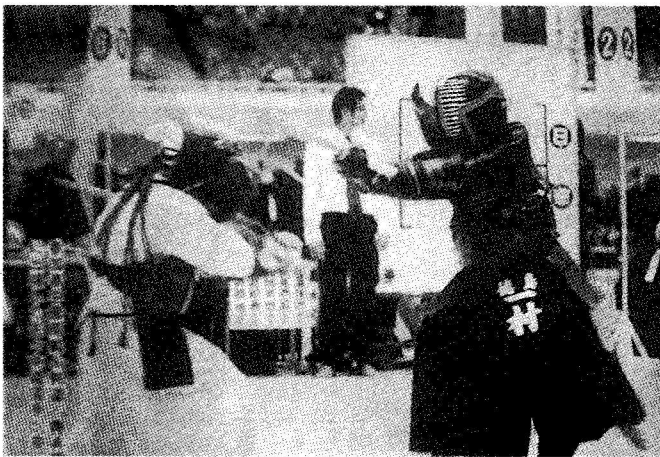
大会である。

開会式では、本県会長の遠藤一美先生が参加者五六四名を代表して大変立派な選手宣誓をされた。

開会式後、日本剣道形・銃剣道形、なぎなた合同演武、居合の各演武が披露され、続いて各種目の試合が同時に展開された。また、昼休みの時間帯には、剣道対銃剣道、剣道対なぎなたの異種試合も行われた。

剣道の試合には、本県から、一村喜佐男、遠藤一美、南充美、近藤康次、中山啓男、西岡金若、有賀秀敏、東内勉、高島稔之の各会員が参加した。

本大会における剣道の試合は、個人戦のみで、年齢別に十試合場に分かれて行われた。昨年までは、全てトーナメント戦で行われていたが、今回からは一回戦は四名（一部三名）による予選リーグで行い、勝ち残った者により決勝トーナメントを行うという方式で展開された。本県会員の先生の中には善戦された方もいたが、入賞しなかった。



一村先生の見事な面（月刊「武道」より）

本県選手の中で、九十三歳（今は九十四歳）の一村喜佐男先生が寿A組（八十五歳以上）で出場され、見事な面を打った場面が、月刊「武道」（二〇〇五年七月号）にも掲載されたことは、特筆すべきことであろう。そして、九十四歳にして、今も稽古をされ、試合に出られる一村先生のお姿は、我々剣道を志す者の鑑であると感動した次第である。

第十七回土佐生涯剣友会 交流大会に参加して

(平成十七年土佐生涯剣友会対)

徳島高齢剣友会定期戦報告

徳島県高齢剣友会

端 村 武



平成十七年五月

十四日、五月晴れ

のもと、高知県立

武道館に現地集合

した徳島の高齢剣

士は、中村稔裕、高島稔之、沢井勝之、端

村武、福井軍二、東内勉、西岡金若、近藤

常次、南充美、糸谷文雄以上十名である。

これを迎える土佐生涯剣友会は、三谷昭

雄、濱田安雄、岡本守雄、濱田幸男、安瀬

地福市、吉野竜太郎、篠崎俊雄、常光彰、

佐々木健、森岡邦弘以上十名の先生方であ

る。

道場の控室で、昼食と湯茶の接待を受け、

休憩した後、防具を装着して道場に入った。

交流試合に入る前に、高知恒例の徳島との立合い(交流試合出場選手以外と徳島の選手)を行い、徳島としては、程よく緊張をほぐした状態で本番の交流試合(定期戦)に臨んだ。

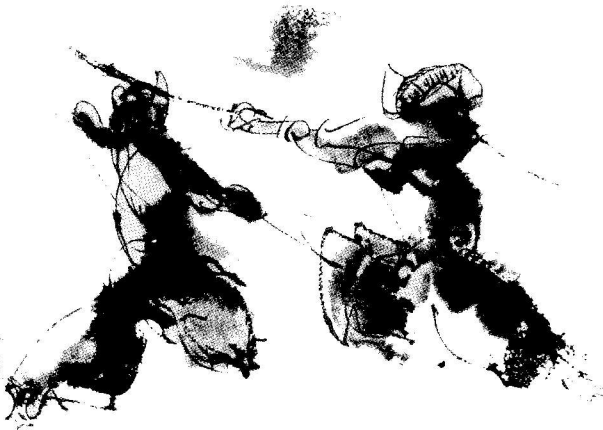
試合結果は、一勝一敗。取得本数も同じ二本であった。昨年も三勝三敗、同本数であった。二年連続全くの引き分け試合となるとは、真の友好なのか？

それとも迫力に欠けているのか、いや、そんなことはない。我が副将の南充美先生が放った鮮烈、豪快、見事な「面」は、会場をどよめかせた。生臭くない絶妙の枯れた技を見せて頂いた。

宿舎の土佐荘での懇親会もカツオのたたきに土佐鶴で和気藹藹、友好を深めて終了した。

余談だが、元気なK先生、M先生は二次会の準備、部屋に入ろうとする我々に向って、「おい、若い衆。行かんか。」の一声で、FとHがお伴仕った次第。剣道は、他のスポーツにはない特長がある。それは、新入生(フレッシュマン)の立場が還暦を迎え

てもあるということ。すなわち、中学一年、高校一年、大学一年、社会人一年、それと高齢剣入会は、高齢一年生という新入生である(六十歳で若い衆はうれしい)「剣道をしていて良かった」とつくづく思う。 (高齢剣万歳)



第十一回徳島県健康福祉祭 剣道交流大会に参加して

高齢剣友会阿南支部

中山 啓 男

私たち高齢剣道家には、年間三、四回の公式の大会が予定されている。今回はその中の一つである表記の大会が中央武道館において実施された。

平成十七年十月十五日その日である。お元気な剣道家にとってはこの日が待ちどおしかったに違いない。私も例に漏れずその内の一人であった。

遠藤会長さん及び来賓のご挨拶の後、端村武選手の力強い宣誓があり、剣道形および居合道の演武と続き、中央武道館一帯が厳肅なムードに包まれ、戦いへの心の準備が整う瞬間でもあった。各支部を代表する団体戦から個人戦へとプログラムが消化されていく中で、戦う者の宿命としてどちらかが消えていく。

だが、戦いが終わればお互いが座礼を交

わし相手の得意技を讃えあう。そして、交剣知愛を体感できるのだ。また、この老人たちを少年の世界に引き戻してくれる最高の幸せを味わう一日でもある。

勝つことは剣士の誰もが共有する絶対の思いではあるが、勝者も敗者も勝敗を超えた何かを味わうことができるのだ。七十、八十、あるいは九十才になられても、このように体が動いてくれる不思議さ、有難さに酔う事も出来るのだ。「生きていて良かった」を実感するのときである。

この日の選手の最高齢者は一村喜佐男先生の九十四才であったが、周りの心配をよそに終始落ち着いた試合運びが披露され、私たちに深い感動と希望を与えてくださった。本県剣道史にとっても特筆に値するものである。

四月には高知生涯剣友会・全国高齢剣友会の皆さんのご指導を頂く事になっている。ためらうことなくご参加ください。

〔徳島県健康福祉祭剣道交流大会結果〕

〔団体戦〕

・優勝：徳島C (先)高島稔之 (中)松村

克隆 (内)南 充美)

・二位：徳島B (先)中尾正輝 (中)端村

武 (内)西岡金若)

・三位：阿南B (先)立岩勝己 (中)有賀

秀敏 (内)遠藤一美)

・三位：麻 植 (先)三木 毅 (中)泊

利治 (内)川井豊吉)

〔個人戦〕

〔特 組〕

優勝 (高田 豊)、二位 (一)村喜佐男)

〔A 組〕

優勝 (中山啓男)、二位 (西岡金若)

〔B 組〕

優勝 (川田武志)、二位 (張西政晴)

〔C 組〕

優勝 (高島稔之)、二位 (中尾正輝)

ねんりんピック福岡大会

高齢剣友会 三木 毅



平成十七年度の
全国健康福祉祭の

剣道交流大会は

第十八回目を数え、

福岡県行橋市で開

催され、本県チームの成績はリーグ戦を勝ち上がり、決勝トーナメントの初戦で優勝した福岡県Aと対戦惜敗し、全国第十六位内に入り、優秀賞をいただきささやかな満足感と会場設営や総合開会式さらには大会運営など感動の残る思い出の一コマを綴る



ことができた。
徳島選手団（写真右より）

中堅 端村 武

大将 有賀秀敏（監督）

次鋒 高島稔之

副将 東内 勉

先鋒 三木 毅

剣道交流大会の場所

大会会場は、福岡県の東部で周防灘に面した行橋市の市民体育館であった。その位置は、北九州市門司区から南方約四十kmの海岸近くに面した田園地帯である。

宿舎

初日の宿舎は二日目の総合開会式を控えていたこともありヤフードームの地続きにあるジャル・リゾート・シーホークホテルであった。二日目からの宿舎は北九州市門司区の関門海峡橋を眼下に見下ろす国民宿舎「めかり山荘」で他県チームとの混成宿泊であった。

「めかり山荘」で宿泊したどの選手も、門司という地名を耳にすれば、宮本武蔵と佐々木小次郎が戦った巖流島を想起す

と思うが、その場所がどこどのような位置しているのかは疎いところであった。

バスに添乗をしてくれた市職員にその所在を尋ねると、宿舎に向かう急勾配の坂道から西方を指差し「あの平たい島です」という。

かすかに見える島影を目に焼き付け、大方の人が「うーん、あれが巖流島か」と思えたのか、もの静かに見据えていたのが印象深い情景であった。

総合開会式

(一) 会場の模様

総合開会式は、福岡市の福岡ドームとかヤフードームと呼ばれているいわゆる野球場である。観覧席は五万とか六万人とかが着席できる円形で、ドーム全体を見事な屋根が覆っている。その巨大さと無柱の建造物に圧倒されながら建築技術の見事さ、すごさを感じずにはいられない。屋根のある会場は雨天の心配は全くいない最高の場所である。

前日泊はドームと地続きの立派なジャ

ル系のホテルであり、とても便利な設営であった。

(一) 開会式の模様

皇族として常陸宮殿下と同妃殿下のご臨席を得ての開会式であった。大会宣言に続き、恒例の歓迎挨拶があり、地元的女子高校生代表とNHKアナウンサーコンビによる司会進行でイベントが進められた。

イベントは幼児・小中学生・高校生・一般によるマ스ゲームや踊りなど趣向を凝らした内容であった。会場の広さに見合う大多数によるイベントは各種目ごとによく稽古がなされており見事な展開であった。

中でも、黒田節、小倉太鼓、山車など地方色の豊かさをアピールしたのが印象的であった。地元の方々の事前準備は相当長期に及んだものと推察し自然のうちに敬意と感謝の念に駆られた。

また、最後の龍の舞いの大型化と照明のうまさも爽やかさを覚えた。

剣道交流大会会場

剣道交流大会会場は前記したとおり、海に面したのかな田園地帯の一角に位置する市民体育館であった。

体育館は多目的仕様であり正面には一段高い舞台となり、剣道試合会場が四面がゆったり配置されていた。

その市民体育館の敷地内には柔道・剣道の武道館が併設され、渡り廊下でつながっている。武道館のうち、柔道場が選手の控え場所となっており、剣道場は素振りとか軽い稽古場として利用できた。

対戦成績

(一) リーグ戦

リーグ戦は、徳島・沖縄・富山であり、初戦は沖縄であった。沖縄戦は二対一で勝利し、第二試合の富山戦でも二対一で勝利したことから決勝トーナメント戦に進むことができた。

(二) 決勝トーナメント戦

決勝トーナメントの初戦は、地元福岡Aチームであった。よく戦ったが二対一、三引き分けとなり、惜しくも敗退した。

(三) 試合総評

リーグ戦の対戦相手の力は共に互角というものであり、徳島の剣風と似通っているも、軽快に動く印象もあった。

決勝トーナメント戦の福岡Aチームの動きは、鋭いものがありしかも、相手の技が終わった後に、一本を打ち込むという剣風を感じた。



地元福岡県は三チームの出場であり、ベスト四の中に三チームが勝ちあがっていた。

この三チームの剣風はよく似通っており、前述のように、相手の技の終わった後に一本を打ち込むというのは、剣道理論のとおりであると感じた。

本県の剣道にも取り入れ、各人が身に付けるべきではないかという認識をもった。

ああ巖流島

巖流島は、もともと「舟島」とか「向島」と呼ばれていたが、一六二二年四月一三日（明治元年から二五六年前）に宮本武蔵玄信と佐々木巖流こと小次郎が試合をした後に「巖流島」と称されるようになったという。

剣術家の両雄が何故試合をするようになったのかという経緯については諸説あるようであるがその探求は置くとして、余りにも有名であり、剣道を志す者にとっては一度はその地に足を運びたいという願望はもっていると想われる。

幸いにして眼下に見た巖流島は極近くであったから渡ることとした。

巖流島の広さは約二畝弱であり、島の高さは約二坪といったものである。

古い昔には舟の形をしていたというが、今は周辺が埋め立てられ円形である。島内は観光用として路面整備がされ、かつて剣の両雄が闘った場所の表示や決闘場

面を観光客に再現して見せる建物も設備されている。

次回開催地

平成十八年度の開催地は静岡県藤枝市である。次期出場選手の先生方の健闘を祈念いたします。



随想

風香る

細川 昭典



昨年の新年宴会の席で、吉田監事さんから松本一城先輩（武専第二十五期）のお話があら

りました。

その時、武専（大日本武徳会武道専門学校の正面（昔の正門）脇の右側の句碑について話が出ました。

吉田先生は、毎年五月に旧武徳殿で行われる京都大会に参加されています。

碑文「風香る左文右武の学舎跡」

について、話が弾み、楽しいひとときを過ごさせていただきました。

私は、武専の最終三十五期の一人として、武道の殿堂「武徳殿」で文武両道の道に励

んでいましたが、終戦により学校は廃校となりました。三十五期生は、やむをえず、他校へ（立命館大学専門部国文専攻科や国学院大学等）夫々の道へ進みました。私は、二年後、徳島大へ入り教員の道を選びました。

武専の沿革ですが、

- 一、武術教員養成所（明治三十八年十月一日～明治四十五年一月二十三日）
- 二、武徳学校（明治四十三年十一月二日～明治四十五年一月二十三日）
- 三、武術専門学校（明治四十五年一月二十三日～大正八年八月一日）

四、武道専門学校

- （大正八年八月一日～昭和二十二年一月三十一日）

五、京都文化専門学校の名称で終了

明治二十八年以来時代と共に変遷はあった

が、一貫して武道の振興に貢献し、その総本山としてのつとめを果たしました。終戦により、大日本武徳会が解体されると共に、武専も廃校となったわけです。さて、正面の句碑の件ですが、神宮正統記の中の「さまざまな道(三)」に記されています。

「世乱れたる時は、武を右にし文を左にす、国治れる時は、文を右にし、武を左にすともいへり。かくの如くさまざまな道を開いて、民の愁をやすめ、各争なからしむ事を本とすべし。」と書かれています。



句碑 昭和38年に鈴鹿登（野風呂）先生の喜寿を祝って建立された。武専にふさわしい句碑の大将であると、先生はご満足であった。

この句碑は、昭和三十八年に文科主任教授であった鈴鹿登（雅号野風呂）先生の喜寿を祝って建立されたものです。先生は、京都大学文学部を卒業されて、大正九年四月から武専で教壇に立たれました。不言実行の先生は「ものあわれを知る左文右武の士」をとのお心から、俳句の指導をされていました。三高、京大に俳句の他流試合の申し込みをし、武専からも、多数参加していました。

当時は、戦時体制下で、学生とはいえ、岡田金属への半日動員、あとの半日が文化・武科の実技でした。鈴鹿先生の句碑の通り、左文右武、否、左武右文の武専教育は苦しい「行」の殿堂でもありました。

教育とは、どのような環境にも耐えるための心身の鍛練の場であるとすれば、この確かな手応えが短い武専生活の中に生きていたと思います、六十年の歳月を経て、しみじみとその事をありがたく思っています。亡くなられた先輩諸士の御冥福をお祈り申し上げます。

昔の名前で出ています（その二）

—— 高齢者の剣道に思う ——

高 田 豊



今、私は高齢剣友会の稽古会に自分の新しい剣道の活路を見い出して、希望に燃えて汗を

な打突中心の稽古を続けてしまいました。しかし、その結果は予想した通り体力の低下は決定的なダメージで毎回惨めな自分を自覚させられることとなりました。

そこで、ようやく前述のように「心の剣道」への転換を実行することにしたのです。

人間年をとれば体力が落ちるのは当然だ。まして病を得れば尚更のこと。体力が落ちれば技に陰りがくる。ならば早目に「心」に重点を置いた剣道に脱皮するにしくはない、と決意しました。即ち、今迄「体

流しています。思えば一年半に及ぶ大患で絶望的に体力が低下して歩行もままならない時期が有り「もう絶対竹刀は握れないだろう」と諦めていたものでした。しかし、一方では方に一つ再び道場に立てるようになったら…という思いも棄てきれず、その時はどうするかと考え続け、その帰結として「体技の剣道」から「心の剣道」に脱皮するしかないだろうと思いついて、その時がやがて来るだろうと予感してしまいました。そして、好運にも十七ヶ月ぶりに再び竹刀を握ることが出来た訳ですが、当初はやはり病前の剣道感覚から抜け出せず相当無理

「技」に置いていた軸足を、「心」に移した訳です。そして、まず手はじめに、「心を動かさない」ことに取り組むことにしました。その訳は今迄の経験から、「たたいてやろう」と自分の心が動いたとき、「邪心」を抱いたときに打たれることを痛感していたからです。能動的であれ受動的であれ、とにかく「たたこう」という邪心を払拭することに集中することとしました。すると剣道は「打たなくてはならないものだ」という呪縛に似た観念から抜け出し、「打たない剣道も在る」と気付いて俄かに肩に入っ

ていた力が抜け、今迄と違った陽光のさす新しい剣の道が拓けてきたように感じています。

堀江先生が生前「打たず、打たれずの剣道を……」とおっしゃっていた意味が今ようやく見えてきたように思います。

「五体不満足」「心技体不一致」の現象は人間さけて通れない摂理として必ずやって来ます。私はこれに対応するのではなく順応してゆこうと思ひ定めました。この考えを実践し、検証するには年令体力のよく似た高齢剣友会の稽古会が最適の場です。

私は今、剣道は「立禅の修行」であり、「汗は心にかくもの」であると心掛け、生涯剣道に夢をかけて歩んでおります。

皆様のご支援をおねがい致します。

静岡よりのメッセーヂ

内田 さくら

(旧姓坪井)

「お久しぶりで
す」

結婚のため平成

十七年三月に新野

高校を退職し、四

月に静岡県磐田市に引っ越しました。名前は「内田さくら」となりました。結婚当初、この名前に違和感がありましたが、最近はずっかり慣れました。

磐田市は「トンボとサッカーのまち」ということで、トンボもよく見たし、駅にはジュビロ磐田の選手の足型が飾られています。ジュビロスタジアムと呼ばれる大きな競技場やジュビロユースの寮もあります。また、温和な気候で徳島という時とあまり変わりません。とにかく、街も人ものんびりしており、とても生活しやすい街です。

平成十七年度は、磐田北高校で保健体育の非常勤講師として勤務し、また剣道部の

指導もさせていただきました。週八時間勤務であったり、部活動は私の都合のよいきだけでよかったです。仕事の面では、あせらず取り組むことができました。けれども、自分の剣道の面では、たいへん忙しく充実した一年でした。

五月 全日本都道府県対抗剣道優勝大会

出場(第二位)

七月 全国家庭婦人剣道大会 出場

八月 東海ブロック大会 出場

九月 全日本東西対抗剣道大会 出場

四月、十一月 全日本剣道連盟女子強化

訓練講習会 参加

その他、県内の大会や昇段審査もありました。ちなみに全国教職員剣道大会予選と全日本女子剣道選手権予選の日には教員採用試験をはじめ個人的な用と重なったため、予選に参加しませんでした。しかし、どちらの大会も応援に行き、とてもいい勉強になりました。

どの大会も大きな大会ばかりで、「本当に私でいいのだろうか」と考えもしましたが、やれるだけのことはやらせていただき

ました。何よりも静岡に来たばかりの私に県の代表として出場させていただいたことがすごくうれしかったです。

剣道に關してですが、静岡に来てまず思ったことは、剣道人口が多いということです。とくに磐田や浜松といった県西部の地域はとても盛んだそうです。インターハイの西部地区予選では、男女ともに四十校近い学校が参加し、県大会への出場権（上位十二チーム）を競います。試合会場も今まで見たことないような大きな体育館であったり、何もかもが「大きい」というのが印象に残っています。

徳島での自身の稽古は九割が生徒との稽古でした。学校の職員会議や出張などで毎日稽古できる環境ではありませんでしたが、新野高校剣道部員と四国大会に行きたいという強い想いで稽古していました。

現在も部活動で生徒達と一緒に稽古するのが主ですが、週に一、二回は一般の稽古会や教員の稽古会に参加しています。子どもだけでなく一般の方（愛好家）の数も多く、年齢の近い方たちとは稽古後に飲みに

行つては剣道談議に花を咲かせています。磐田はとくに若い人のパワーがある地域で、みなさん忙しい仕事の合い間をぬって、積極的・意欲的に稽古に取り組んだり、剣道仲間と語り合ったりする姿には、いつも感心させられています。

部活動は顧問ではないので、本当にマイペースでさせていただいております。徳島でいた時より、かなりおだやかに指導しています。前のように目標に向かって必死に取り組みたいという気持ちもありますが、今は生活の状況が一変してしまったので、何年先になるかわかりませんが、それが落ち着くまでは、先ほどの想いを忘れず、指導者としてやっていくチャンスを持ちたいです。

静岡に来て、両親から電話やメールで徳島のいろいろな情報が速達で届いております。

「今日は〇〇大会に来ています。結果は……でした。」

「〇〇先生が昇段審査に合格されましたよ」「徳島は大雪です」



夫婦で出場した平成17年の都道府県対抗優勝大会で準優勝

今までは誰に言われなくても全部分かっていたことなのですが、今はすごく新鮮だったり驚きだったりしています。徳島のみなさまのがんばりを生で感じれないのがすごくさみしいです。けれども、これからもうずっと徳島の応援をしていくつもりですし、たぶんいろいろな情報は届くと思いますので、これからもみなさまのご活躍を期待してい

ます。

最後に、結婚の報告が遅れてしまい、十分なあいさつもできないまま徳島を出しまい本当に申し訳ございませんでした。また、今回は「徳島の剣道」を通して近況報告をさせていただくことができ、徳島県剣道連盟の先生方には心から感謝しています。

今後は、静岡県の教員採用試験に合格することを一番の目標にしつつ、今まで通り剣道の修練に励みたいのです。そしていつか、自分の学校の生徒とともに徳島遠征ができたらうれしいです。そのときはいろいろご迷惑をおかけすると思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

静岡もたいへんいいところです。ぜひ機会があればいらして下さい。お待ちしております。

内田さくら（旧姓・坪井）さんの戦歴

中学1年	全国中学校総合体育大会	団体	2位
中学2年	全国中学校総合体育大会	団体	優勝
高校1年	インターハイ	団体	ベスト8
高校1年	国体		3位
高校2年	インターハイ	団体	3位
高校3年	インターハイ	団体	3位
大学1年	：全日本女子学生剣道優勝大会		3位
	関東女子学生剣道優勝大会		優勝
	関東女子学生剣道大会		3位
大学2年	：全日本女子学生剣道優勝大会		2位
	関東女子学生剣道優勝大会		2位
	関東女子学生剣道大会		2位
大学3年	：全日本女子学生剣道大会		2位
	関東女子学生剣道優勝大会		優勝
	関東女子学生剣道大会		優勝
大学4年	：全日本女子学生剣道優勝大会		2位
	全日本女子学生剣道大会		2位
	関東女子学生剣道優勝大会		優勝
	全日本女子剣道選手権		ベスト8
H15	新野高校教諭：全国教職員剣道大会（女子個人の部）		優勝
H17.5月	第53回全日本都道府県対抗剣道優勝大会（静岡県代表）		2位
H17.9月	全日本東西対抗剣道大会		出場

自画自賛の武者修行

勝 浦 守



寝ては夢、おきては現、幻の世情
厳しい中で、永生
しようと頑張つて
も、百年生き抜く

人は古来稀である。昔から、人生僅か五十年と言ひ伝えられたが、現在、我が国では、男七十五歳、女八十五歳が平均年齢とされている。

昭和の初期に入るや、世界情勢は戦争の危機を宣伝はじめ、各地で戦火が拡大して来ていた。兵役を体験しない者は非国民のように言われた時代であった。徴兵検査に、私は甲種合格であった。午年（大正七年）生れのこの身、「何の生命が惜しからう」の信念の下、戦争 酣の戦場へと駒を進めたのである。兵に始り、将に終る中に金鶏勲章を目指すは当然の目標であった。但し、無理矢理では不可と自分に言い聞か

せ、八年余の軍籍を全うした。

初年兵時代は渡満し、四十三連隊に配属され、対ソ戦の精銳関東東軍の一員となった。当時、ソ満国境は風雲急を告げており、応急動員下令がなされていた。吉田一郎教官の率ゆる速射砲小隊は間もなく「ノモンハン」に向ひ出発し、我々候補生は特機となつていった。その後、日ソの停戦に依り、平常勤務に戻つた。

そこで、連隊が駐留していた北陵の大学跡に、我が甲幹生は第一期生として集合教育を受ける事になった。精銳と言われるだけあって、指導者も候補生も厳正一体、日々磨かれ、成果も上つていた。

教育終盤に近づいた或る日、奉天の建国大学で剣道大会が行われた。腕に覚えのある者、十数人が参加交流したよき時代であった。これは建国大学に顧問をせられていた辻元連隊長と本部の小柴中佐（教育主任）との取り計らいだったと記憶している。ここまで武者修行が発展して来た裏には、来るべき大戦が見えかくれしていたように思われた。

昭和十六年元日に同期中田氏と連隊長公

舎に奉祝を表敬参上の折、「嫁採りは、もう少し先でお世話する」と言つて下つた。ここにも風雲只事でない印象が強く感ぜられた。然し、何れも好きな剣道修業の追い風となった。我が師匠とライバルの藤川一太郎先生にも隊内でお世話になり放しで何時の日かご恩返しをと思つていたが、惜しくも沖繩戦で戦死された。その後も、戦友、剣友数え切れぬ程戦死され、誠に痛恨の極みである。

戦後既に六十年、我が友を失い、妻に先立たれては慰霊の行事の他なし。

先輩、後輩の霊、安らかに眠り下さい。

合掌

追記

私の剣道修行を通して次の二点を提案したい。

- 一、試合の勝負は剣の理念に基づき一本勝負がよいのではないか。
- 二、日本剣道形を試合化し、理合に基づき、徹底する迄修練してほしい。

称号・段位合格者

剣道七段に合格して

阿南支部 山田 耕司



平成十七年四月
三十日京都審査会
において剣道七段
に合格させて頂い
た事について報告

致します。私にとって七段審査は初挑戦であり全くの無欲で望みました。六段を合格して六年間日々稽古だけには励んでまいりました。少年剣道を指導するかたわら自身自身の稽古をする時間は限られたものになります。一人一人との稽古を大切にしながら頑張りました。その中で教士八段河田先生より次の点に気を付けて稽古に心掛ける様にご指導頂きました。

一、左手・右足・左腰に気をつける
左脇左足を開けない様腰を真っ直ぐに

し左足を折らない様にして構える。

二、溜める

しっかり溜めて最後まで我慢する。

三、打ち切る 捨て切る

中途半端な打ちでなく遠くまで突き抜けて行き一刀一打に掛ける。

以上の事を心掛け稽古に望みました。気持ちの面では気負う事なく無心で審査に向かいました。一人目二人目共に無心で打ち切った面が見事に決まり、審査員の身体が起き上がるのが目に入り合格を確信しました。

幼い時から剣道を始め目標であった七段に合格する事ができ、この上ない喜びです。これも周りの色んな先生方に稽古を付けて頂いたおかげだと心から感謝の気持ち一杯です。合格の報告を常に稽古を付けて頂いた河田先生にした際には喜びと感謝の気持ちで溢れる涙を抑える事ができませんでした。

思い起せば平成四年に大阪府警を退職し、一度は剣道を辞めていましたが、少年剣道の子供達と出会い剣道を再開し、子供達と

共に自分自身も成長して来た様に思います。教えるのではなく教えられていると感じています。子供達並びに保護者の皆様に対しても感謝の気持ちです。しかし、これから本当の修行だと思えます。七段の名に恥じない様、今後稽古に励み、もう一つ目標を持ち、頑張る気持ちです。私も四十歳を過ぎ、人生の大きな節目であるこの昇段を機に、尚一層健康に注意し、この道に精進して行くつもりです。また、人生の中で一人でも多くの先生方との交剣知愛を通して日々教えて頂いた事を生かし、剣の修行に励みたいと思えます。徳島県の先生方始め、剣友の皆様方、今後とも宜しくご指導ご鞭撻賜ります様お願い申し上げます。

次は十年後八段挑戦……

やっといただきました！七段

丹生谷支部 加藤 哲 裕

表題の通り、本当にやっといただきました。何と、挑戦し始めてから十二年目、受審回数は定かに記憶していないが、二十五回前後と思われる。この合格に、一番ほっとしているのは自分のみならず家族、とくに妻であろうか。

まず、なぜこんなに長くかかったのかを自分なりに分析してみた。一つめは、ぐうたらで中途半端な性格行動による稽古に取り組む姿勢の問題。二つめは、審査に臨む姿勢の甘さ。そこそこできているので、そのうち受かると、まるで遊山気分で行ったことも数回ある。三つめは、審査の立ち会いでの集中力の欠如、無心になれないこと。多くの立ち会いを経験したが、そこそこはできて、中途半端であり、自分自身満足できた立ち会いは、今回以外にない。

次に、審査合格までの過程について振り返ってみよう。受審し始めの頃は、十分な

練習もできていないのと思いつながら出かけたが、そこそこの立ち会いが出来ている

と思いつ込み、稽古での鍛錬が足りなかったようだ。回を重ねるうち、先輩後輩はどんな合格していく。なぜだろうと、焦り、

迷いが生じてきて、いよいよ自分の剣道に自信をなくしていった。その上に、腰痛と足のしびれに悩まされるようになり、思うように体が動かなくなった。こんな筈では

と思いつながら稽古を続けたが、いつまでも体は良好な状態ではいてくれないことを認識させられた。そんな状況の中、先輩方に

稽古をお願いしたとき、中途半端に技を出さないでまっすぐ打ち切ること、先に攻めて相手に打たされないようにすること、こだわりや決めつけによってこせこせした剣道にならないようにというアドバイスをいただいた。できるだけ県剣道連盟の強化練習会等に通い、稽古を重ねることで、少しずつ力がついていったように思う。審査

前の三月二七日、宮崎県の甲斐先生を招いての講習会があった。立ち会いの練習をし、甲斐先生から「技はそれでよい、後は機会

だけだ。」とアドバイスをいただいた。そのことも大いに自分の自信になった。

審査当日、受付をすると二一七のBであった。午前中最後のほうである。その日受審した県内の人たちの立ち会いを見せていただいた。なかなか日頃の稽古が生かされた立ち会いが出来ていないと思った。自分だけではない、みんなそうなんだ、今回こそ無心になって自分の力を出し切ろうと思った。すると心が落ち着いてきた。自分の立ち会いは、今までのように慌てることなく十分に力が出せたと思った。合格発表を待った。自分の番号があった。

立ち会い最初の相手Aも合格していた。自分はAに打たれていなかった。そこで思ったのは、打った打たれたでなく、お互いが自分のよいところを出して、合気の剣道をするのが大事だということであった。

最後に、稽古をつけたいただいた多くの先輩、後輩に深く感謝しています。怠け者の自分ですが、できるだけ稽古を重ね、自分自身を高めていきたいと考えています。今後ともご指導よろしく願っています。

無欲・無心と稽古

板野東支部 伊賀雅人



立ち会いコート
に行くとな午前中
の合格者が三名であ
り、周囲の受審者
と「七段は段々

しくなるねえ」との言葉を交わし、その後立ち会いまでの長い待ち時間に色々瞑想しておりました。それは昭和五十六年の大日本居合道大阪八重垣会の大会で、出場はその口神戸の親戚事で参加していなく、帰徳するその足で大阪府立体育館へ出向き、急遽先輩の道具一式を借りて、名札は紙で作りピンで留め出場し、気が付いたら三位となったのです。正に無欲の勝利であり、この時のことを思い出していると何か吹っ切れた気分となり、埼玉県と福岡県の前後の受審者と挨拶が出来たほどでした。
帰宅後、御指導頂いた先生方に感謝しながら審査を振り返っております。特に今

回の合格への道筋となったのは、甲斐清治範士をお迎えしての受審講習会にあったと考えています。範士より「胴が流れている、不十分である」との御指摘を頂きました。

また講習会解散直後には、堀江幸夫範士より「応じ技はあれで良いが、勢いが要る」との御指導を頂きました。私にとって、堀江先生最後の御指導を頂ける機会となり残念でありませんが、御遺訓として頂戴し、切り止めや前に出る意識での練習に取り組みました。

審査当日にサブコートの練習会場で、顔なじみの仲間より「今日はいつもと違うな、強うに打てよんちがうん」との言葉を掛けて貰い、何か打突に変化が表れていたのかとの思いですが、今考えますと、両先生の御言葉や御指導を頂いた結果にあると捉えています。

私の剣道を思い起こせば、多くの先生方に御指導を頂いております。特に印象に残っているのが、三十数年前に竹原常雄範士への掛かり稽古で、範士の面を「ハイどうぞ、ハイどうぞ」と何回も打たせて頂いた事や、

五段の審査後にもお声を掛けて頂き、「面を押し切って行きなさい」と御指導を受けたことが感激的で、私の脳裏に深く刻まれております。

また六段受験の時には、故三木只雄範士が剣道教室にお運びを頂いた時には、必ず掛かり稽古をお願いしました。私の打突は触らせては頂けなく、最後には自分の足がからみつくほどに面を打たせて頂きました。

また、受審について悩んでいたときには、徳農大先輩の勝浦守範士や居合道範士八段の平尾勝美先生に御指導をいただきました。七段の壁について、「打突の機会について考えることと、強い練習について」の御示唆を頂き、大人の練習時にはもちろん子ども相手の練習時にも心掛け、積極的に取り入れました。

この様に多くの範士先生の御指導を頂き、この御示唆が私の剣道の歩みの中には脈々と流れているの思いであり、非常にありがたく感謝申し上げます。

最近の稽古では、県庁の剣友会にお声を掛けて頂き、練習仲間に加えて頂いております。

ます。特に連盟会長の遠藤一美先生に、掛かり稽古時に気迫について激励を頂いたり、また、佐藤勇先生には打ちの強さの御指摘を頂いたことは大変有難く、剣友の方々に共に竹刀を合わせ指導して頂きました事に深く感謝申し上げます。また、地元での稽古では、板野東支部会員の方々、私の所属する北島剣道教室の先生方や後援会の方々、生徒の皆さんには多くの御支援を頂きましたこと、この紙面をお借りしてお礼申し上げます。

私にとっての稽古は先生方から頂戴した御示唆を生かす努力であり、自分との戦いでもありますし、自分を矯める一つの修業の機会であると捉えています。初級から中級へまた上級の道への修練であり、それを超えていく修業者であると考えています。最後に、私のために御指導を頂いたり、稽古や応援を頂いた多くの方々に重ねて感謝を申し上げます、また、若輩な私の今後の精進や、更なる取り組みのスタートに御指導をお願いして、私の報告とさせていただきます。ありがとうございます。 合掌

七段に合格して

警察支部 岩 木 一 功

平成十七年十一月十九日、名古屋市で行われた剣道七段審査会において、三回目の挑戦で合格することが出来ました。

誌面をお借りしまして指導をしてくださいました先生、諸先輩方に御礼申し上げます。

私は、平成十二年に機動隊の剣道特練生を卒業し、それ以後三年間、剣道から離れた生活でしたが、美馬警察署に転勤を期に時間的余裕も出来たことから、大石雅生先生が指導されている穴吹少年剣道教室に稽古をお願いし、また、これを好機とばかり我が子も半強制的に竹刀を握らせ家族と共に再開しました。

こんな経緯で子供と汗を流しながら、この年七段の審査資格も出来たことから私も子供達に「お父さんも頑張っているぞ」というところを見せる意味と、私自身、技量向上を目指す意味合いも含め、七段を受験することにしました。

そして、平成十六年十一月に名古屋で行われた審査に挑戦しましたが、力不足で見事に不合格。

その審査では、審査用にとられた形ばかりを気にしたもので、気持ちも打突も全て中途半端で、充実感が無い情けない結果でした。

これまでは、私自身、警察特練生として「負けたくない」という勝負にこだわったスピード、勝ちを意識した剣道でしたが、審査後、自己の剣道を今一度見つめ直し、一枚脱皮した一つ上の剣道を目指そうと決意して稽古に臨みました。

平成十七年四月から勤務地も変わったことから、子供も徳島少年剣道教室に移り、中央武道館での週二回の稽古、警察学校での連盟の稽古会等積極的に稽古をお願いし、多くの先生方にご指導を頂きました。

その度に先生や先輩から「打ち切れ(捨て切れ)ていないぞ、少し足幅が広い、溜めがない」ある時には、「攻めが足りない、(伝わってこない)、剣先に張りが無い、立会を大事に一本勝負と思って稽古をせよ」

等々、全てなるほど、なるほどと反省を重ねる稽古でした。

これらを克服するために、その日の稽古に課題を決め稽古に臨むのですが、自分では攻めつつ溜めているつもりでも見過ぎて遅れる（体が居着く）等々、悔しい思い。

今度は、気負うと「溜めが甘く、打ち急ぐ。攻めているようで、攻め切れていない。」なんだが薄っぺらい剣道になる。

稽古が終わり、落ち込んでいた私にある先輩が、「今日の稽古は、溜めようと我慢しているのが伝わってきたよ。あれでいい、先輩方もみんな悩んで壁に当たり、それを乗り越えてきているから、お前ももう少しだ」等々、私自身納得がいかず落ち込む気持ちの中で先輩の励ましの言葉に奮起でき、大変ありがたいアドバイスの数々に今改めて感謝しています。

最終的には、名古屋の審査で、充実した気持ちで、「さあこい、いくぞ、いくぞ」と先を取って、相手を攻めてそれでいて打たず、相手が苦しくなって打ってくるまで

詰めて、ここぞというところで打ち切る（スパン！とすべてを掛ける）この「打」

この技が審査に出せたように思います。

今回、七段を頂いたといいましても、まだまだ力の無さを感じているところであり、この合格は一つの節目、また私自身の剣道人生の一通過点としてこれからますます精進していく所存でありますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしく願います。ありがとうございました。



六段に合格して

小松島支部 園 田 慎 吾



平成十七年五月、
京都審査会におい
て、六段に合格す
ることができまし
た。この場をお借

りしまして、日頃からご指導いただいております。諸先生方に心より御礼申し上げます。
小学生の頃から剣道を始め、中学・高校と剣の道を志し、そして高校二年より福多雅英先生から上段の手ほどきを受けました。しかし、大学入学と同時に上段禁止令が出されました。これは当初、私が中学校の教員を目指していたこともあり、指導者自身が中段を出来なくては、指導ができないという理由からでした。それから、中段を中心とした稽古が再び始まったわけですが、その頃の私の中段は、高校一年生レベルで止まっていたので、一日の稽古メニューを消化するのが精一杯という感じでした。

これでは、同級生との差が開く一方だと思
い、何か『得意』をつくろうと考えました。
そこで取り組んだことは、『面技を中心と
した正しい剣道』でした。これは、現在の
稽古でも心掛けていることですが、特に入
学から二年間は、剣道の『基本の基本』を
学んだように思います。そして、今回の六
段昇段も、この時代の基礎があったからだ
と思っております。

現在は、日亜化学工業に勤務し、会社剣
道部での稽古を中心におこなっております
が、勤務の都合上、納得のいく稽古はでき
ていないのが実情です。このような環境の
中で、初めて臨んだ六段審査は平成十六年
八月の福岡審査会でした。ここでは、明ら
かに稽古不足という一面が露呈してしまい、
自分の剣道に対する取り組みの甘さを痛感
する結果となりました。その後は、少ない
機会のなかでも、今まで以上に一本に集中
して、稽古に取り組むように心掛けました。
また、日常生活においても剣道を意識した
生活を送るよう、自分なりに工夫をしてい
きました。

そして、今回の京都審査会では、普段の
自分ではないほど落ちていて、二度の立会
いがありました。審査が始まり、私がいつ
になく充実して攻め入ると、相手が剣先を
外して下がったので、迷わず面に飛びまし
た。相手も合わせようと面に来ましたが、
私の面が決まりました。二人目も同様の面
があり、審査終了後は心地よい感触が残っ
ていました。合格発表では、共に審査に臨
んでいた福多博史先輩と、互いに合格の喜
びを味わうことが出来ました。

今回、六段には合格しましたが、まだま
だ五段に近い六段だと思っておりますので、
初心を忘れず気を引き締め、今後は七段に
近い六段となるよう、さらに努力と精進を
重ねていきたいと思っております。また、
これからも実業団剣道を通して、剣道に取
り組んで行くことになりませんが、試合での
勝ちを意識すると共に、正しい剣道を身に
つけるため、『生活即剣道・剣道即生活』
を心掛けていきたいと思っております。
今後とも変わらぬご指導を賜りますよう、
お願い申し上げます。

剣道六段に合格して

丹生谷支部 福多博史

五月の京都会場での審査会において六段に合格することができました。剣道連盟の稽古会や阿南工業高校での稽古会、勤務校である阿南第二中学校の剣道部員との稽古などさまざまな機会を通して、たくさんの先生・先輩方、そして生徒たちからご指導をいただきました。この場をお借りしましてお礼申し上げます。

三、四年前より同級生が六段にチャレンジし、合格するようになってきました。五段合格から七年間、あまり昇段審査を意識していませんでしたが、同級生達のがんばりに刺激を受け六段審査にチャレンジすることを決めました。何とかなるだろうと、あまり準備もせずに臨んだ一回目福岡での審査会、審査が近づくと、立ち会いに對して迷いが出てきました。心が定まらなまま審査が終了。約一分間にすべてを出すことの難しさを感じました。普段から目

的意識を持って稽古に臨むことの大切さを再認識しました。この後、二回目・三回目と同じような状況が続きました。ただ内容的には徐々によくなってきたように思います。打たれると言うことはなかったように思います。私自身も打ち切ったという技はあまりありませんでした。審査を意識しながらの稽古の中で、先をかけ、技を打ち切ることを心掛けました。

そして、四回目となる京都での審査会。審査会終了後、全国都道府県剣道大会に出場するということもあり、前回に比べ、稽古もできていました。何とか大会のメンバーの人たちに良い報告ができ、試合になればと感じました。立ち会いについては、構えが崩れないようにすること、打ち切ることを意識しておこないました。緊張し、落ち着いて立ち会うことができたとは思いますが、技を打ち切ることができたように思います。

何回審査にきても合格発表は良いものはありません。ドキドキしながら発表を待ちました。「実技審査合格」。うれしいとい

うよりもホッとしました。そして形審査へ。一回やり直しましたが、実技よりも緊張しました。やっぱり普段から形の稽古もしておかないといけません。

今まで不合格の時、事務局の長谷川さんに連絡をすると、いつも励ましてもらっていました。(ありがとうございます。)今回、合格の報告ができることをうれしく思いました。

最後になりましたが、まだまだ私自身修行不足で至らぬところばかりではあります。が、「これからが六段の稽古」と、今まで以上に剣道に精進していきたいと思えます。今後ともご指導よろしく願います。

六段に合格して

阿南支部 平 正 明

平成十七年四月二十九日、京都における六段審査会において、おかげさまで合格することができました。

これもひとえに徳島県剣道連盟会長、遠藤先生を始め連盟の各先生方、阿南支部長、北條先生、また支部の先生方のご指導のおかげであると、深く感謝しております。

平成十年六段の受審資格を得て七年、十回目の受審でした、この間、羽ノ浦朝稽古会、濱田先生、中山先生を始め先生方は、げますと、ご指導を得、又、受審前には須藤先生には朝稽古とは別に稽古日をもうけ、打ち込みを基本とした二人稽古をさせていただけました、本当にありがとうございます。

私が剣道に出会ったのは海上自衛隊に入隊したとき、新隊員教育の中に武道があり、剣道を選んだのが始まりです、十九歳で初めて竹刀を握りました。

六ヶ月の教育期間の中で初段をいただきましたが、艦船勤務等の部隊配属の関係から、剣道を続けていく事ができず、次第に剣道から離れていきました、再会する機会を得たのは鹿児島鹿屋基地の勤務となった時で、基地に剣道部があることを知り、約十年の空白がありましたが入部することにし、稽古を再会しました。

徳島県には昭和六十二年三月に沖縄から転勤となり、羽ノ浦町で生活を始め、剣道は羽ノ浦少年剣道教室で子供二人と共にお世話になることとなりました。

当時私は昇段への意欲はまったくなく、



子供と共によい汗がかければ良いとの考えでありましたが、故、尾崎行雄先生、濱田逸雄先生から、子供達に剣道を指導をし、又続けていくのであれば、自分も目標と向上心を持つ必要があるとのお言葉をいただき、昇段審査に挑戦することにしました。

昭和六十三年から三段、四段、五段には平成五年九月に二回目の審査で合格と私としては、できすぎの昇段でした。

平成十年六段の受験資格を得、六段への挑戦が始まりました。審査の度に今回こそはとの思いで立ち会いを願いましたが、技の問題、心の問題と多くの未熟さを発露し、合格するにはほど遠い内容であったと思います。

今回の受験では、今までの反省から、始めから止めの合図があるまで先の気持ちをなくさない、無駄打ちをしない、お相手の剣風に惑わされないとの気持ちで挑みました。一人目のお相手には、初太刀の面の後も気を緩める事なく三本目の面まで、お二人目お相手には面を引き出したかたちでの面返し胴で初太刀をその後も同じ様な攻め

で小手と面返し胴で立ち会いを終わりました。

合格発表に自分の番号のあるのを見て信じられない思いと感激、又長かったなーとの思いで一杯でした。

これで、一つの挑戦は終わりましたが、すぐに次の挑戦が始まります。この感激を忘れることなく今後も精進を重ねていく所存です。

羽ノ浦少年剣道教室子供達、また多くの先生方そして家族の応援に支えられてここまでこられたことに感謝を申し上げますと共に今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくおねがいを申し上げます。

六段に昇段して

機動隊 山 室 雅 幹



これまでに御指導して頂いた諸先生方、諸先輩方の御陰で六段に合格させて頂くことができました。本当に、ありがとうございました。

六段審査に向け、心掛けたことは、特別な技やまた、審査だからといって、こうしなければならぬといったようなことを意識せず、これまでに稽古してきた内容をこの場で充分に発揮してやろうということを中心に臨みました。

そのためには、単純なようですが普段から心掛けている、大きな声をだして「氣」をいれることに集中して審査に臨みました。大きな声をだすことで、相手を圧倒することができたと感じましたし、集中することもできました。また、そうすることで自然

と気持ちに余裕ができ、限られた時間の中で「主導権を握った状態」で自分の剣道ができたように思います。

この「主導権」については、普段から自分なりにイメージし、また、先生方からの御指導をもとに稽古を行っています。相手の動きに合わせた技ばかりになると、後手に回ってしまい最後まで相手のペースで終わってしまいます。したがって、主導権を握る方法として、出頭の技を中心に組み立てることを意識しています。その結果、審査では思い通りに出頭の技ができ、相手の動きに対応して他の技も自然とできたように感じられました。

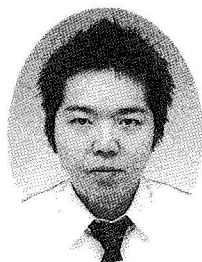
また、先生方から、「自分が今までやってきた剣道をこの限られた時間内で表現しなさい。」というアドバイスから、自分が稽古してきたことに自信を持ち、「堂々とするしかない」と自分に言い聞かせ挑んだことが、合格に繋がった最大の要因ではないでしょうか。

最後に今回の六段昇段をきっかけに、今ま

で以上に稽古に精進し、剣道についての更なる勉強に努め、剣道人生のステップアップに繋げていきたいと考えておりますので、これからも御指導、御鞭撻のほど宜しくお願い致します。

六段に合格して

徳島支部 山本 泰史



八月二十八日に高松市で行われた六段審査会に合格することができました。

これもひとえに大澤孝彰先生をはじめ、多くの先生方のご指導のおかげであると思っております。この度寄稿する機会をいただきましたので、合格までの自分の心情について、少し述べたいと思います。

二〇〇四年十一月 受審資格ができるが、今の自分の剣道では、合格は無理であると断念。

二〇〇五年一月 妻の妊娠がわかり、二〇〇五年を記念の年にしたいと六段受審を決意。

二〇〇五年二月五月 三十歳の節目に久しぶりに都道府県予選に出場し、優勝。都

道府県大会へ出場することで六段への自信がほんの少し、湧き出る。

二〇〇五年六月、七月 大学三年時に断裂したアキレス腱に経験したことのない痛みが走り、思い切って練習を一ヶ月休む。仕事面で非常に充実していたので、気持ちの切りかえは早かった。

二〇〇五年八月 香川県の北條先生に稽古をお願いする。『これでは、六段受審以前の問題』と一蹴。なぜですかと問うたところ、対峙した時、刃筋が少し斜めになっていると指摘あり。改めて、六段審査の厳しさを目の当たりにする。

審査前日 同期生(大学時代)が大阪から受審するというので、母校の城ノ内高校で汗を流し、高松入り。学生時代のエピソード話に花を咲かせ、リラックスした雰囲気而就寝。

審査当日 いつもより、寝起きがいい。快便。会場入りしたが、嫌な緊張感はなし。着装・刃筋・間合い……いろいろなことが頭に浮かぶ。いよいよ出番。大澤先生にかかる気持ちで、『先をとり、真っ直ぐの面



一本だけ決める』。満足いく出端面が二本合格。世界した祖父・父の顔が浮かぶ。やったわ。おやじ見たか。

悶々と悩んでいた時期もあったが、小学校三年生からお世話になっている大澤孝彰先生の教えどおりの立会いをすることができ、恩返しがほんの少しできたことが何よりうれしかった。会社員だから練習する時間がないというのは言い訳にしなければならない。ただ、体調は自分でしかわからない。思い切って休み、体力を温存しリフレッシュした気持ちで初心に返り、素直に指摘事項を解決していったことが今回の合格につながったと思う。

七段受審資格まで六年間の修行。多くの先生・先輩方のうしろ姿を追いかけてながら、謙虚な気持ちで、正しい剣道を心がけて修煉していきたいと思います。

今後ともご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

剣道六段に合格して

鳴門支部 平野悦子



我が子三人の出生・子育てによる十年のブランクを経て、稽古を再開したのは平成十年の夏でした。

翌十一年二月には五段に挑戦し合格して以来、私の稽古環境は週二回（水・土）の連盟強化稽古会と週二回（火・木）の少年剣道教室（鳴門市光武館）での稽古、更には月に一度の女子稽古会（第一日曜日／十八時／中央武道館）と少年強化稽古会であり、日頃から連盟のたくさんの先生方にご指導をいただき、また女子部の皆さんと共に充実した汗を流しています。

我が家は家族五人すべてが剣道をしていますので、夫と三人の子供を中心に稽古日程がどんどん決まっていく中で、私が参加できる稽古にはとにかく付いていき稽古さ

せてもらっているのが現状です。楽しく充実した日々を稽古で得たいという思いで再開したはずでしたが、最近では国体出場と六段合格の大きな課題を頂いており、厳しく充実（？）した日々を重ねております。

特に今年は私の出身地でもある岡山（津山）での国体開催でしたので、何とかして「親娘三人で国体本大会出場」という大きな夢を掲げておりました。結果として出場できたのは父娘二人だけで、私は四国ブロック予選敗退となりました。今回は何よりも稽古を優先し十分に力を注いだだけに、この負けはさすがにとことん落ち込んでしまいました。

今年五月、京都六段審査。受験資格ができて一年が過ぎようとしていたので、経験と受け止めて初めての全国審査に臨みました。「誰も一発とは言わんよ。」という夫の励まし（？）も受けていましたし、初体験が幸いしてか、欲もなく緊張もせずといった感じで男性二名と立ち合いができました。（自分なりに、まあまあかなという甘い感触を持っていたのですが……。）

見ていた夫の評価は、

「一人目はうまく捌いたけど、二人目の人には手の内を見られた。向こうもそれなりに対応してくるから、それを打つには力をつけなダメ。それと先と後をうまく使い分ける工夫が大事。」と……。結果は不合格でした。

雰囲気は何とかわかりましたので、後は実力をつけるだけです。とはいえ、これがなかなか簡単であれば苦労しません。幸運にも今年は八月の国体ブロック大会の一週間後に高松市で六段審査がありましたので、遠征・強化を重ねながら三ヶ月間とにかく頑張ろうと二度目の受験を決心していました。

最初は、審査の反省から『打ちを強く』『先と後の技を使い分ける』という二点に絞って稽古をしていました。しかし、大会が近づくにつれ内容より勝ち負けを優先してしまい課題どころではありません。内容と勝負の板挟みで、何をどうすればいいのか苦しい日々が続きました。

試合と審査。最初は試合用とか審査用と

か、色々考え分けて考えたり焦ったりしていましたが、またもや夫の一言。

「試合も審査も同じ。実力がなければ勝てないし受からない。運良く、いいところ打って勝とう、受かろうと思うから焦るし、苦しくなる……。」

私自身の中では受験は年一回の京都だけと決めていましたが、こうなればこのチャンスは何とか生かしたいものです。しかしながら、ここへ来て一週間前にあったブロック敗退のショックは思っていた以上に大きく、「どうせ審査も受かるわけではない……。」と心の奥底で投げやりになっている自分だったのでした。

ここでまたもや、夫の喝が……。

土壇場になってようやくふっきれたことで、何も求めず考えず、ただすぐ集中することができ、「勝負してやる」という試合の気持ちに乗っかっていったのではないかと思います。

立ち合い後、観客席を見上げると夫の“OKサイン”が出ていて、本当に試合に勝った時の充実した気分になったのが忘れ

られません。

「気が乗っていて、機会に応じた技が無理なく出てよかった。」という評価でした。

この間、いろいろとご指導していただいた連盟の各先生方、また共に悩み、共に夢を抱き続けている女子部の皆さんに心から感謝申し上げます。今後ともよろしくお願ひいたします。ありがとうございました。



剣道六段に合格して

森本 敦子



止まっていた私の剣道。学生時代に四段をいただき卒業。それから一、二年間はたま

に道場で汗を流すこともありましたが、さして目標もなく、そんな中途半端な気持ちで剣道に接していたので、いつのまにか道場にも遠のき、仕事、結婚、出産、育児と剣道のことを考えることもなく日々を送り、再び竹刀を握ることはないと思っていました。

そんな私が、長男が小学一年生になって剣道をするようになると、子供と共に再び道場通いをするように。それから吉野少年剣道教室、板野西支部、県連の警察学校での稽古会、錬成会等に参加させていただくようになりました。

特に再開してからは、板野西支部の高田

豊先生、高田亮先生はじめ支部の各先生方には、親子共々熱心にご指導していただき、そして何度となく五段受審を勧めていただきました。私自身は長い空白もあり、格別昇段へのこだわりもなく、まだまだという気持ちでしたが、いろいろな講習会にも参加し、自分自身を試すにもと思い受審しました。

その五段審査終了後、会場で高田先生が、「最後の胴はよかったよ。」「最後にいい一本が打てましたね。」と、言っていた。たお言葉が、学生時代に三橋秀三先生に稽古をつけていただいた時に、稽古終了間際に打たせていただいた胴に先生が、「最後にいい一本打たれました。あの胴は良かったですよ。」と講評していただいたお言葉とオーバーラップして、はっと記憶の中から蘇り、空白期間を飛び越えて学生時代ピンと一本の線につながった様な気持ちになりました。

それからは、また剣道に対しての取り組み方も少し変わって、以前「徳島の剣道」にも書かせていただきましたが、剣道を再

開した一時期は期待に応えたい、良い成績を残したいと思う時期もありました。が、五段を取得してからは、正しい剣道、基本に忠実な剣道をと、より心がけるようになりました。

そしてまた、六段受審時期を得たのですが、なかなか受審の決心がつかずにいた私に、また高田亮先生や他の先生方が再々勧めてください、平成十七年八月二十八日高松での審査会ということもあって受審しました。その時も前後の方々との立ち会いは、意識していたのではないのですが、終わってみれば一本ずつ胴を打っていました。それが審査にどのように評価されたのかは私にはわかりませんが、一本につながる技を打ちきれることができました。

こうして私が六段を取得できましたのも、私のような者をいつも気にかけてくださる高田豊先生、高田亮先生との出会い、板野西支部、徳島県剣道連盟の先生方との出会いとあたたかいご指導、そして私の剣道の基礎をご指導してくださった三橋秀三先生、近藤利雄先生、林邦夫先生のおかげであり、

感謝の気持ちでいっぱいです。

これからも、いままで以上に色々な方々との出会い、一期一会を大切にしていきたいと思えます。

平成十六年には河田先生、平成十七年には米倉先生が八段に合格され、本当に徳島県剣道界にとっては喜ばしいことでした。

昨年から女子部の稽古会が、毎月第一日曜夜六時から中央武道館で行われており、たくさんの方が参加されているようです。

既婚者には時間の都合、やりくりが困難な時もあるかと（自分がそうなので）おもいますが、いつまでも続けてほしいと思います。そして、六段・七段と、剣道家が目指す目標に向かって進んでいくって欲しいと思います。私も皆さんのお力をお借りしたい時があるだろうし、またお力になれますことがあればと。その時にはどうぞよろしくお願ひいたします。ありがとうございます。

皆様に感謝して。

合掌

六段受審への変革

麻植支部 三木 毅



平成十五年三月に警察を退職して剣道に携わる機会が甦ってきた。それまでは機会を見つけて少年剣道教室に顔を出すという期間がとて長かった。そのことが剣道を継続してきた基になっていたことにもなる。

退職後これまでの二年半、大人としての剣道の稽古に精を出し、平成十七年五月に京都で六段を受審したが不合格であった。この不合格を大きな転機ととらえて、よく反省をしてみた。

年を重ねると自己満足的な解釈が根底に存在している上に、若き頃の「当てる剣道」「速さの剣道」「試合調の剣道」が身から離れておらず、加えて打突後の余勢がなくなっていること、更には、自分の守りの気持が強まっていることなど正当剣道の基本的

なことが歪んでいるのではないかと気付くこととなった。

じっくり反省した上の結論は「剣道を変えよう」という切り替えであった。そしてその後の稽古では秘かにこれに邁進した。

特に、打つべき時の左足の状態を「これでよいか、これでよいか」と意識し、左手の具合、右手の具合は竹刀を振るたびに「よかった」「悪かった」の判断を繰り返すようにした。

十一月十三日ねりんピック福岡大会の選手として参加したことは、幸いにもとても大きなものを得ることができた。

初戦は負けをした試合となり、たまたまその初戦の立ち会いをしていた審判主任の先生が懇意な先生であったことから、試合直後に、先生から「エンジンのかかりが遅かったですよ」との評価をいただいた。自分自身は血気にはやり充実していたつもりでしたが、横から見ると、自分の気迫が十分外形に表われていなかったという評価であった。

—これではいかん、次回からは早く充実

した気迫造りに努めなければ」と自分に言い聞かせ、相手に対して早く充実した気迫を造ること、充実した気迫で竹刀を振ること、積んできた稽古の集約を出すことを頭から外さず試合に臨み、またこの気分を昇段審査にも生かすことにした。

昇段審査の、一人目の相手には、初太刀の技は確実な飛び込み面を打つことができ、二人目の相手には、充実した気分で攻めると抜き胴を打ってきたのでこれを確実に受け止め、面返しを打つことができた。

二人との立ち会いを終え、鮮明に記憶しているこれらの打突は、満足できる技であったという気分であり、後刻の発表では合格という結果に結びつくこととなった。

この二年半、剣道連盟の諸先生、高齢者剣友会の諸先生、藍住道場の諸先生、麻植支部の諸先生、市場道場の諸先生など多くの先生方のご指導に心から感謝をしており、紙面をお借りして心からお礼を申し上げます。

平成十七年は佳き年であったという記憶を踏まえて、更なる前進をしようと決意を

新たにしたところです。



平成十七年度

称号・段位合格者一覽

― 剣道 ―

【錬士】

【教士】

五月六日

岡田 豊

五月六日

玉田 晋作

十一月三十日

富田 圭介

十一月三十日

影山 美雄

山田 浩司

河野 公雄

大野 祐吉

後藤 徳朝勝

久次米 繁興

【八段】

十一月二十八日

米倉 滋

【七段】

四月三十日

山田 耕司

加藤 哲裕

八月二十七日

伊賀 雅人

十一月十九日

岩木 一功

十二月二十九日

東 徳美

【六段】

四月二十九日

園田 慎吾

福多 博史

平 正明

五月十五日

山室 雅幹

八月二十八日

山本 泰史

平野 悦子

森本 敦子

【五段】

五月二十九日

佐藤 智

近藤 正章

玉田 真理

九月十八日

岩朝 洋平

出口 正春

岩見 さゆり

十一月二十七日

河村 知志

奥田 博志

稻生 哲也

平成十八年

二月十九日

岡崎 洋明

大内 敏行

堀川 修

【四段】

五月二十九日

桑内 政彦

山田 泰弘

九月十八日

佐伯 隆仁

割石 裕之

十一月二十七日

横山 雄太

仁木 祐昭

平成十八年

二月十九日

戸川 和樹

今井 剛

【三段】

五月二十九日

中山圭一
山内陽典
古波千秋

九月十八日

櫻木雄一郎
森本龍毅
松本和起
神元育巳
米田正人
佐藤一貴
伊藤優利
乃一貢
久保雄二
濱野薫
山田愛
村瀬聡美
近藤愛
石本裕賀

十一月二十七日

片山将志
加重裕之
森達裕

西岡佳祐

米倉裕作
平山大
玉山起大
横手隆介
岡野飛斗史
湯村裕喬
吉田和也
岸貴之
近藤徹
石井孝二
高橋洋行
松原佑介
近藤武史
池田佳南
前川亜希子

長地千景

坂本鮎美
井上舞子
藤本恵美子
平成十八年
二月十九日

轟昌訓

山下功
三木貴広
兼高俊介
石丸浩久
長尾真一
上野淳也
長江智恵美
田尾望

【二段】

五月二十九日

山川則幸
田村嘉崇
津山拓也
喜多隆文
深田良平
福井一馬

岡田大樹

井上貴仁
株木拓也
鈴木健太郎
武市修蔵
正村良太
前川淳史
松本凜太郎
岩永連
小西衛
助田直紀
湯浅彰義
坂東裕紀
一楽崇好

高島健

大黒将幸
佐藤裕
中本恵理矢
土山康平
櫻木鉄也
河野稔之
西山拓志
前川航

平井悠基

三木亮二
坂本真太郎
峯田博生
森出大介
江口直希
福川敬太
福永啓人
瀬尾圭佑
森下知矢
眞鍋崇
内藤隆仁
井内新
谷川修平

西田奈央

細川美波
井上奈津実
黒川ひとみ
磯部つかさ
中川知香
原井美佳
村田奈津季

高岡晶美

菅野和美
菅野和美
永浦瞳
石井やよい
鶴岡由貴
松尾和美
小西陽子
九月十八日
大垣俊喜
中島裕典
中島健太
檜原健太
中島悠人

大森駿斗

森下竜太
大塚亮太郎
柳谷俊樹
北浦良介
住吉隼斗
平井拓也
影山智也
中山大地

高島永憲

辺見晃
谷脇竜弥
安田明博
上田大記
小森洋和
佐方亮介
台越潤平
林良憲
濱本秀一
佐野大明
日野浦陽二
沼田昌哉
木下功

延清正博 木内悠太 藤本健登 小笠原祐輝 齋藤翼 十一月二十七日 泉智子 近藤葉子 田中千晶 清楽真理子 福永有希 藤本彩 小森唯 今川和美 横川由佳 延谷美帆 壺内美沙希 芳田裕美子 大西由起 中川瑞稀 大西梓 田内照男

坂口仁規 白川亮太 矢野翔太 牧野谷真弘 竹澤一樹 宇井涉 福田征大 尾崎勇大 平成十八年 二月十九日 酒井奈々 滝下聡子 高橋真理 奥村仁視 西澤真世 川田沙織 向原敬夫 蛇目英樹 莊田素久 岸賢一 東真也 関口正二郎

藤井美樹 森本花菜子 森博美 中原恵麻

山ノ井拓也 大泉京志郎 山口智弘 谷口真一 坂東剛 米澤宏記 小山和也 坂本光 夙鍋一輝 真鍋一輝 宮浦昌平 家長崇裕 小澤裕貴 平野将司 山下基 三橋遼太 中野誠 神余梢太 臼木郁登 奥田浩二 四月二十九日

中野高志 佐藤勝哉 武市一樹 松本真生 奥村誠人 国貞貴広 石川喜基 近藤平 高島啓介 安宅誠 藤本稜 山田溪太 山田泰平 久米利典 河野大輝 小西貴大 佐々木健人 吉田拓司 牧野谷啓介 住友新 立川拓也 坂本圭次 長崎恭平

井上敬介 辺見亮太 山田翔太 小林智 竹澤諒 小柏卓也 松林和宏 永浜圭一郎 新矢佳久 青木一晃 岡田啓太 岩川洋志 三馬彰純 森本裕紀 藤田展広 定作康平 小倉大典 勝野祥史 樋本拓馬 植田直人 津田利明 河野卓也 川邊祐樹

湯浅萌 香川千夏 柳瀬美希 福田あい子 美馬香苗 西山史織 生田圭 湊友里 大久保紫陽 加重汐理 佐野未幸 櫻木舞 山邨恵美 岡本真実子 山西彩輝 佐藤美優 菊岡星花 喜多あゆみ 若江美香子 竹内美貴 岩原里紗 高瀬雅大 永瀬敏彦

【初段】

赤川優子	濱沙織	小笠原恵	喜多ゆなみ	湯浅桂	森本ひろか	寺西珠里	仁居真琴	安田淳美	仁木悠美	新田彩乃	森本志穂	森長美都里	横手菜結子	白石けい子	井本梨奈	児玉睦	末長佳奈	篠原ひろみ	近藤陽香	藤本雅代	井東愛実	小出朋代
井筒智宏	佐條大輔	湯浅翔平	鈴木智也	永浜拓也	原悠介	芝生直幸	曾根健貴	淀谷瑞木	山本健太	長瀬一人	岡田紘平	杉崎聡	多田憲市	笠井貴弘	赤川貴斗	藤井公典	原田知典	六月二十六日	衛藤里沙	西野奈保	黒田佳代	
羽田晋	ライト武頼閣	野村和樹	野上健太	大場健康	下鳥健吾	佐々木真人	大山博史	中野武志	原田貴博	美馬秀一郎	川真田貴史	堀川達晶	村山知寛	吉田健太	酒卷依暉	宇山公暁	大西友也	岸本宗紀	高橋将也	藤原大地	松本卓也	庄司一平
杉山舞	川上依子	平井千晶	中川美佳	正木美菜子	西川友理	酒卷潤那	山村由梨	大塚奈津美	入江彩加	市瀬祐季奈	今川知美	高田真帆	久保満男	重田松弘	川原克仁	竹谷真人	山下達彦	スターマリン	佐藤城介	新開崇涼	阿部知裕	前田道信
藤井秀敏	浅尾純平	田村佳弘	稲井伸二	仁木正志	岡田佑介	板東佑樹	長瀬豪佑	高尾哲也	稲木大輔	高橋知宏	安原大樹	笹辺真史	桑原大樹	笠井一也	延本大輝	陶久清隆	熊野裕太	小倉歩	矢野優貴	北岡泰人	河村俊平	八月二十八日
田中裕貴	本田稜	正地裕貴	十月三十日	佐藤美香	板東由香梨	地本尚美	南山愛	山口由記子	園木美里	片山陽香	東根梓	松野秀昭	上坂和憲	森本和憲	辻彩子	藤本奈緒	森友香	坂東沙樹	影山愛子	山本瑞穂	高橋光市郎	小泉和寛
吉岡真衣	打樋佳奈	上田芽依	竹内奈々恵	藤村哲央	重井莊八	西岡駿	森正志	河野勇二	尾方俊彦	高田慎吾	岩田悠希	松野秀昭	上坂和憲	澤本光太郎	森智秋	西森健博	杉本光	清水賢太	岩佐貴仁	蒲生悠太	野口泰宏	

田中 小西 大紀
浦岡 綾音
福島 果歩
藤井 萌如
鈴木 敦子
西本 恵理
奥村 美由紀

平成十八年

一月二十二日

中井 博基
酒卷 奈暉
佐藤 佑太
久米 智士
小林 俊介
三輪 高大
梯 哲也
鈴木 雄士
大倉 靖史
北島 義教
小西 貴大
ヴァラモフ
セルゲイ
吉本 絵理子
桑原 麻美
郡 玲央奈
田中 晶子
西本 留理

― 居合道 ―

【五段】

十一月十二日

戸村 淳一

【四段】

十一月十二日

安友 健雄

【三段】

五月二十二日

中西 敏治

十一月十二日

寒川 清

林 由美

【二段】

五月二十二日

鳩成 亮介

河野 勇二

関口 泰司

吉原 均

村井 恒治

勝野 晴孝

徳山 豊

藤田 由香

十一月十二日

多田 照夫

松尾 みゆき

【初段】

五月二十二日

三木 恭子

松原 美和

十一月十二日

近藤 智公

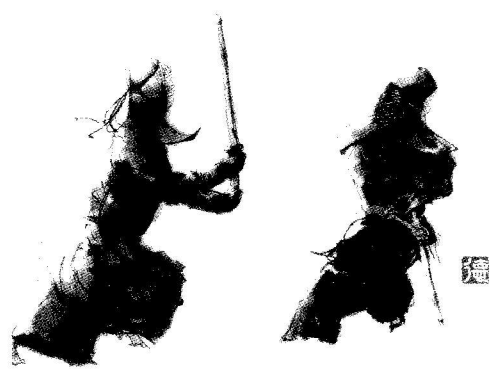
三木 拓人

勝野 祥史

増井 利治

藤澤 英文

藤井 萌如



がんばろう徳島

徳島県剣道連盟

美馬支部の誕生について

美馬支部長 大川 功



平成の大合併と称し、日本全国各地で市町村合併が推進される中、私たちの住んでいる町村

にも合併の波は押し寄せてきた。平成十七年三月に旧美馬郡が一市一郡に分断した形で合併し、美馬市と美馬郡つるぎ町（一部一町）が誕生し、早、一年が過ぎました。

町村合併が施行された後、私たちの活動している徳島県剣道連盟美馬東・西支部にも支部員の中から合併して一つの支部になつては……との意見がありました。

支部合併の意見としましては、合併前に美馬東支部は、旧（脇町・穴吹町・木屋平

村）の二町一村で美馬西支部は、旧（美馬町・半田町・貞光町・一字村）の三町一村という形で構成されていましたが、合併後は、美馬市と美馬郡つるぎ町という形になり、美馬市には旧（脇町・穴吹町・美馬町・木屋平村）の三町一村の合併、美馬郡つるぎ町には旧（半田町・貞光町・一字村）二町一村の合併となり、美馬東・西の両支部の行政区が合併前のものにくらべ歪なものとなりました。

そこで、支部の合併について県剣道連盟の役員の方々の意見を聞いてみますと、市町村合併に伴った剣道連盟の支部合併は考えていないとの事であり、また、合併後も合併前の支部運営体制である旧警察（脇町・貞光）署管轄の行政区で支部運営を続行しても問題はないとの意見であった。

しかし、美馬東支部に所属している、穴吹剣道教室の大石雅生室長より、旧穴吹町が主催で実施していた、県西部剣道穴吹大会の開催が美馬市主催になるため徳島県剣道連盟美馬東・西支部の両支部に協力を依頼され、この際に、美馬東・西支部を合併

して美馬支部として活動しては、との意見に両支部員一同が賛同した。

これをきっかけに、去る十七年五月に第一回徳島県剣道連盟美馬東・西支部合併協議会を開催、その後、協議会を数回開催し、支部員間で協議の結果、徳島県剣道連盟美馬支部として新支部が誕生し、運営が開始されました。

徳島県剣道連盟美馬支部として誕生した、新役員及び支部員等については、後で紹介させていただき、先に現在の美馬支部内の活動状況を簡単に説明させていただきます。

現在、美馬支部には六十五名（内七名が支部登録のみ）の支部員が所属登録しているが、支部員各位は支部内の各剣道教室・道場（七箇所）等で日々稽古に励んでいる。

支部内各教室等においては、それぞれに修行目標をかかげているが全体的な目的としては、青少年の健全育成はもとより、剣道発展・普及に尽力されると共に、剣道の底辺拡大と指導者の育成、支部員同士の技術向上と自己の鍛練・研鑽に切磋琢磨している。

支部内各剣道教室等は、次のとおりである。

教室名等

(室長、道場名・稽古場所・稽古生人数)

- ・脇町少年剣道教室
(細川昭典・美馬市脇町 脇町小学校 体育館 三十三名)
- ・穴吹町少年剣道教室
(大石雅生・美馬市穴吹町 穴吹小学校 校体育館 十九名)
- ・徳島春風館道場
(青木茂生・美馬市穴吹町 自宅道場 三十名)
- ・美馬町剣道教室
(香西虎夫・美馬市美馬町 重清東小学校体育館 十七名)
- ・半田町剣道教室
(大川 功・美馬郡つるぎ町半田 日浦小学校体育館 五名)
- ・一字少年剣道クラブ
(西岡隆英・美馬郡つるぎ町一字 一宇中学校体育館 十名)

・貞光町子ども会連合会剣道部

(藤本情仁・貞光小学校体育館、休部中)

美馬市及び美馬郡つるぎ町内

中学校剣道部

美馬市・脇町中学校、江原中学校、穴吹中学校、美馬中学校
美馬郡つるぎ町・貞光中学校

以上が美馬支部内の教室等と各中学校の剣道部である。

後になりましたが、旧支部の歴代支部長と美馬支部新役員体制について紹介させていただきます。

【旧美馬東支部長】

- 初代 須見 虎雄 昭和三十二年～昭和五十年一月
- 二代 長江 義香 昭和五十年二月～昭和五十六年三月
- 三代 平田喜一郎 昭和五十八年一月～昭和六十三年三月

四代 中川 富男 昭和六十三年四月～平成九年三月

五代 青木 茂生 平成九年四月～平成十八年三月

【旧美馬西支部長】

- 初代 臼井 豊春 昭和三十四年～昭和三十七年三月
- 二代 佐藤 藤太 昭和三十七年四月～平成六年三月
- 三代 香西 虎夫 平成六年四月～平成十三年三月
- 四代 大川 功 平成十三年四月～平成十八年三月

☆美馬支部役員

支部長 大川 功

副支部長 中川 正・土井 博

理事 大石雅生・柴田宗忠

松田久司・日野浦正一

横畠 保・藤本文義

阪本光男・高尾 茂

仲 稔・下藤 仁

監事 後藤徳朝勝・近藤俊文

事務局長 辻 孝



事務局次長 西岡隆英
会 計 宮田 一

以上が支部の沿革及び新支部の役員体制です。

この役員体制で新支部を運営していく所存でありますので、剣道連盟の先生方には何かとご迷惑をおかけすることもあると思いますが、今後とも、ご指導ご鞭撻がいただけますよう、よろしくお願いいたします。

部活だより

直心

素直で、正直で、真っ直ぐな心

徳島中学校剣道部顧問

栗 田 恭 史



「直心 素直で、正直で、真っ直ぐな心」これは本校剣道部の部訓である。念願の

剣道部顧問として、二十年ぶりに剣道具をつけ、懐かしい汗をかいた気分は最高であった。

本校剣道部はたいへん歴史があり、過去には県大会優勝などの実績を残している。この伝統ある剣道部をもつことができたことにたいへん感謝すると同時に、責任も感じている。

現在の部員は、男子部員三年生三名、一

年生五名の計八名である。女子は一人もお

らず、少し寂しく感じている。部員たちは

たいへん素直で、剣道を愛し、まじめに稽

古に取り組んでいる。昨年度は、部員一人

ひとりの努力によって、団体戦では県大会

ベスト八、個人戦では四国大会ベスト八と

いう実績を残すことができた。私自身が高

校までの剣道経験しがなく、指導者として

日々力不足を感じながら稽古に励んでいる。

そして、保護者やOBの方々もたいへん協

力的で剣道部を応援して下さっている。

普段の稽古は、徳島武道館をお借りして

恵まれた環境の中でしている。また時々、

近くの高校へ出稽古をさせてもらっている。

部員たちは、顧問の先生からはもちろんの

こと、高校生からも身をもって、技のスピー

ドや力、そして何より礼儀作法を学ばせて

もらっている。それは、顧問である私自信

も同じである。指導者となり、いろいろの方

から親切に剣道について教えていただき、

剣道のよさ、楽しさ、難しさなど奥深さを

実感しながら毎日を過ごしている。

そして昨年度、三重県で行われた全国中



学校剣道大会の視察員として大会に参加させていただいた経験は私にとってありがたい財産となった。全国トップレベルの中学校の指導者や選手を間近に見ることができ、すばらしい剣道に出会うことができた。そして、いつか子どもたちと共にこの場所に来てみたいと思った。

そのために、今日も剣道具をつけ、岸野、東川、村島、浜田、清水の五人が待つ武道

館へバイクを走らせるのである。彼らには、これからの人生で、剣道を通して、素直で、正直で、真っ直ぐな心をもって生きてほしいと願っている。



生徒とともに歩む

相生中学校 剣道部顧問

福田 美知子

相生中学校は那賀川の中流域に位置する、全校生徒九九名の小規模校です。現在剣道部は男子六名、女子三名の計九名（一・二年生）で毎日稽古に励んでいます。我が校剣道部は伝統があり、多くの先輩方がすばらしい成績を残しております。部活だよりということですが、恥ずかしながら私自身のことを述べさせていただきます、部活だよりにさせていただきますと思います。

私の母校でもある相生中学校に赴任して、早いもので六年がたとうとしています。私が赴任したときは師匠でもありません富田正先生が熱心に指導されていました。徳島市内の中学校に勤務していたとき、剣道部をもたれていた先生にお世話になったこともあり、先生から「剣道部へ来い。」とお誘いをいただき、相生中学校での剣道生活がスタートしました。富田先生は毎日、生

徒とともに防具を付けられ練習しておられました。練習の開始時間には胴衣に着替えて道場にいました。その姿を横で見、学んできたように思います。指導者としての原点、忘れてはならないものを教えていただきました。その富田先生が転任され、大きな不安の中で顧問としての第二の剣道生活がスタート。しかし、先生に頼ってばかりだったということを感じました。

毎日の稽古、数々の試合、次から次へとやるべきことがありました。何より相生中学校の生徒は素直で、まっすぐな目で剣道に打ち込んでいました。そんな生徒たちに何ができるのだろうかとの未熟さに情けなく、悔しく思ったことがたくさんあります。中途半端な姿勢が一番良くない。自身に問いかけ、とにかく必死だったように思います。

そんな私が相生中学校で剣道を続けてこられたのは、中体連・高体連など多くの先生方に助けていただいたことと、ともに歩んでくれる生徒と保護者がいたからです。練習を見ていただいたり、練習試合によん

でいただいたり、相談にのっていただいたり、あげればきりがありません。本当に感謝しています。感謝の気持ちを忘れず生徒とともに歩んでいきたいと思っております。現在剣道部は中学校から剣道を始めた生徒が約半数。あらためて基本や礼儀、目標を持つことの大切さを感じます。また、反省することで学ぶことも多いです。相生中学校ではみんなが目標を持ち、人間的にも、剣道も成長していけるよう毎日がんばっています。今後ともご指導よろしく願います。



為せば成る

徳島県立城北高等学校剣道部
監督 福多雅英

城北高校は昭和十六年、徳島県立渭城中学校として開校しました。その後、学制改革や新制高等学校編成により、昭和三十一年に徳島県立城北高等学校となりました。六十余年の伝統を受け継ぎながら、校是「為せば成る」のもと、さらなる飛躍を目指して、平成十六年度から普通科進学重視型単位制を導入しています。

剣道部については、開校当初から盛んに活動をしていたと思われ、特に昭和五十一年に竹田昌弘教諭が赴任されてからは、女子が個人戦で全国大会に出場したり、男女団体戦で四国大会に出場したりするようになりました。全国大会等で活躍されている卒業生として、竹内佳代子（旧姓寺西）さんがおられます。

また、本校は、昭和四十六年度全国高等学校総合体育大会剣道競技と平成四年度全

国教職員剣道大会、平成五年度国民体育大会剣道競技成年の部の会場校となりました。

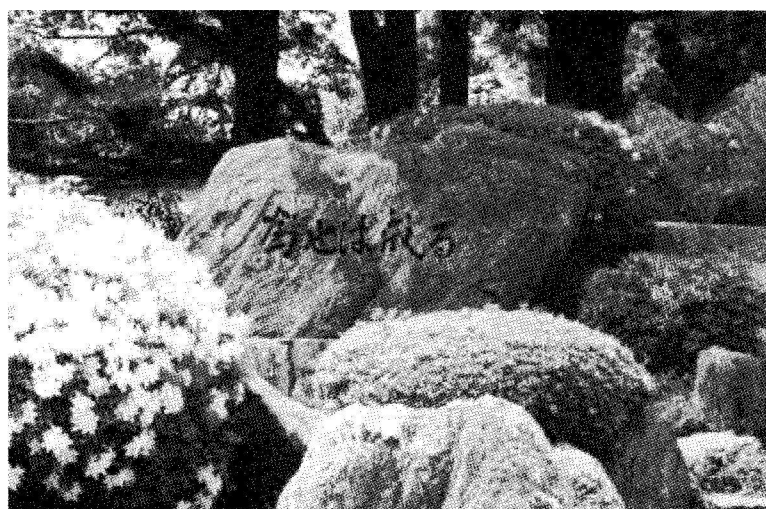
現在剣道部は、部員数三年生七名・二年生十六名・一年生六名の二十九名(男子二十一名・女子八名)で活動しています。部員同士大変仲が良く、稽古は張りつめた厳しい雰囲気の中で行われていますが、稽古以外の場では、和気藹々楽しく活動しています。

活動の最大の目的は、「剣道を通じての人間形成」であり、「時代を超えて変わらない価値あるもの」としての豊かな人間性、正義感や公正さを重んじる心、自らを律しつつ他人と協調し、他人を思いやる心などを培うことであると考えています。礼儀作法の修得はもちろんのこと、ひとりの人として育まなければならない「心の修養」に努めたいと思います。

活動時間は、勉学と剣道の両立を目指しているため、六限授業の日は二時間程度・七限授業の日は一時間三十分程度という短時間ではありますが、集中した質の高い稽古を目指しています。夏季休業日や冬季休

業日等は、県外へ練習試合や合同合宿に出かけ、他県の強豪校から多くのことを学んでいます。

まだまだ未熟な部ですが、限られた時間の中でいかに効率よく稽古をするかが大きなテーマであり、部員一人ひとりが意欲を持ち、研究工夫しながら取り組めることを



目指して努力して行きたい思います。

また、私が剣道を指導する上で、いつも念頭においていることは『師弟同行』ということがあります。剣道は実践学であり、剣道という同じ道を歩む者同士、共に稽古に励みながら精進してまいりたいと考えています。

本年度、本校としては初めて四国高校剣道新人大会に男女アベック出場することができました。このことは、部員達に取りましては大きな自信にもなりましたし、本校の校是である「為せば成る」を実感出来た貴重な経験となりました。これもひとえに剣道関係者のご指導・ご協力の賜であり、OB会や保護者のご支援のお陰であります。心から感謝申し上げます。

我が剣道部紹介

那賀高等学校剣道部

監督 大石 正志

那賀高校は、県南部那賀川中流域の中山間部にある生徒数約二四〇名の全日制普通科高校である。那賀郡唯一の高校として、那賀地域の四中学と連携型の中高一貫教育を推進している。現在、剣道部は、生徒数減による部員不足が大きな課題であるが地元講師である井村雅人氏の指導をいただきながら日々努力をつづけている。那賀郡丹生谷地域は、昔から剣道の盛んな土地であり、中学校では「丹生谷を制するチームは県下を制する」とまで言われてきた。その中で本校剣道部は開校当時から地道な活動を続け、全国高等学校総合体育大会や国民体育大会に出場するなど、輝かしい実績を持っている。剣道部卒業生の多くは、少年剣道教室などの指導者として活躍している。剣道部が県下の大会で頭角を現したのは、昭和四十年年度頃からである。そのころには、

地元中学から有望な生徒が入部し、県下大会で上位に入り、高校総合体育大会では第三位に入賞、初めての四国高等学校剣道選手権大会に出場を果たした。

その後、坂本信幸先生、西谷肇一先生、



平成17年度 那賀高校 部活動

加藤哲裕先生らの剣道専門家を迎え各種大会で優秀な成績を修めた。以下、剣道部の特筆すべき成績と那賀高校創立五十周年記念誌「竜峰」に寄稿していただいた中川裕司氏（昭和五十九年度卒業生）の随想を紹介いたします。

剣道で学んだこと

昭和五十九年度 卒業生

中川 裕 司

私の高校生活は「剣道に始まり剣道に終わる」という三年間でした。剣道部顧問である西谷肇一先生に出会い、私の高校生活は始まりました。剣道を学ぶこと、それは苦しみの体感と努力の尊さ、そして何時でも剣道を学ぶものとしての心構えを持つておくという、どれも大変難しいものでした。西谷先生は「剣道は人間形成の道である」という言葉とともに剣を私たちに突き当てました。そしてその剣で、剣道とは、勝利とは、人間形成とはということを私たちに問いかけてくださったように思います。

年 度	男子団体
昭和四十三年度	高校総合体育大会ベスト4・四国高校剣道選手権大会出場
昭和四十四年度	高校総合体育大会ベスト4・四国高校剣道選手権大会出場
昭和五十二年	高校総合体育大会ベスト4・四国高校剣道選手権大会出場
昭和五十六年度	白木 崇 滋賀県国体出場
昭和五十七年度	山家旗争奪県下剣道大会 準優勝 白木 崇(十七人抜き) 三木杯高校剣道大会 準優勝 県中高武道大会 準優勝 高校総合体育大会 個人優勝 白木 崇 島根県国体出場 白木 崇
昭和五十八年度	高校総合体育大会 個人準優勝 福井 則夫 全国高校総合体育大会出場
昭和五十九年度	建国記念奉祝県下剣道大会 準優勝 磯部旗争奪県下剣道大会 準優勝 三木杯高校剣道大会 優勝 山家旗争奪県下剣道大会 優勝 県中高武道大会 優勝 高校総合体育大会 優勝 四国高校剣道選手権大会出場・全国高校総体出場 監督(西谷肇一) 選手(中川裕司・森野喜代重・山川雄也・ 吉田浩明・要英二・川野(中川) 武史)
昭和六十年	奈良県国体出場中川裕司・川野(中川) 武史 高校総合体育大会 個人優勝 川野(中川) 武史 鳥取県国体出場 川野(中川) 武史
昭和六十一年	高校総合体育大会 優勝 四国高校剣道選手権大会出場・全国高校総体出場

剣道の精神を学んでゆくことによって人間は正しく形成され、人間が正しく形成されれば、剣道は強くなる。そして剣道とはそういうものでなければならぬ。「勝つ」ということは技や体力、気を練習によって十分に身に付けること。そしてもう一つ、相手の心を知り、心の動きを知ること。剣とは人の心であり、弱いところも強いところも、剣を交えれば自ずと知ることができること。これを西谷先生から学びました。西谷先生の剣は、その強靱な両腕から繰り出す、力強く、痛い一本一本の技。その一本一本には、私たちへの優しさが含まれていました。私たちの未熟なところや心の隙を先生は確実に見抜き、剣で教えてくれました。そのおかげで四回の優勝と二回の準優勝、全国大会、国体出場を成し遂げることができました。それと同時に、多くの友人もできました。剣を交えることで、お互いの弱いところを教えあい、互いに克服していくことで精神的にも肉体的にも強くなり、それが何事にもかえがたい友情や信頼に変わっていきました。そのことを竹刀一

本で教えてくださった西谷先生には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。私は今、相生龍虎館で指導者の一員として小学生達に剣道を教えています。恩師、西谷先生の教えを受け継ぎ、剣を子どもたちと交えることで、人間形成の初歩を子どもたちにかかりやすく教えています。まだまだ未熟な私たちですので、子どもたちから教えられることもあります。子どもたちの純粋で輝く目を見てみると、教えることの重大さを感じ

じ、責任が重くのしかかりますが、子どもたちとの剣と剣の交流はとても楽しいものです。高校卒業から十数年、今一度機会があれば、言葉ではなく剣と剣で恩師、西谷先生と対話したいと思っています。那賀高校での三年間は、すばらしい先生、先輩、後輩に恵まれ大変充実して思い出深いものとなりました。今、那賀高校剣道部は部員が少なくないと聞きますが、先輩から一言。主将を

平成二年度
平成十二年度
平成十三年度
平成十四年度
平成十七年度

監督（西谷肇一）選手（中本栄治・山川健二・小川裕巳・入江明德・新田孝文・船田善仁）
山梨県国体出場 山川健二・小川裕巳
高校総合体育大会ベスト4・四国高校剣道選手権大会出場
新人大会兼全国高等学校選抜大会予選 ベスト4
四国新人大会出場
清原杯争奪県下剣道大会 第三位
新人大会兼全国高等学校選抜大会予選 ベスト4
四国新人大会出場
山家旗争奪県下剣道大会 第三位
高校総合体育大会個人ベスト8 西田義玄
四国高校剣道選手権大会出場



中心に、今、そしてこれからの那賀高校剣道部が発展していけるよう、あわてず、じっくり頑張ってくれることを期待しています。最後になりましたが、西谷先生、那賀高校への感謝の思いを、創立五十周年誌「竜峰」を借りて表すことができたことを大変感謝し、こういう機会を与えて頂けたことを光栄に思っております。ありがとうございました。

道場・教室だより

岫雲館剣道場について

岫雲館館長 藤 本 辰 夫

私が岫雲館（シュウウンカン）剣道場を開いたのは平成元年六月でした。道場名は師匠の堀江幸夫先生が座右の銘にしておられた「岫雲」の言葉を、お願いして頂きました。

当時、本県剣道連盟は、東四国国体を四年後に控えて選手強化に励まなければならぬ大切な時期でありましたが、それまで何十年と続いてきた朝稽古の場所である旧県立武道館が取り壊され、中央武道館となつてからは様々の問題で朝稽古ができなくなり、成年の部の強化は厳しい状況におかれていました。

稽古場所の確保に腐心していた折、最悪の場合には朝稽古の場所を提供できるようなとの理由から、私は交通の便を考慮して

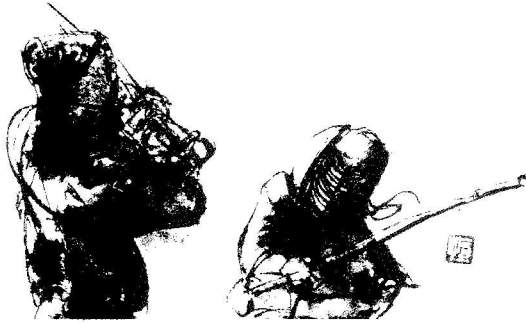
北田宮に道場を開いたのですが、幸いにも当時城ノ内高校の西谷肇一先生のご尽力により同高校で朝稽古をさせて頂けることになりました。そのために岫雲館は朝稽古の場所としては活躍できませんでしたが、堀江先生のご指導もあり、小学生、中学生の部では熱心な生徒が多数集い、一般の部においても県下のそうそうたるメンバーが稽古に通



い励む道場として始まりました。そして、平成五年に開かれた東四国国体においては、みごと準優勝を果たした少年の部の選手のうち三人が、当道場出身という荣誉に輝いたことも忘れることができません。

岫雲館の稽古の信条は、創立当初からの初心を忘れずに、少年の部、一般の部ともに将来正しく伸びていくことができますよう、また、しっかりした地力をつけるため、前半は基本稽古を充分に行い、後半を地稽古にしています。厳しい稽古の中にも暖か味のある人間関係が築ける道場づくりを目指しています。

月日は早いもので道場創立以来十七年が経ちました。その間、当道場のご指導をして頂きました堀江幸夫先生や柏原浩先生が鬼籍の人となってしまったことは、思い出すたびに寂しさがつる悲しい出来事であります。また、現在、岫雲館道場の近隣では公施設を利用した少年剣道教室の数が増えて盛んになってきたことから、私設の私の道場は少年の部員数がめっきり少なくなってきました。一方、初心者から始めた熱心



三好淳志館の剣道仲間

増田和広

な一般の剣道愛好家が増えており、当道場の役割は時とともに様変わりしつつあるように思います。これからの位道場を続けられるか定かではありませんが、堀江先生や柏原先生のご遺志を、微力ながら少しでも永く伝えていきたいと思っております。

皆様方には今後ともなお一層のご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。



私達、三好淳志館では週三回、月水土、三好中学校体育館で少年剣道教室の稽古終了後、

一般の方々と稽古に励んでいます。十年ほど前から徐々に稽古参加者が増えはじめ現在では十人ほどで稽古をしています。

当初は三好支部事務局の藤本常巳さん五段と大西健太君二段の二人でしたが、藤本さんの熱心な勧誘により堀川修さん四段、島尾真且さん五段が加わりました。その後、池田警察署に藤川和秋先生が赴任され道場に訪問頂き熱心にご指導頂きました。藤川先生との稽古は日頃あまり稽古の出来ていない私達にとっては大変厳しく激しいものでしたが、全員休まず熱心に充実した稽古が出来ました。そこへ加藤良光五段、湯岑昭彦四段、高知出身の兵頭光二四段、池田第

一中学校教諭の山田泰弘四段、九州佐賀出身の庄嶋亮三段、少年剣道教室の父兄で重田松弘さん等が参加してくれています。

さらに、三好支部の先生方が加わり、活気ある道場になっていきました。不思議なもので人が集まりだすと中学生、高校生、大学生、と各方面からの稽古参加者が増えてまいりました。支部の先生方も昇段意欲が高まり多くの方々が順調に昇段されています。ご指導いただきました藤川先生も三年ほど前に市内に栄転されましたが、私自身も七段審査の時期には熱心にご指導いただき大変感謝しております。藤川先生にご指導いただいた剣道精神を継承してまいりたいと思っております。現在、稽古をしている先生方は私より年配の方々も多くいらっしゃいますが、懸命に励む熱心な稽古姿を拝見し、私もガンバラなくてはと励まされています。若い人達も本当に剣道好きな好青年ばかりです。

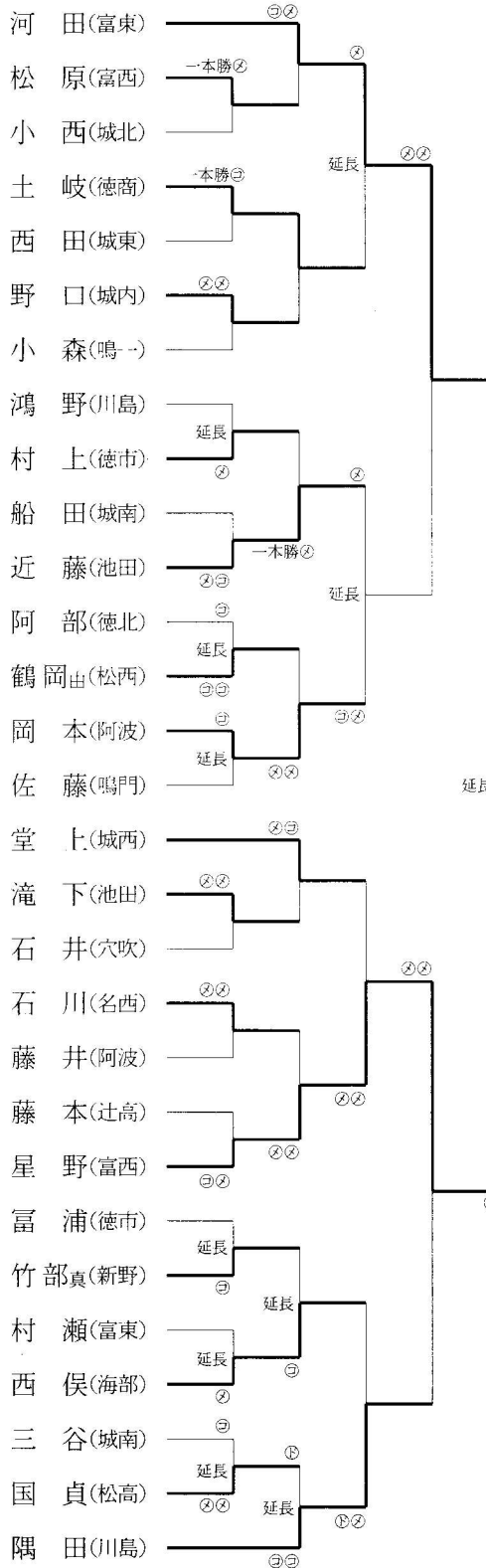
このすばらしい仲間と一緒に剣道ができることに感謝しこれからも切磋琢磨し良き仲間と共に気持ちのいい汗を流したいと思っ

おります。

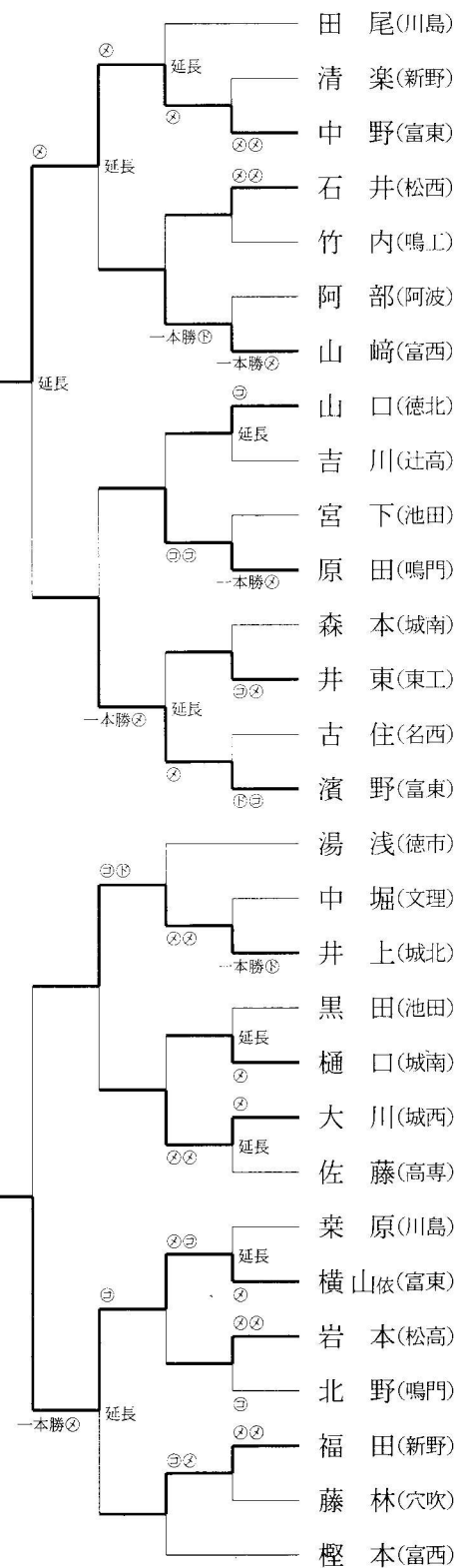
三好支部は他県と隣接しているので香川県や愛媛県との交流が盛んで、私達淳志館も最近では、川之江市などの少年剣道教室へ訪問しています。これからも地域利点を活かしながら近隣の道場と交流を深めてまいりたいと思っています。しかしながら私達の住む県西部は町村合併、少子化、学校の統合と将来を心配する声もあります。こういった時代だからこそ微力ではありますが、少しでも剣道人口を増やせるよう三好支部の方々と協力し後の時代を担う後輩たちに剣道を伝承してまいりたいと思います。



〈女子個人 1組〉

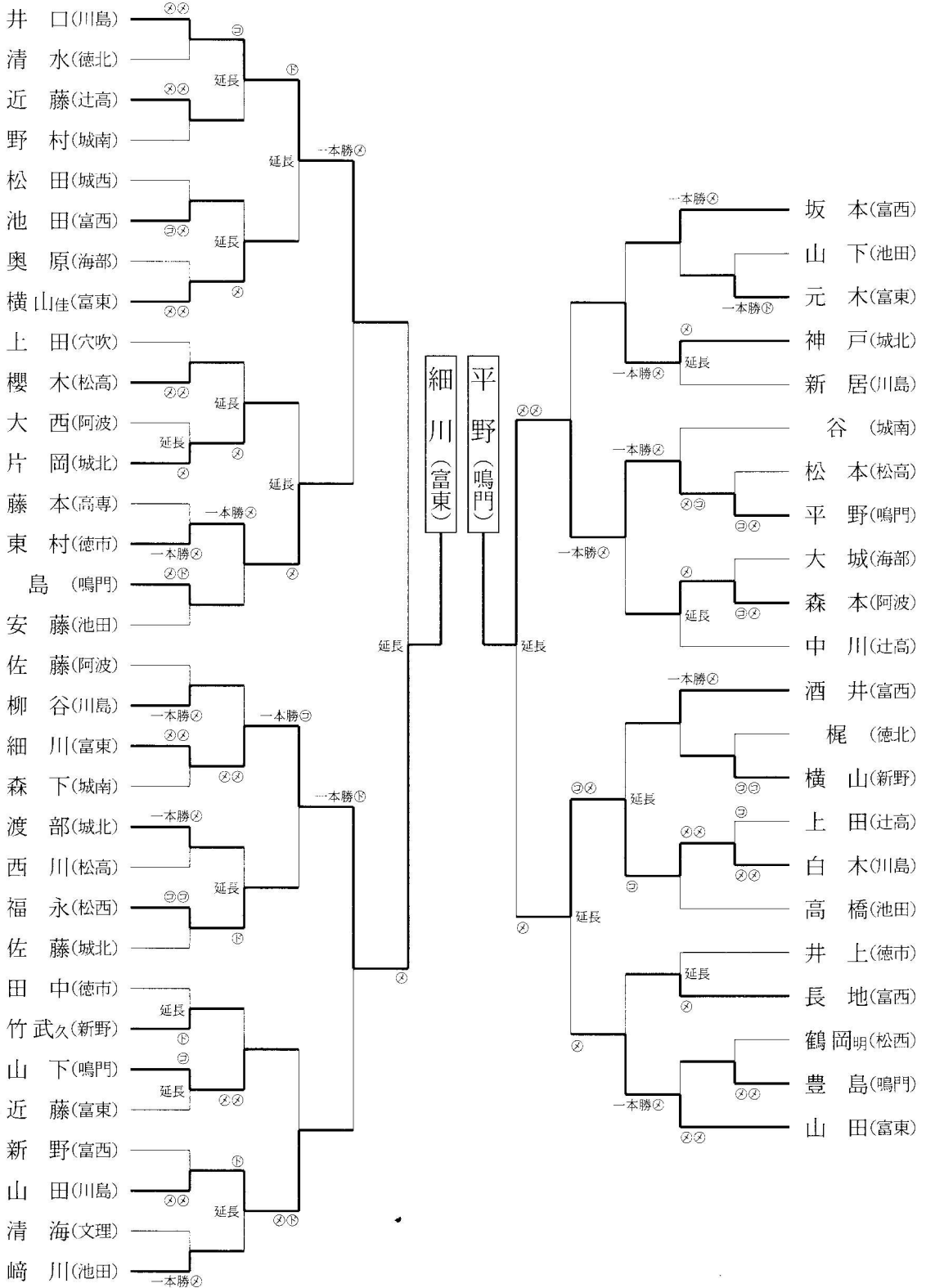


〈女子個人 2組〉

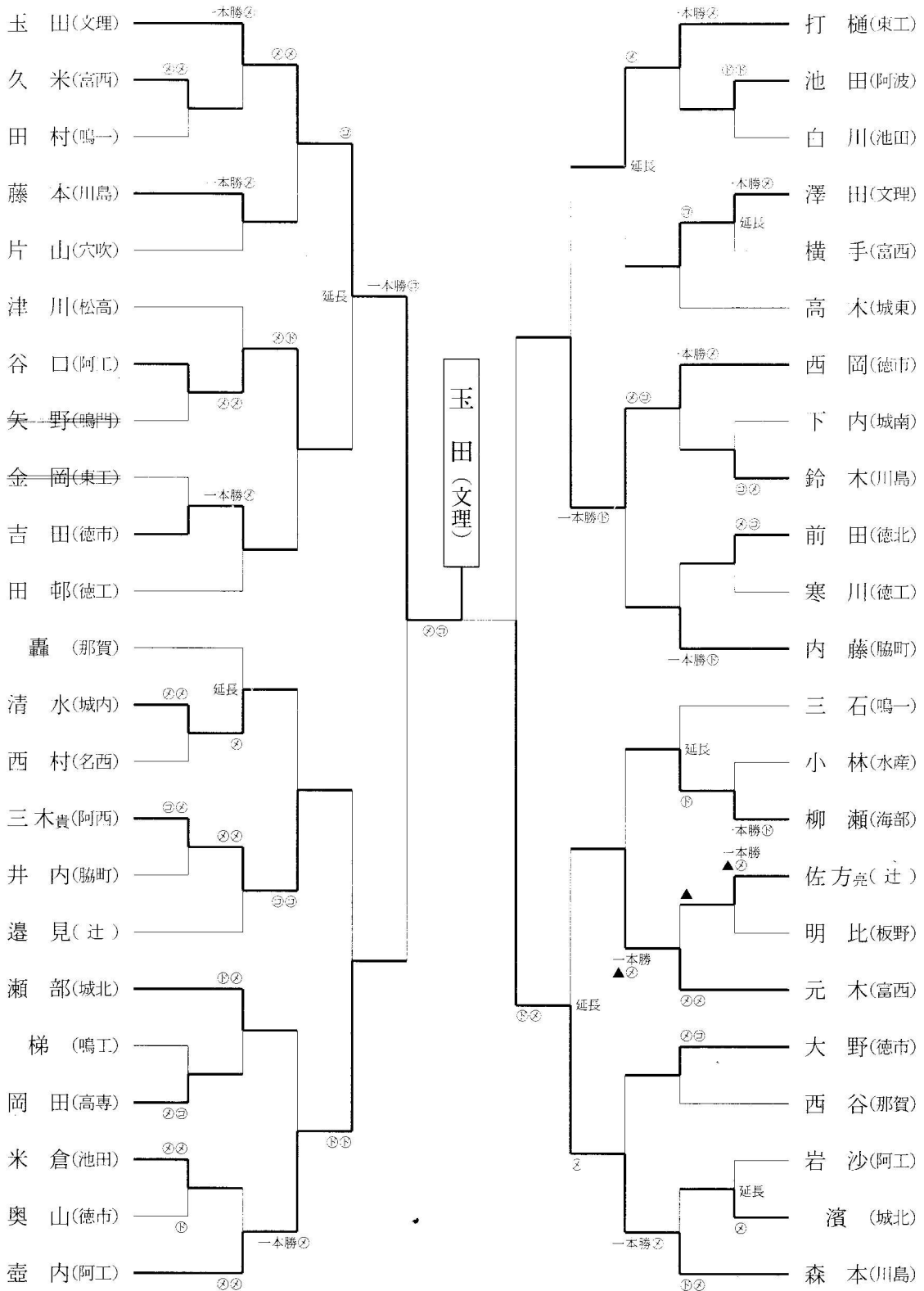


〈女子個人 3組〉

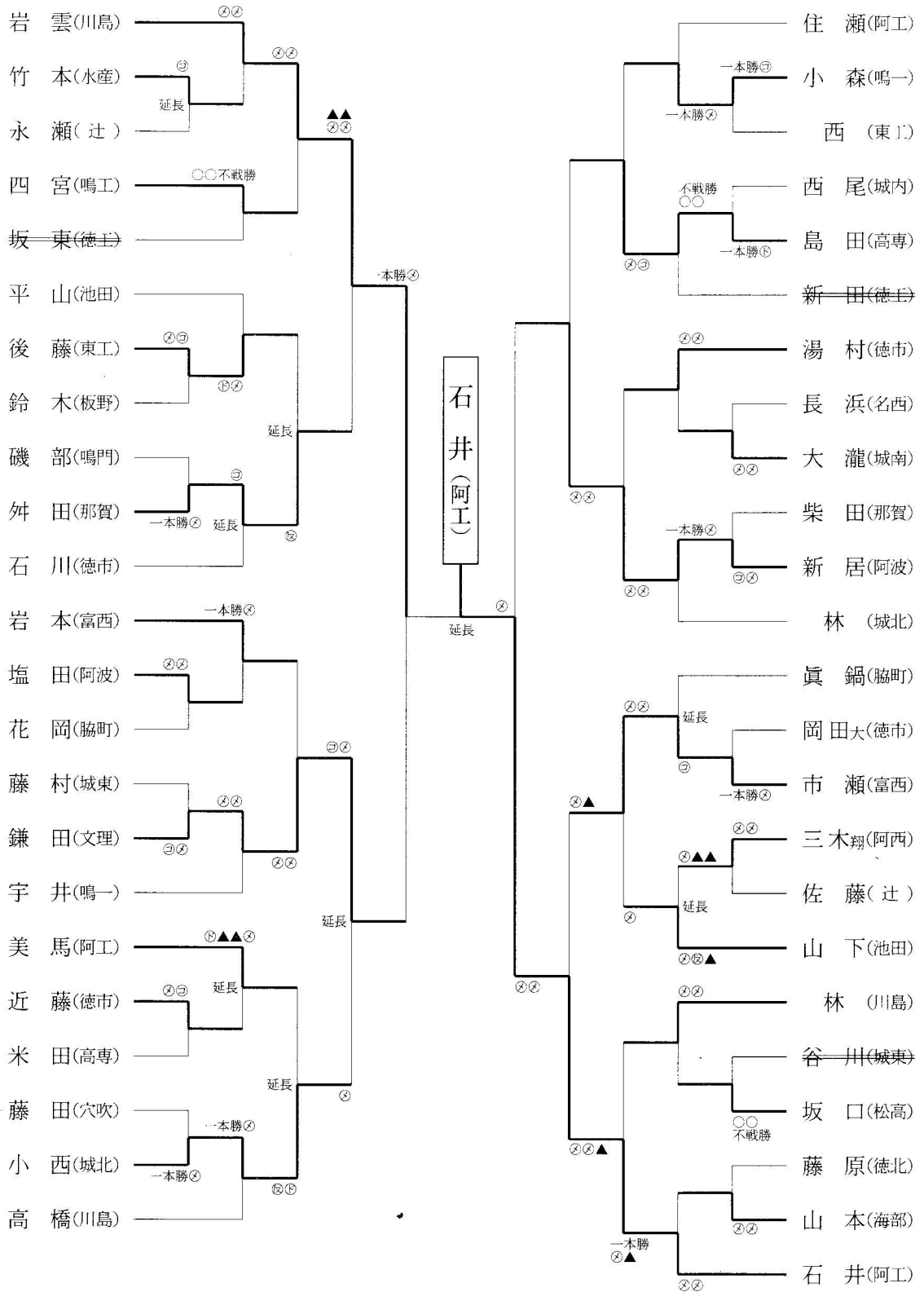
〈女子個人 4組〉



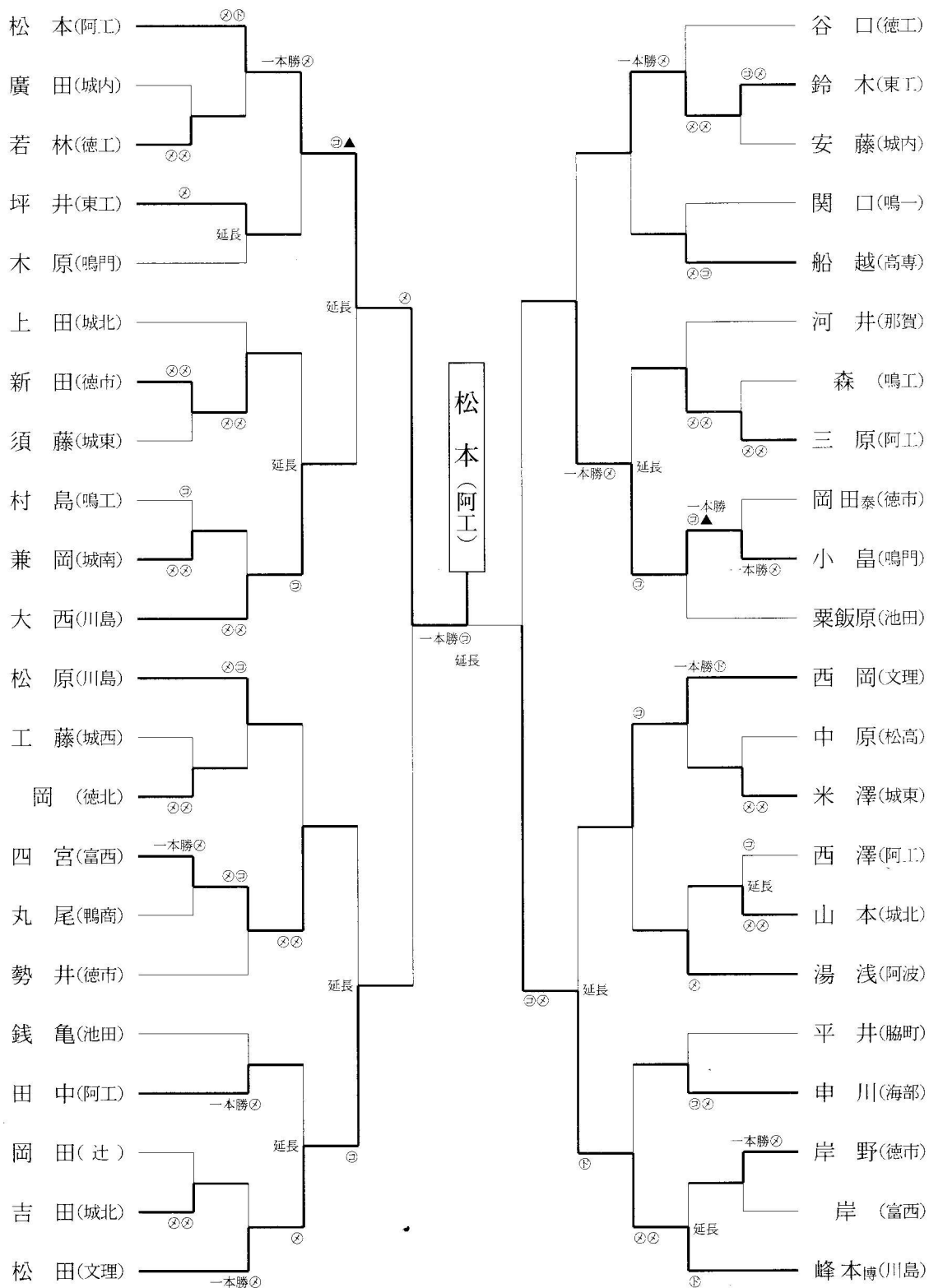
〈男子個人1組〉



〈男子個人2組〉



〈男子個人 4組〉



〈男子の部〉

団体戦

準決勝

校名	先	次	中	副	大	勝敗	本	代
城	北	須	高	藤	米	0	1	
	浜	藤	木	村	澤			
東		⊗ 延						
文	⊕ ⊕	⊗ ⊗	⊗ ⊗	⊕ ⊕	⊗ ⊗	5	9	
	川	松	西	片	玉			
理	人	本	岡	山	田			

準決勝

校名	先	次	中	副	大	勝敗	本	代
阿	美	神	松	櫻	石	3	5	
	南	馬	本	木	井			
工	⊗ ⊗	▲ ⊗ ⊗	⊗ 延長					
川		⊗			⊕ ⊗	1	3	
	島	松	岩	森	峰			
	原	雲	本	本	久			
					保			

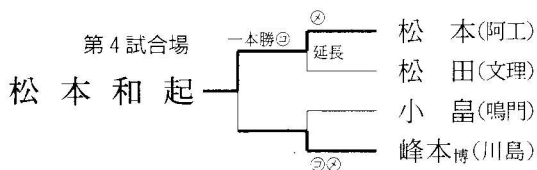
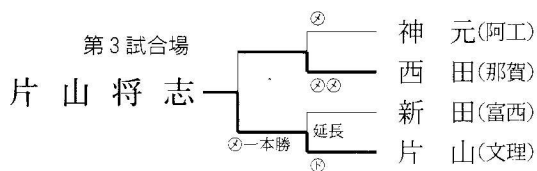
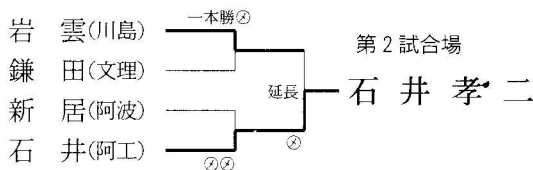
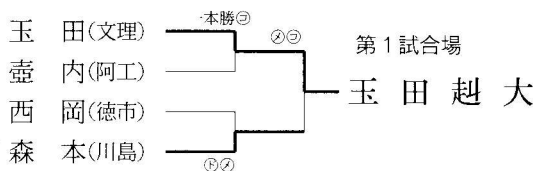
決勝

校名	先	次	中	副	大	勝敗	本	代
文	川	鎌	西	片	玉	1	2	
	理	人	田	岡	田			
阿			延長	延長	▲	3	4	
南		⊗ ⊕	⊕ ⊕	⊕ ⊕	▲			
工	美	神	松	櫻	石			
	馬	元	本	木	井			

3位決定戦

校名	先	次	中	副	大	勝敗	本	代
城	北	須	高	藤	米	1	2	
	東	浜	藤	村	澤			
川						4	7	
島	▲ 延長	⊗ ⊗	⊕ ⊗	⊗ ⊕	⊕ ⊗			
	松	峰	林	峰	久			
	原	本		本	保			

個人戦



決勝リーグ

〈男子個人〉

	玉田	石井	片山	松本	勝数	勝本数	得失点	順位
玉田		⊙ ⊙	⊙ 一本勝	⊙	3	4	+4	1
石井	△		△	⊙ 一本勝	1	1	-2	3
片山	△	⊙		⊙	2	2	+1	2
松本	△	△	△		0	0	-3	4

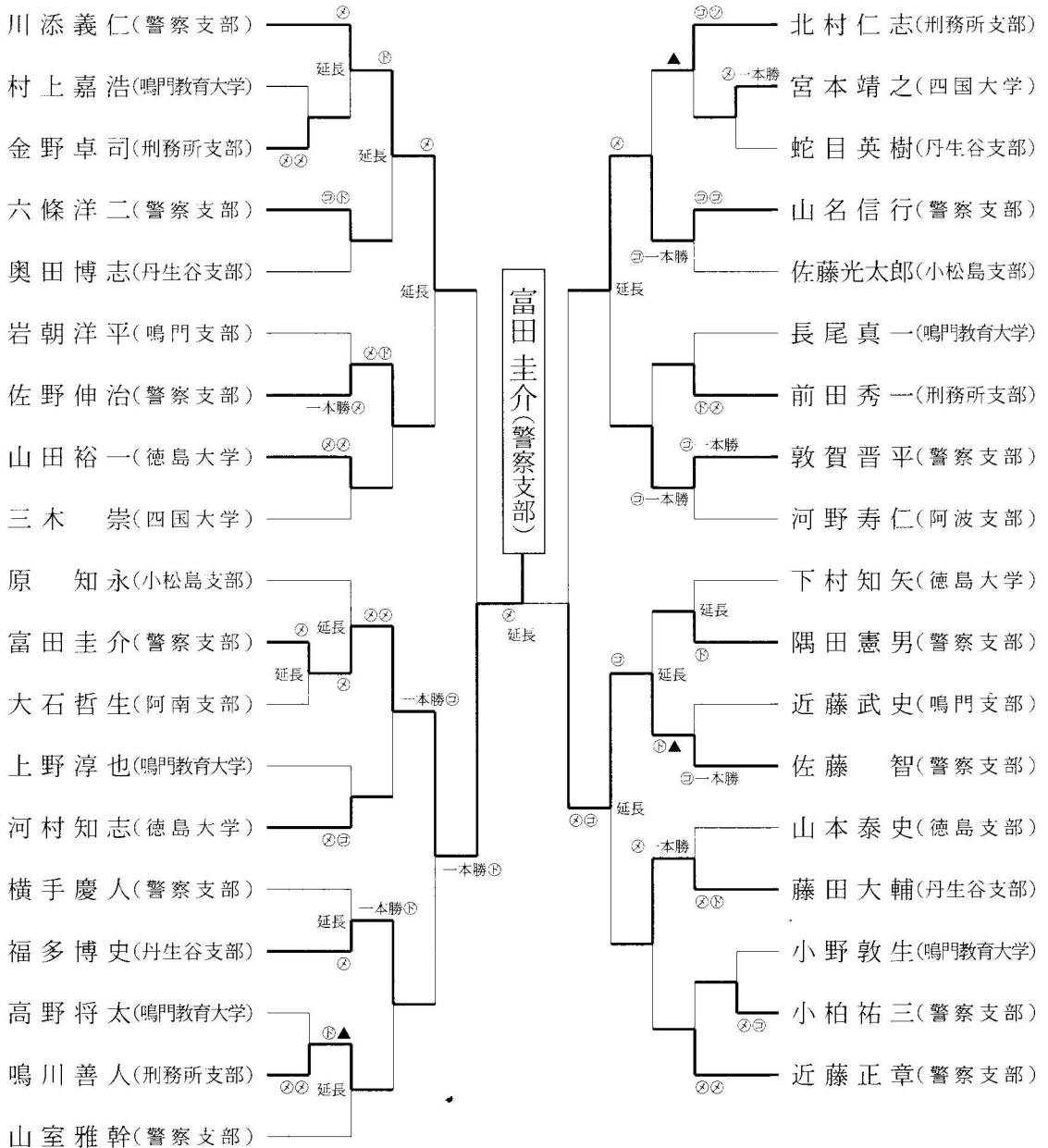
〈女子個人〉

	星野	中野	細川	平野	勝数	勝本数	得失点	順位
星野		△	△	⊙	0	1	-4	4
中野	⊙		△	△	1	1	-1	3
細川	⊙ ⊙	⊙ 一本勝		△	2	3	+1	2
平野	⊙ ⊙	⊙	⊙ ⊙		3	5	+4	1

第17回 徳島県剣道選手権大会並びに 第53回 全日本剣道選手権大会県予選会

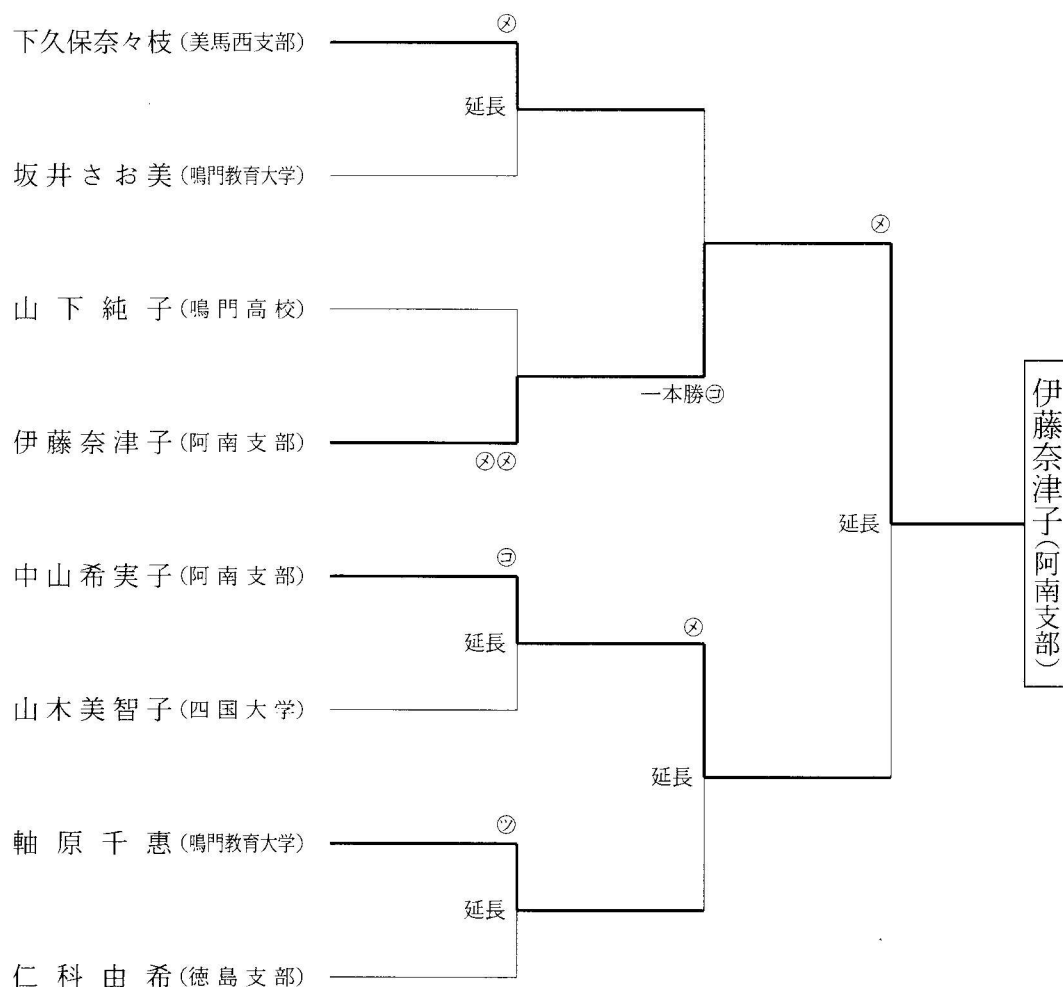
優勝 富田 圭介 (警察支部)
 準優勝 佐藤 智 (警察支部)
 第三位 川添 義仁 (警察支部)
 第三位 山名 信行 (警察支部)

日時 平成17年7月10日(日) 午前9時
 場所 鳴門 武道館



第 8 回 徳島県女子剣道選手権大会並びに 第44回 全日本女子選手権大会県予選会

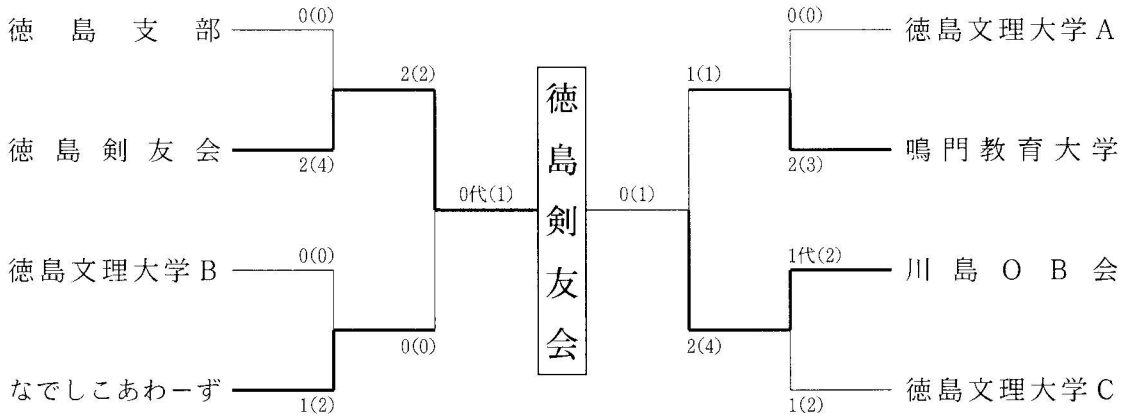
優勝 伊藤 奈津子 (阿南支部)	日時 平成17年7月10日(日) 午前9時
準優勝 中山 希実子 (阿南支部)	場所 鳴門 武 道 館
第三位 下久保 奈々枝 (美馬西支部)	
第三位 軸 原 千 恵 (鳴門教育大学)	



第26回 徳島県女子剣道大会並びに 第22回 全国家庭婦人剣道大会県予選会

〈団体戦〉

日 時 平成17年 5月 8日(日) 午前 9時
場 所 徳島県立中央武道館



決 勝 戦

	先鋒	中堅	大将	代表	
徳島剣友会	伊藤	山田	平野	伊藤	$\frac{1}{0}$
川島 O B 会	下久保	工藤	玉田	下久保	

準 決 勝

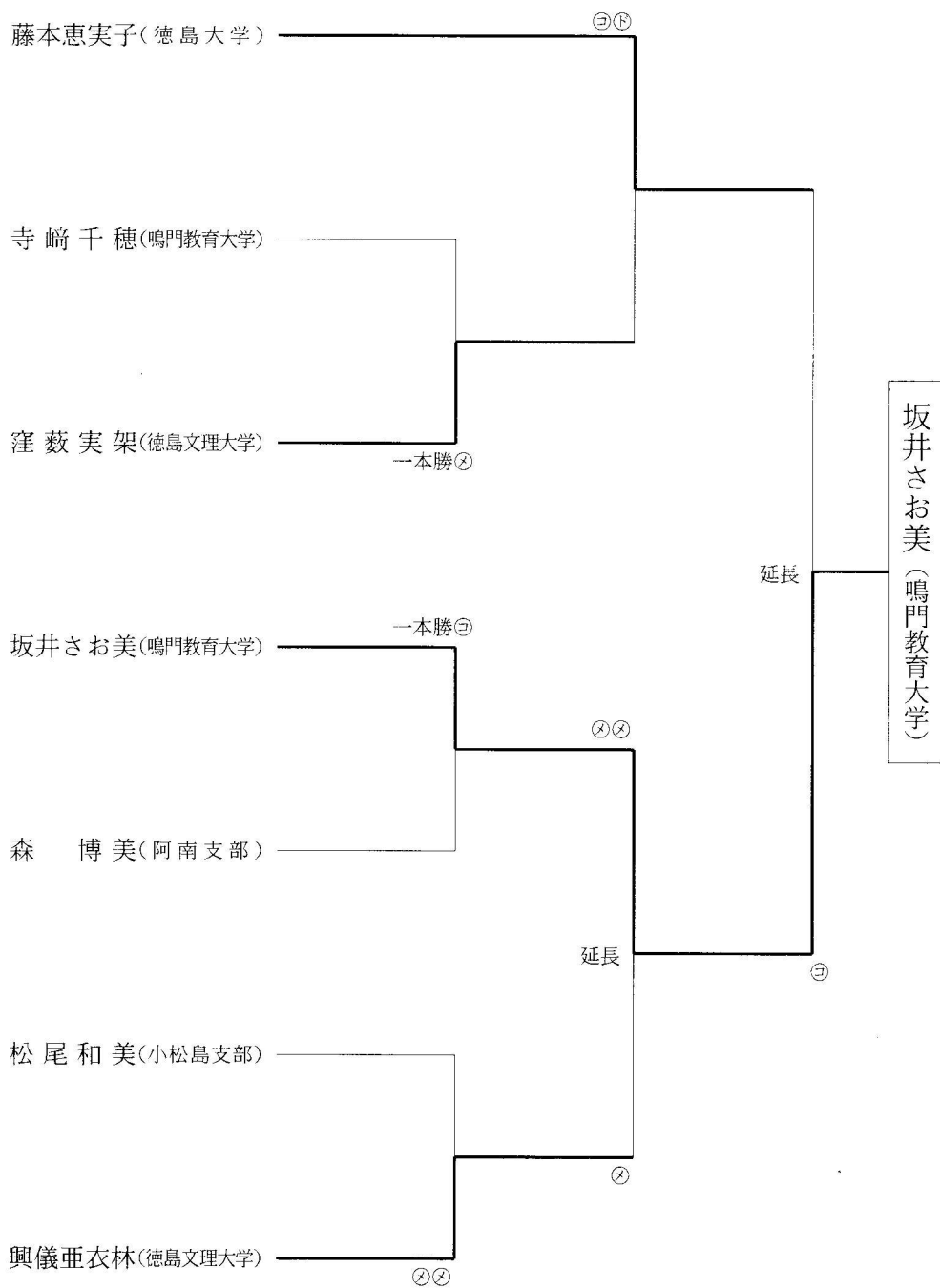
	先鋒	中堅	大将	
徳島剣友会	伊藤	山田	平野	$\frac{2}{2}$
なでしこあわーず	仁科	藤本	塚原	

準 決 勝

	先鋒	中堅	大将	
川島 O B 会	下久保	工藤	玉田	$\frac{4}{2}$
鳴門教育大学	坂井	寺崎	軸原	

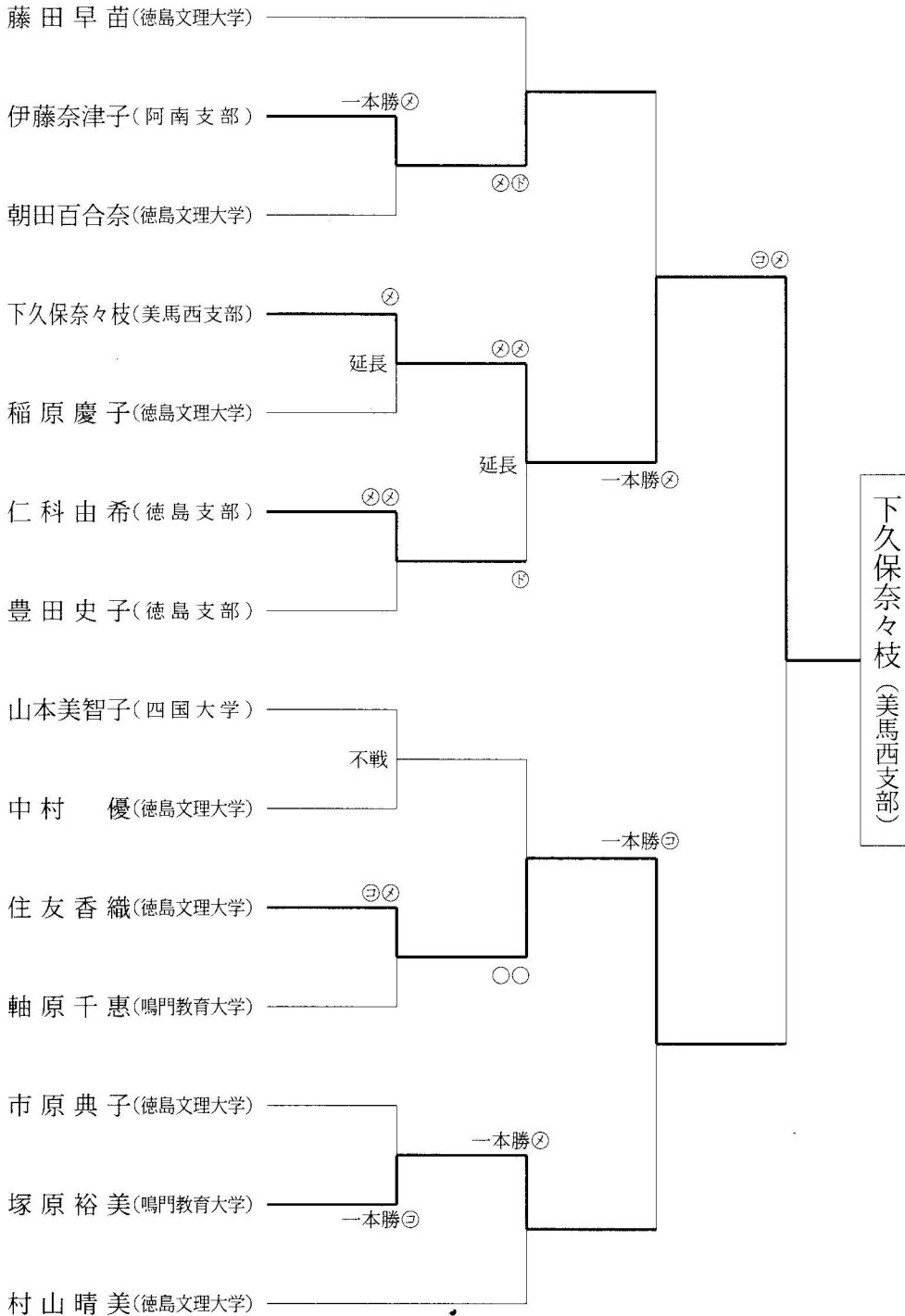
〈個人戦〉

〈二段以下の部〉



〈個人戦〉

〈三段以上の部〉



第59回 徳島県中学校夏季総合体育大会 剣道競技

日 時 平成17年7月18日(月) 午前9時
場 所 鳴 門 武 道 館

	男 子	女 子
優 勝	板 野 中 学 校	北 井 上 中 学 校
準 優 勝	徳 島 文 理 中 学 校	阿 南 第 一 中 学 校
第 3 位	鴨 島 第 一 中 学 校	坂 野 中 学 校
第 3 位	相 生 中 学 校	牟 岐 中 学 校

[男子決勝]

学 校 名	先 鋒	次 員	中 堅	副 将	大 将	勝 敗
坂 野 中	櫻 木	田 村	平 井	小 西	松 本	3
	⊗×		⊗一本勝		⊗一本勝	
徳 島 文 理 中						0
	原	藤 本	湯 浅	鈴 木	庄 地 畠	

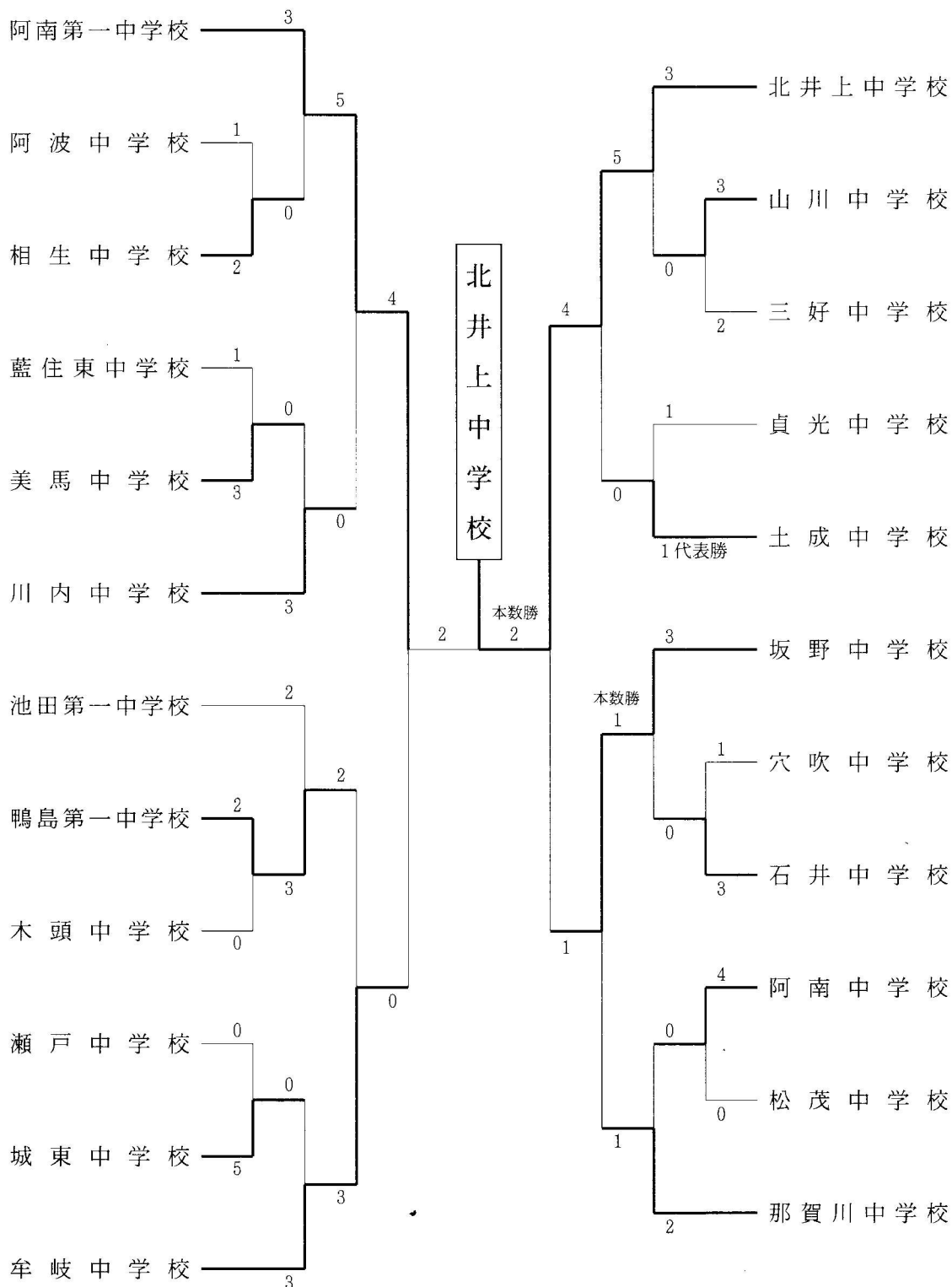
[女子決勝]

学 校 名	先 鋒	次 員	中 堅	副 将	大 将	勝 敗
阿 南 第 一 中	大 西	賀 上	近 藤	仁 木	細 川	2 (3)
	⊗一本勝	⊗×				
北 井 上 中			⊗×	⊗×		2 (4)
	中 川	井 上	森 本	美 馬	加 重	

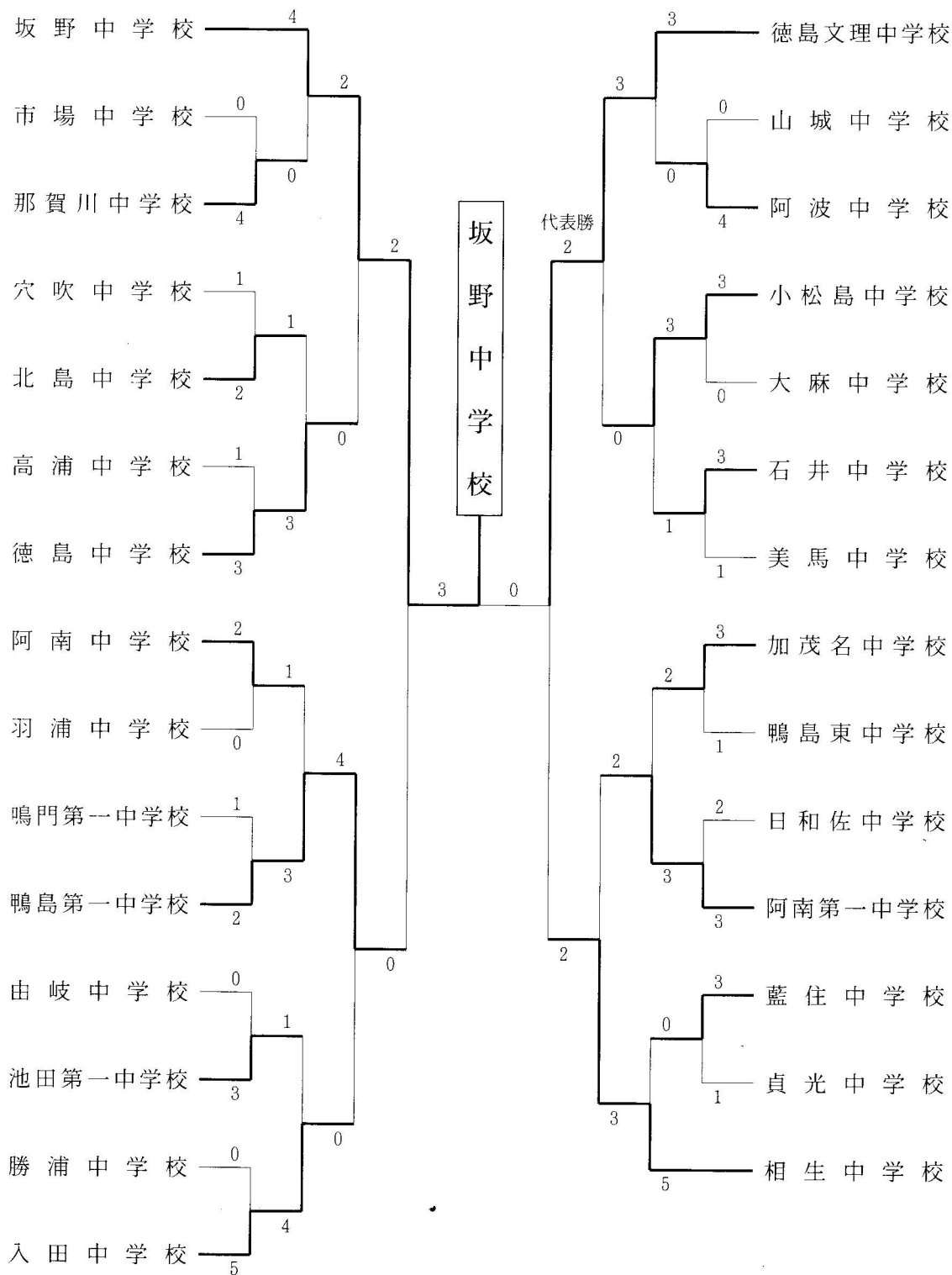
[個人戦]

順 位	男 子	学 校 名	順 位	女 子	学 校 名
優 勝	庄地畠 康 太	徳島文理中	優 勝	大 西 梓	阿南第一中
準優勝	福 川 敬 太	相 生 中	準優勝	西 田 奈 央	相 生 中
第 3 位	松 本 凜太郎	坂 野	第 3 位	高 橋 理 恵	山 川 中
第 3 位	山 田 溪 太	那 賀 川 中	第 3 位	森 本 志 穂	北 井 上 中

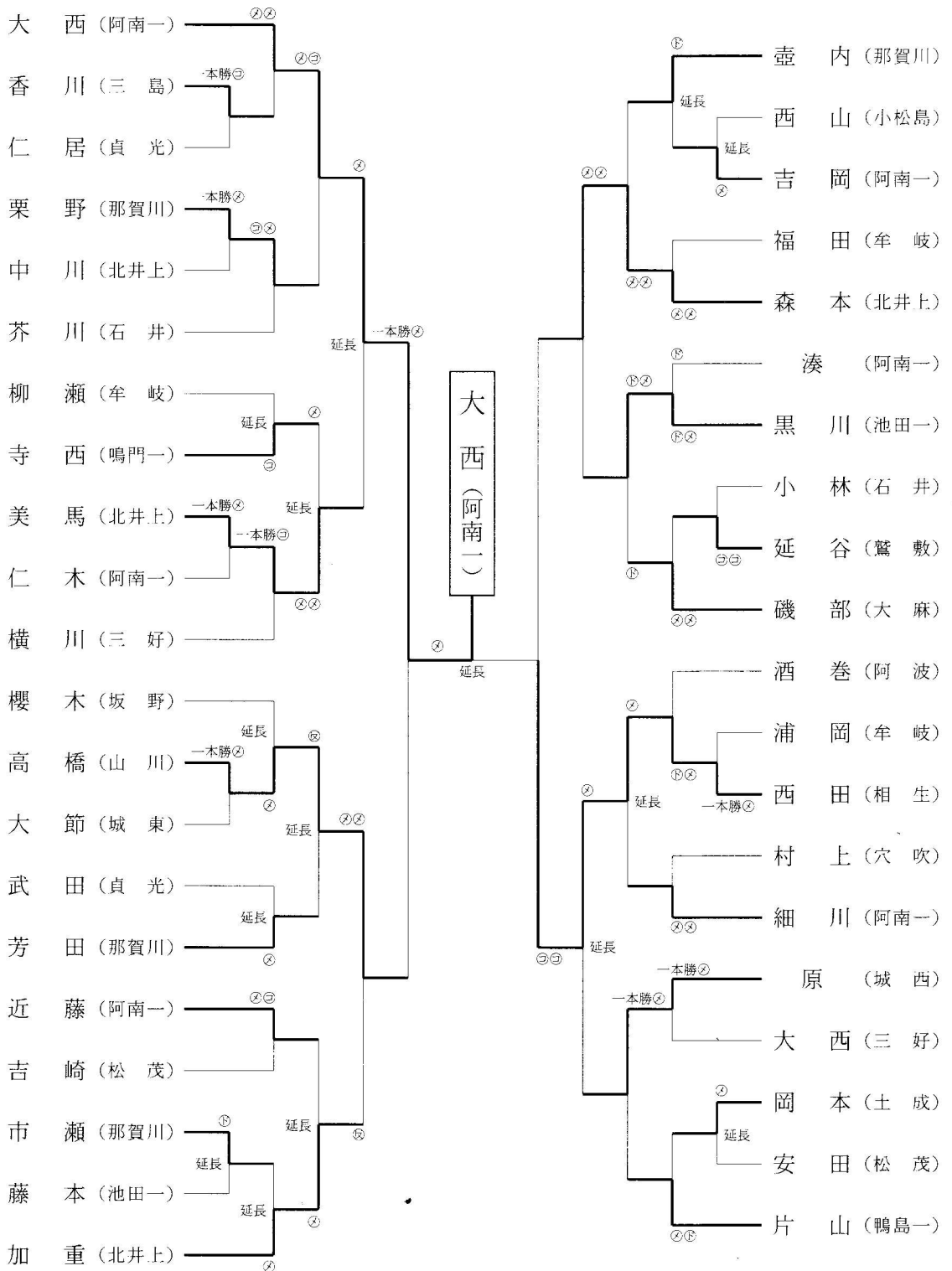
《女子組み合わせ》



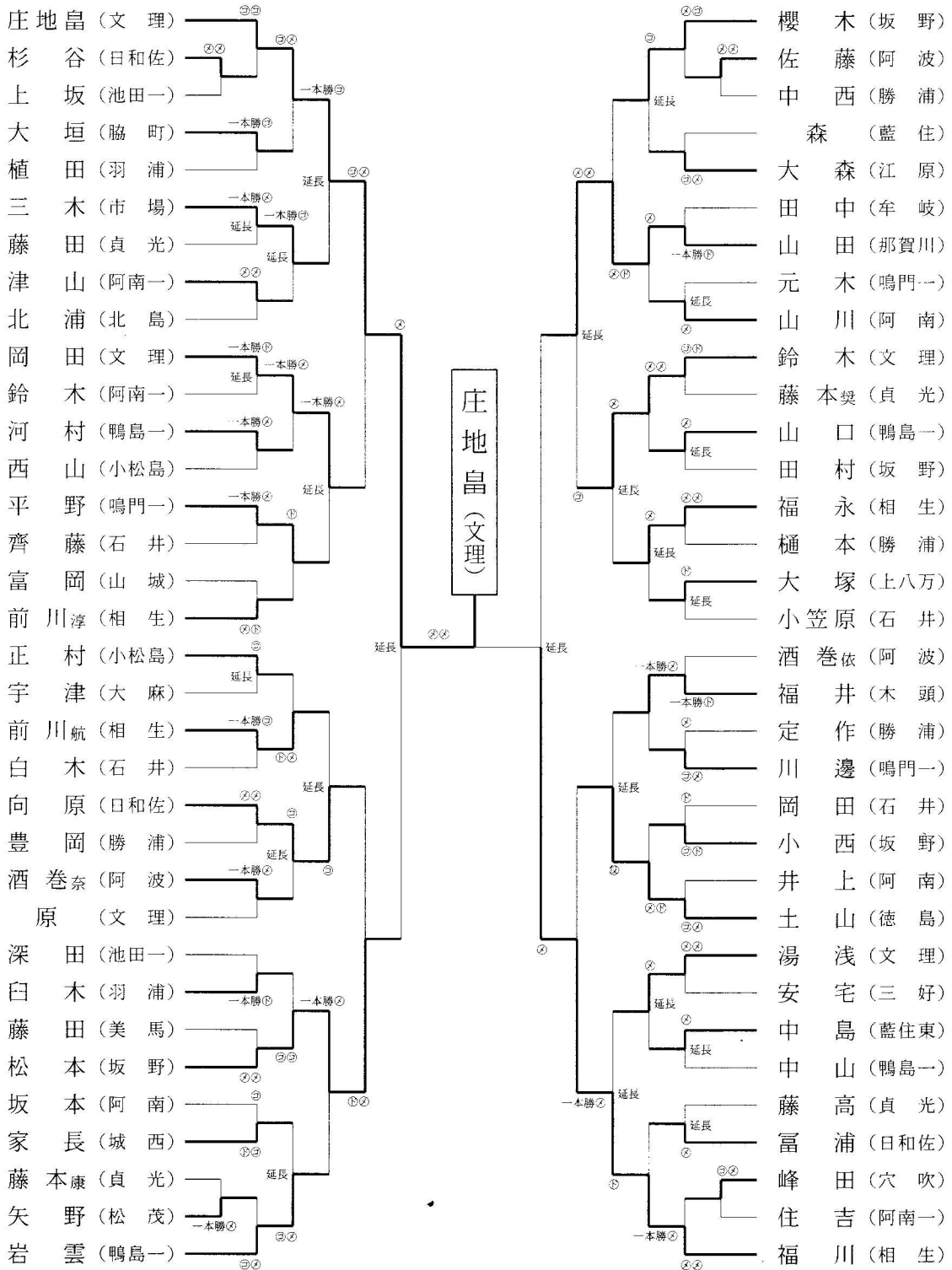
《男子組み合わせ》



《女子個人組み合わせ》



《男子個人組み合わせ》

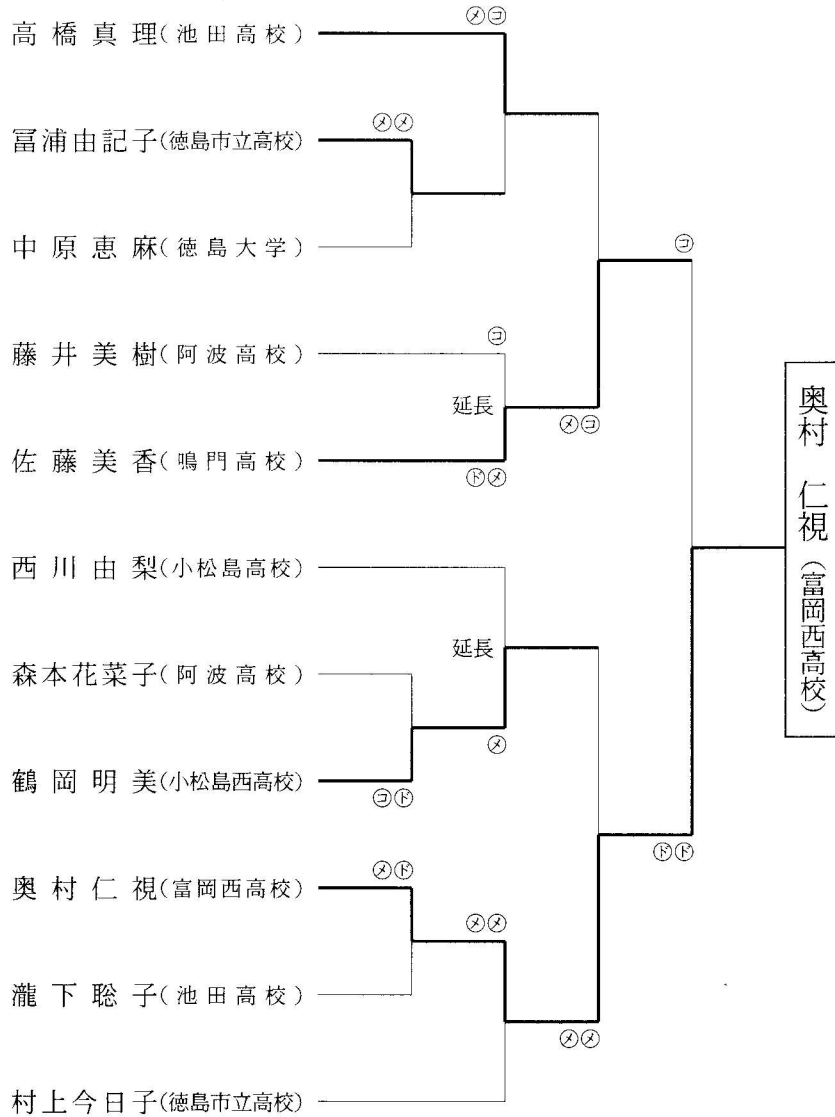


第29回 徳島県剣道段別選手権大会

日時 平成17年11月6日(日) 午前9時
場所 鳴門武道館

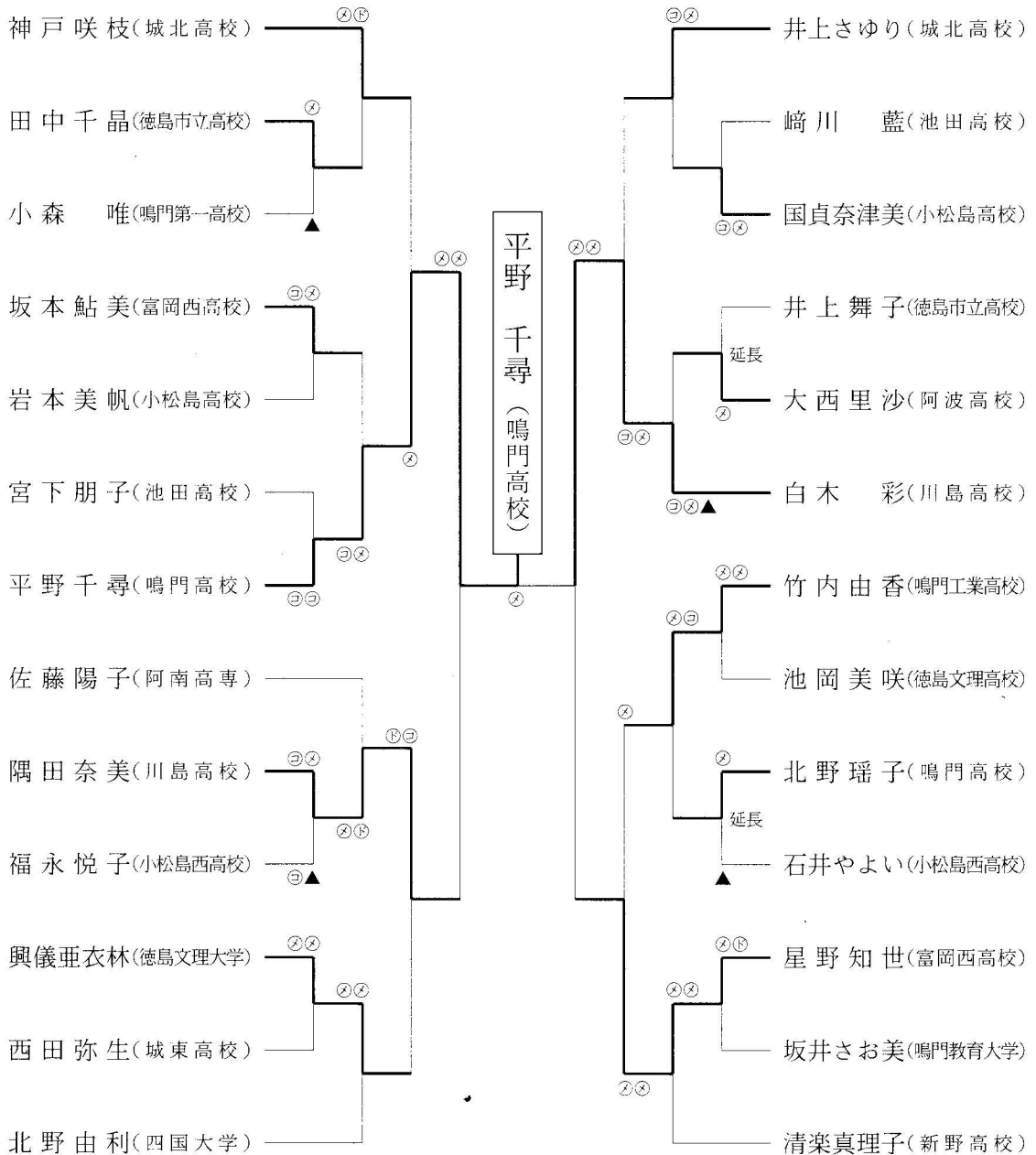
初段の部 (女子)

優勝 奥村仁視 (富岡西高) 三位 高橋真理 (池田高)
準優勝 佐藤美香 (鳴門高) 三位 鶴岡明美 (小松島西高)



二段の部（女子）

優勝 平野千尋（鳴門高） 三位 隅田奈美（川島高）
 準優勝 白木彩（川島高） 三位 星野知世（富岡西高）



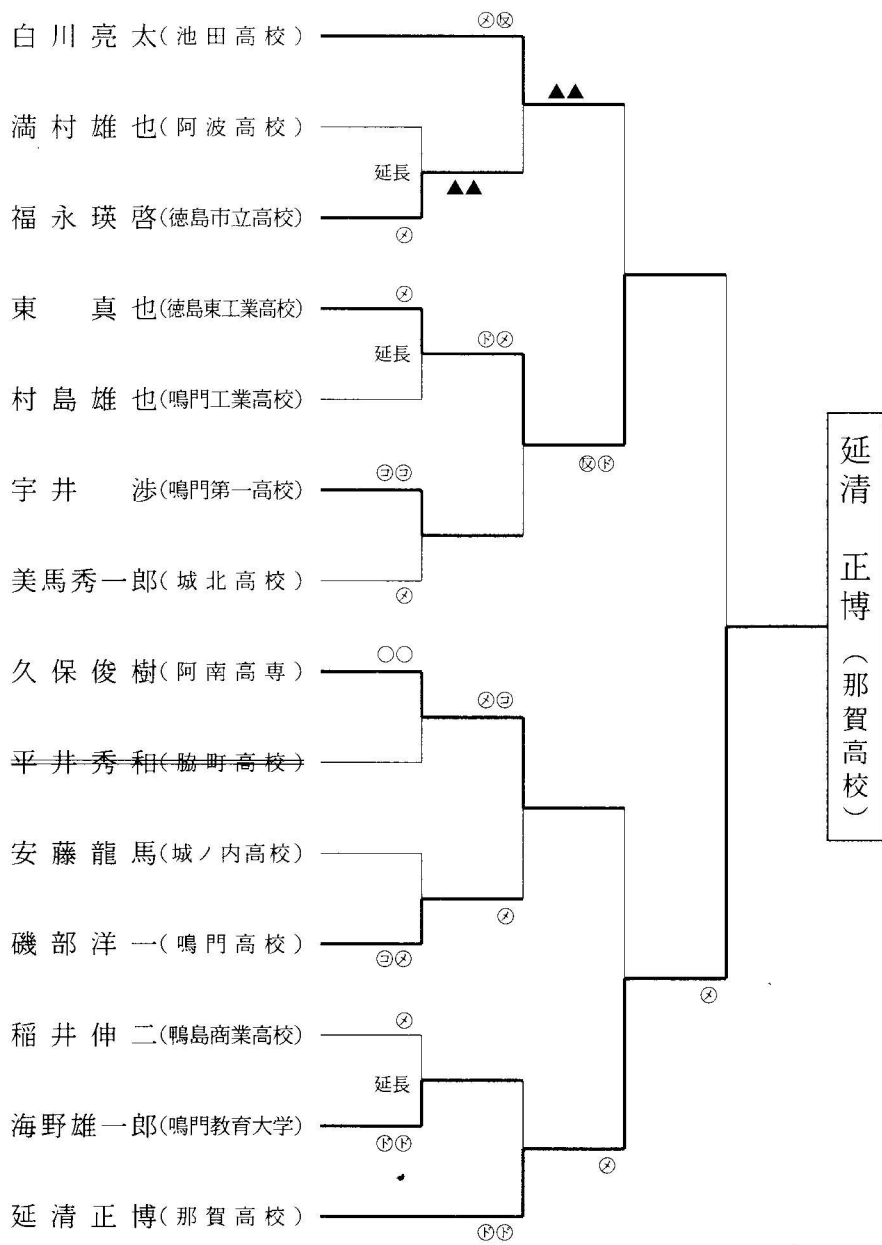
三段以上の部（女子）

優勝 近藤 愛（富岡東高） 三位 山木美智子（四国大）
 準優勝 軸原千恵（鳴門教育大） 三位 住友香織（徳島文理大）



初段の部 (男子)

優勝 延清正博 (那賀高) 三位 白川亮太 (池田高)
 準優勝 東 真也 (徳島東工) 三位 久保俊樹 (阿南高専)



三段の部 (男子)

優勝 横山雄太 (徳島文理大) 三位 森本龍毅 (川島高)
 準優勝 後藤裕二 (徳島東工) 三位 森田拓磨 (徳島文理大)



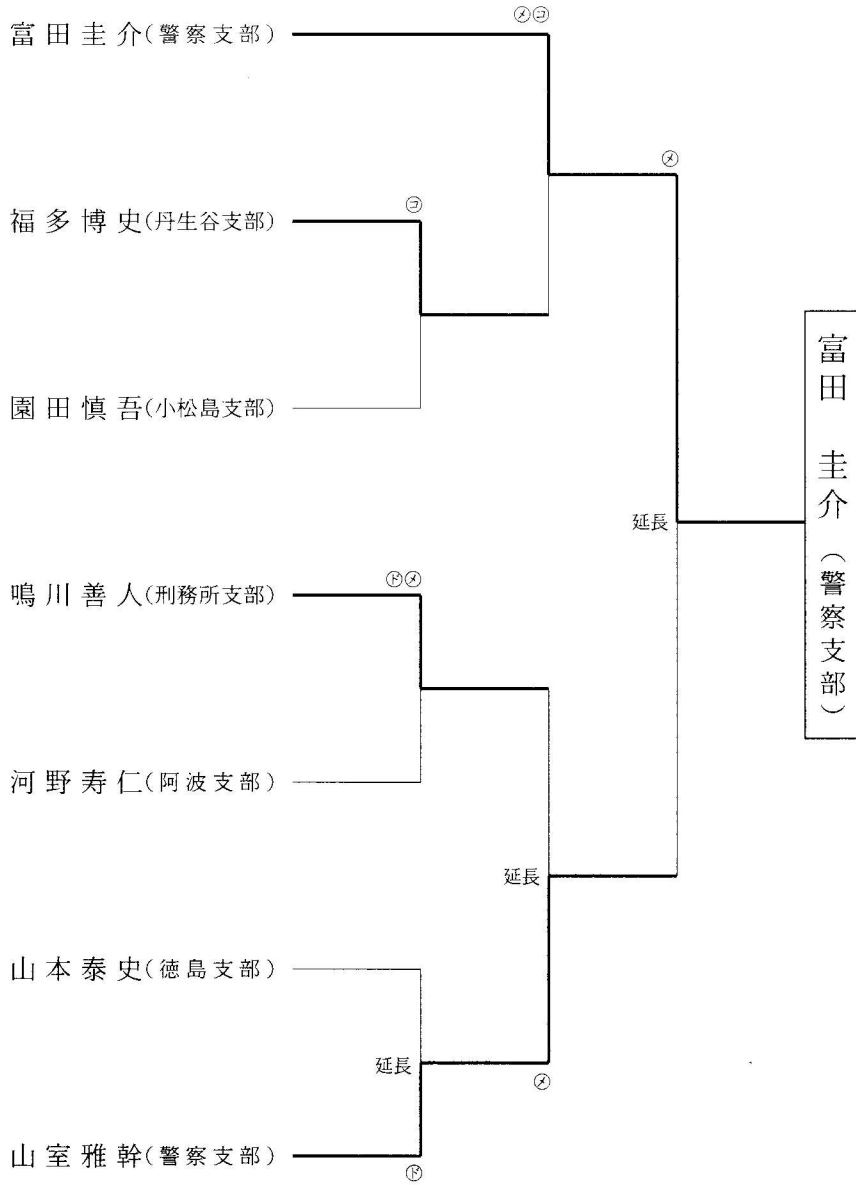
五段の部 (男子)

優勝 川添 義仁 (警察支部) 三位 佐野 伸治 (警察支部)
 準優勝 近藤 正章 (警察支部) 三位 前田 秀一 (刑務所支部)



六段の部（男子）

優勝 富田圭介（警察支部） 三位 福多博史（丹生谷支部）
準優勝 山室雅幹（警察支部） 三位 鳴川善人（刑務所支部）



第34回 徳島県社会人剣道大会

予選リーグ

日時 平成17年10月16日(日) 午前9時
場所 鳴門武道館

A	名西支部	板野西支部	丹生谷支部	海部支部B	勝者数	勝本数	順位
名西支部		⑥/③	⑤/③	⑥/③	3	9	17
板野西支部	△/①		⑤/②	⑥/③	2	6	13
丹生谷支部	△/①	△/②		③/①	1	4	9
海部支部B	△/①	△/①	△/①		0	2	4

B	徳島大学OB	養武館	阿波支部D	勝者数	勝本数	順位
徳島大学OB		④/①	⑧/④	1	5	12
養武館	①/①		⑤/②	1	3	9
阿波支部D	△/①	△/①		0	1	3

C	上那賀竹友館	麻植支部	阿南支部B	勝者数	勝本数	順位
上那賀竹友館		⑥/③	③/②	1	5	9
麻植支部	△/①		△/①	0	0	1
阿南支部B	③/②	⑦/③		1	5	10

D	板野東支部	鳴門支部A	小松島航空隊	勝者数	勝本数	順位
板野東支部		△/②	△/②	0	4	6
鳴門支部A	⑥/③		△/①	1	3	7
小松島航空隊	④/③	⑥/③		2	6	10

E	海部支部A	徳島支部B	阿南支部D	勝者数	勝本数	順位
海部支部A		⑦/④	⑥/③	2	7	13
徳島支部B	△/①		②/①	0	1	2
阿南支部D	△/①	②/①		0	2	3

F	徳島支部C	美馬東支部A	振武館B	勝者数	勝本数	順位
徳島支部C		③/③	△/①	1	3	5
美馬東支部A	△/①		④/②	1	3	6
振武館B	④/②	③/①		1	3	7

G	阿波支部C	徳島右武館	美馬東支部B	勝者数	勝本数	順位
阿波支部C		⑧/④	⑦/④	2	8	15
徳島右武館	△/①		④/③	1	3	5
美馬東支部B	△/①	△/①		0	0	0

H	徳島支部A	阿南支部大野	阿波支部A	勝者数	勝本数	順位
徳島支部A		③/②	③/①	2	3	6
阿南支部大野	△/①		⑤/③	1	3	5
阿波支部A	△/①	△/①		0	1	5

予 選 リ ー グ

I	阿南支部 A	刑務所支部 B	小松島支部・小	勝 数	勝 者 数	勝 本 数	順 位
阿南支部 A		$\frac{5}{3}$	$\frac{3}{1}$	1	4	8	2
刑務所支部 B	$\frac{1}{0}$		$\frac{1}{1}$	0	1	1	3
小松島支部・小	$\frac{2}{2}$	$\frac{6}{3}$		2	5	9	1

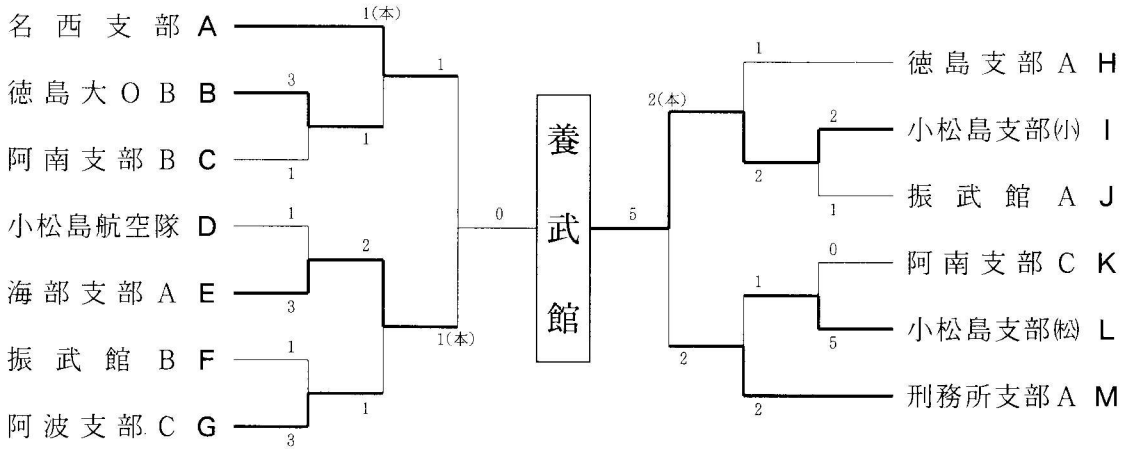
J	振武館 A	鳴門支部 B	三好支部	勝 数	勝 者 数	勝 本 数	順 位
振武館 A		$\frac{10}{5}$	$\frac{6}{3}$	2	8	16	1
鳴門支部 B	$\frac{1}{0}$		$\frac{3}{2}$	0	2	6	3
三好支部	$\frac{1}{1}$	$\frac{7}{3}$		1	4	8	2

K	阿南支部 C	美馬西支部	徳島錬心館	勝 数	勝 者 数	勝 本 数	順 位
阿南支部 C		$\frac{5}{3}$	$\frac{7}{4}$	2	7	12	1
美馬西支部	$\frac{4}{2}$		$\frac{6}{4}$	1	6	12	2
徳島錬心館	$\frac{0}{0}$	$\frac{3}{1}$		0	1	3	3

L	小松島支部・松	吉野川市	阿波支部 E	勝 数	勝 者 数	勝 本 数	順 位
小松島支部・松		$\frac{6}{3}$	$\frac{3}{3}$	2	6	9	1
吉野川市	$\frac{4}{2}$		$\frac{2}{1}$	0	3	6	3
阿波支部 E	$\frac{2}{2}$	$\frac{3}{3}$		1	5	5	2

M	阿波支部 B	刑務所支部 A	小松島支部・島	岫 雲 館	勝 数	勝 者 数	勝 本 数	順 位
阿波支部 B		$\frac{2}{1}$	$\frac{7}{3}$	$\frac{4}{2}$	2	6	13	2
刑務所支部 A	$\frac{8}{4}$		$\frac{9}{4}$	$\frac{6}{4}$	3	12	23	1
小松島支部・島	$\frac{1}{0}$	$\frac{1}{0}$		$\frac{1}{0}$	0	0	4	4
岫雲館	$\frac{1}{1}$	$\frac{3}{1}$	$\frac{6}{3}$		1	5	11	3

決勝トーナメント表



準決勝戦

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	得点
名西支部	富山	鋳形	白木	久保	大西	1 (1)
	⊗ 一本勝					
海部支部 A	丸岡	木下	美馬	富浦	山崎	1 (2)
	⊗ ⊖					

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	得点
小松島支部(小)	佐藤	武蔵	園田	高木	藤川	2 (3)
	⊗ 一本勝					⊗ ⊙
刑務所 A	一本勝 ⊗	一本勝 ⊖	北村	猪野	中村	2 (2)
	金野	前田				

決勝戦

- 優勝 小松島支部(小)
- 準優勝 海部支部 A
- 第3位 刑務所支部 A
- 第3位 名西支部

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	得点
海部支部 A	丸岡	木下	美馬	富浦	山崎	0 (1)
	⊖					
小松島支部(小)	一本勝 ⊖	Ⓛ ⊗	一本勝 ⊗	⊖ ⊖	Ⓛ ⊕	8 (5)
	佐藤	武蔵	園田	高木	藤川	

第16回 徳島県小・中学校剣道強化錬成大会

少年の部 (50チーム)

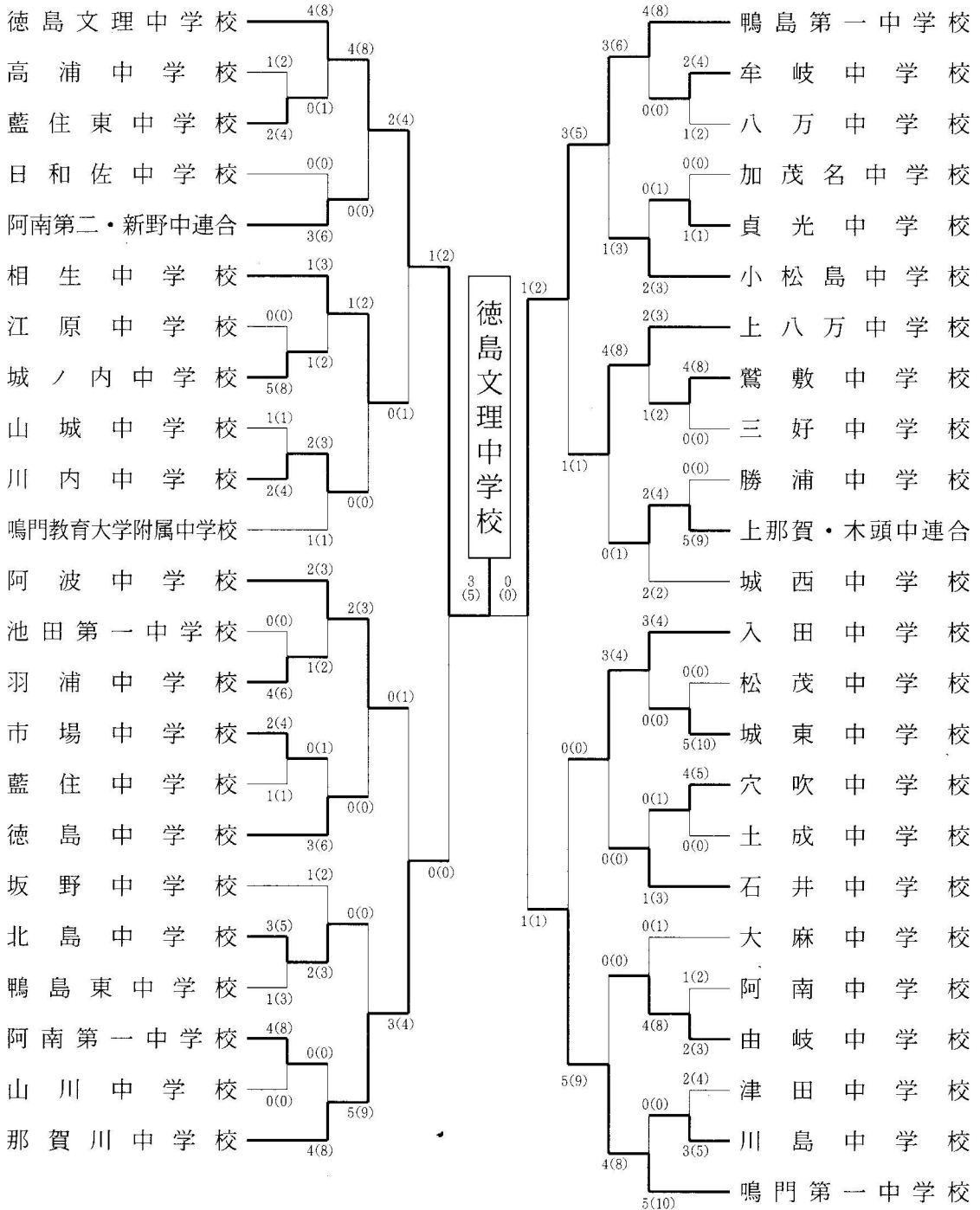
- 優勝 那賀川B & G 剣道教室
 準優勝 木頭 錬心会
 第3位 徳島 至誠館
 第3位 小松島 少剣クラブ

日時 平成18年1月29日(日) 午前9時
 場所 鳴門県民体育館



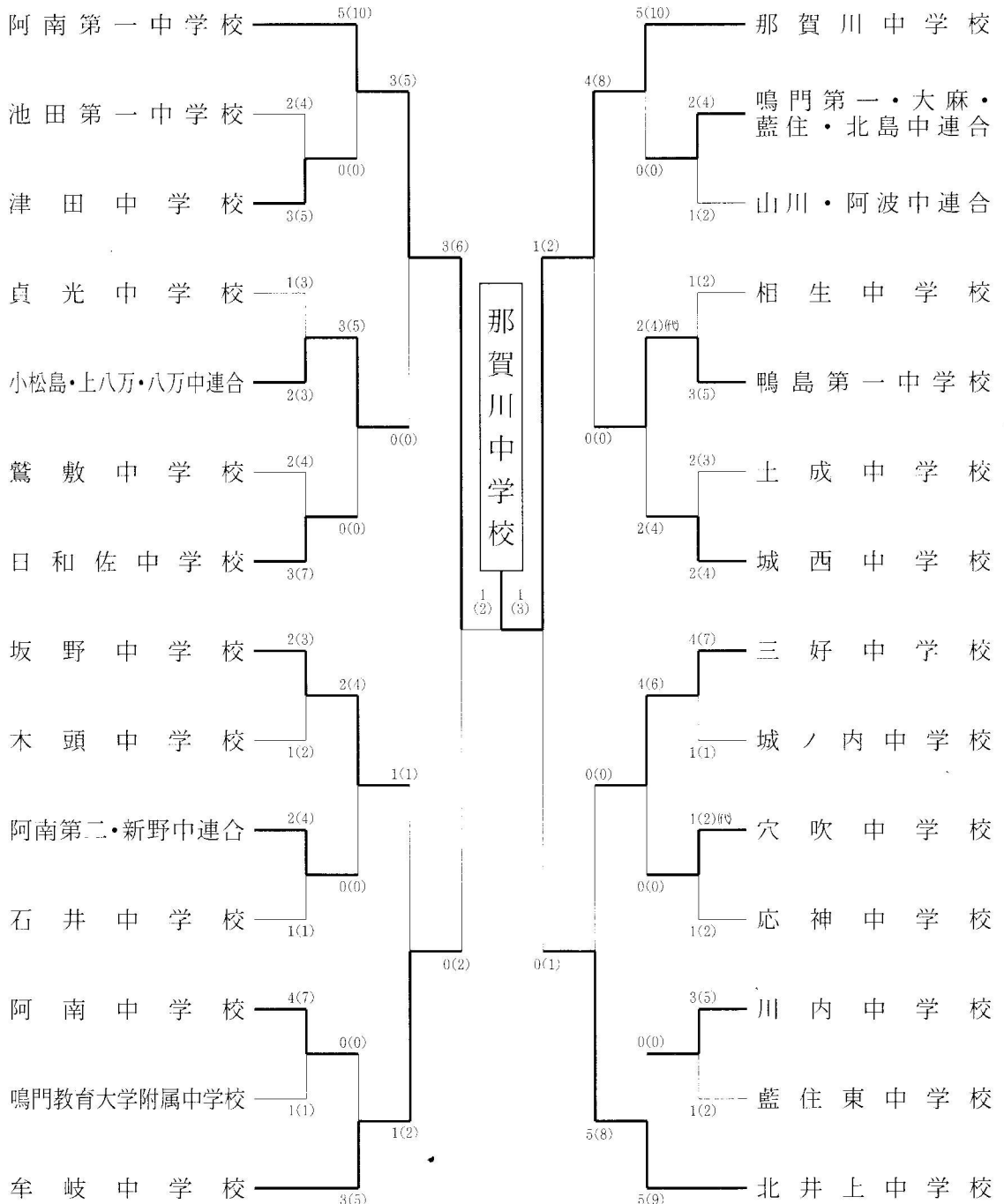
中学校男子 (47チーム)

優勝 徳島文理中学校
 準優勝 鴨島第一中学校
 第3位 那賀川中学校
 第3位 鳴門第一中学校



中学校女子 (28チーム)

優勝 那賀川中学校
 準優勝 阿南第一中学校
 第3位 牟岐中学校
 第3位 北井上中学校



準決勝戦 (少年の部)

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
徳島至誠館	湯浅	生島	山西	岩原	住友	
	⊗	⊗				$\frac{2}{1}$
那賀川 B & G		⊙ ▲	⊗	⊙		$\frac{3}{2}$
	井上	澤田	那佐	谷口	井上幹	

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
小松島少剣	南谷	青木	長谷川	山川	岡内	
	⊗		Ⓛ			$\frac{2}{1}$
木頭錬心館			⊗	⊙	⊙	$\frac{3}{2}$
	高石	久保	小藪	廣井	小野	

準決勝戦 (中学男子)

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
徳島文理 中学校	淀谷	松本	湯浅	岡田	鈴木	
		▲			Ⓛ ⊗	$\frac{2}{1}$
那賀川 中学校	▲			▲		$\frac{0}{0}$
	小濱	中野	小西	松本	山田	

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
鴨島第一 中学校	桑原	小倉	笠井	立石	河村	
				⊗ ⊙		$\frac{2}{1}$
鳴門第一 中学校			Ⓛ			$\frac{1}{1}$
	元木	福居	平野	小倉	川邊	

準決勝戦 (中学女子)

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
阿南第一 中学校	仁木	品川	湊	湯浅	近藤	
	Ⓛ ⊗	⊙ ⊙		Ⓛ	⊙	$\frac{6}{3}$
牟岐中学校				⊙		$\frac{2}{0}$
	福田	上田	浦岡	藤井	柳瀬	

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
那賀川 中学校	栗野	今川	岩原	木村	市瀬	
	⊗			⊗		$\frac{2}{1}$
北井上 中学校			▲	⊗		$\frac{1}{0}$
	森本	菊岡	三馬	竹内	加重	

決勝戦（少年の部）

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
那賀川	井上	澤田	那佐	谷口	井上幹	
B & G				㊟ ㊟		$\frac{2}{1}$
木頭錬心館					▲	$\frac{0}{0}$
	高石	久保	小藪	廣井	小野	

決勝戦（中学男子）

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
徳島文理	曾根	松本	湯浅	岡田	鈴木	
中学校		▲	㊟	㊟ ㊟	㊗ ㊗	$\frac{5}{3}$
鴨島第一		▲				$\frac{0}{0}$
中学校	桑原	小倉	笠井	立石	河村	

決勝戦（中学女子）

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
阿南第一	仁木	品川	湊	湯浅	近藤	
中学校	㊗ ㊗					$\frac{2}{1}$
那賀川		㊟ ㊟			▲	$\frac{3}{1}$
中学校	栗野	今川	岩原	木村	市瀬	

徳島新聞に見る戦いの跡

4月18日

5月2日

富岡西 2年連続制覇

女子 富岡東19度目の栄冠

県剣道連盟会長杯高校

剣道の第30回徳島県連盟会長杯高校大会は17日、城西高体育館で行われ、男子決勝は富岡西が3-1で阿南工を下して連覇した。女子決勝は富岡東が3-0で川島に勝ち、2年ぶり19度目の優勝を果たした。

【男子】1回戦 徳島市立4-1海部、那賀4-1阿南高専、城東2(代表戦勝)2池田、辻4-1鳴門、2回戦 徳島市立1-0徳島文理、脇町4-1城南、城北5-0徳島工、阿南工5-0那賀、富岡西4-0城東、阿波5-0鳴門、徳島東工5-0水産、川島5-0辻、準々決勝 徳島市立4-0脇町、阿南工2-1

城北、富岡西1(代表戦勝)1阿波、川島3-0徳島東工、連決勝 阿南工3-1徳島市立、富岡西2-1川島、3位決定戦 川島4-0徳島市立

▽決勝
富岡西3-1阿南工
○横手、メコ、岩沙、岸、メ、美馬、櫻木

【女子】1回戦 池田3-2小松、阿波3-1城西、城北2-1鳴門、川島4-0辻、徳島市立4-1城南、新野3-1徳島北、準々決勝 富岡東5-0池田、城北5-0阿波、川島5-0徳島市立、富岡西3-1新野、準決勝 富岡東4-0城北、川島2-1富岡西、3位決定戦 富岡西4-1城北

▽決勝
富岡東3-0川島

○横山、コ、井口、河田、メ、山田、近藤、コ、田尾、山田、コ、栗原、細川、白木

都道府県対抗剣道 徳島1回戦敗退

岡山が連覇
剣道の全日本都道府県対抗優勝大会は1日、大阪市中央体育館で行われ、岡山県が2年連続3度目の優勝を果たした。徳島県は1回戦で宮崎県に1-4で敗れ

宮崎	徳島	岡山	兵庫	大阪	静岡	岡山	静岡	岡山	静岡	岡山	静岡	岡山	静岡	岡山	静岡	岡山	静岡	岡山	静岡	岡山
4	1	3	3	4	5	3	3	4	5	3	3	4	5	3	3	4	5	3	3	4
1	1	2	2	1	1	2	2	1	1	2	2	1	1	2	2	1	1	2	2	1
徳島	岡山	兵庫	大阪	静岡	岡山	静岡	岡山	静岡	岡山	静岡	岡山	静岡	岡山	静岡	岡山	静岡	岡山	静岡	岡山	静岡
保	久	今	反	木	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田
保	久	今	反	木	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田
保	久	今	反	木	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田



5月9日

徳島剣友会初の栄冠

個人 下久保(支部)が制す

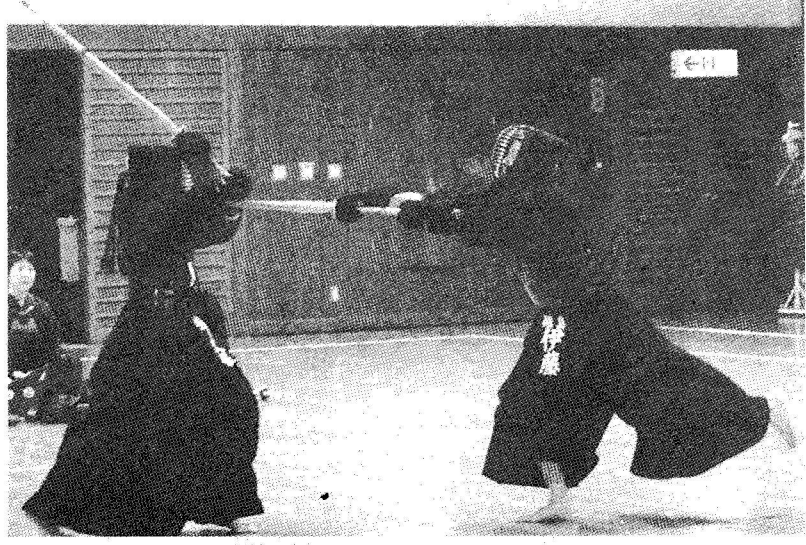
県女子剣道
剣道の第26回徳島県女子
大会は8日、中央武道館で
あり、団体は徳島剣友会が
初優勝を飾った。個人段
以下の部は伊藤(美馬西
部)が制し、三段以上の
部は下久保(支部)が制す。

支部)が栄冠を獲得した。
【団体】I高戦 徳島剣友会2
I徳島支部、なでしあわす
I O徳島文理大、川島OB会
I代表勝ち、I徳島文理大、
鳴教大、I O徳島文理大、鳴決
勝 徳島剣友会、I Oなし、あ
わす、川島OB会、I鳴教大
▽決勝

徳島剣友会 O O 川島OB会
(代表勝) 伊藤 下久保
山田 コメ 北村
平野 玉田
▽代表戦
伊藤 メー 下久保
【個人】二段以下の部準決勝
藤本(徳島大)コト 窪敷(徳

島文理大、坂井(鳴教大)メ
メ 園儀(徳島文理大)
▽決勝
坂井 コト 藤本
▽三段以上の部準決勝 下久保
(美馬西支部)メー 伊藤(阿南
支部)、佳友(徳島文理大)コ
塚原(鳴教大)
▽決勝

下久保 コメ 住友
団体出場へ意欲
○「後がないというプレッシャーよりも一本を取ることに集中していた」。
代表戦にもつれ込んだ決勝でメンを決め、徳島剣友会初優勝の立役者となった伊藤はほっとした表情。
昨春から母校・富岡東高で非常勤講師を務め、剣道部で後輩たちの指導の傍ら練習に取り組んでいる。
「今年の目標は団体に出ること。もう一度あの大会で戦いたい」と、6年ぶりの出場に意欲をみせた。



団体決勝、徳島剣友会対川島OB会 代表戦で攻め込む徳島剣友会の伊藤(左)＝中央武道館

山家旗争奪県下剣道大会で熱戦を繰り広げる参加者



◆第30回山家旗争奪県下大会(4月24日・那賀町B&G海洋センター体育館)

①那賀川②牟岐③阿南第一
 【高校】男子①徳島文理A②阿南工B③徳島市立A④女子①富岡東A②富岡東B③富岡西A
 【個人賞】5人以上勝ち抜き)9人 鎌田崇佐(徳島文理)▽7人 岡田大賢(徳島市立) 石井孝二(阿南工)▽6人 西岡敬太(徳島文理)▽5人 拙友勝也(徳島東工) 奥村隼(阿波) 西田義玄(那賀) 美馬憲太(阿南工) 星野知世(富岡西) 神元育己(阿南工) 細川美幸(富岡東)

4月11日

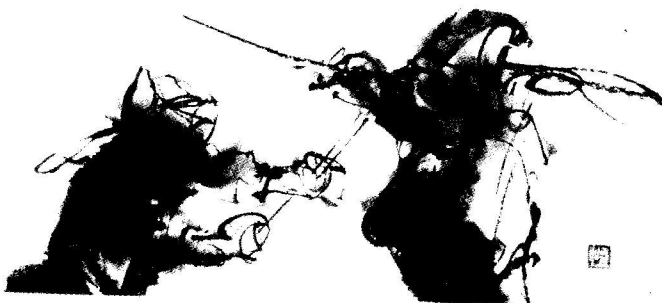
県勢、5年ぶり栄冠

四国4県剣道

剣道の第57回四国四県大会が22日、高松市総合体育館で行われた。各県15人による団体リーグ戦で争い、徳島県選抜(中尾正輝、北條憲治、西谷肇一、近藤巨、福多雅英、富浦廣志、平野誠司、富田圭介、福多博史、前田秀一、佐藤智、今井剛、平野悦子、丸岡亜寿佳、下久保奈々枝)が5年ぶり10度目の優勝を飾った。

成績は2勝1敗で3県が並んだが、得本数で勝者数が同じだった高知県選抜を上回った。
 △リーグ戦 高知5-1愛媛、香川4-3徳島、徳島5-3愛媛、高知4-3香川、徳島5-4高知、香川5-2愛媛
 △順位①徳島2勝1敗②高知2勝1敗③香川2勝1敗④愛媛3敗1-3位は勝者数、得本数による。
 中尾大将の話 女性を含めて20代から60代まで、15選手のチームワークがよかった。4年も優勝から遠ざかっていただけに、本当にうれしい。剣道連盟として長年、週2回の強化練習を続けてきた成果が表れた。

5月23日



県高校総体

6月7日

最終日

富岡東 14連覇

女子

男子は14年ぶり阿南工

剣道

【男子】団体準決勝
文理5-0城東 阿工3-1山馬
▽3位決定戦 川馬4-1城東
▽決勝
阿工 3-1 文理
美馬 1-2 川人
○神元 ヨコ 鎌田

○松本 西岡
○石井 玉田
▽個人決勝リーグ⑤玉田 魁天
(文理)3勝⑥片山(文理)2勝
1敗⑦石井(阿工)1勝2敗⑧松
本(阿工)3敗
【女子】団体準決勝
富東4-1城北 富西2-1山馬
▽3位決定戦 川馬4-1城北

▽決勝
富東 3-1 富西
○横山 坂本
○中野 山崎
○山田 星野
○細川 ト 池田
▽個人決勝リーグ④平野 千尋
(鳴門)3勝⑤細川(富東)2勝
1敗⑥中野(富東)1勝2敗⑦星

野(富西)3敗
阿南・石井 大将戦で優勝を決める1本勝ち
「無心で臨んだ。決まった。子は少し浅いと言ったが、旗が上がったのを見てほっとした」



富岡東 終わって、今年も富岡東だ。これで14連覇。大将戦でメンを決め、優勝を決めた細川は、「瞬相手の面が空いたのが見えた。無心で打った」とし、情、あいつを済ませ、試合場から引き揚げる。チームメイトと抱き合って喜んだ。

富岡東 富岡東と富岡西の星野との対戦は見応えがあった。延長戦でメンを取った中野は、「相手の得意とするコートを警戒しつつ、集中が切れた相手の一瞬のすきを攻めることができた」と喜んだ。

富岡東 全国総体では、これまで3位が3回、ベスト8が5回と輝かしい実績を持つが、4年前の3位を最後に予選リーグを突破できなかった。「まずは予選リーグ突破が目標」と声を合わせた選手たち。真夏の大会の伝統校復活に向け、あらためて気持ちを一つにした。(石津)



女子団体決勝・富岡東対富岡西 大将戦でメンを決める富岡東の細川(左)＝城西高体育館

坂野、初の栄冠

女子 阿南一が制す

県中学剣道

剣道の第34回徳島県中学校選手権大会は11日、鳴門武道館で男子53校、女子28校が出場し、団体戦を行った。男子は坂野が初優勝、女子は阿南一が3年ぶり5度目の優勝を飾った。

○大森、加茂客3、高浦、牟岐	坂野 1-0 相
3-0 城西、穴吹2、藤住東	榎木メー
阿南4-0 松茂、北島3-0 園	田村
府、石井2-1 江原、阿南1-5	平井
○三好、上八万4、阿南1-木	小西
頭3-1 池田、那賀川4-0 山	松本メー
城、入田1-0 羽浦、新野3-0	福本
川島、由岐4-0 勝浦、城東4	【女子】直嶋、真光2-0 新
1 山川、池田1-3 阿南、脇町	野、木頭0 (代表勝) 0 川内
4-0 青、日和佐4-0 付属、	阿南2-1 土成、山川2 (本数勝
徳島5-0 真光▽2 回戦、坂野5	ち2 八万、穴吹3-0 藤住東、
0 上那賀、市場1 (代表勝) 5	城西3-1 美濃、坂野5-0 付
1 川内、牟岐3-1 加茂、鷲敷	属、相生2 (代表勝) 2 城東、
1-0 穴吹、鳴門1-3 阿南、	三好4-0 石井、池田1-5 0 瀬
阿波3-1 北島、石井2 代表勝	戸、鴨島1-4 0 鷲敷、阿波2
0 2 阿南、上八万2-1 小松	(本数勝) 2 志神2 回戦、阿
農、相生5-0 木頭、那賀川3	南1-4 0 真光、阿南1-0 木
2 入田、新野2-1 志神、鴨島1	頭、山川2-1 穴吹、牟岐4-0
3 0 由岐、城東4-0 土成、池	城西、那賀川3-1 坂野、三好3
田1-3 2 善住、日和3-0 脇	南1-0 (代表勝) 0 阿南、牟岐
町、徳島文理3-1 徳島3 回戦	4 0 山川、那賀川3-0 三好、
坂野5-0 市場、牟岐3-1 鷲	南2-1 牟岐、那賀川2-0 北
敷、鳴門1-3 1 阿波、上八万2	井上
1 石井、相生3-0 那賀川、鴨	▽決勝
島1-4 0 新野、津田1-2 (本数	阿南 1-1 1
勝) 2 城東、徳島文理4-1 白	(本数勝)
和佐▽準々決勝、坂野5-0 牟	阿南 1-1 1
岐、上八万2 (代表勝) 2 鳴門	阿南 1-1 1
1、相生5-0 鴨島、徳島文理	阿南 1-1 1
5-0 池田▽準決勝、坂野4-	阿南 1-1 1
0 上八万、相生1 (代表勝) 1	阿南 1-1 1
徳島文理	阿南 1-1 1
▽決勝	阿南 1-1 1

6月12日



剣道

◆第25回三浦旗全国招待少年大会(5月8日・新居浜市民体育館) 徳島県関係の記録。 徳島至誠館(先) 決勝 徳島至誠館3-0

【小学校低学年】準々 陶器春風館(大阪)▽準 決勝 徳島至誠館3-0

録。 田村隆成、次鋒 玉 田理沙子、中堅 上田雅 大、副将 高木勝己、大 得 岩原将平) 3-0 東

【中学校】準々決勝 宋栗連盟(兵庫) 4-0 鳴門市光武館、徳島 文理中4-0 新居浜南 中2-1 宋栗連盟▽決 勝 徳島文理中3-1 久 枝会



三浦旗全国招待少年剣道大会小学校低学年の部で準優勝を果たした徳島至誠館(左から)田村くん、上田くん、玉田さん、高木くん、岩原くん



東かがわ市武道大会、剣道小学校低学年の部で準優勝した羽ノ浦至誠館(前列)と優勝した徳島至誠館

6月8日

岡山養徳館▽決勝 昇竜 館一福道場(岡山) 3-1 徳島至誠館

【小学校】低学年①徳島至誠館(先鋒) 田村隆成、次鋒 高木勝己、中堅 玉田理沙子、副将 上田雅大、大将 岩原将平) ②羽ノ浦至誠館(朝田大樹、玉田真子、福田鏡斗、佐々木雨波、福田篤己)▽高学年③徳島至誠館(山西浩平、味間修一、住友勇輝、生島大空、湯浅絵里加)

◆第3回東かがわ市武道大会(5日・白鳥神社境内) 徳島県関係の記録。 【小学校】低学年①徳島至誠館(先鋒) 田村隆成、次鋒 高木勝己、中堅 玉田理沙子、副将 上田雅大、大将 岩原将平) ②羽ノ浦至誠館(朝田大樹、玉田真子、福田鏡斗、佐々木雨波、福田篤己)▽高学年③徳島至誠館(山西浩平、味間修一、住友勇輝、生島大空、湯浅絵里加)



女子決勝・積極的に攻め込む伊藤⑤
(阿南支部) 二鳴門武道館

全日本剣道選手権大会

徳島県予選会を兼ねた20

男子 富田 (警察支部)
女子 伊藤 (阿南支部)

全国へ

05年度県選手権と女子選手権は10日、鳴門武道館に男子37人、女子8人が参加して行われ、男子は富田圭介(警察支部)が3年ぶり3度目、女子は伊藤奈津子(阿南支部)が6年ぶり2度目の優勝を飾った。
富田は第53回全日本選手

7月11日

権大会(11月3日・日本武道館)、伊藤は第44回全日本女子選手権大会(9月4日・藤枝市)に出場する。
【男子】準々決勝 川添(警察支部)メー 佐野(警察支部)、富田(警察支部)コ一 福多(丹生谷支部)、佐藤(警察支部)コ一 藤田(丹生谷支部)、山名(警察支部)メー 敦賀(警察支部)▽準決勝 富田ト一 川添、佐藤メー 山名
▽決勝 富田メー 佐藤
【女子】準決勝 伊藤(阿南支部)コ一 下久保(美馬西支部)、中山(阿南支部)メー 軸原(鳴教大)▽決勝 伊藤メー 中山

延長戦の末、制す



○…5分間の試合時間で決まらず、11分40秒にも及ぶ延長戦の末、つばぜり合いからの引きメンで女子を制した伊藤II写真。「タイムリングを狙っていた」と笑顔で振り返った。
前回の優勝は富岡東高3年生だった6年前。立命大1年で3位となり、出場はそれ以来。現在は母校で非常勤講師として、女子剣道部を指導しながら自身も練習に励んでいる。
教員採用試験を控え、出場を迷ったが「出てよかった。体もよく動いた」。全日本選手権は6年ぶりとなるが「しっかり練習を積み、2回戦で敗れた前回よりも上を目指したい」と健闘を誓った。

「集中して戦えた」



○…「1日6試合は体力的にきつかったが、最後まで集中して戦えた」
男子で3年ぶりに王座に返り咲いた富田II写真IIは、疲れた表情を見せながらも満足感を漂わせた。
12日に35歳の誕生日を迎える。今大会は出場選手中、最年長だった。しかし毎朝1時間、素振りセラリングを欠かさないベテランは、体力の衰えを感じさせない竹刀さばきを披露。
「全日本選手権でも今日のように1試合1試合、集中して戦いたい」と、2回戦で敗れた前回以上の成績へ意欲をみせた。

日々の鍛錬 剣の腕磨く



徳島県中学校総合体育 講師、写真。「有効打の 一九九八年七月に外国
大会の剣道（鳴門武道 見極め、つばせり合いを 語指導助手（ALT）とる。奥の深さが剣道の魅
館）で審判を務めたカナ 引き離すタイミングなど）して来日。同市内の中学 力。将来はカナタに帰る
が出身のフリップ・ト 審判は難しい。まだまだ 校で英語を教える傍ら阿 かもしれないが、剣道は
クリンさん（三）阿南 勉強が足りません」と流 南一中で剣道部の練習に 一生続けるつもりです」
市見能林町青木、外国語 ちような日本語で話す。 参加した。ALTの任期 と声を弾ませた。

ぴーぷる

8月6日

を終えて四年がたつ現在
も同校の練習に毎日通
い。今年二月に三段に昇
段。これを機に小中学生
の各種大会で審判を任さ
れるようになった。
八大会目となった県総
体では一試合で主審も務
めはじめ「勝負あり」
と大きな声を出しながら
自信たっぷりに判定。

「一つ目標をクリアす
る。必ず次の壁が出てく
る。奥の深さが剣道の魅
館」

3年ぶりに出場権 少年女子

8月22日

（鳴門武道館）
少年男子リーグ戦の優勝3
勝④高知2勝③徳島1勝②取
④香川3敗
優勝、高知が団体に出場。
少年女子リーグ戦④高知3
勝③香川2勝②徳島1勝①勝
④徳島3敗
高知が団体に出場。
少年女子リーグ戦①香川2
勝①取②徳島2勝①取③徳島1勝
2敗④高知1勝取①1、2位と
3、4位は勝者数による。



剣道少年女子リーグ戦・徳島対香川 大将戦でメンを決める徳島の平野④
（鳴門武道館）

（徳島県剣道連盟）
少年男子 団体総合優勝④松
川正憲（徳島、マールック）
66・8点（スピード&ン）ティエ
ス①高橋肇人（徳島、マジラム
II）53秒06②松本（徳島、ルミエ
ール）55秒36
少年女子 2段階層書昇級①
赤井華也（徳島、マジヨラム）
25秒24、総減点④坂東（徳島、
フレクトロ）43秒86①1走行
員 総減点4
少年男子 スピード&ンテ
ィス④藤原（徳島、ダスティン
ル）51秒75⑤岩本（徳島、ピサ
ノカッシー）41秒75⑥団体障
害昇級①回戦 香川 総減点4 徳
島 総減点8
徳島は成年男子団体総優勝は
26種目で出場権を獲得。

剣道野試合 伝統を継承

阿波市の八幡神社

体育の日の十日、阿波市町屋敷の八幡神社境内で奉納演武大会（同神社剣道同志会主催）があり、大勢の少年剣士が県内では珍しい野試合を繰り広げた。八幡神社は、連合軍総司令部（GHQ）の意向で武道が抑圧された敗戦直後、剣道愛好者が人目をばっかりながら練習を続けた道場の一つ。冬の時代にも脈々と生き続けた剣道の伝統を継承しようと、二〇〇三年から始まった大会も今年で三回目。地域の行事として定着しつつある。



八幡神社境内で熱戦を繰り広げる少年剣士。阿波市町屋敷

戦後の地域行事に定着

戦後の越え
抑圧

戦後、GHQは軍国主義と武道の深い結び付きを懸念し、全日本剣道連盟の前身に当たる大日本武徳会に解散を指令。幹部は公職を追われた。剣道自体が禁じられたわけではないが、武徳会の解散は剣道禁止令と同等の効果を持ち、教育施設での練習ができなくなった。同志会によると、そんな時代に旧阿波、旧麻植両郡内で剣の道を志す人たちが集い、鍛錬を重ねたのが、幕末のころから地域の道場としての役割を担っていた八幡神社だった。

この日の奉納演武大会には阿波、吉野川両市内の小中学生計九十三人が出場。土の上に石灰で線を引いた一つの試合場で

戦後、GHQは軍国主義と武道の深い結び付きを懸念し、全日本剣道連盟の前身に当たる大日本武徳会に解散を指令。幹部は公職を追われた。剣道自体が禁じられたわけではないが、武徳会の解散は剣道禁止令と同等の効果を持ち、教育施設での練習ができなくなった。同志会によると、そんな時代に旧阿波、旧麻植両郡内で剣の道を志す人たちが集い、鍛錬を重ねたのが、幕末のころから地域の道場としての役割を担っていた八幡神社だった。

この日の奉納演武大会には阿波、吉野川両市内の小中学生計九十三人が出場。土の上に石灰で線を引いた一つの試合場で

奉納大会で少年熱戦

10月11日

頑張ってます



実業団大会で上位狙う

徳島県内では数少ない実業団の剣道部。高校や大学まで剣道をしていた社員が「実業団の全国大会で上位を目指そう」と集まり、2002年に結成された。

03年の全日本実業団大会ではベスト16入り。日亜化学の名前を全国の剣道関係者に知らせた。

部員は現在12人で、22歳から35歳までの若いチーム。合同練習は、毎週木曜日の午後7時からの約1時間だけだが、大半が交代勤務職場のため、全員が集まることはほとんどない。そのため、選手個々が仕事の

合間を見つけて技を磨き、全日本大会に備えているという。

9月19日に東京・日本武道館で開かれた今年の特選実業団大会には20歳代前半の若手部員5人で挑んだ。2年前の再現はならなかったが、5回戦まで勝ち上がり、ベスト32に入る健闘をみせた。

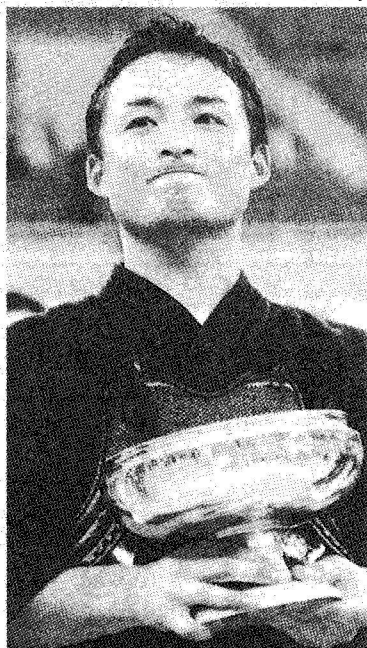
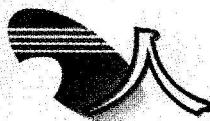
監督を務めている園田慎吾さん(34)＝六段＝は「若手中心で臨んだが、今後につながるいい試合ができた。来年はさらに上位を目指したい」と意気込んでいる。

日亜化学剣道部「剣志会」(阿南市)

10月12日

全日本剣道選手権で初優勝した

はらた さとる
原田 悟さん



小学四年生で剣道を始めた。福島・福島高、筑波大時代を含め、縁のなかった全国レベルの大会での個人優勝。それを全日本選手権という大舞台で成し遂げた。「全部の試合が苦しかった。自分との戦いだった」。栄冠を手にした余韻に浸った。

九年前、初出場でいきなり二位に入った。そのことが精神的な負担になり続けたという。「周りか
ら強豪という目で見られた。自分の力と周囲の期待とのギャップに悩んだ時期もあった」と明かした。そんな葛藤(かっとう)を猛練習で克服した。所属は警視庁第三機動隊だが、剣道特別訓練員として日々練習を続けている。早朝、午前、午後を合わせ約五時間のけいこを積む。一月から三月までは下半身強化のため、一日十キ以上

の長距離走もこなす。

去年は二度目の準優勝に終わった。翌日の食卓で、妻の徳子さんから言葉を掛けられた。「二位になったけど、毎日、朝から頑張っている姿を見ている。わたしはそんなあなたを理解している」。頂点に立つまでの支えになった。

「一心不乱」が座右の銘。「身体能力が素晴らしい人は多くいる。それに対抗するには気持ちいい」。強い信念を持ってやっている。日本一になっても、チャレンジャー精神で鍛錬に励むという。

徳子さんとは共働き。休みの日は、普段なかなか相手ができない息子の光ちゃんと遊ぶことが、もっぱらの楽しみになっている。福島県伊達市出身。三十二歳。

11月4日

富岡東が14連覇

男子 徳島文理は2度目

県高校新人剣道

剣道の全国高校選抜大会徳島県予選を兼ねた第50回男子、第40回女子県新人大会は15日、城西高体育館に男子20校、女子12校が参加して熱戦を展開した。男子は徳島文理が2年連続2度目、女子は富岡東が14年連続20度目の栄冠に輝き、全国大会(3月27、28日・愛知県)出場を決めた。

四国大会(2月19日・松山市)には、男女とも上位4校が出場する。チーム一丸の勝利

○：阿南工に競り勝ち、連続
ち、連覇
を果たした男子の
徳島文
理。全
員が攻めの姿勢を失わず、最後までよくつないでくれた。玉田主将



【男子】1回戦 海部5〇鳴門1、城北5〇城南、徳島市立4―那賀、池田3〇藤野2
2回戦 阿南工5〇海部、阿南高専3〇鳴門工、徳島北4〇城内、城北4―城東、川島2―徳島市立、富岡西2―阿波、徳島東工5〇六吹、徳島文理5〇池田、準々決勝 阿南工4―阿南高専、城北5〇徳島北、富岡西1(代表勝)1―川島、徳島文理4―徳島東工、徳島文理4―阿南工4―〇城北、徳島文理3―富岡西3位決定戦 富岡西3

【女子】1回戦 徳島東5〇川島、徳島市立4―那賀、池田3〇藤野2
2回戦 阿南工5〇海部、阿南高専3〇鳴門工、徳島北4〇城内、城北4―城東、川島2―徳島市立、富岡西2―阿波、徳島東工5〇六吹、徳島文理5〇池田、準々決勝 阿南工4―阿南高専、城北5〇徳島北、富岡西1(代表勝)1―川島、徳島文理4―徳島東工、徳島文理4―阿南工4―〇城北、徳島文理3―富岡西3位決定戦 富岡西3

写真1は、チームワークの勝利を強調した。決勝で1―1の均衡を破り、2本勝ちで連覇を

手繰り寄せた副将・片山は「少しでも有利な状況で大将につなごうと、攻め続けた」と満足そう。玉田監督は「いいスタートが切れた。全国もこの勢いで勝ち上がった」と意欲をみせた。
大分遠征の成果
○：「年末の大分遠征で強豪にもまれた成果が表れた」。女子決勝の中堅戦で2本勝ちし、富岡東の14連覇を決めた1年生・中野由は満面の笑みを浮かべた。
準決勝の城北戦で1人が敗れた以外、すべてストリート勝ちした富岡東。決勝では5人全員が2本勝ちと、安定した戦



女子決勝・富岡東対川島 中堅戦で富岡東の中野由(左)がメンを決める。城西高体育館

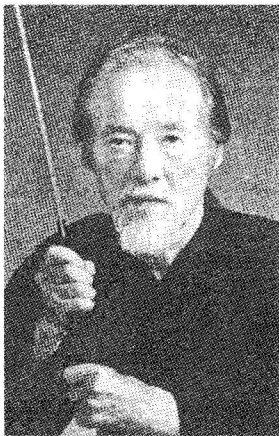
いぶりだった。四国、全国大会に向けて細川主将は「打ちの強さ、足さばきにもっと磨きをかきたい」と力強く話した。

1月16日

少年剣士育て半世紀、寺西さん(鳴門市)死去

教え子、大先生に恩返し

ゆかりの大会で優勝



亡くなった寺西慶裕さん

半世紀以上にわたって千五百人を超える剣士を育成した鳴門市撫養町木津の寺西慶裕さん(剣道教士七段)が七日、心不全のため七十七歳で亡くなった。くしくも翌日は、寺西さんの名前を冠した「第八回寺西杯争奪選抜少年剣道大会」。子供たちは喪章をつけて試合に挑み、七年ぶりに団体優勝、通夜の席で霊前に報告した。「大先生(おおせんせい)が勝たせてくれた。これからも教えを守って上手になりたい」と、弟子たちは決意を新たにしている。

寺西さんは井川町出身。戦後、警察官になり各勤務地で道場を借りて剣道教室を開いた。鳴門市では一九六〇(昭和三五)年に少年剣道クラブと、一貫して言い続けた。

第八回寺西杯争奪四国選抜少年剣道大会



寺西さんが亡くなった翌日の大会で優勝した光武館チーム＝鳴門県民体育館

九八年には、道場OBや保護者の協力を得て四国選抜大会「寺西杯」を創設。民間道場主催の大会としては県内最大規模に育てた。

昨年末、体調を崩した。「大会であいさつする」と心待ちにしていた九人が集まった。

現館長の明弘さん(四九)は「開催こそが父の遺志」と、予定通り実施した。遺影が飾られた会場の鳴門県民体育館には、四国四県から小中学生千七百九人が集まった。

光武館チームは、胴を打つのが苦手な子が胴で勝つなど、「胴の寺西と呼ばれた大先生が乗り移ったよ。」(保護者ら)な試合ぶりで快進撃。優勝の瞬間、全員がその場で泣き崩れた。大将を務めた桑島小六年の齋田悟志君(二七)は「みんな大先生のために絶対優勝すると誓って頑張った。うれしかった」。同夜、全員で優勝旗やカップを寺西さんの枕元に届けた。

大先生の死去から約二週間。道場にはこれまでにも増して気合のこもった声が続く。明弘さんは「子供たちが社会に貢献できる人間に育つよう、父の精神を引き継ぎ、指導していきたい」と気を引き締めていた。

1月24日

徳島県剣道連盟事務分掌表

平成十八年四月一日現在



事務局だより

約七年間の感謝

前事務局員 長谷川 陽子



平成十二年二月
事務局として入り
昨年十一月まで約
七年間連盟役員の

先生方をはじめ会員の皆様には大変お世話になりました。山積みの書類に囲まれ、日曜度に開催される行事の準備に追われ何とか皆様のご協力のおかげで努める事ができました。特に女子部の皆様には大変な時には支えて戴き、お手伝い戴き感謝の気持ちでいっぱいです。

事務局に入った当初は寒い時期でよく雪が降りました。雪が降るたび当時理事長をされていた柏原先生が飛んで来られて「はよう帰れ、道路が凍ったら危ないけん」と

安じてくれました。生前一度だけ稽古をお願いした事がありますが一度も打たせてもらえず先生の顔を見ると、その面金の奥の瞳は、ニヤッと優しく笑っておりました。雪が降るたび今は亡き柏原先生を思い出し、本当に優しい方だったといつも心の中で手を合わせておりました。

優しく包んでくださった堀江名誉会長、恩師の堀金實先生、亡くなる前日まで一緒に仕事をしていた森川澄先生、数えきれない先生方が逝ってしまわれましたが、沢山の出会いと、別れの中で色々な事を学び私の人生の貴重な財産となった七年間でした。仕事上ミスがあつてはならないと言う気持ちを持ち張り詰めて来ましたのでその緊張感が保てなくなつた時は会員の皆様に迷惑をかけないよう次の人と交代しようとして決めておりました。

お蔭様で可愛い後任も決まり今は仕事と格闘しております。剣道経験が無い人なので大変だとは思いますが頑張ってくれています。どうか温かく見守ってあげてください。

新任紹介

清水 和美

年齢不詳



ご主人と小学校
六年生の娘さん
と三人家族
佐那河内在住

以上

七年間の思いは書き尽くせませんが、今後は、一会員として連盟行事に参加し協力して行きたいと思っておりますのでどうぞ宜しくお願いいたします。

最後になりましたが、剣道連盟の発展と会員の皆様のご活躍とご健康を心よりご祈念申し上げます。

本当にありがとうございました。感謝！

編集後記

今回の『徳島の剣道第二十二号』では、昨年七月にご逝去された堀江幸夫先生の特集を組ませて頂いた。その中で、かつて堀江先生が『徳島の剣道』へ恩師・酒匂久先生のことについて書かれた随想を再度読む事ができた。毎年、鹿児島へ行き、酒匂先生のお墓参りをしながら、堀江先生はどんな思いをされていたのだろうか。僭越ではあるが、おそらく、酒匂先生にその年の剣道修練の工夫や成果を報告されていたのではないかと拝察する。心の師を持つ事が如何に大切であるかを示されているように思う。「こんな時、先生だったら、どうされるだろうか。」「先生だったら、こうされただろう。」酒匂先生を心に浮かべながら、ご自分のあるべき姿を自問されたに違いない。

我々編集担当者も、この『徳島の剣道』のあるべき姿を自問しつつ、さらに充実した冊子になるよう努力していきたいと思う。読者の皆様のさらなる御支援・御協力をお願いしたい。

『徳島の剣道』第二十二号

編集委員会

山	増	有	上	美	本	福	福	中	手	藤	三	木
田	田	賀	田	馬	村	多	多	村	塚	本	木	原
耕	和	秀	宏	和	賢	博	雅	稔	十三	雅		資
司	広	敏	司	義	二	史	英	裕	子	史	毅	裕

『徳島の剣道』第22号

平成18年4月1日発行

編集・発行 徳島県剣道連盟

代表者 遠藤一美

☎770-0853 徳島市中徳島町2丁目96

TEL 088-652-2337

FAX 088-652-2360